博　多　20

—第45次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第248集

1991

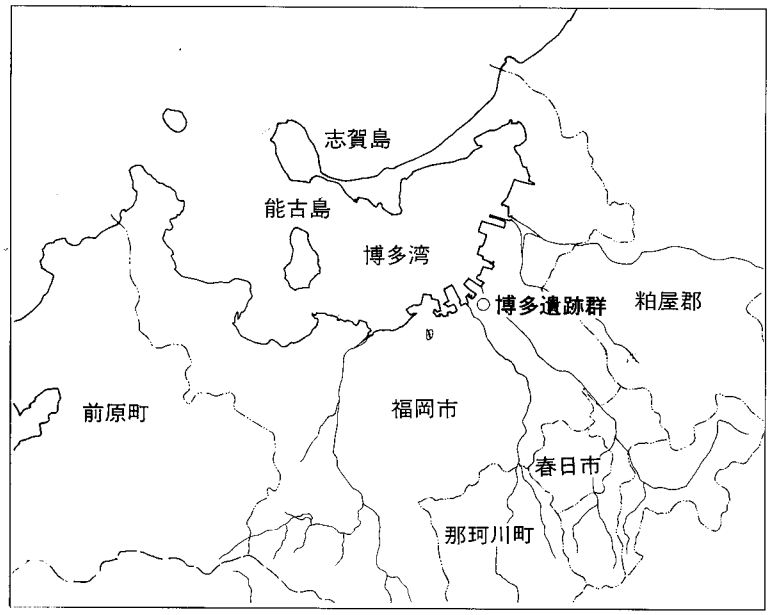
福岡市教育委員会

博多20－第45次調査－正誤表

頁	誤	正
巻頭図版	ＳＥ－２００１	ＳＥ－２００４
挿図目次 Fig.77	ＳＫ－３０２６	ＳＫ－３０６２
図版目次巻頭図版	(2) ＳＥ－２００１	(2) ＳＥ－２００４
ＰＬ．９	(1) ＳＥ－３０２９(北から)	(1) ＳＥ－３０７６(東から)
	(2) ＳＥ－３１３１(東から)	(2) ＳＥ－３０７８(南から)
	(3) ＳＥ－３０３６(東から)	(3) ＳＸ－３１１９(西から)
	(4) ＳＥ－３０５６(南から)	(4) ＳＫ－３０９７(北から)
	(5) ＳＥ－３０７７(南から)	(5) ＳＸ－３００１(北から)
	(6) ＳＥ－３０７７(西から)	(6) ＳＸ－３０８０(西から)
ＰＬ．10	(1) ＳＥ－３０７６(東から)	(1) ＳＥ－３０２９(北から)
	(2) ＳＥ－３０７８(南から)	(2) ＳＥ－３１３１(東から)
	(3) ＳＸ－３１１９(西から)	(3) ＳＥ－３０３６(東から)
	(4) ＳＫ－３０９７(北から)	(4) ＳＥ－３０５６(南から)
	(5) ＳＸ－３００１(北から)	(5) ＳＥ－３０７７(南から)
	(6) ＳＸ－３０８０(西から)	(6) ＳＥ－３０７７(西から)
Ｐ．55	3．第３面の遺構	3．第３面の調査
Ｐ．92 ＰＬ．９	(1) ＳＥ－３０２９(北から)	(1) ＳＥ－３０７６(東から)
	(2) ＳＥ－３１３１(東から)	(2) ＳＥ－３０７８(南から)
	(3) ＳＥ－３０３６(東から)	(3) ＳＸ－３１１９(西から)
	(4) ＳＥ－３０５６(南から)	(4) ＳＫ－３０９７(北から)
	(5) ＳＥ－３０７７(南から)	(5) ＳＸ－３００１(北から)
	(6) ＳＥ－３０７７(西から)	(6) ＳＸ－３０８０(北から)
Ｐ．93 ＰＬ．10	(1) ＳＥ－３０７６(東から)	(1) ＳＥ－３０２９(北から)
	(2) ＳＥ－３０７８(南から)	(2) ＳＥ－３１３１(東から)
	(3) ＳＸ－３１１９(西から)	(3) ＳＥ－３０３６(東から)
	(4) ＳＸ－３０９７(北から)	(4) ＳＥ－３０５６(南から)
	(5) ＳＸ－３００１(北から)	(5) ＳＥ－３０７７(南から)
	(6) ＳＸ－３０８０(北から)	(6) ＳＥ－３０７７(西から)
Ｐ．102 Fig.104	ＳＫ－４００１	ＳＫ－４０１１

博　多　20

第45次調査



遺 跡 略 号 HKT-45
遺跡調査番号 8862

1991

福岡市教育委員会

SX-3001備蓄銭出土状況

SE-2001・包含層出土土師皿面

序

ＪＲ博多駅から博多湾をのぞむ一帯は、弥生時代以来大陸文化の窓口として栄えたところであり、中世には貿易都市「博多」として繁栄を極めたところです。

この博多の町も、近年は都市部の再開発が急速に進み、60次を越える発掘調査が実施されています。大量の輸入陶磁器をはじめとする多種多様な遺物の発見は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿とさせるものがあります。

今回の第45次調査では、500枚もの渡来銭を輸入陶器に納めて埋めた「備蓄銭」や土師皿に円孔を穿った「面」等が出土しました。古代博多の庶民生活を物語る遺物として注目される資料です。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導、ご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成３年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　　井口　雄哉

れいげん

1．　本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区祇園町4－50の普賢山万行寺内における納骨堂建設に先立って、1989年（平成元年）3月から6月に緊急調査した博多遺跡群第45次調査の発掘調査報告書である。

2．　本書に使用した方位はすべて磁北方位であり、真北からの偏差は西偏6°21′である。

3．　遺構は呼称を記号化し、竪穴住居址をSC、土壙をSK、井戸址をSE、ピットをSPとし、その後に遺構Noをつづけた。遺構Noは各面ごとにすべての遺構を通して001から始まる3桁のNoを付し、その巻頭に検出面を示す1～4の数字を付した4桁の数字で表示した。

4．　本書に掲載した遺構の実測は、小林義彦・池田祐司・梶村嘉長・尾園晃が、遺物の実測は、小林・田崎真理・入江のり子・撫養久美子・濱石正子が分担してあった。

5．　本書に掲載した遺構・遺物の製図は、小林と田崎が分担してあたった。

6．　本書に掲載した写真は遺構・遺物とも小林が撮影した。

7．　本文中で用いている貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV　博多（1）1984年　別冊）に拠っている。

8．　本文中に示した土師皿の計測グラフは、比較的出土量の多い遺構について主に掲げた。実線が糸切底、破線がヘラ切底を示す。縦軸が器高を示し、横軸が底径・口径を半径で示している。

9．　本書の執筆は、II－2・3・4・6の土器を田崎が、その外は小林が担当した。

10．　本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

11．　本書の編集は小林と田崎が協力して行なった。

遺跡調査番号：8862	遺跡略号：HKT-45	分布地図番号：49－A－1
調査地籍：福岡市博多区祇園町4－50		
工事面積：269㎡	調査対象面積：269㎡	調査実施面積：248㎡
調査期間：1989年3月7日～4月17日、1989年5月16日～6月22日		

本 文 目 次

序
Ⅰ．はじめに……1
1．調査にいたるまで……1
2．調査の組織……1
Ⅱ．調査の記録……6
1．調査の概要……6
2．第1面の調査……6
(1) 井戸址（SE）……8
(2) 土　壙（SK）……10
(3) その外の遺構と遺物（SX・SP）……20
3．第2面の調査……31
(1) 井戸址（SE）……32
(2) 土　壙（SK）……40
(3) その外の遺構と遺物（SX・SP）……49
4．第3面の調査……55
(1) 井戸址（SE）……56
(2) 土　壙（SK）……73
(3) その外の遺構と遺物（SX・SP）……85
5．第4面の調査……95
(1) 竪穴住居址（SC）……96
(2) 土壙（SK）……101
(3) その外の遺構と遺物（SX・SP）……107
6．包含層出土の遺物……111
Ⅲ．おわりに……117

挿 図 目 次

Fig. 1．周辺遺跡分布図（1/25000）…… 2
Fig. 2．博多第45次調査地点位置図（1/5000）…… 4
Fig. 3．調査区周辺現況図（1/400）…… 5
Fig. 4．第1面遺構配置図（1/150）…… 7
Fig. 5．SE－1073実測図（1/60）…… 8
Fig. 6．SE－1073土師皿計測グラフ …… 8
Fig. 7．SE－1073出土土器実測図（1/4）…… 9
Fig. 8．SK－1051実測図（1/30）……10
Fig. 9．SK－1090実測図（1/30）……11
Fig. 10. SK－1002～1071出土土器実測図（1/4）……12
Fig. 11. SK－1090土師皿計測グラフ ……13
Fig. 12. SK－1098実測図（1/40）……13
Fig. 13. SK－1075・1090・1091出土土器実測図（1/4）……14
Fig. 14. SK－1121実測図（1/40）……15
Fig. 15. SK－1098・1100・1121出土土器実測図（1/4）……16
Fig. 16. SK－1171実測図（1/40）……17
Fig. 17. SK－1175実測図（1/60）……18
Fig. 18. SK－1175土師皿計測グラフ ……18
Fig. 19. SK－1154～1175出土土器実測図（1/4）……19
Fig. 20. SX－1089土師皿計測グラフ ……20
Fig. 21. SX－1063～1142出土土器実測図（1/4）……22
Fig. 22. SX－1168・1189出土土器実測図（1/4）……24
Fig. 23. 第1面SP出土土器実測図（1/4）……25
Fig. 24. 第1面遺構出土石製品実測図（1/3）……26
Fig. 25. 第2面遺構配置図（1/150）……31
Fig. 26. SE－2004実測図（1/60）……32
Fig. 27. SE－2004出土土器実測図(1)（1/4）……33
Fig. 28. SE－2004出土土器実測図(2)（1/4）……34
Fig. 29. SE－2004出土土器実測図(3)（1/4）……35
Fig. 30. SE－2004土師皿計測グラフ ……36
Fig. 31. SE－2005実測図（1/40）……36

Fig. 32. SE－2005出土土器実測図(1)（1/4）……37
Fig. 33. SE－2005出土土器実測図(2)（1/4）……38
Fig. 34. SE－2005土師皿計測グラフ……39
Fig. 35. SE－2005出土石製品実測図（1/3）……39
Fig. 36. SK－2001実測図（1/30）……40
Fig. 37. SK－2001出土土器実測図（1/4）……41
Fig. 38. SK－2001土師皿計測グラフ……42
Fig. 39. SK－2003実測図（1/40）……42
Fig. 40. SK－2003土師皿計測グラフ……42
Fig. 41. SK－2006・2007・2027実測図（1/40）……43
Fig. 42. SK－2030実測図（1/30）……44
Fig. 43. SK－2039～2104実測図（1/40）……45
Fig. 44. SK－2105実測図（1/30）……46
Fig. 45. SK－2002～2107出土土器実測図（1/4）……47
Fig. 46. SK－2107・2110実測図（1/40）……48
Fig. 47. SX－2050・2101出土土器実測図（1/4）……50
Fig. 48. 第２面出土土製品実測図（1/3）……50
Fig. 49. 第２面SP出土土器実測図（1/4）……51
Fig. 50. 第３面の遺構配置図（1/150）……55
Fig. 51. SE－3029実測図（1/40）……56
Fig. 52. SE－3029出土土器実測図(1)（1/4）……57
Fig. 53. SE－3029出土土器実測図(2)（1/4）……58
Fig. 54. SE－3029出土土器実測図(3)（1/4）……59
Fig. 55. SE－3029土師皿計測グラフ……60
Fig. 56. SE－3036実測図（1/40）……60
Fig. 57. SE－3036出土土器実測図（1/４）……61
Fig. 58. SE－3056実測図（1/60）……61
Fig. 59. SE－3056出土土器実測図(1)（1/４）……62
Fig. 60. SE－3056出土土器実測図(2)（1/４）……63
Fig. 61. SE－3076実測図（1/60）……64
Fig. 62. SE－3076出土土器実測図（1/4）……65
Fig. 63. SE－3076土師皿計測グラフ……66
Fig. 64. SE－3077実測図（1/60）……66

Fig. 65. SE－3077出土土器実測図（1/4）……67
Fig. 66. SE－3077土師皿計測グラフ……68
Fig. 67. SE－3078実測図（1/40）……69
Fig. 68. SE－3077土師皿計測グラフ……69
Fig. 69. SE－3131実測図（1/60）……70
Fig. 70. SE－3136実測図（1/60）……71
Fig. 71. SE－3029～3078出土石製品実測図（1/3）……71
Fig. 72. SE－3078・3131・3136出土土器実測図（1/4）……72
Fig. 73. SK－3037実測図（1/40）……73
Fig. 74. SK－3039・3045実測図（1/40）……74
Fig. 75. SK－3002～3054出土土器実測図（1/4）……75
Fig. 76. SK－3054土師皿計測グラフ……76
Fig. 77. SK－3026・3079実測図（1/40）……76
Fig. 78. SK－3108・3121実測図（1/60・1/40）……77
Fig. 79. SK－3062～3121出土土器実測図（1/4）……78
Fig. 80. SK－3108土師皿計測グラフ……79
Fig. 81. SK－3127実測図（1/40）……79
Fig. 82. SK－3147実測図（1/40）……80
Fig. 83. SK－3147土師皿計測グラフ……80
Fig. 84. SK－3127・3147出土土器実測図（1/4）……81
Fig. 85. SK－3148～3158実測図（1/40）……82
Fig. 86. SK－3148～3158出土土器実測図（1/4）……84
Fig. 87. SX－3001実測図（1/15）……85
Fig. 88. SX－3080実測図（1/40）……86
Fig. 89. SX－3118・3119実測図（1/40）……86
Fig. 90. SX－3001～3119出土土器実測図（1/4）……87
Fig. 91. SX－3115・3135実測図（1/30）……88
Fig. 92. SK－3002・SX－3119出土石製品実測図（1/2）……88
Fig. 93. 第3面SP出土土器実測図（1/4）……89
Fig. 94. 第3面出土土製品実測図（1/3）……90
Fig. 95. 第4面遺構配置図（1/150）……95
Fig. 96. SC－4005実測図（1/60）……96
Fig. 97. SC－4041・4044実測図（1/60）……97

Fig. 98. SC－4042実測図（1/60）……98
Fig. 99. SC－4041・4042出土土器実測図（1/4）……99
Fig.100. 第4面出土土製品実測図（1/3）……100
Fig.101. SC－4047実測図（1/60）……100
Fig.102. SC－4047出土土器実測図（1/4）……100
Fig.103. SK－4003・4007実測図（1/40）……101
Fig.104. SK－4011～4018実測図（1/40）……102
Fig.105. SK－4007・4018出土土器実測図（1/4）……103
Fig.106. SK－4031実測図（1/40）……103
Fig.107. SK－4031出土土器実測図(1)（1/4）……104
Fig.108. SK－4031出土土器実測図(2)（1/4）……105
Fig.109. SK－4049・4051実測図（1/40）……106
Fig.110. SK－4051出土銅鏃実測図（1/2）……107
Fig.111. 第4面SP出土土器実測図（1/4）……107
Fig.112. 包含層出土土器実測図(1)（1/4）……112
Fig.113. 包含層出土土器実測図(2)（1/4）……113
Fig.114. 包含層出土土器実測図(3)（1/4）……114
Fig.115. 撹乱壙出土土器実測図（1/4）……115
Fig.116. 遺構外出土土製品（1/3）……116
Fig.117. 包含層出土石製品実測図（1/3）……116
Tab. 1. 第1面土壙一覧表……21
Tab. 2. 第2面土壙一覧表……49
Tab. 3. 第3面土壙一覧表……90

図 版 目 次

巻頭図版(1)　SX－3001備蓄銭出土状況

PL. 1．(1)　第1面Ⅰ区全景（北から）　(2)　第1面Ⅱ区全景（北西から）

PL. 2．(1)　SK－1051（南から）　(2)　SK－1051（西から）

(3)　SK－1071（北から）　(4)　SK－1091（北から）

(5)　SK－1121（東から）　(6)　SK－1121（西から）

PL. 3．(1)　SK－1070（南から）　(2)　SK－1090（東から）

(3)　SX－1074（西から）　(4)　SX－1089（北から）

(5)　SX－1088（南から）　(6)　SX－1088（西から）

PL. 4．第1面出土遺物

PL. 5．(1)　第2面Ⅰ区全景（北から）　(2)　第2面Ⅱ区全景（北から）

PL. 6．(1)　SE－2004・2006、SK－2001（西から）　(2)　SE－2004・2006土層断面（東から）

(3)　SE－2004・2006（南から）　(4)　SE－2004（南から）

(5)　SK－2001（東から）　(6)　SK－2003（東から）

PL. 7．第2面出土遺物

PL. 8．(1)　第3面Ⅰ区全景（北から）　(2)　第3面Ⅱ区全景（北から）

PL. 9．(1)　SE－3029（北から）　(2)　SE－3131（東から）

(3)　SE－3036（東から）　(4)　SE－3056（南から）

(5)　SE－3077（南から）　(6)　SE－3077（西から）

PL.10．(1)　SE－3076（東から）　(2)　SE－3078（南から）

(3)　SX－3119（西から）　(4)　SK－3097（北から）

(5)　SX－3001（北から）　(6)　SX－3080（西から）

PL.11．第3面出土遺物

PL.12．(1)　第4面Ⅰ区全景（北から）　(2)　第4面Ⅱ区全景（北から）

PL.13．(1)　SC－4041（東から）　(2)　SC－4042（東から）

(3)　SC－4047、SK－4049（北から）　(4)　SC－4047（北から）

(5)　SK－4031（西から）　(6)　SK－4051（東から）

PL.14．第4面・包含層・撹乱壙出土遺物

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたるまで

中世に貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の受入れ口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なった様々の遺構が眠っている。近年、この博多の町も再開発が進み、都市空間の有効利用を図った高層ビルの建設が目覚しい。この傾向は市街地にある寺院も同じで、境内の墓地空間拡大のため高層化した納骨堂が次第に増えつつある。祇園町にある普賢山万行寺も例外ではなく、第3納骨堂の建設が計画され、1989(平成1)年1月12日に埋蔵文化財の事前調査願が埋蔵文化財課に提出された。普賢山万行寺は博多遺跡群の南西端に位置し、1979(昭和54)年には北接する第2納骨堂の建設に先立って第3次調査が実施されていることから遺構・遺物の存在が十分に予想された。試掘調査を実施した結果、地表下1.2mで厚さ約1mの遺物包含層があり、この間に複数の遺構面が確認された。第3納骨堂の建設は、施工業者に発注され、着工日程も既に決定されていることから早急な発掘調査が必要となった。このような状況下で埋蔵文化財課は、施主の普賢山万行寺及び施工業者の丸信建設株式会社との協議を重ねた末、条件が整い次第直ちに発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、納骨堂建設の工法上2工区に分けて実施した。まず、地下構造物部分の矢板工事が行なわれ、1989(平成1)年3月7日より4月17日までに第Ⅰ区の調査を実施した。その後、地下構造物の建設工事完了後の5月18日より第Ⅱ区の調査に着手し、6月22日に無事終了した。

なお、発掘調査にあたっては万行寺や施工に当たられた丸信建設株式会社の方々には物心両面にわたるご理解とご協力をたまわった。末筆ながら記して謝意を表します。

2．発掘調査の組織

調査委託　宗教法人　万行寺
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係
庶務担当　第2係長　飛高憲雄（前任）　柳沢一男（現任）　松延好文
調査担当　小林義彦
補助員　池田祐司（現福岡市埋蔵文化財課）　梶村嘉長　田崎真理
調査・整理作業　阿部剛孝　岩隈史郎　大島賢司　大瀬良省吾　尾園　晃　川端義美
近藤誠一　小西哲夫　篠崎伝三郎　篠原博之　白土広信　花畑昌一郎　古屋信彦　森垣隆視
森実雄一郎　若山智三　岩本朝子　大瀬良清子　鬼木礼子　河野トキノ　木村良子
木村美奈子　近藤澄江　坂田美佐子　武田潤子　田中聖子　津川真千代　堤　滝代

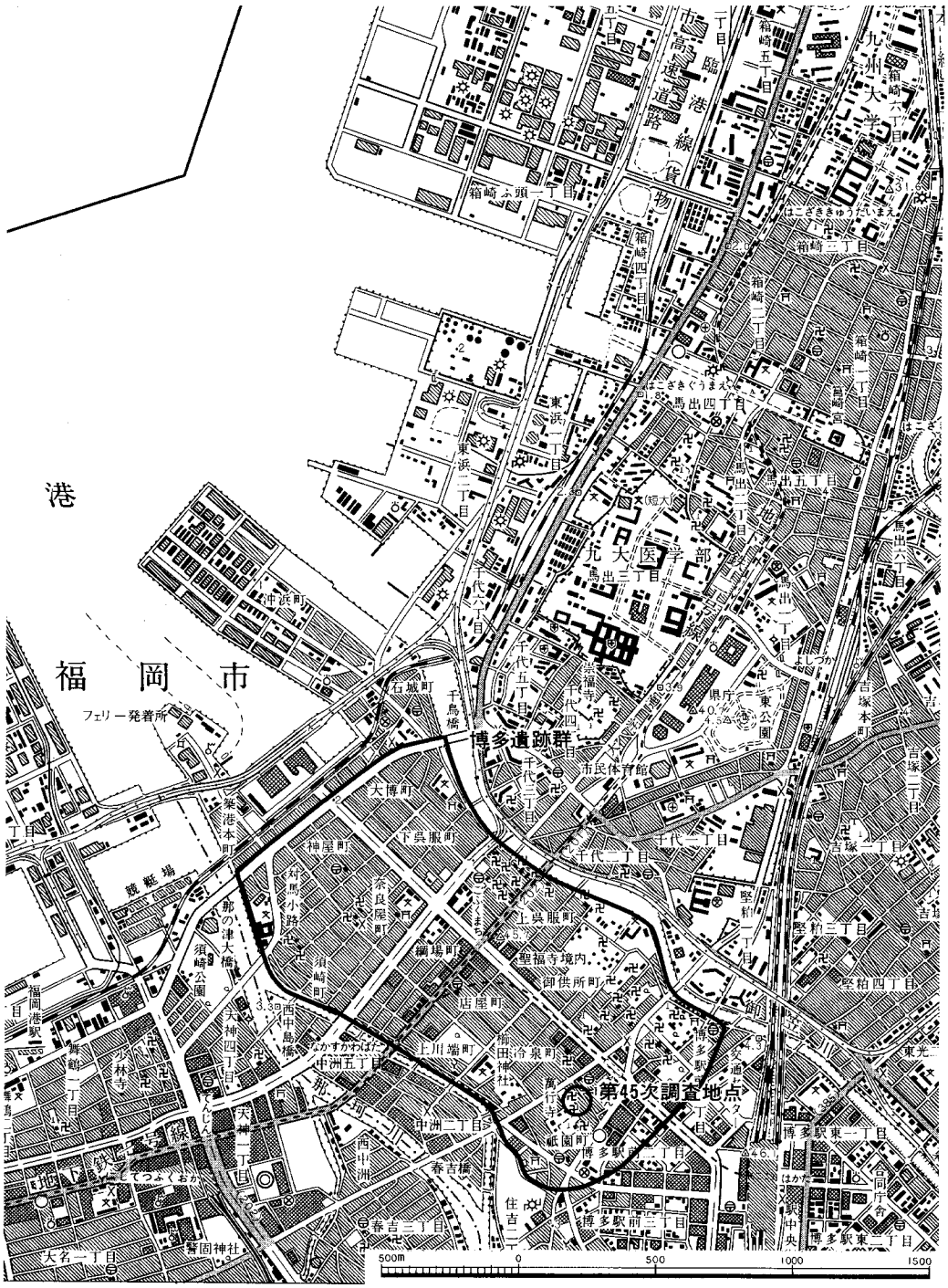


Fig. 1. 周辺遺跡分布図 (1/25000)

土斐崎孝子　橋本恵美子　花畑照子　馬場イツ子　松本藤子　村田敬子　吉住シズエ
また、発掘調査・整理報告では、松村道博、大庭康時（福岡市埋文課）の助力を得た。

3．立地と歴史的環境

三方を三郡山系と背振山系に囲まれた福岡平野は、北の博多湾にむかって開口し、平野を貫流する御笠川と那珂川の二筋の流れは河口を接して博多湾に注ぐ。博多遺跡群はこの両河川に挟まれた博多湾岸沿いの砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画される。

博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連綿とつづく大複合遺跡であり、中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の調査は、1977（昭和52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に緒を発し、一連の高速鉄道や都市計画道路博多駅築港線関係の調査をはじめ70次におよぶ調査の結果、次第にその姿を現わしつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初現は弥生時代中期前半に遡る。祇園町交差点を中心とする古砂丘上に円形居住址や甕棺墓群が立地する。ここは博多濱のほぼ中央部で、濱の最高所にあたる。弥生時代後期になると遺跡は南の後背地に拡がりを見せる。

古墳時代になると、砂丘の進行に伴って北の上呉服町周辺まで拡がるが、遺跡の中心はまだ博多濱の最高所にあり、竪穴住居址や方形周溝墓が調査されている。また、第28次調査区では、墳丘長56mを越える5世紀初頭の前方後円墳が確認されている。

536（宣化1）年に「那の津」の官家が設置されて以降古代になると、対外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は博多濱全域に拡がる。688（朱鳥3）年に初見する筑紫館、842（承和9）年以降に現れる太宰府鴻臚館は、博多遺跡群から入海ひとつを隔てた丘陵上に位置する。遺物も鴻臚館式瓦、老司式瓦、皇朝十二銭、円面硯、石帯、墨書須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器の外に越州窯系青磁、長沙窯系陶器等の輸入陶磁器が多く出土し、官家的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。909（延喜9）年の遣唐使の廃止は私貿易を促すこととなり、古代末から博多は対宋貿易の中心地となる。発掘調査で最も多く検出される遺構や遺物は11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には博多濱北限の潟が砂州状に埋め立てられ、呉服町交差点付近で沖ノ濱と繋がる。

鎌倉時代には沖ノ濱の開発が進み、博多濱と一体化して都市「都市」を形成する。この沖ノ濱と博多濱に挟まれた西側の入江が袖の湊と推定されている。

室町時代には九州探題が置かれたが、幕府権力の衰退とともに貿易権益を巡る争奪戦が筑前の小弐氏、豊後の大友氏、周防の大内氏によって繰り返され、1586（天正14）年の島津氏による焼き討ちによって灰燼に帰す。その後、豊臣秀吉によって復興され、朝鮮出兵の兵站基地として活況を呈したが、1639（明正16）年の鎖国令により貿易都市としての終焉を迎える。

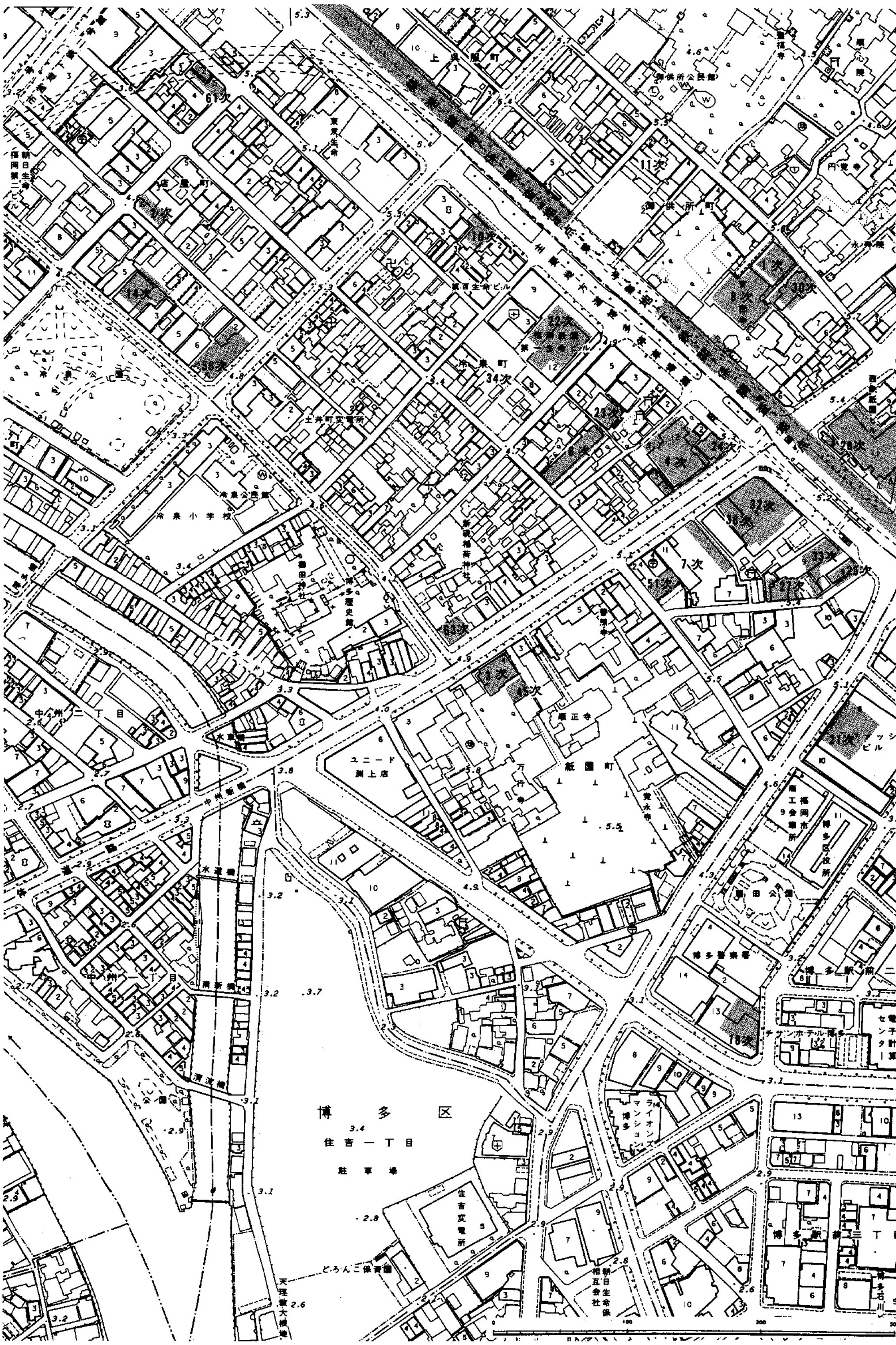


Fig. 2．博多第45次調査地点位置図（1/5000）

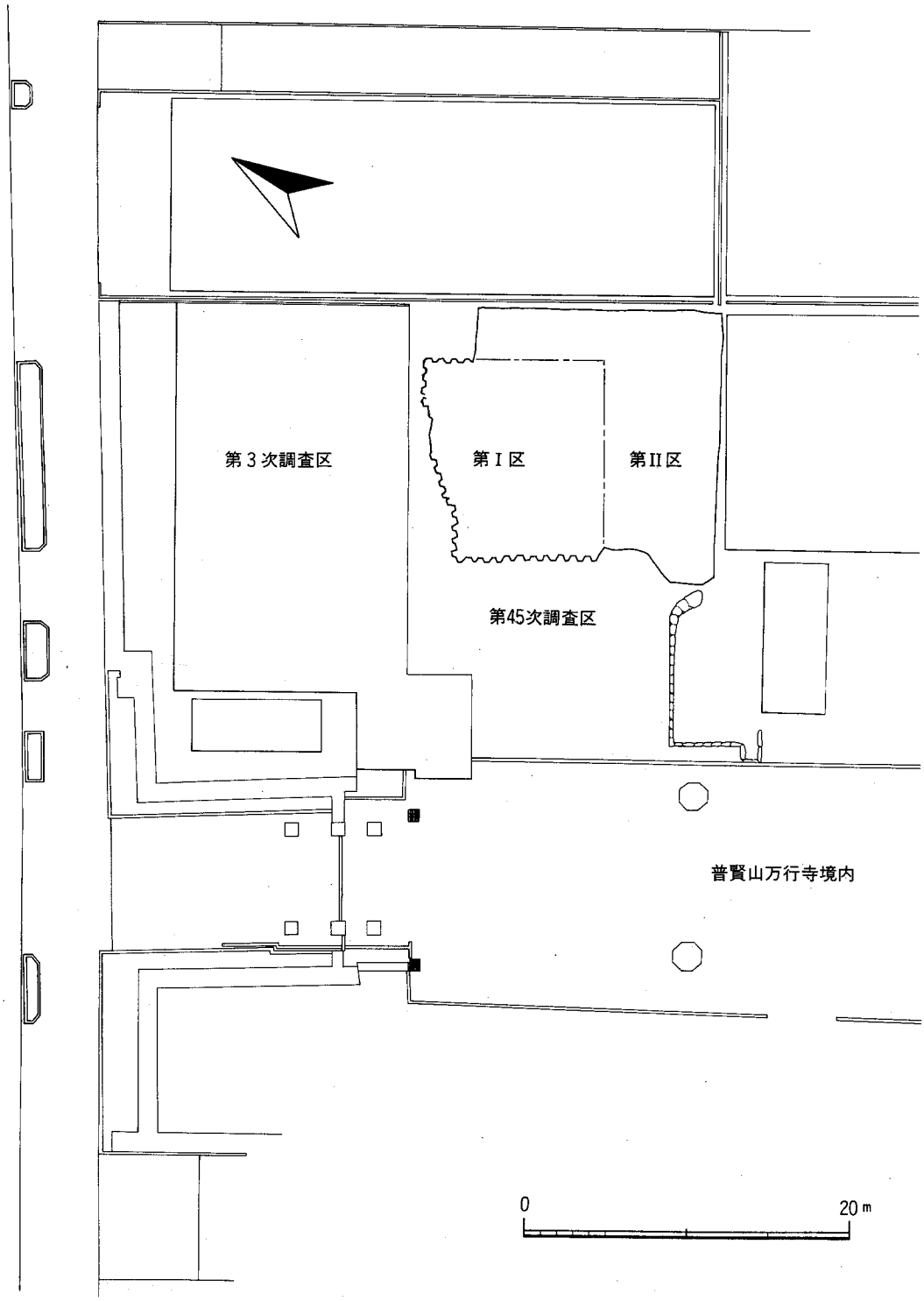


Fig. 3．調査区周辺現況図（1/400）

II. 調査の記録

1. 調査の概要

第45次調査区は、博多遺跡群を形成する二つの砂丘のうち、内陸側にある博多濱の南西隅、砂丘が那珂川にむかって傾斜をはじめる落ちぎわに立地する。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの大複合遺跡で、基盤層となる黄白色砂層までの間には1～5mにも及ぶ遺物包含層が堆積している。この遺物包含層には幾面もの遺構面が重層的にあるが、堆積土壌の変化はほとんどなく、一部に整地層等が確認されても面的な拡がりとしてはほとんど捉えられないのが現状である。このため発掘調査では、一定面まで恣意的に掘り下げて遺構面を確認し、さらに包含層を掘り下げて下層の遺構面を検出するという方法を取った。第45次調査区では4面の遺構面を検出し、上層から第1面、第2面とした。また、遺物包含層は各遺構面ののる土層を一括して1層、2層とした。第3面下には奈良時代の須恵器を含む黒灰褐色土層と古墳時代の土師器のみを含む茶褐色砂層に区分されるために上層を3層とし、下層を4層とした。遺構は検出順に通して3桁のNoをつけ、その巻頭に検出面を表す1～4の数字を付けた4桁で表示した。しかし、それは各遺構の属する年代に必ずしも対応するものではない。

発掘調査は、納骨堂建設の工程に合わせる形で進めることを余儀なくされ、269㎡の調査対象地を2工区に分けて実施することになった。そこで、地下構造物部分を第Ⅰ区、それ以外を第II区として便宜的に2区分した。まず、発掘調査に先立って直径70cmの基礎杭が調査区内に33本打ち込まれた後、地下構造物部分の矢板工事が行なわれた。これらの工事が終了後に、試掘調査によって遺物包含層が確認された地表下1.2mまで表土をすき採って3月10日より発掘調査を開始した。第Ⅰ区は調査区の北西側12m四方の約140㎡である。調査区中央には大きな撹乱壙があり、第2納骨堂と連結される北側は鋼矢板がないため調査に困難をきたしたが、4月17日に終了した。その後、地下構造物の建設が行なわれた5月15日までは調査を中断し、5月16日より第II区の調査を開始した。第II区は、第Ⅰ区の東側と南側でL字状をなす。調査面積は約110㎡で、1～3面の遺構面は第Ⅰ区のレヴェルに合わせて遺構を検出し、すべての発掘調査を6月22日に終了した。

発掘調査の結果、古墳時代～中世までの遺構面を4面確認した。第1～3面は古代末から中世の井戸址や土壙を、第4面では古墳時代前期の竪穴住居址と土壙を検出した。

2. 第1面の調査

第1面は、地表下1.2m、標高4.4mで検出した遺構面である。この第1面の上層には一部で焼

土処理層が検出されたが、表土すき採り中のことであり、年代や面的な拡がりは確認できなかった。また、調査区の中央には幅４m、長さ12mの大きなF字状をした撹乱壙がある。この撹乱壙は基盤層となる砂丘下まで達して、多くの遺構を破壊しているため青・白磁や土師皿等の遺物が多く混入していた。

第１面で検出した遺構は、井戸址、土壙、柱穴と不定形土壙があり、全体に密な分布を示す。このうち柱穴は、調査区のやや東側に集中する傾向があるが、柱筋の通るようなものは認められず、建物としては復原できなかった。

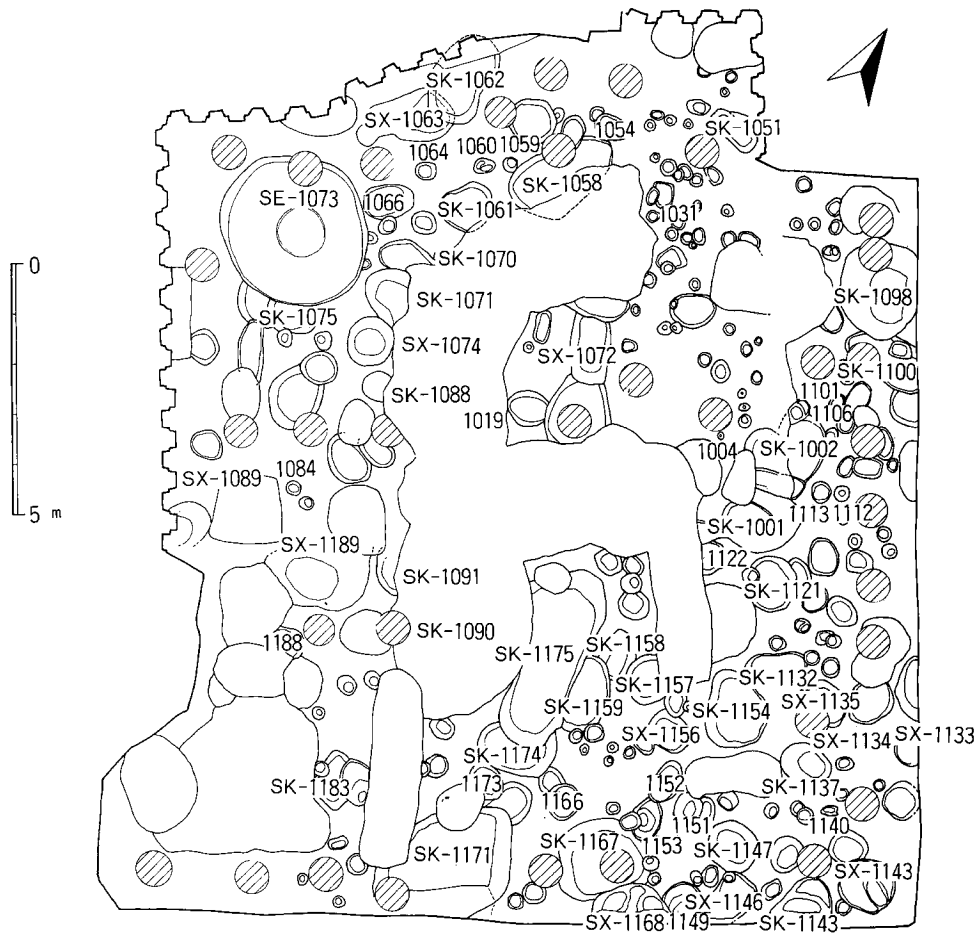


Fig. 4．第1面遺構配置図（1/150）

(1) 井戸址 (SE)

第1面では1基の井戸址を検出したが、これは第1面で検出した遺構群とは時期的に大きく隔たり、新しい時期のものである。

SE−1073 (Fig. 5 ～ 7　PL. 4)

調査区の北西隅にある近世の井戸址で、平瓦の井戸側をもつ。2.85×3.25mの楕円形の大きな掘り方のほぼ中央に直径約1m井戸側を穿つ。井戸側は20×25cmの平瓦を17枚を縦に継ぎ合せ、その下段は瓦を半分ずらして千鳥状に組んでいる。深さは第4面下の砂層まで達するが、完掘しなかった。掘り方内からは青磁や土師皿が多数出土しているが、それは井戸側の裏込めとした包含層の遺物であり年代を決するものではない。

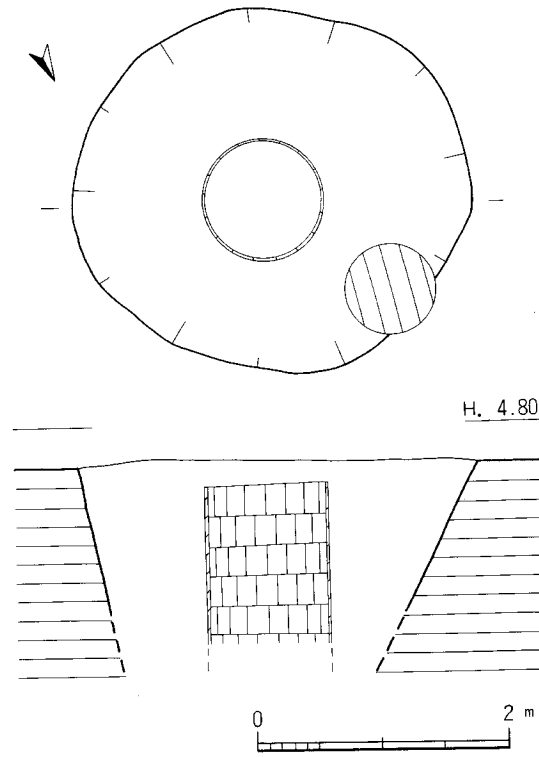


Fig. 5．SE−1073実測図 (1/60)

出土遺物

1～10は土師器である。1～5は小皿である。1は口径6.9cmと小型であるが、2～5は口径8.2～9.2cm、器高0.7～1.5cmを測る。6は中皿で、口径10.2cm、器高1.5cmを測る。7～10は坏で、口径12.2～14.4cm、器高2.0～2.9cmを測る。いずれも糸切り底をもつ。11～15は白磁である。11はII類の平底皿、12はIV類の碗、13・14はV類もしくはVI類の碗である。13の見込みには輪状に釉の削り取りが見られる。14の高台内には『十』の墨書が残る。15は水注頸部である。16・17は龍泉窯系青磁である。16はI類の平底皿で見込みに櫛描文が見られる。17はI類の碗である。18～20は同安窯系青磁である。18はI類の平底皿で外底部のみ釉を削り取って露胎となす。見込みには櫛描文

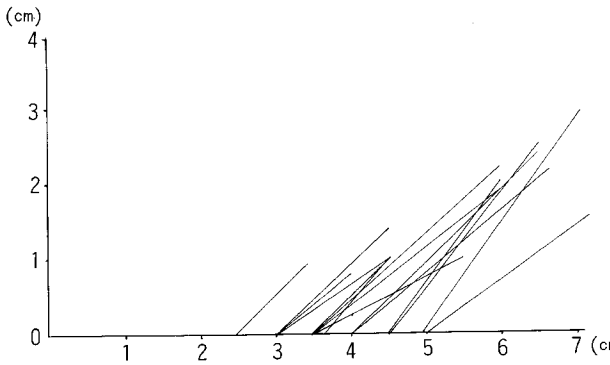


Fig. 6．SE−1073土師皿計測グラフ

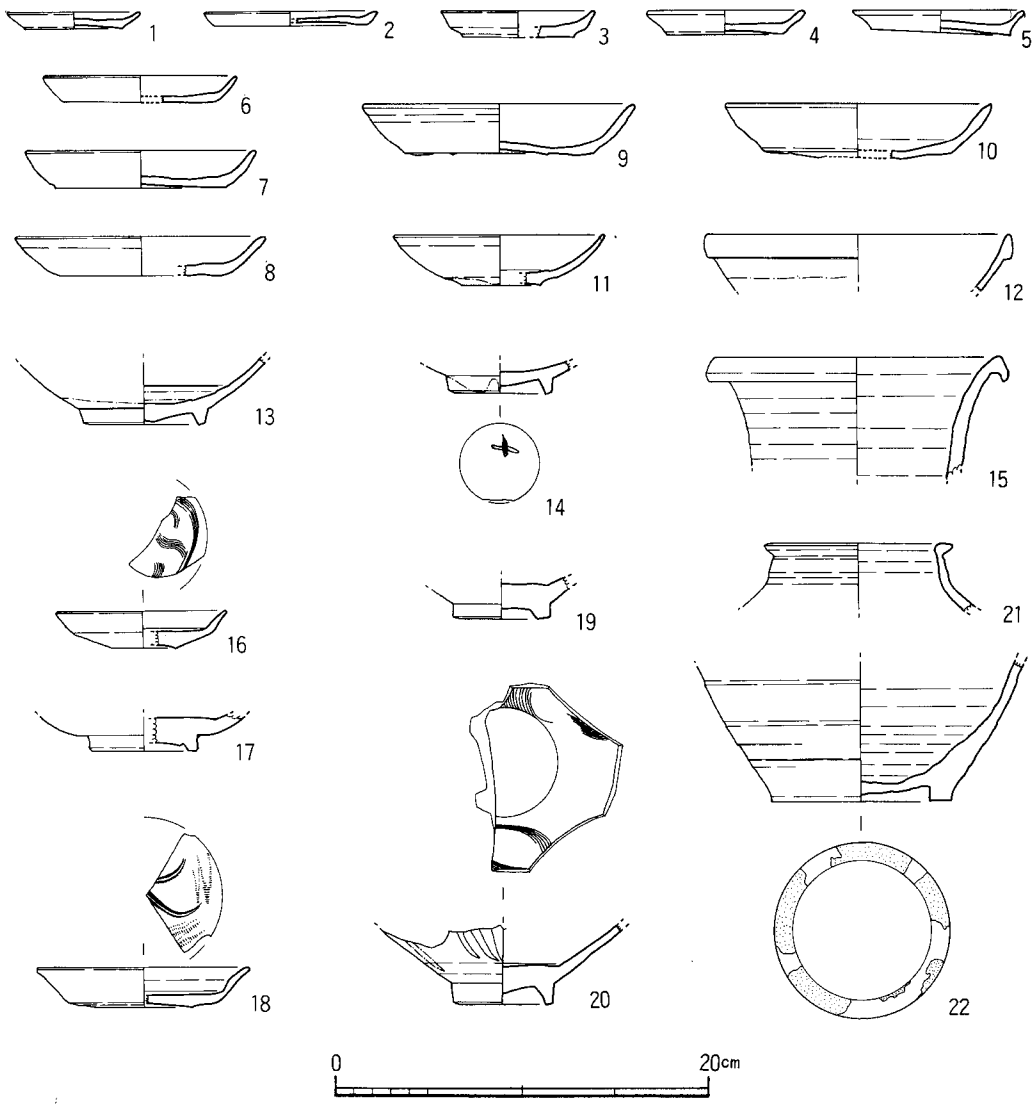


Fig. 7．SE－1073出土土器実測図（1/4）

とヘラ描文を施す。19・20は碗である。20は体外壁に片切彫で放射状に線を刻み内面に櫛描文を施す。体外半釉である。酸化気味に焼成されたのか、胎土・釉とも黄白色を呈する。21・22とも中国陶器である。21はC群の壷で、濃い灰色のやや粗い胎土にあずき色の不透明釉がかかる。22はB群の壷で、灰色の精良な胎土に灰オリーブ色の不透明釉がかかる。畳付に目跡が残る。その外に、砥石１点と『寛永通寶』１枚が出土している。

(2) 土壙（SK）

土壙は、調査区全域で27基を検出した。平面プランは、方形、円形、楕円形のものがあるが、それが時間的あるいは前途的な相違によるりものかは判然としない。

SK－1002（Fig.10）

調査区の東端にある。平面形は一片が1.2×1.5mの隅丸方形になると思われるが、土壙中央が鋼矢板で破壊されている。深さは35～55cmを測り、東側が１段浅くなる。

出土遺物

いずれも土師器である。23～27は小皿で、口径8.6～9.6cm、器高1.0～1.1cm。28は坏で、口径13.4cm、器高2.7cmを測る。小皿・坏とも糸切り底をもつ。23は底部小片であるが、外底に墨書が見られる。４は滑石製石鍋で、外面には煤が付着する。

SK－1051（Fig.８・10　PL.２・４）

調査区の北東隅にある小型の土壙である。平面形は長軸105cm、短軸50cm、深さ15cmの隅丸長方形を呈し、N－83°－Wに主軸方位をとる。底面は中央がやや凹む舟底状をなす。土壙の東側上面と南西隅の肩部からは白磁皿と土師皿が一括して出土した。

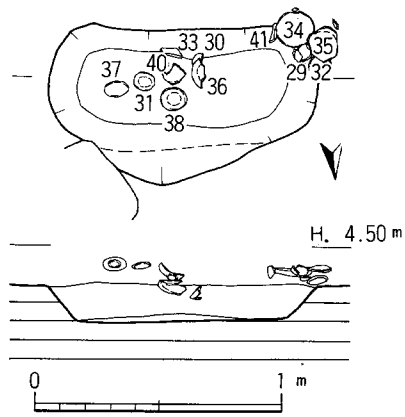


Fig. ８．SK－1051実測図（1/30）

出土遺物

29～39は土師器である。29～32は小皿で、口径8.0～9.6cm、器高0.9～1.2cm、33～36は坏で、口径13.9～15cm、器高2.5～2.9cmを測る。小皿・坏とも全て糸切り底で、36を除いていずれも内底にナデ調整が見られる。37・38は白磁II類の高台付皿で、見込みで輪状に釉を削り取る。39は龍泉窯系青磁Ｉ類の碗で、内面に花文を施す。40・41は青白磁である。40は口縁を輪花にし見込みに花のスタンプをもつ小碗である。淡青色の釉がほぼ畳付までかかるが、焼成不良でピンホールが密にはいり釉が縮れたようになる。41は口ハゲの印花文皿である。ベージュ色を帯びた白色の胎土に若干草色がかった透明釉がかかる。

SK－1062（Fig.10）

調査区の北端にあり、SX－1063よりも新しい。北側は調査区外に平面形は長軸1.9m、短軸1.1mの不整楕円形になろう。深さは45cmを測り、断面形は逆台形を呈する。北側の土壙底より、完形の土師皿が出土した。

出土遺物

すべて土師器である。42～46は小皿で、口径7.7～8.6cm、器高0.9～1.2cmをはかる。47・48

は坏で、47は口径12cm、器高2.5cm、48は口径12.9cm、器高2.8cmをはかる。小皿・坏とも全て糸切り底をもち、42・47には内底にナデ調整が認められめる。

SK－1070（Fig.10・21　PL.3）

調査区の北西部にある土壙で、SK－1071よりも古い。東側は撹乱を受けて消失しているが、楕円形プランをなすものであろう。断面形は浅い舟底状をなす。

出土遺物

3点とも土師器である。49･50は小皿で、49は口径9cm、器高1.3cm、50は口径10cm、器高1cmをはかる。51は坏で、口径13.5cm、器高3cmである。小皿・坏とも内底をナデ調整し、糸切り底で板状圧痕が残る。

SK－1071（Fig.10　PL.2）

調査区の南端にある大型の土壙で､SK－1070より新しく､SK－1074よりも古い｡平面形は長軸1.6m､短軸1.1mの隅丸方形になろう｡底面は東側に浅く凹み､壁面は緩く傾斜して立ち上がる。

出土遺物

52～54は土師器である。52・53は小皿で、口径8.8cm、器高0.9～1cm、54は坏で、口径13cm、器高2.9cmをはかる。いずれも内底をナデ調整しており糸切り底で板状圧痕が見られる。55は灰釉陶器と思われる壷の口縁部である。黒色粒や白色粒が多く混じった灰色の胎土に外面だけに黒灰色の釉がかかる。内面は自然釉のため光沢がある。焼きしまっている。56・57は龍泉窯系青磁の碗であるが、56は古い要素をもつ。57はⅠ類に属する。58は同安窯系青磁Ⅱ類の無文の碗である。酸化ぎみに焼成される。

SK－1075（Fig.13）

調査区の北西隅にある楕円形の土壙で、長軸は95cm、短軸は70cmを測る。北側はSE－1073によって切られる。深さは45cmを測り、断面形は浅い舟底状を呈する。土壙内からは瓦質の火舎が出土した。

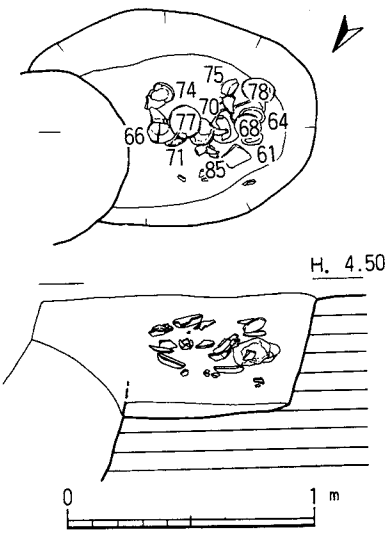


Fig. 9．SK－1090実測図（1/30）

出土遺物

59は土師器の小皿である。口径9.2cm、器高1.8cmを測る。糸切り底で板状圧痕をもつ。60は瓦質土器の火舎である。内面はハケ目、口縁付近はヨコナデ、外面は研磨風のナデ、外底はハケ目、脚部付近はナデ調整する。胎土は茶褐色で土師質に近いが、表面は黒灰色を呈する。

SK－1090（Fig.9・11・13　PL.3）

調査区の南西部にある小型の土壙で、平面形を復原すると、長軸120cm、短軸90cmの楕円形になろう。深さは50cmを測り、底面は浅い舟底状をなす。遺物は、龍泉窯系

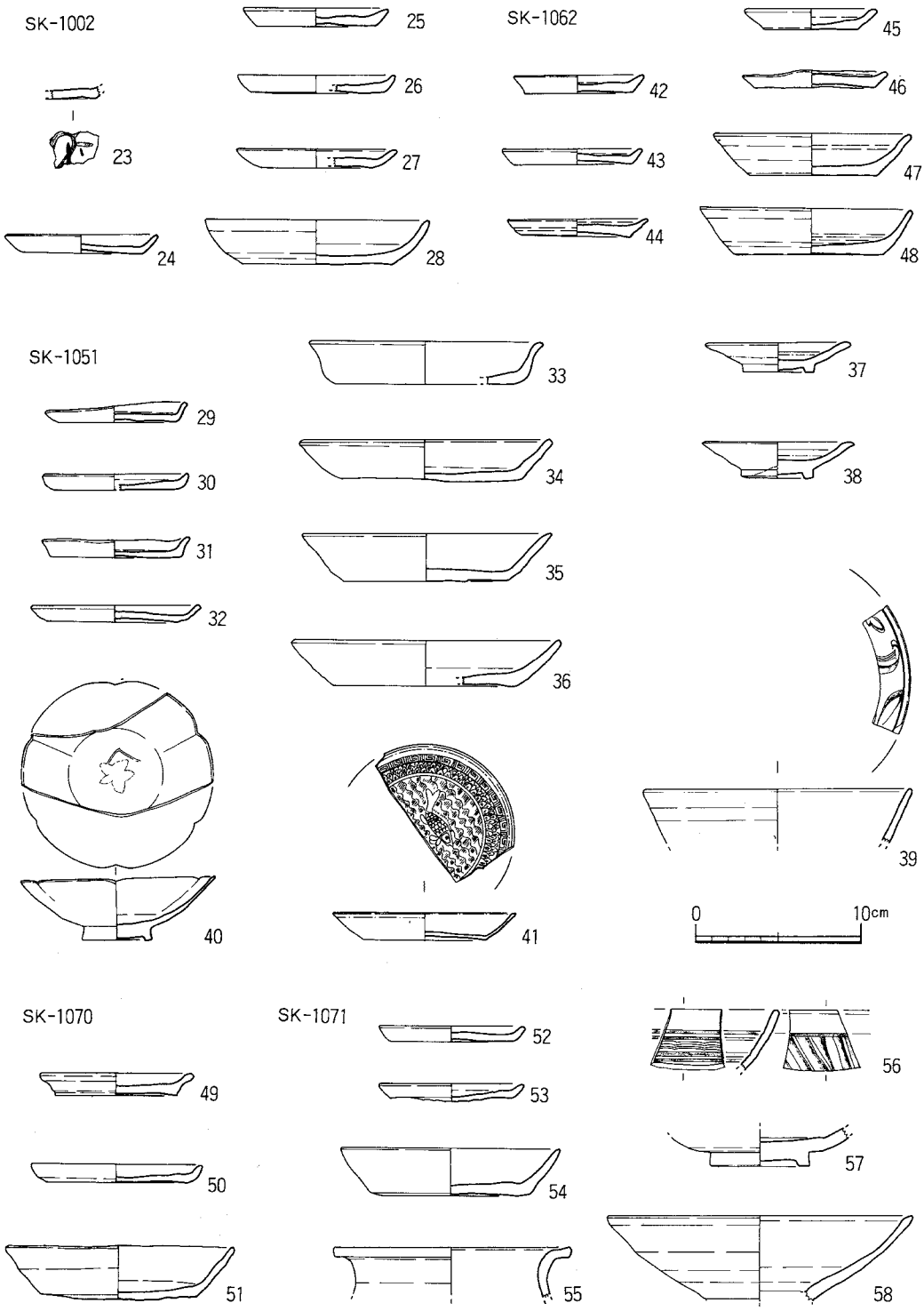


Fig. 10. SK－1002～1071出土土器実測図（1/4）

青磁や土師皿が出土した。

出土遺物

61～80は土師器。61～68は小皿で、口径8.1～9cm、69～80は坏で、口径12～14.2cmを測る。いずれも糸切り底で、内底はナデ調整。69は突起状の脚部をもつ小片であるが、香炉等の器型になろうか。薄い茶褐色の極めて精良な胎土で焼きしまっている。81～84は龍泉窯系青磁である。81は小碗と思われるが、体外半釉という点で特殊である。82はヘラ描きの蓮弁をもちII類に属する。83はIII類の鎬蓮弁をもつ碗で青灰色の釉が厚くかかる。85は同安窯系青磁の小碗である。半透明の灰オリーブ釉がかかる。内面に櫛描文がある。

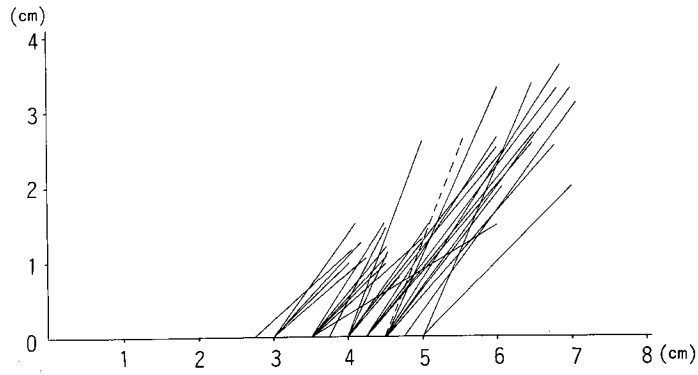


Fig. 11. SK－1090土師皿計測グラフ

SK－1091（Fig.13　PL.2）

調査区西側にSK－1090に隣接してある。北と東側は撹乱によって消失しているために全容は定かでないが、平面形は直径約1mの円形になろう。深さは50cmで、底面は浅い凹レンズ状をなす。壙底より土師皿が3点出土した。

出土遺物

3点とも糸切り底をもつ土師器の坏である。口径12.5～13.5cm、器高2.9～3cmを測る。いずれも全体をヨコナデ調整する。

SK－1098（Fig.12・15　PL.4）

調査区の北東隅にある土壙で、SK－1100よりも新しい。平面形は1.7～1.9mのほぼ円形を呈し、深さは30cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物

89～91は土師器である。89・90は小皿で、口径8.8cm、器高1.1～1.3cm、91は坏で、口径13.2cm、器高2.6cmを測る。小皿・坏とも底部は糸切り底である。92～95は白磁である。92はIII類の平底皿、93はIV類、94はII類の碗である。95は灰白色の胎土にうすい

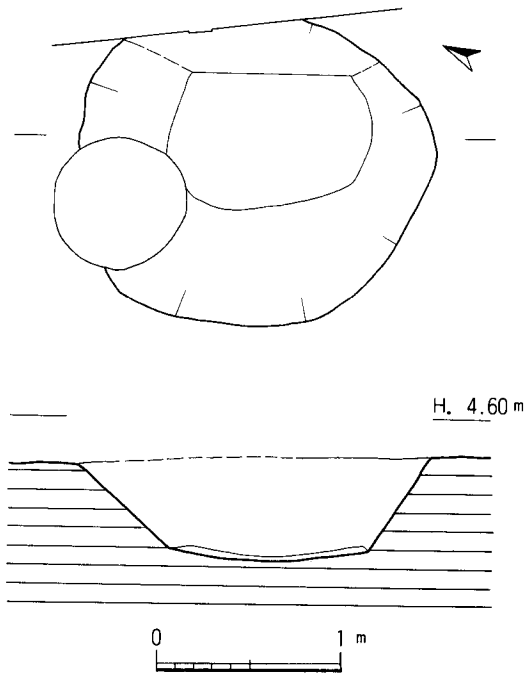


Fig. 12. SK－1098実測図（1/40）

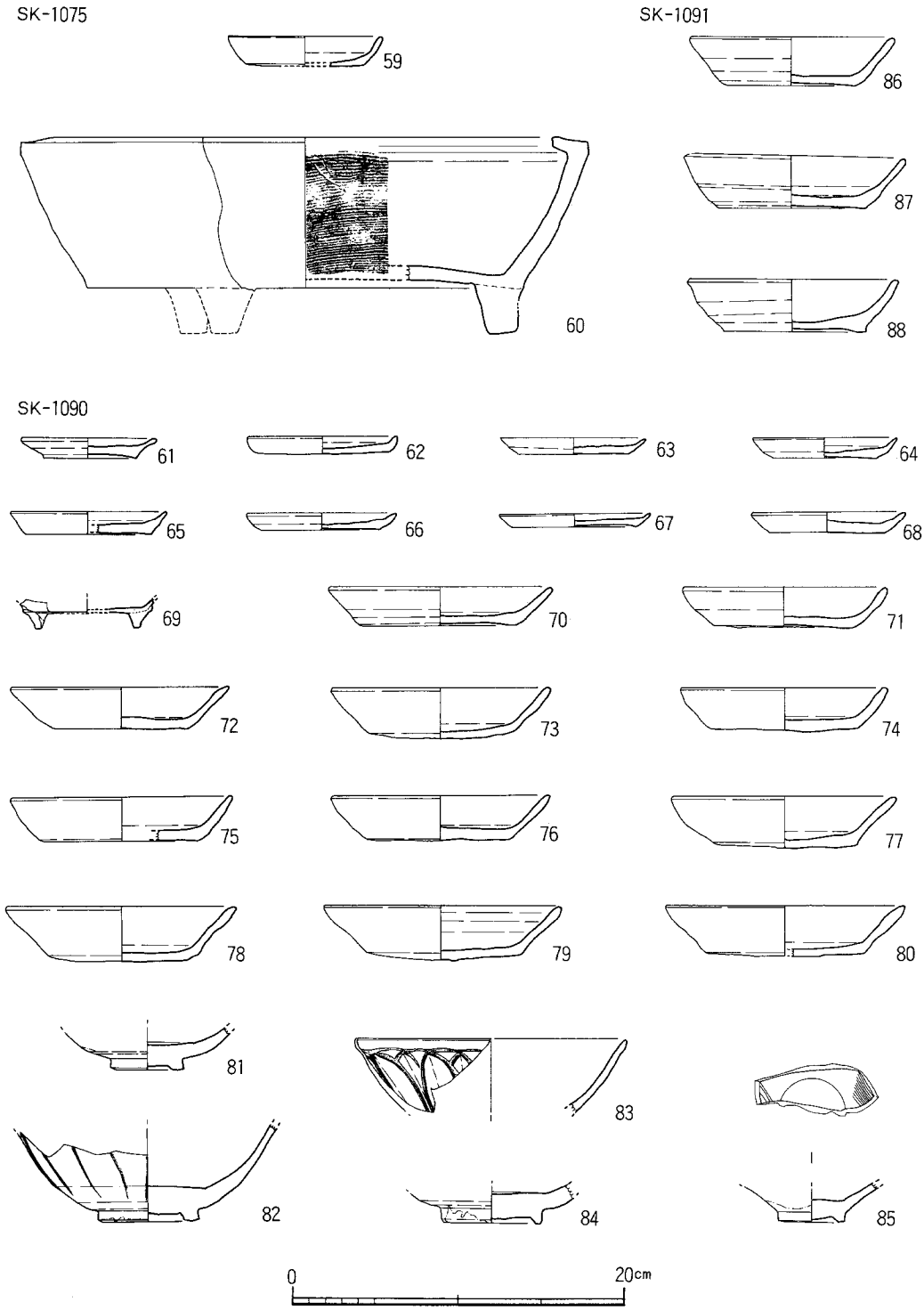


Fig. 13. SK－1075・1090・1091出土土器実測図（1/4）

灰緑色の半透明釉がかかる碗である。見込みは小さめで平たく、内面には大きい櫛描文を施す。96～99は青白磁である。96・97は碗で、口縁部がやや外反する。いずれも胎土は灰白色で半透明のうすい青緑色の釉がかかり、全体に細かい貫入が見られる。内面に片切彫で文様を描く。98・99は平底皿で、いずれも口縁部を輪花となす。白色の緻密な胎土に淡い青灰色の透明釉がかかる。外底部のみ釉を削り取る。100は中国陶器B群の皿で、黒色粒の混じる灰色の緻密な胎土に黒褐色の不透明釉が全体にかかる。

SK－1100（Fig.15　PL.4）

調査区の北隅にあり、北西隅はSK－1098に切られる。平面形は長軸1.9m、短軸0.9mの楕円形になろう。深さは15cmで、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物

101・102は土師器である。101は小皿で、口径8.2cm、器高1.1cm、102は坏で口径12cm、器高2.5cmを測る。どちらも糸切り底をもつ。103は中国陶器B群の皿で、うすい茶色の緻密な胎土に茶オリーブ色の不透明釉がかかる。

SK－1121（Fig.14・15　PL.2・4）

調査区の東隅にある直径110cmの円形土壙である。深さは70cmを測る壁面は急峻で、断面形は箱形に近い逆台形をなす。

出土遺物

104～106は土師器である。104は小皿で、口径9.2cm、器高1.4cm、105は坏で、口径12.8cm、器高2.5cmを測り、どちらも糸切り底である。106は碗で灰褐色の精良な胎土である。内底はナデ調整、外面はヨコナデ調整する。107は国産緑釉陶器の碗である。灰白色の砂っぽい胎土で、光沢ある明るい黄緑色の釉が全体に施される。108～110は白磁である。108はV類もしくはVI類、109はIV類に属する。110は壷もしくは水注の底部である。淡い青色の不透明釉が内面と高台付近までかかる。111は天目碗である。やや粗いうすい茶褐色の土に黒灰色の土が混じる。黒色の不透明釉が厚く施される。112は青白磁の合子の蓋である。113は龍泉窯系青磁II類の碗で、器外壁にヘラ描きの単弁の蓮弁をもつ。114は瓦質土器の捏鉢である。白黒の細～小砂粒を少量含む灰白色の精良な土である。内面はハケ目調整し、内底付近のハケ目が使用により摩滅している。口縁付近はヨコナデ調整し、外面は指頭痕が多く残り、凹凸が激しい。

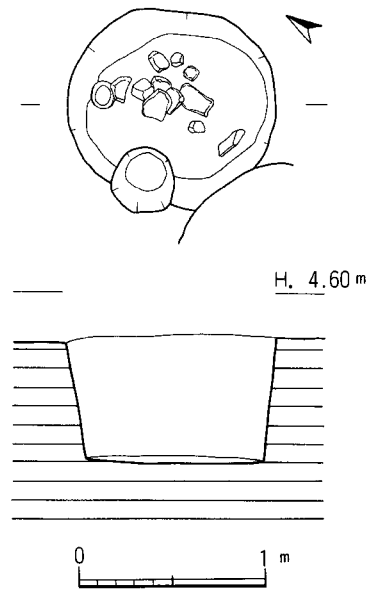


Fig. 14. SK－1121実測図（1/40）

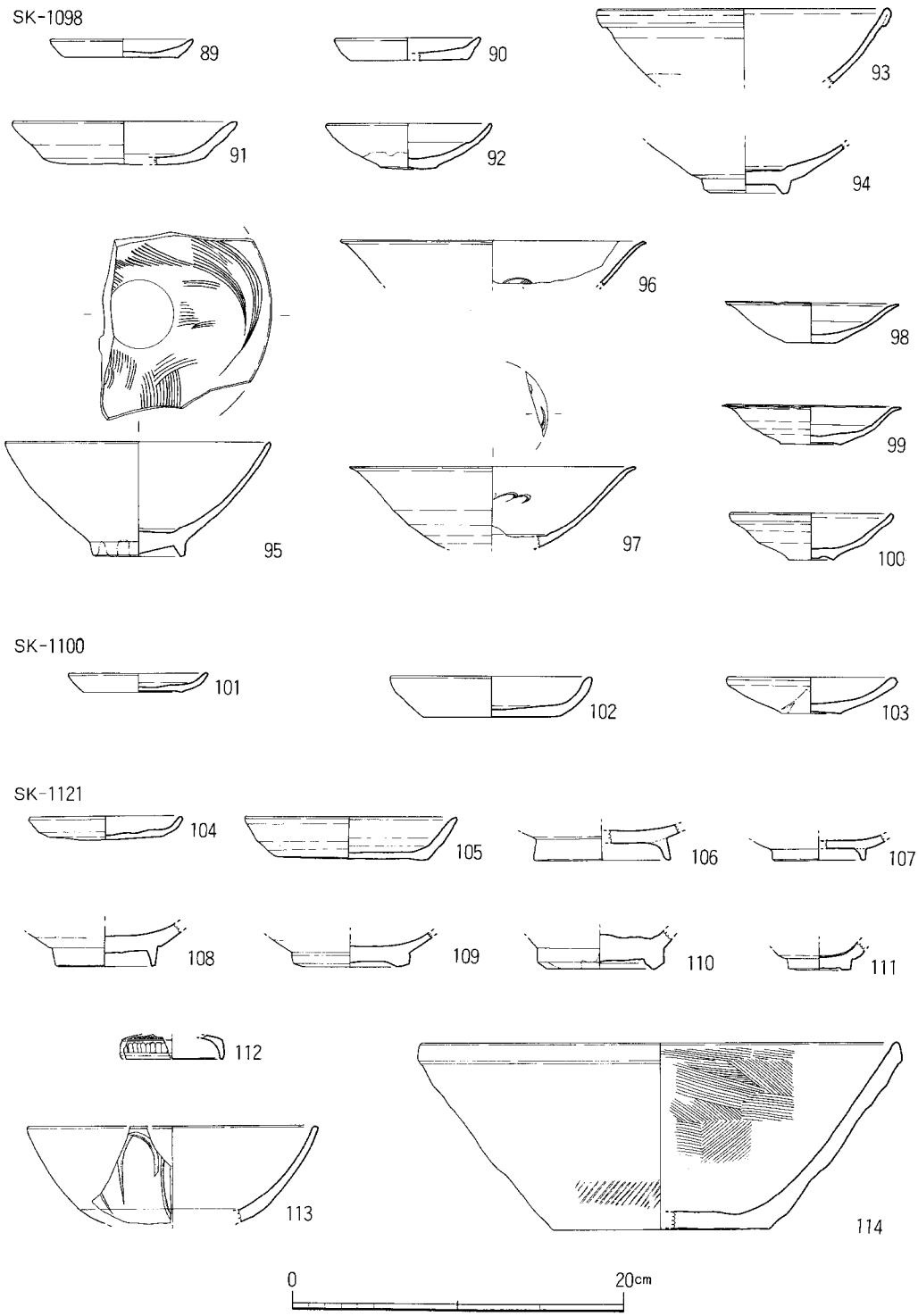


Fig. 15. SK－1098・1100・1121出土土器実測図（1/4）

SK－1154（Fig.19）

調査区の東側にあり、長軸1.55m、短軸1.25mの不整方形をなす。深さは34cmを測り、断面形は舟底状を呈する。

出土遺物

115は須恵器の大甕である。口縁部を折り返し玉縁となす。口径は40cm前後になると思われる。胎土は小～粗砂粒を少量含み、くすんだあずき色を呈する。堅く焼きしまり表面にうすく自然釉がかかる。この外に砥石１点がある。

SK－1158（Fig.19）

調査区の東側にあり、SK－1157、SK－1159に切られる。平面形は70×100cmの隅丸方形を呈し、深さは50cmを測る。断面形は逆台形をなす。

出土遺物

中国陶器Ｂ群の長瓶である。黒灰色の緻密な胎土に不透明な黒色の釉がかかる。

SK－1167（Fig.19　PL.４）

調査区の南端にあり、南側はSX－1168に切られる。平面形は1.6×1.8mの隅丸方形をなす。深さは35cmを測り、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物

117は龍泉窯系青磁III類の坏である。全面に青灰色の不透明釉が厚く施され、畳付のみ釉を削り取り露胎となす。大きな貫入が見られる。

SK－1171（Fig.16・19　PL.４）

調査区南端にある大型の土壙で、平面形は2.5×2.8mの隅丸方形に復原できよう。深さは30～50cmで東側にむかって緩く傾斜する。

出土遺物

118～120は土師器である。118・119は小皿で、口径9.2～9.3cm、器高1.2cm、20は坏で、口径13.1cm、器高2.5cmをはかる。小皿・坏とも内底をナデ調整し、糸切り底をもつ。121は口ハゲの白磁碗で、淡い青緑色の不透明釉が施される。外底と畳付は露胎である。122

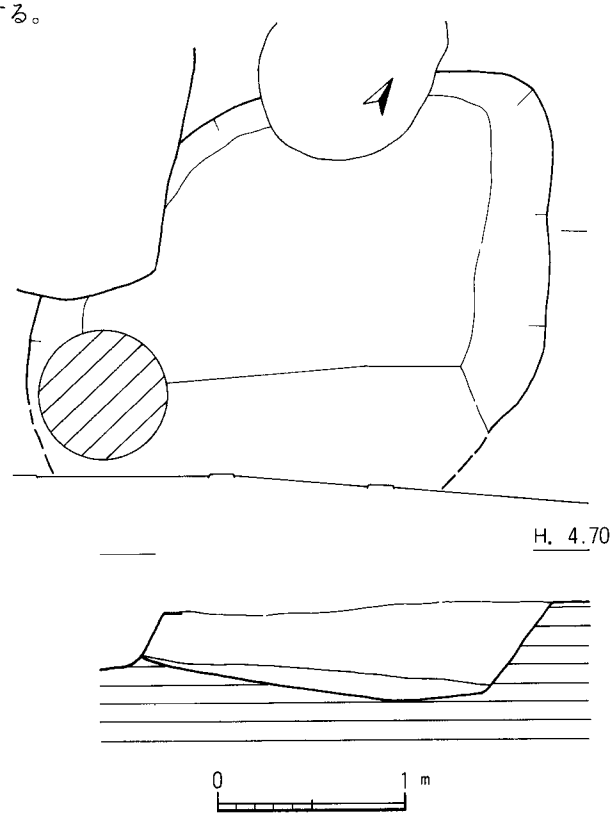


Fig. 16. SK－1171実測図（1/40）

は同安窯系青磁II類の無文の平底皿である。123は須恵質土器の擂鉢である。124は中国陶器B群の深鉢で、うす茶色の緻密な胎土に不透明なくすんだ赤茶色の釉がかかる。口縁部と胴部下位に目跡が残る。

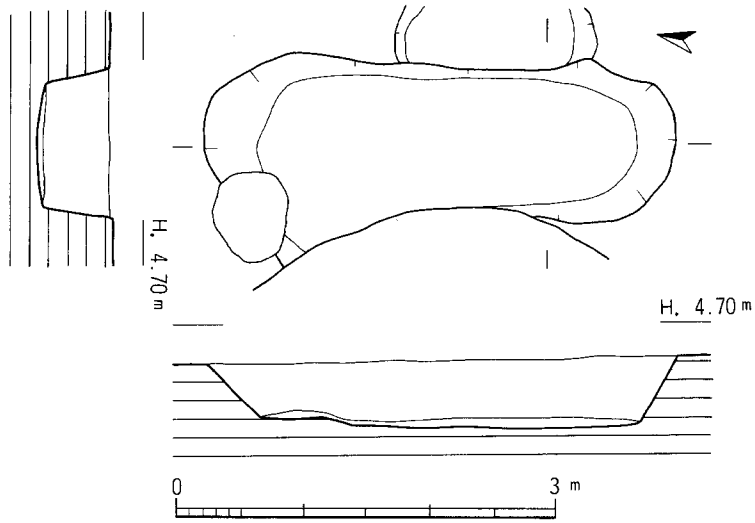


Fig. 17. SK－1175実測図（1/60）

SK－1175（Fig.17～19 PL. 4）

調査区の中央南側に位置する大型の土壙で、SK－1159よりも新しい。平面形は長軸3.7m、短軸1.6mの隅丸長方形をなし、主軸方位をN－11°－Wにとる。底面は平坦であるが、東側は5cm程高いフラット面をつくる。深さは30cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物

125～131は土師器である。125～128は小皿で、比較的器高の高い125・126と、低い127・128の2つのタイプに分かれる。前者は口径7.4cm、器高1.7cm、後者は口径8.2～8.6cm、器高1cmをはかる。129・130は坏で、口径12.3～12.7cm、器高2.4～2.6cmをはかる。小皿・坏とも糸切り底をもつ。131は高台付坏の脚部と思われる。132は中国陶器A群の軍持の口縁部と思われる。ねっとりとした極めて緻密なあずき色の胎に褐釉がかかる。133～135は白磁碗である。133は内面にヘラ描と櫛描を組み合わせた花文を描く。高台内に墨書が残る。134はIV類、135はVI類に属する。136・137は龍泉窯系青磁I類の碗である。138は土師質土器の鍋で、口唇部に縄目圧痕が見られる。白い小～粗砂粒を多量に含んだ茶褐色の粗い胎土である。口縁部から外面にかけて煤が付着する。

3は、粘板岩質の薄い石製品で4面とも丁寧に磨き上げている。

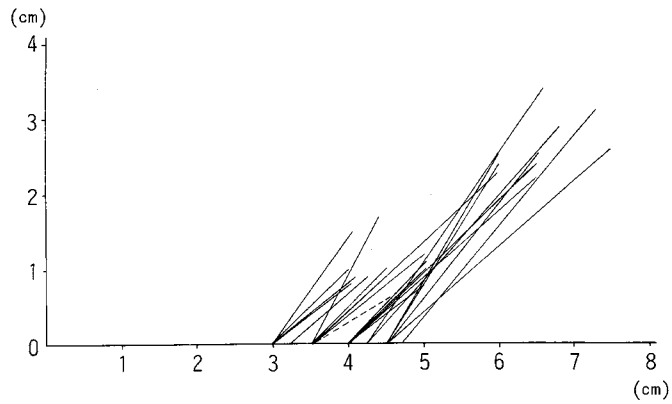


Fig. 18. SK－1175土師皿計測グラフ

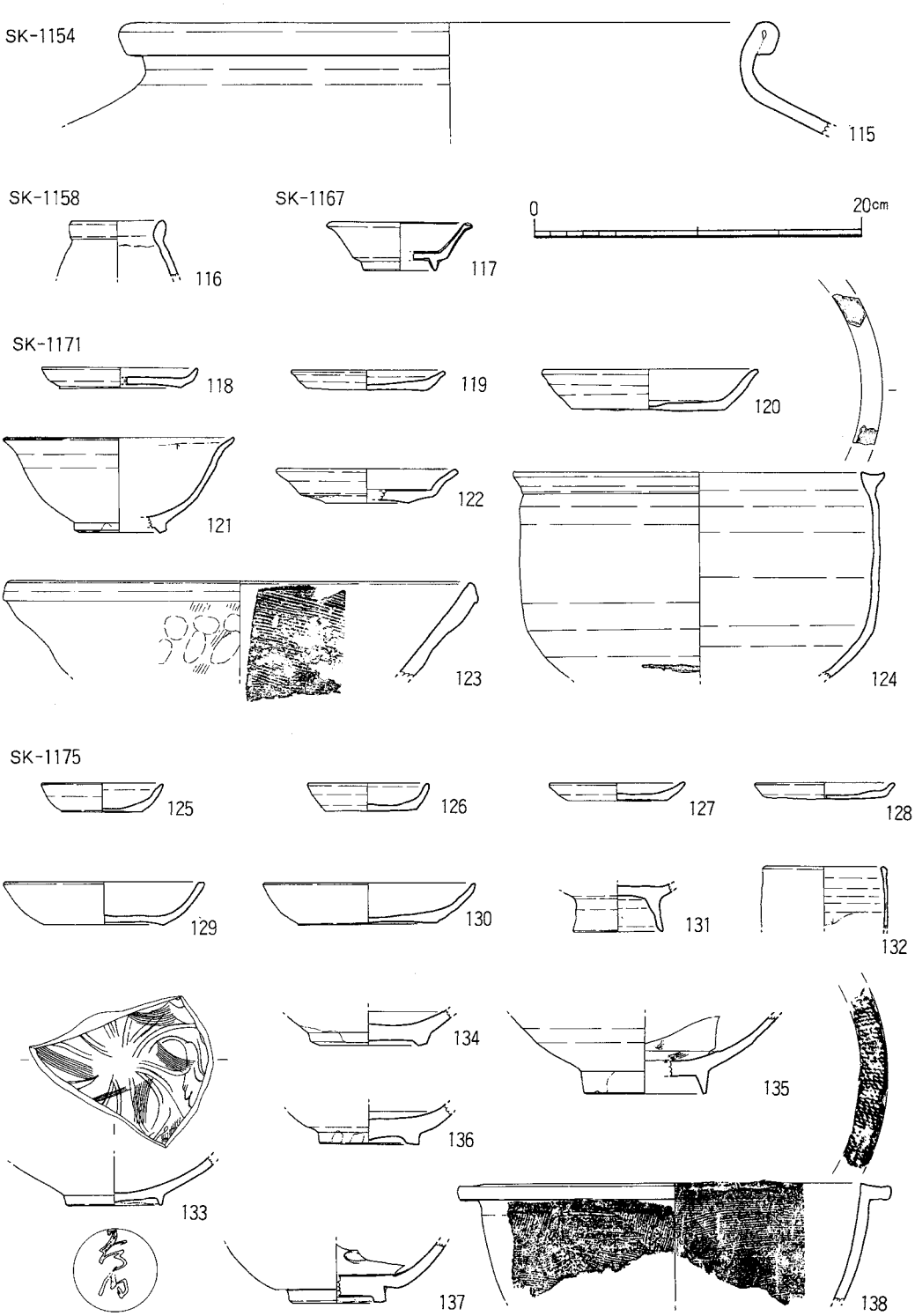


Fig. 19. SK－1154～1175出土土器実測図（1/4）

(3) その外の遺講と遺物 (SX・SP)

第1面では、井戸址と土壙の外に不整形土壙（SX)と多数のピット（SP）が検出された。

不整形土壙とは、いわゆる土壙とは明らかに異なる土壙状の遺構である。平面形は、円形や方形に近いものから不整形のものまで様々で、壁面や床面は、凹凸や立ち上がりの不確かなものが多い。このような遺構検出面の包含層土壌と明らかに異なる土壌の堆積した不明確な凹地状の遺構を、一括して不整形土壙として取り扱った。この種の不整形土壙は調査区全域で15基検出し、うち10基からは良好な遺物が得られた。

また、ピットの中には明確な柱痕跡が検出されたものや柱筋の通るものもあり、建物址等の構造物を構成したと考えられるが、調査区が狭小な故に全体像を把握できるものはなかった。

出土遺物

139は、SX－1063出土の中国陶器と思われる蓋である。黒色粒を含む灰色の緻密な胎土で、天井部には黒褐色の不透明釉がかかる。天井部には細い粘土紐を取り付けつまみとしている。

140と141はSX－1072より出土した。140は白磁小碗で、内面に線描きの文様が見られ、見込みに茶溜りをつくる。淡青色の半透明釉がかかり全体に細かい貫入がある。141は中国陶器C群の捏鉢である。白黒の小～粗砂粒を多量に含んだ濃い灰褐色の胎土で無釉である。

142と143はSX－1074から出土した糸切り底の土師器の坏である。142は口径15cm、器高2.5cm、143は口径15.2cm、器高3cmを測る。いずれも内底にナデ調整が認められ143には板状圧痕が残る。

144はSX－1087出土の中国陶器B群の鉢である。白色粒や褐色粒を含んだうす茶色の緻密な胎に同色の不透明釉がかかる。口縁には目跡が残る。

145～150はSX－1088から出土した糸切り底をもつ土師器の小皿である。口径9.2～9.6cm、器高1.5～1.8cmを測り、比較的大きめである。器型も類似しており体部が丸みをもって立ち上がり口縁部が若干内弯する。いずれも体部・内底ともにヨコナデ調整で仕上げる。

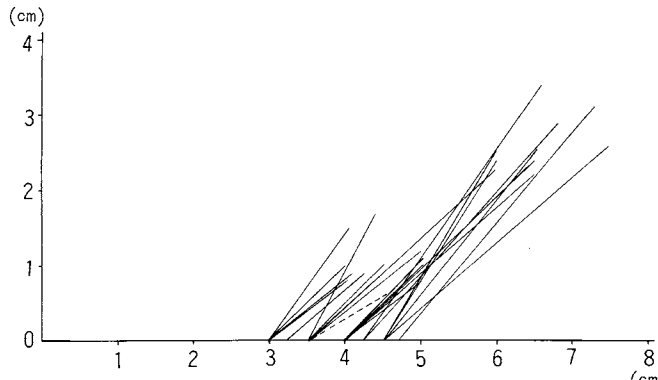


Fig. 20. SX－1089土師皿計測グラフ

SX－1089（Fig.20・21　PL.3）

調査区の西側、第Ⅰ区の南西端で検出した。鋼矢板の角地になるため全容は判然としないが、平面形は径１m余の円形になるものであろう。深さは30cm余を測り、円錐状の断面形をなす。壙内には破砕した土師器小皿が多量に投棄されていた。

151～160は土師器である。151～154は小皿で、口径8.1～8.9cm、器高0.8～1.5cm、155～160は坏で、口径13～14.3cm、器高2.2～3.2cmを測る。小皿・坏とも内底にナデ調整が見られ、糸切り底をもち、157を除いて板状圧痕が見られる。161･162は龍泉窯系青磁Ⅱ類の碗でヘラ描きの蓮弁をもつ。161には見込みにスタンプがある。

遺構No.	法量(長軸×短軸×高さ)	主軸方位	平面形	断面形	出土遺物
SK-1001	×83×24		不整形		土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・中国陶器・古窯系陶器・近世陶磁器
SK-1002	150×120×45		隅丸方形		土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁・古窯系陶器・中国陶器・石鍋
SK-1018	×131×22		不整形		土師器・須恵器・土師質土器・瓦器・白磁・青磁・黒褐釉・中国陶器・瓦
SK-1051	105×50×15	N－83°－W	隅丸長方形	舟底状	土師器・古窯系陶器・中国陶器・青磁
SK-1057	93×92×22	N－58°－E	円形		土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器・石玉・石鍋
SK-1058	226×125×30	N－30°－E	楕円形	凹レンズ状	土師器・土師質土器・瓦質土器・須恵器・白磁・青磁・黒褐釉・中国陶器
SK-1061	110×87×9	N－37°－E	隅丸方形		土師器・青白磁・白磁・青磁・中国陶器
SK-1062	190×110×45	N－7°－E	不整楕円形	逆台形	弥生式土器・土師器・須恵質土器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器
SX-1063	176×90×8	N－58°－E	不整形		土師器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器
SK-1070			楕円形	舟底状	土師器・瓦器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器
SK-1071	160×110×		隅丸方形		土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器
SX-1072	×78×32	N－32°－W	長楕円形		土師器・白磁・青磁・中国陶器・古窯系陶器・瓦
SX-1074	98×95×28	N－32°－W	円形		土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器
SK-1075	95×70×45	N－89.5°－E	楕円形	舟底状	中国陶器
SK-1087	105×　×23	N－61°－W	楕円形		土師器・白磁・青磁・中国陶器
SX-1088	×58×		不整形		土師器・土師質土器・瓦質土器・中国陶器
SX-1089	100×100×30		円形	円錐状	土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁・中国陶器 他
SK-1090	120×90×50		楕円形	舟底状	土師器・須恵器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器
SK-1091	100×100×50		不整形	凹レンズ状	土師器・須恵器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器
SK-1098	180×180×30	N－32°－W	円形	逆台形	土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・白磁・青磁・中国陶器
SK-1099					土師器・須恵器・白磁
SK-1100	190×90×15	N－85°－E	楕円形	逆台形	土師器・瓦器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器・石鍋
SK-1121	110×110×70	N－32°－W	円形	逆台形	土師器・須恵器・須恵質土器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器
SX-1132	125×68×12	N－58°－E	楕円形		土師器・須恵器・土師質土器・白磁・青磁
SX-1133					土師器・白磁
SX-1134	×85×38		円形		土師器・須恵器・土師質土器・白磁・中国陶器・近世陶磁器・石鍋
SX-1135	103×84×47	N－81.5°－E	円形		土師器・須恵器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器
SX-1137	101×80×44	N－84.5°－E	隅丸方形		弥生式土器・須恵器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器・石鍋
SX-1142	78×70×20	N－58°－E	円形		土師器・須恵器・瓦質土器・土師質土器・白磁・中国陶器・近世陶磁器
SK-1143	×110×		不整形		土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器
SX-1146	120×76×12	N－8°－E	隅丸方形		土師器・白磁
SK-1147	110×95×28	N－69.5°－W	円形		土師器・須恵器・白磁・黒褐釉・中国陶器・銅銭
SK-1154	155×125×34	N－48°－W	不整方形	舟底状	土師器・須恵質土器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器・黒褐釉・古窯系陶器
SX-1156	85×70×22	N－88°－E	隅丸方形		土師器・須恵器・白磁・中国陶器
SK-1157	95×95×25	N－32°－W	円形		土師器・白磁・青磁・中国陶器
SK-1158	100×70×50	N－15°－W	隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・白磁・瓦
SK-1159	158×　×30	N－13.5°－E	楕円形		土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器
SK-1167	180×160×35	N－70°－E	隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器
SX-1168			不整形		土師器・須恵器・白磁・青磁・黒褐釉・中国陶器
SK-1171	280×250×40	N－57°－E	隅丸方形	舟底状	弥生式土器・土師器・須恵質土器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器
SK-1174	154×　×50	N－78.5°－E	楕円形		土師器・須恵器・須恵質土器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器
SK-1175	370×160×30	N－11°－W	隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・須恵質土器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器
SK-1183	118×65×26	N－32°－W	隅丸方形		土師器・須恵器・瓦器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器
SX-1189					土師器・須恵器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器・石鍋

Tab. 1. 第1面土壙一覧表

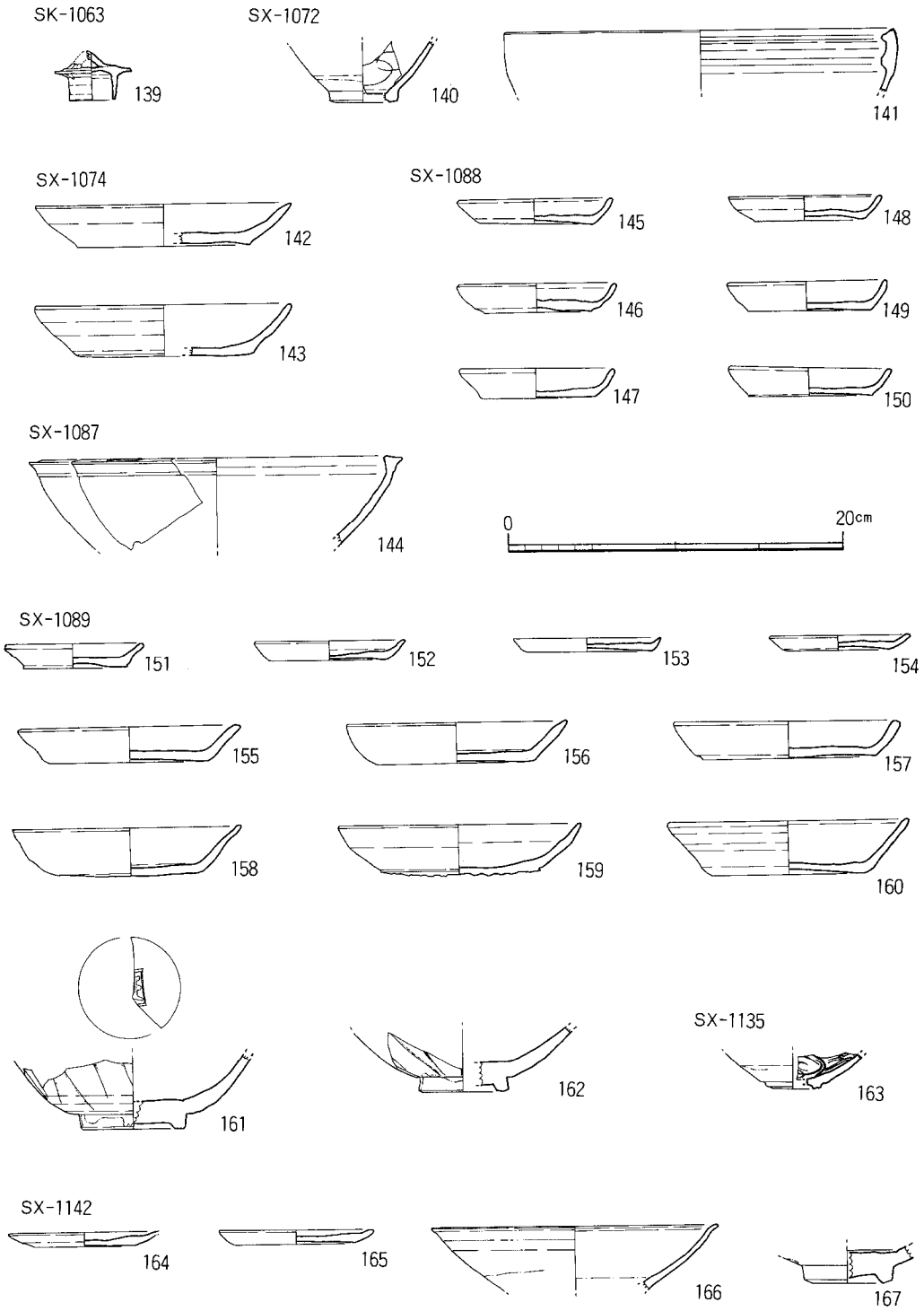


Fig. 21. SX－1063～1142出土土器実測図 (1/4)

163はSX－1135出土の青磁小碗で、内面体部に小さなヘラ描文を施す。灰白色の緻密な胎土に半透明のうすい茶オリーブ釉がかかる。広東系のものと思われる。

164～167はSX－1142より出土した。164・165は糸切り底をもつ土師器の小皿である。164は口径8.9cm、器高0.8cm、165は口径9.1cm、器高９㎜を測る。どちらも内底にナデ調整が認められる。166は白磁碗である。若干外反する口縁をもつ。淡い青色の不透明釉がかかり、見込みに釉の削り取りが見られる。167は同安窯系青磁碗である。

168～170はSX－1168から出土した。168・169は土師器である。168は小皿で、口径8.8cm、器高1.2cm、169は口径14.3cm、器高３㎝を測る。どちらも糸切り底をもち、169は板状圧痕をもつ。170は青磁の碗である。灰色の緻密な胎土で、青灰色の半透明釉がかかる。重ね焼きのため、見込みの釉が細く輪状にはがれ、高台畳付にもぐるりと釉が付着する。

171～189はSX－1189より出土した。171～173は土師器である。171・172は小皿で、口径8.7～8.8cm、器高1.3～1.4cm、173は坏で、口径14.2cm、器高2.8cmを測る。小皿・坏とも内底にナデ調整が見られ、糸切り底をもち板状圧痕が残る。174～177は白磁である。174はⅦ類の平底皿で、見込みに線描きと櫛描きの花文がある。175はⅨ類の碗と思われる。見込みの釉は雑に削り取られる。176・177はⅦ類の碗で、ベージュ色の胎にうすい灰ベージュ色の半透明釉がかかる。177の内面にはヘラで花文が描かれる。178～183は龍泉窯系青磁である。178～181はⅠ類に属する。178は内面に雲文が描かれ、畳付に４か所の目跡が認められる。179は見込みに花のスタンプが、180は『金玉満堂』のスタンプがある。181には見込みに目跡が残る。182・183はⅡ類のもので、線描きの単弁の蓮弁をもつ。182は灰色の胎に青灰色の半透明釉が、183は灰ベージュ色の胎に金茶オリーブ色の半透明釉が施される。184は同安窯系青磁Ⅱ類の無文の碗で、酸化ぎみに焼成される。185～189は中国陶器である。185・186はＢ群のもので、185は長瓶、186は壷である。187・188はＡ群の盤である。187は広い鍔口縁をもつが、188は口縁を玉縁となす。188には口縁に目跡が残る。189はＢ群の鉢で、灰ベージュ色の緻密な胎土に濃い褐色の不透明釉がかかる。

190～222はピットから出土した。190～195は土師器である。190～192は小皿、193は中皿、194は坏である。いずれも内底にナデ調整が見られ、糸切り底をもつ。191・192・194には板状圧痕が残る。195は碗である。体部内外は雑なヘラミガキで仕上げる。低い高台の内側には糸切り痕が残る。うすい茶褐色の精良な胎土である。196～200は青白磁である。196は菊弁印花の合子身、197は天井部・側面に花文が陽刻された合子の蓋である。198は小壷である。胎土はベージュ色でやや粗い。淡青色の粘性の強い半透明釉が厚く施され、口縁部の釉は削り取られる。胴部外面には型造りの菊弁が見られる。199・200は平底皿で、200は外底の釉が削り取られる。201～209は白磁である。201・202は平底皿。203～209は碗である。203・206はⅣ類、204はⅡ類、205はⅨ類、207はⅦ類、208・209はⅥ類に属する。210～214は同安窯系青磁である。210はⅠ類の平底皿で、外底のみ釉を削り取る。211・212はⅡ類の碗である。213は体外壁に大きく放射状にヘ

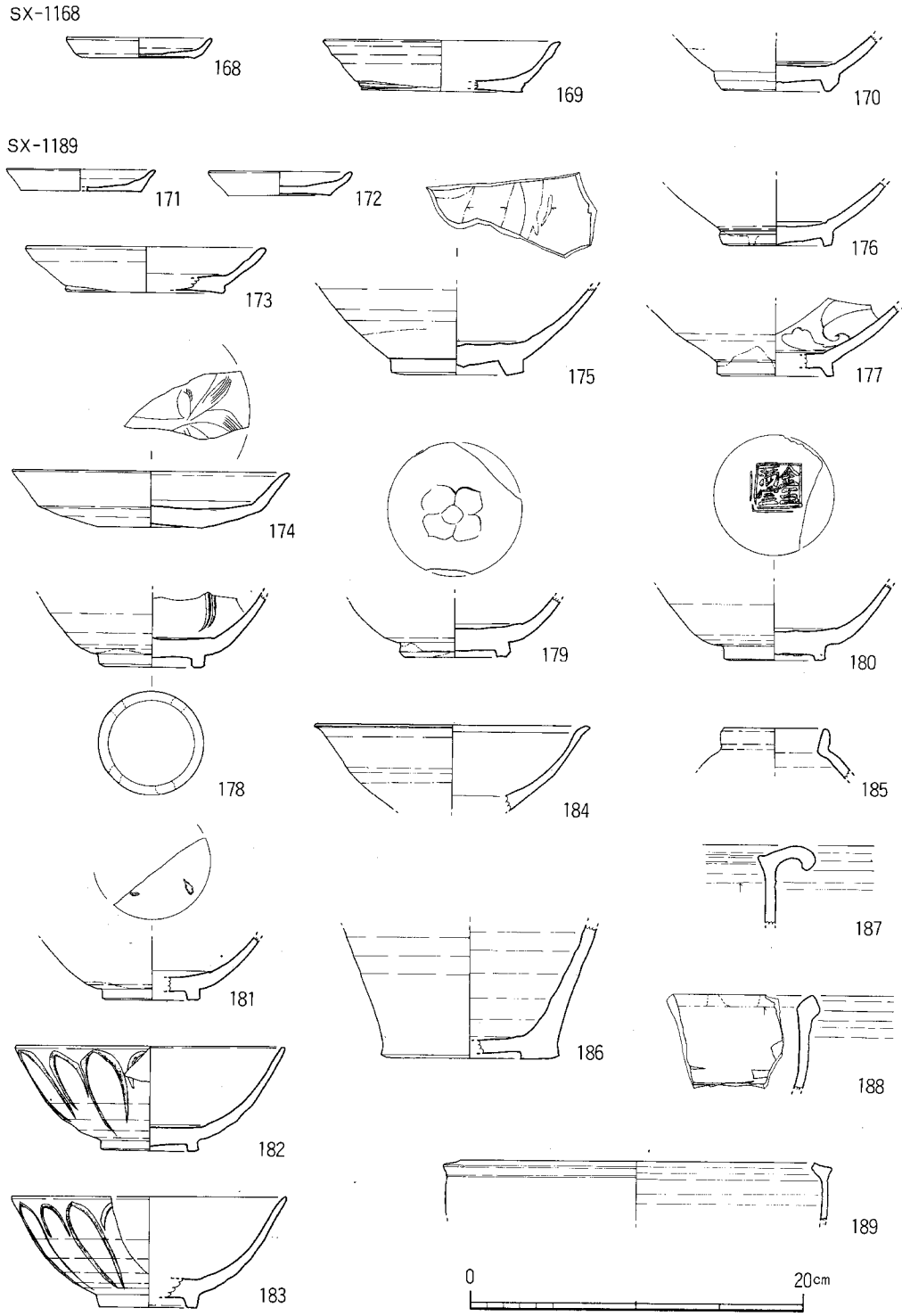


Fig. 22. SX－1168・1189出土土器実測図（1/4）

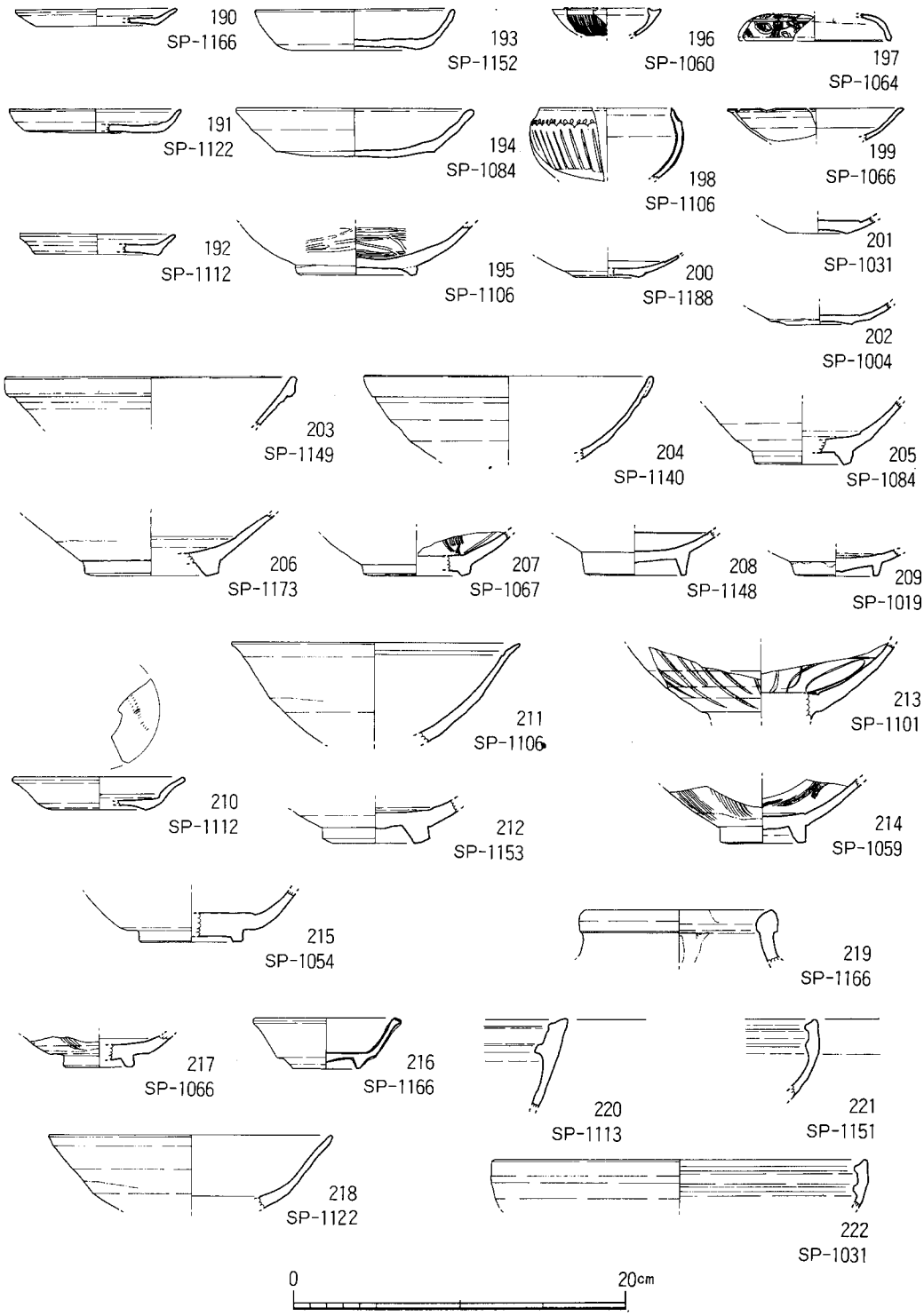


Fig. 23. 第1面SP出土土器実測図 (1/4)

ラ描きの斜め線を刻み、内面にはヘラ描文がある。灰オリーブ色の半透明釉が高台付近までかかる。214はII類の碗である。215・216は龍泉窯系青磁である。215はⅠ類の碗、216はIII類の坏である。217は青磁の碗である。灰色の緻密な胎にうすい灰オリーブ色のガラス質の釉が内面と体外下半までかかる。対外壁に櫛描文がわずかに残る。218は青磁の高台付坏であろうか。うすい灰色のやや粗い胎土で、灰オリーブ色の釉がかかる。219～222は中国陶器である。219は準A群の壷で茶褐色の釉がかかる。220～222はC群の捏鉢である。いずれも小～粗砂粒をぎっしりと含んだ粗い胎土で無釉である。

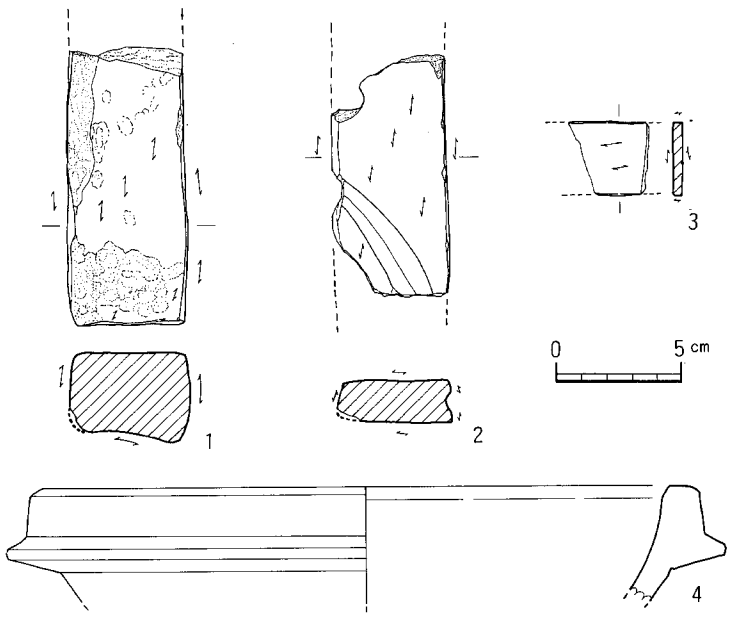
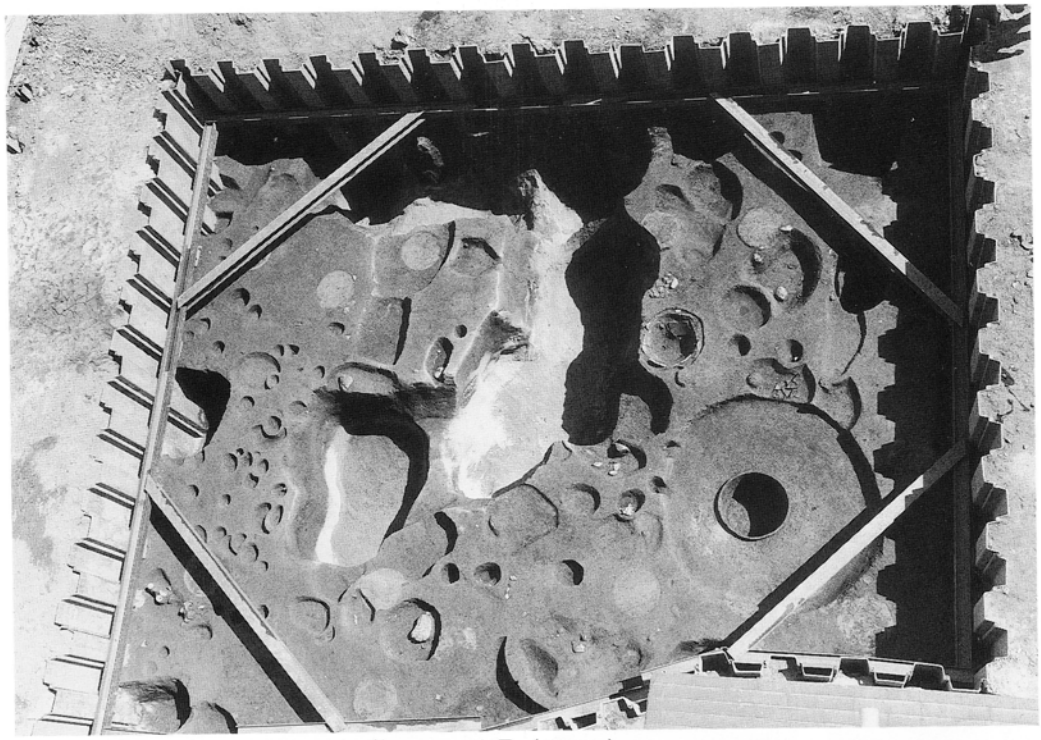


Fig. 24. 第1面遺構出土石製品実測図（1/3）

PL. 1.



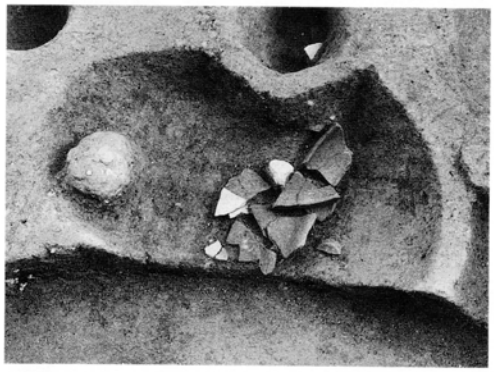
(1) 第1面Ⅰ区全景（北から）

(2) 第1面Ⅱ区全景（北西から）

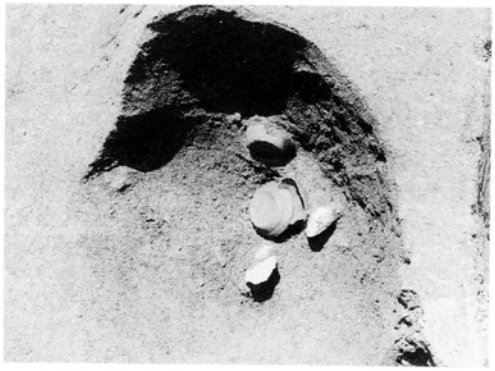
PL. 2.

(1) SK－1051（南から）

(2) SK－1051（西から）



(3) SK－1071（北から）



(4) SK－1091（北から）

(5) SK－1121（東から）

(6) SK－1121（西から）

PL. 3

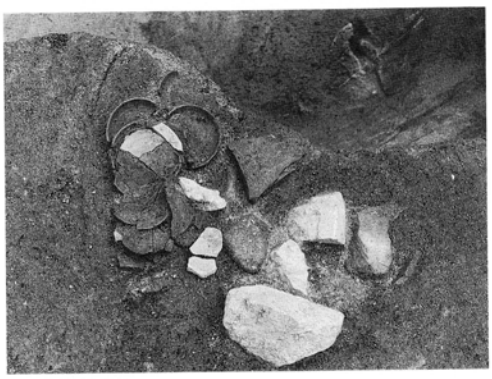
(1) SK－1070（南から）

(2) SK－1090（東から）

(3) SX－1074（西から）

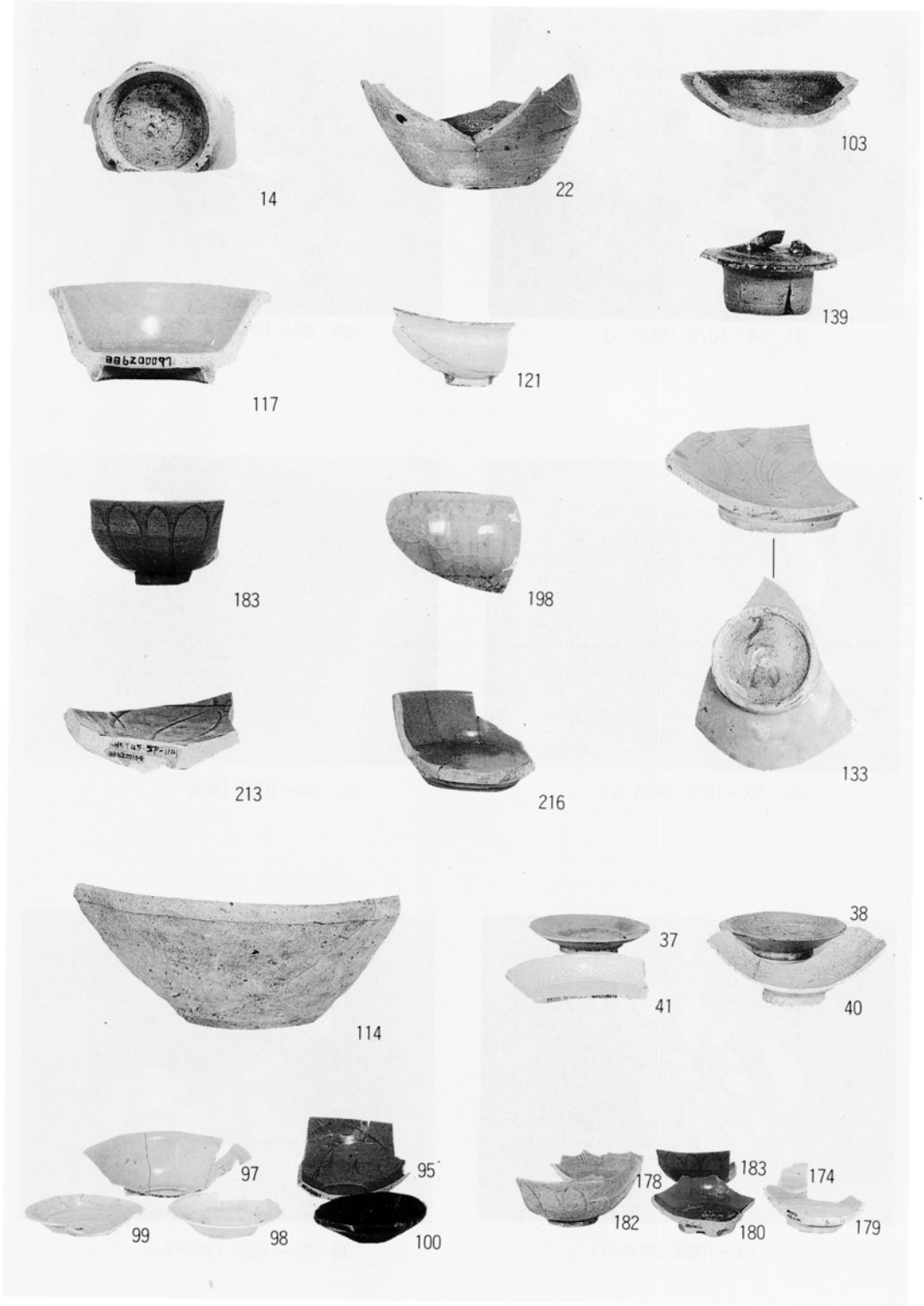
(4) SX－1089（北から）

(5) SX－1088（南から）



(6) SX－1088（西から）

PL. 4.



第 1 面 出 土 遺 物（縮尺不同）

2．第2面の調査

第2面は、第1面ののる第1層の遺物包含層を約25～30cmほど掘り下げて検出した遺構面で、標高は4.5～4.55mを測る。第1層の包含層の一部には、版築状に固めた整地層が狭範囲に認められたが、町割りを区画する溝等はなく、建物に伴うものと考えられる。

第2面で検出した遺構は井戸址2基、土壙16基等と柱穴がある。

このうち井戸址からは多量の土師皿が出土し、廃品の投棄壙として使用された井戸の終焉を物語るものである。また、SK－2001からは100点以上の土師皿が出土したが、この中には底面に、目と口を刳り貫いて作った「面」があり、当時の習俗を知るおもしろい資料になろう。

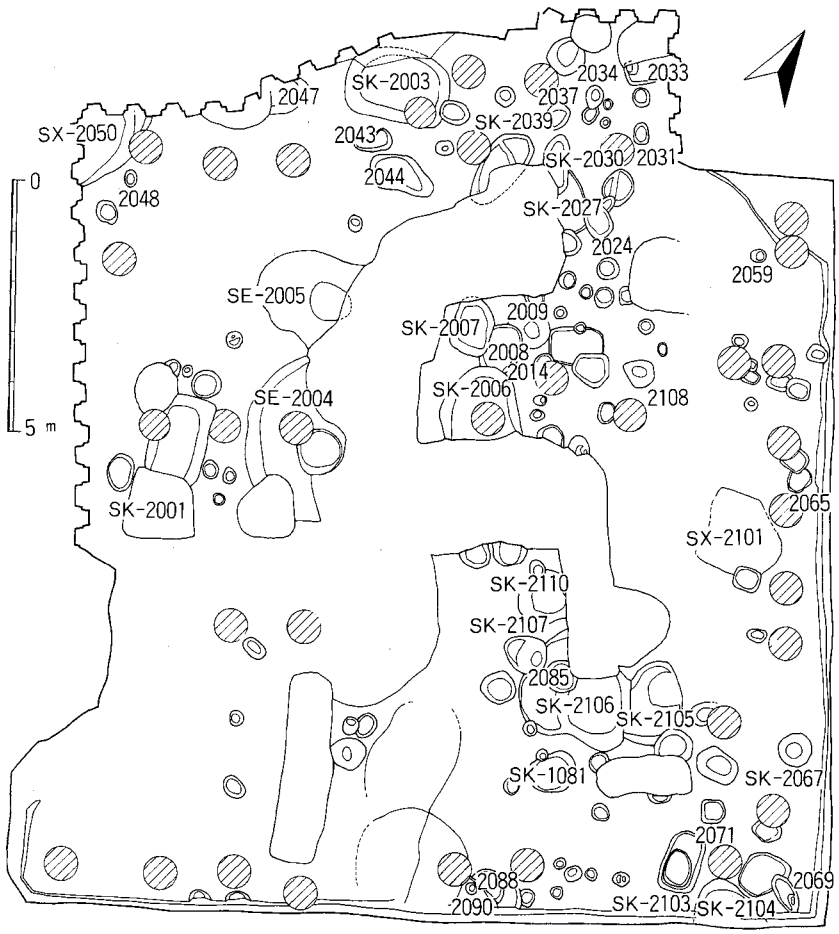


Fig. 25. 第2面遺構配置図（1/150）

(1) 井戸址 (SE)

第2面では、調査区の中央部で2基の井戸址を検出した。1基はやや小型の素掘りのものであり、1基は大型で深く井戸側に木枠を用いたものである。いずれも掘り方内からは一括投棄された状態で多量の遺物が出土し、上層ほどその傾向が強い。これは井戸の廃棄に際しては廃品処理場的性格で一気に埋め戻されたものだろう。これは博多遺跡群のこの期の井戸址でしばしば見受けられる。

SE−2004 (Fig.26〜29・48 PL.6)

調査区のほぼ中央で検出した井戸址で、すぐ北にはSE−2005がある。東側半分は撹乱を受けて消失しているが、掘り方は直径約3.4mの円形になろう。掘り方の覆土は暗茶褐色土で、約1m掘り下げると中央部で直径90cmの井戸側を検出した。井戸側の覆土は濃灰褐色土で、壁面には2〜5mmの濃灰黒粘質土が薄く貼りついており、井戸側に木枠を用いたものと思われる。井戸底面は、井戸側検出面より2.5m下がり、標高0.8mを測る。掘り方の壁面は検出面より2m程の深さまで擂鉢状に掘り、それより底面までの1.5mは井戸側の大きさだけを掘っている。掘り方内からは龍泉窯や同安窯系青磁のほか、多量の土師皿が出土している。輸入青磁類に比べ土師皿の量は圧倒的に多く、一括投棄されたかの如き状況を呈す。また、井戸側内からは大型の緑釉壷が出土している。

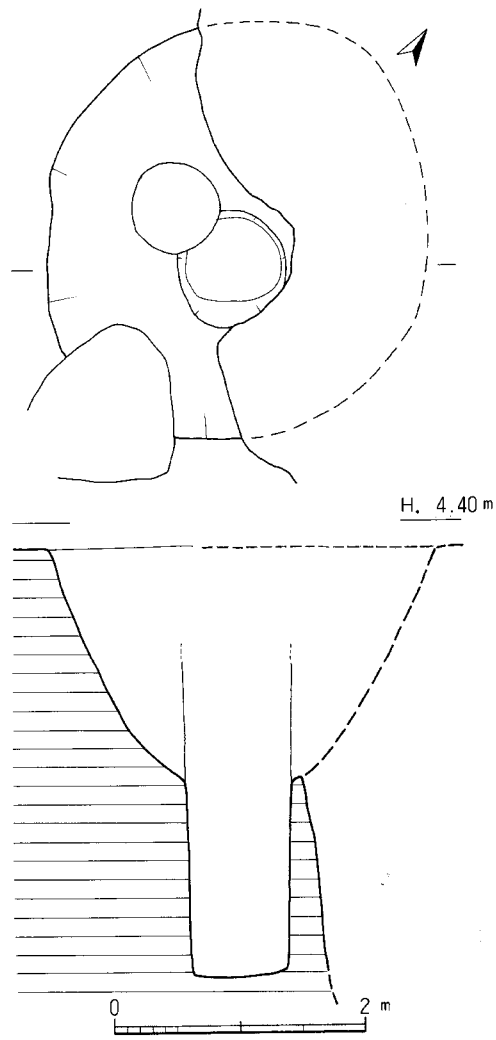


Fig. 26. SE−2004実測図 (1/60)

出土遺物

223〜281は土師器である。223〜273は小皿で、口径8.4〜9.4cm、器高0.9〜1.2cmを測る。274〜281は坏である。比較的器高の高いタイプの274・277を除くと、13.4〜14.2cm、器高2.4〜2.8cmである。小皿・坏とも全て糸切り底で板状圧痕をもつ。また274を除く全てに内底にナデ調整が認められる。281は焼成後に5カ所の穿孔を行い、面のように仕

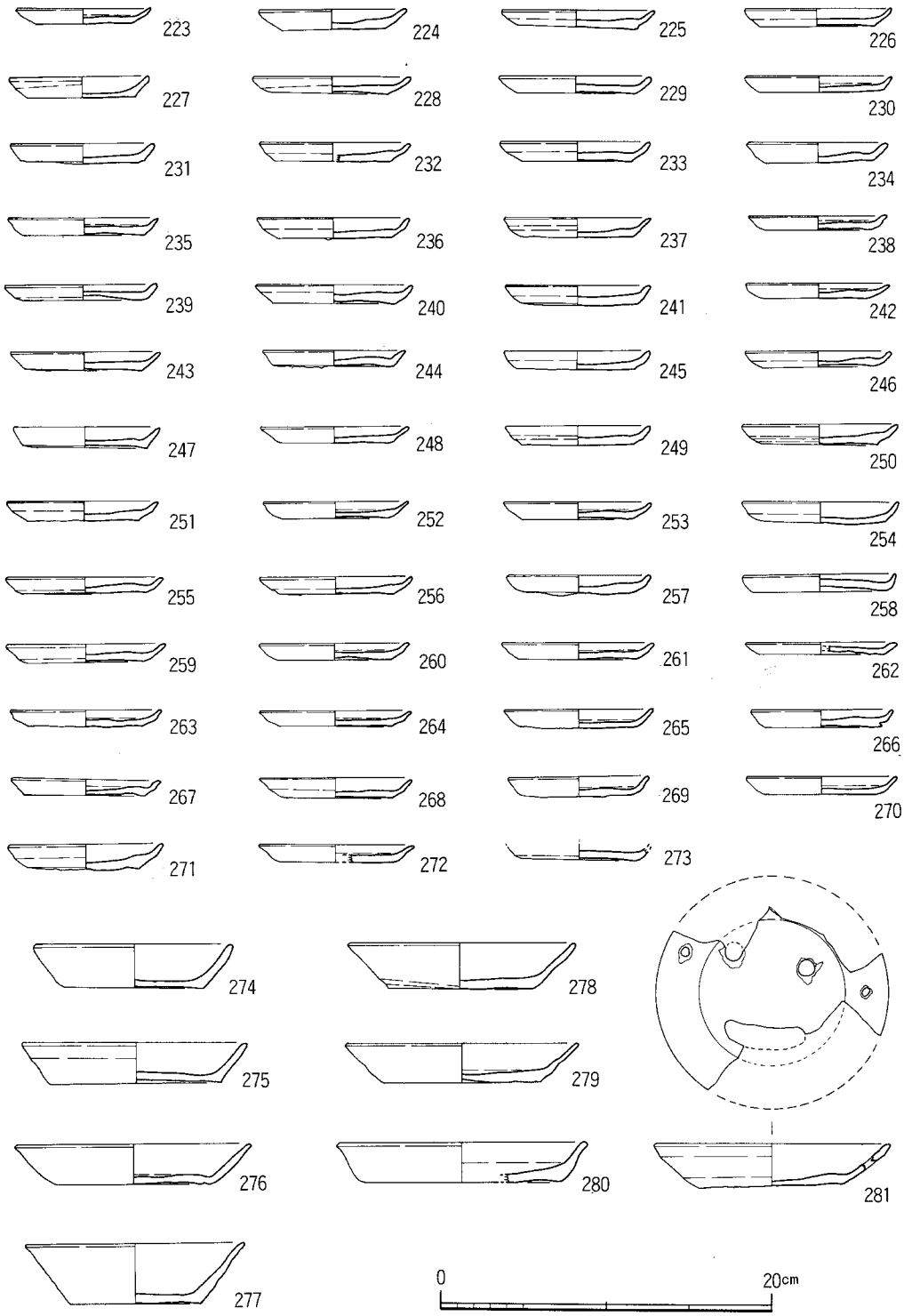


Fig. 27. SE－2004出土土器実測図(1) (1/4)

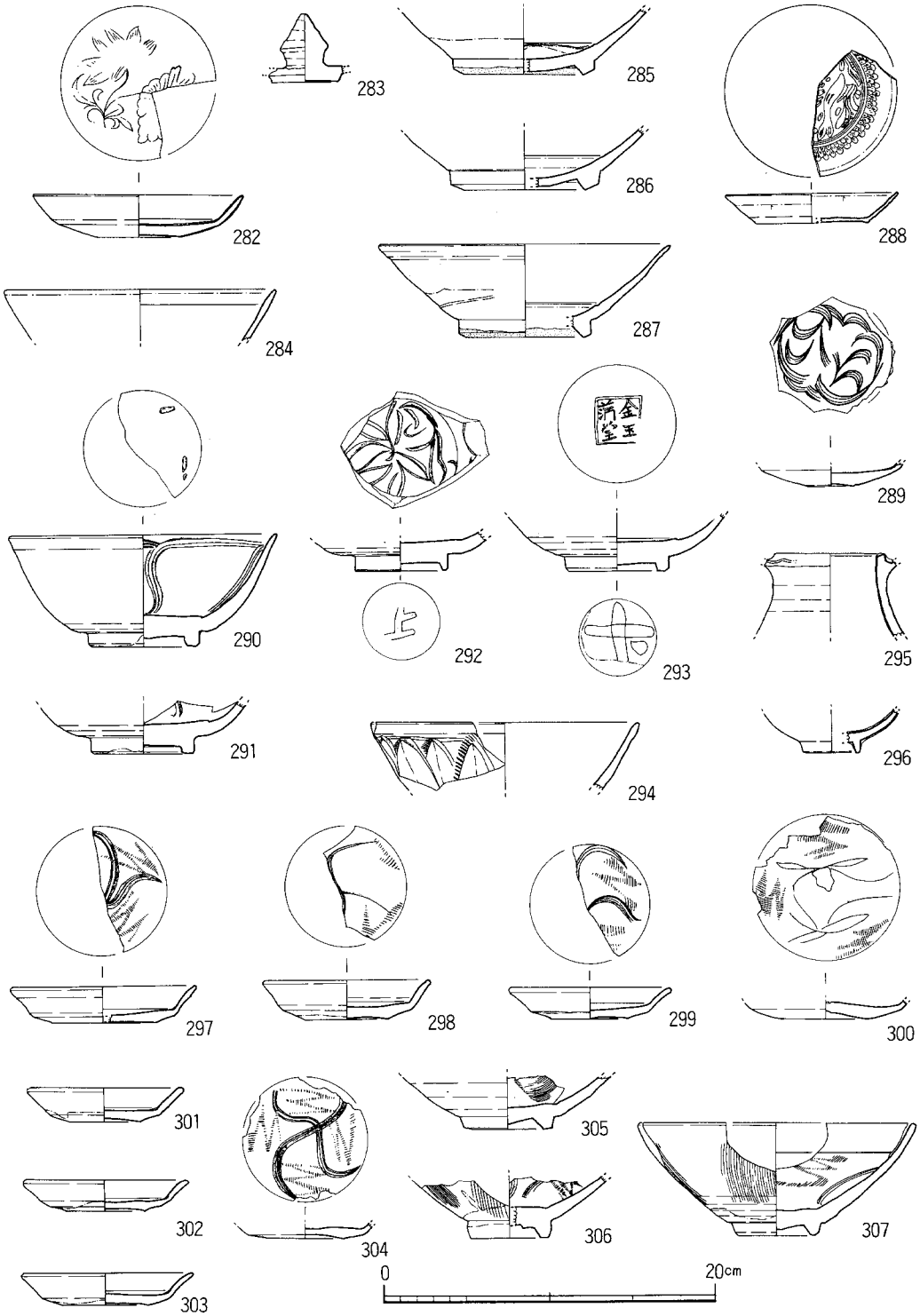


Fig. 28. SE－2004出土土器実測図(2) (1/4)

上げている。282～287は白磁である。282はVII類の平底皿で見込みに花のスタンプが見られ、外底の釉は削り取られる。283は宝珠形のつまみをもつ壷の蓋である。うすい灰ベージュ色の緻密な胎土で、天井部だけに淡青灰色の不透明釉がかかる。極めて細かい貫入がはいる。284は口ハゲの碗で、青白磁のような淡青色の半透明釉がかかる。285・286はIV類の碗で見込みの釉を輪状に削り取る。287は口縁がやや外反し見込みに釉の削り取りが見られる碗である。灰色の緻密な胎土に若干青みある灰白色の不透明釉がかかる。高台に目砂が付着する。288が口ハゲの青白磁の平底皿で、見込みに双魚の浮文をもつ。若干草色がかった半透明釉がかかる。外底の釉は少しふきとられている。289～296は龍泉窯系青磁である。289はI類の平底皿で見込みに櫛描文を施す。290～293はI類の碗。290・291は内体壁に雲文、292は見込みに花文、293は見込みに『金玉満堂』のスタンプをもつ。また292は『上』、293は『十』の字に似た墨書が残る。294は鎬蓮弁をもつII類の碗である。295は壷の口頸部である。うすい青灰色の半透明釉が厚く施釉される。III類に属するものと思われる。296はIII類の小碗である。297～307は同安窯系青磁である。297～304は平底皿で、297・300・304はI類に属し、他はII類である。305～307はいずれもII類の碗である。208～316は中国陶器である。308はB群の皿。309はA群の壷。310はB群の蓋で、うすい茶色の緻密な胎に不透明な黒褐色の釉がかかる。311はC群の擂鉢である。白色粒を

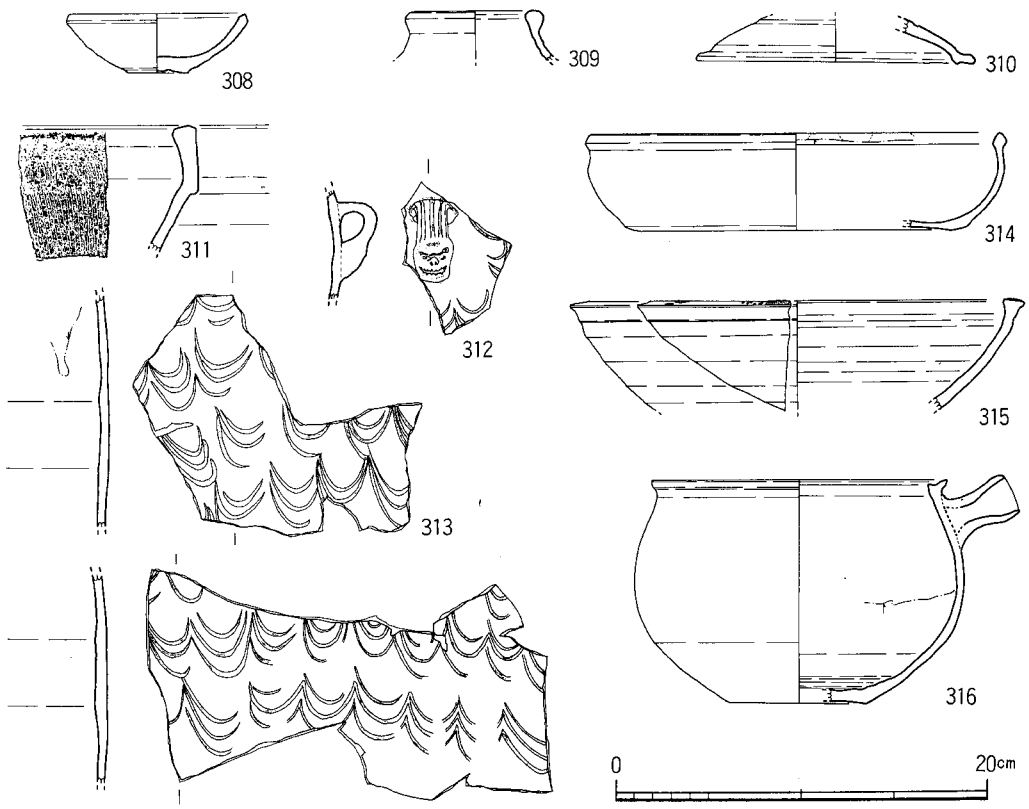


Fig. 29. SE－2004出土土器実測図(3) (1/4)

含む紫色を帯びた黒褐色胎土で、口縁部に茶褐色の釉がかかる。312は獣面のついた耳をもつ壷である。白黒の細～小砂粒を多く含んだ灰ベージュ色の胎土に黒緑色の不透明釉がかかる。313は緑釉の壷である。外面に太い線彫の波状文が描かれる。白黒の細砂粒を多く含む。粗い灰ベージュ色の胎土に光沢あるペンキ状の緑釉がかかる。かなり大型になると思われ、同一固体の小破片が多数出土している。314はA群の玉縁をもつ盤。315はB群の鉢。316はB群の行平である。褐色粒を少量含んだうす茶色の緻密な胎土である。茶色の不透明釉が外面全体と内面下半に施される。

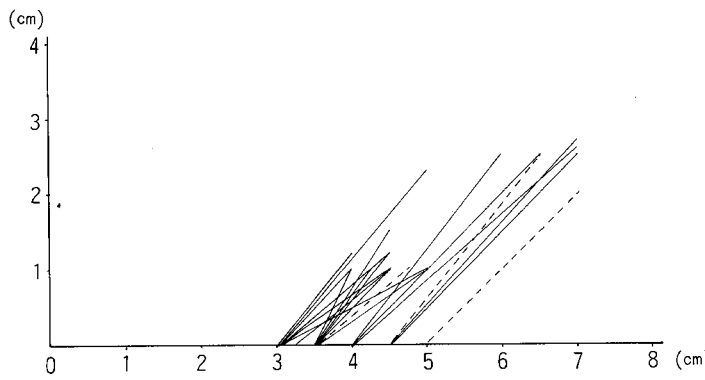


Fig. 30. SE－2004土師皿計測グラフ

1は土錘である。長さは4.1cm、重さは4.0gを測る。

SE－2005（Fig.31～35・48　PL.7）

調査区の中央部北寄りに位置する素掘りの井戸址で、すぐ南にはSE－2004がある。井戸址の東側は撹乱により消失しているが、掘り方の平面形は長軸2.6m、短軸1.9mの楕円形に復原できよう。検出面よりの深さは1.5mで、標高は2.3mを測る。壁面は擂鉢状に立ち上がり、平坦な底面はやや西側に傾く。木枠等の井戸側は確認できなかった。遺物は、龍泉窯や同安窯系青磁と天目碗等の輸入陶磁器ほか多量の土師皿がある。遺物は乱雑に折り重なって出土し、一括廃棄された感がある。

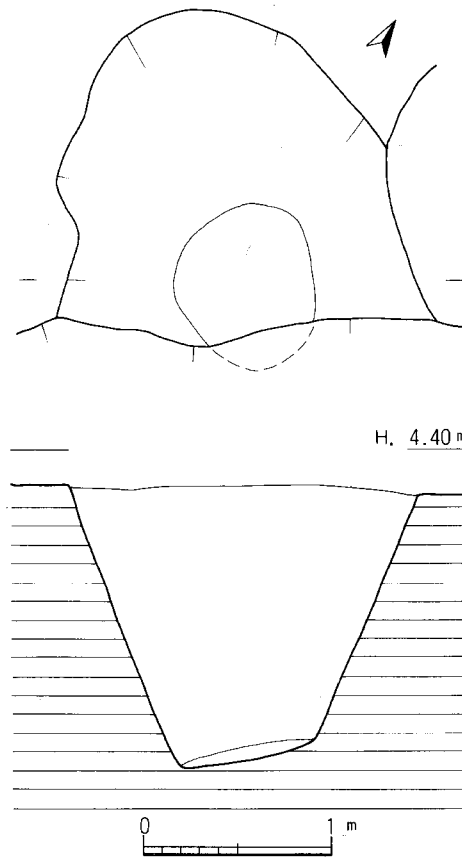


Fig. 31. SE－2005実測図（1/40）

出土遺物

317～372は土師器である。317～360は小皿で、口径8.7～9.6cm、器高0.8～1.4cmを測る。361～372は坏で、口径13.1～14.8cm、器高2.5～3.4cmを測る。小皿・坏とも全て糸切り底で

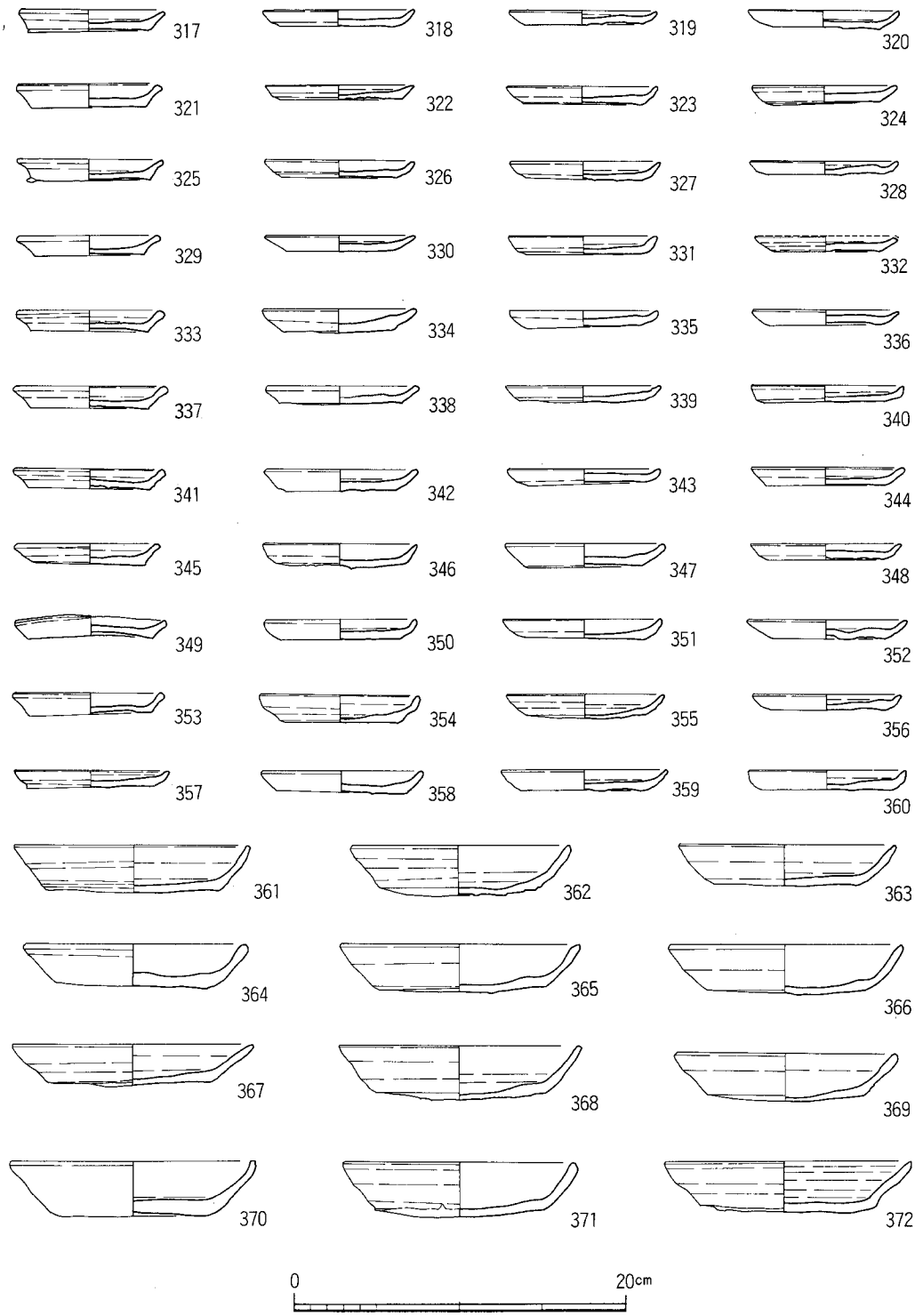


Fig. 32. SE－2005出土土器実測図(1) (1/4)

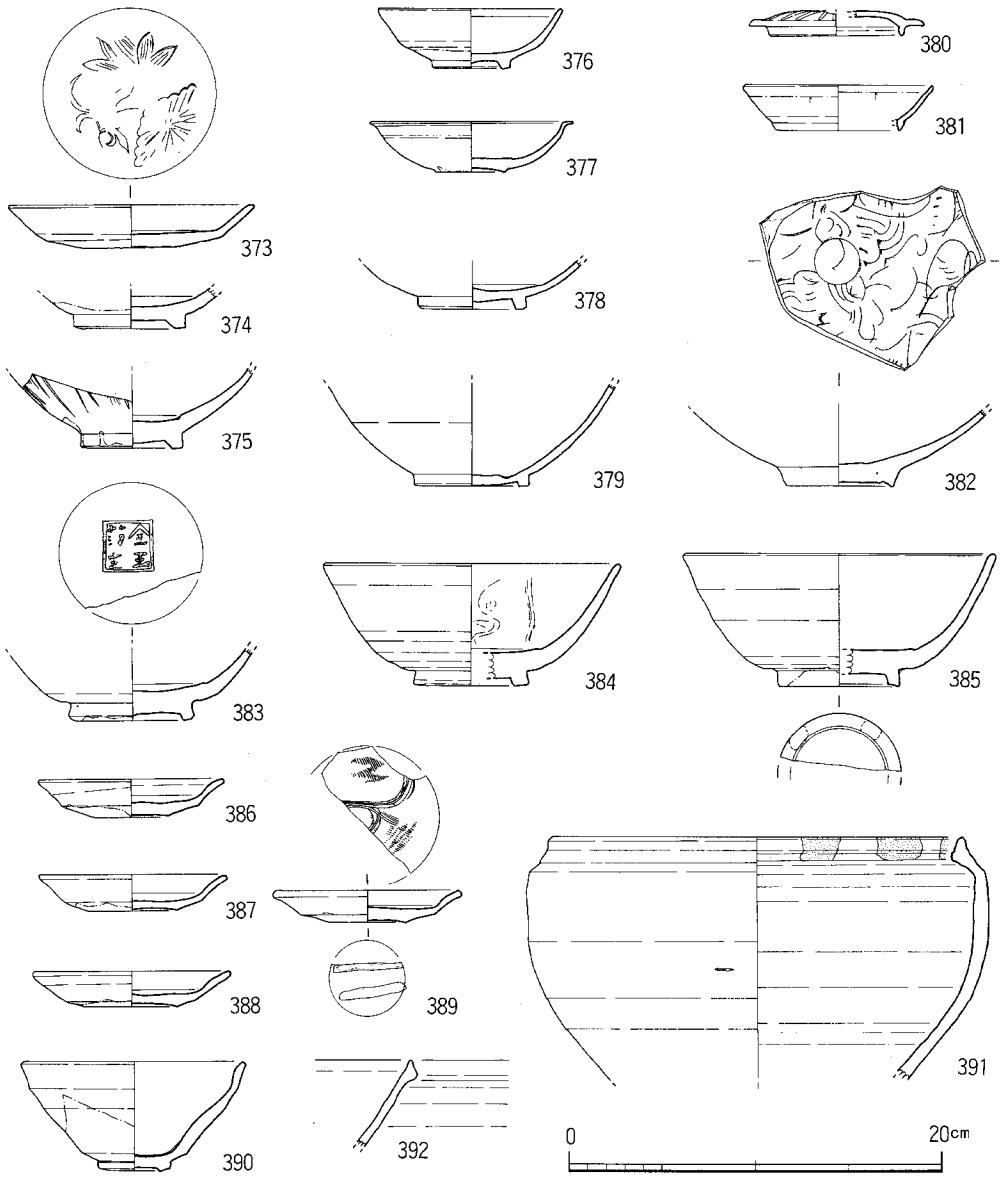


Fig. 33. SE－2005出土土器実測図(2) (1/4)

板状圧痕をもつ。373～376・378～380は白磁である。373はVII類の平底皿で、見込みに花のスタンプがある。374はII類の碗。375は体部外面に片切彫と櫛目を組み合わせた文様を描く。半透明で青白磁風なうすい青色の釉が畳付までかかる。376は小碗で口縁下に沈圏線をもつ。不透明なごく淡い青灰色の釉がかかる。378・379は口ハゲの碗である。やや外方に開く断面四角形の太い高台をもつ。378は見込みに沈圏線、379は小さな茶溜りが見られる。いずれも半透明な淡

い青緑色の釉がかかる。380は合子の蓋である。最大径9.4cmをはかる。天井部に型押しで菊弁を施す。不透明のごく淡い青灰色の釉が天井部と内面にかかる。377・381・382は青白磁である。377は平底皿で、内弯して立ち上がる体部に水平に小さく外反する口縁部がつく。半透明の淡緑色の釉がかかる。381は口ハゲの高台付皿である。382は内面に片切彫で文様を描く碗である。見込みに小さな茶溜まりが見られる。外底部のみ釉を削り取って露胎となす。383～385は龍泉窯系青磁Ⅰ類の碗である。383は見込みに『金玉満堂』のスタンプをもつ。374は焼成不良で釉が溶け切れず濁っておりピンホールが多い。雲文が内面に施される。385は無文であるが、高台畳付に目跡が残る。386～389は同安窯系青磁Ⅱ類の平底皿である。390は天目碗で、黄ベージュ色のやや粗い胎土に黒色の釉がかかる。391は中国陶器B群の深鉢である。灰色の緻密な胎土にあずき色の不透明釉がかかる。口縁部と胴部中位に目跡が残る。392は須恵質土器の鉢の口縁部小片で東播系のものと思われる。

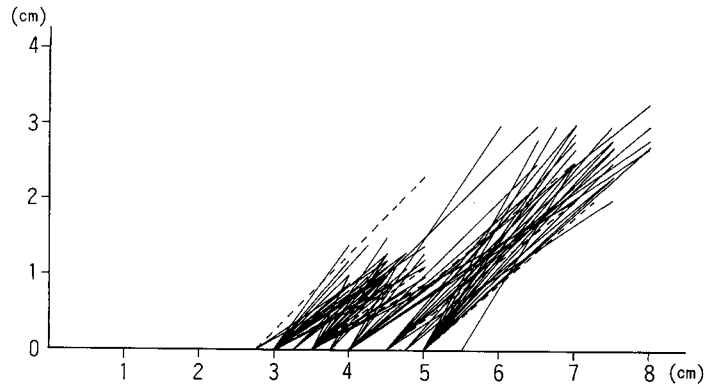


Fig. 34. SE－2005土師皿計測グラフ

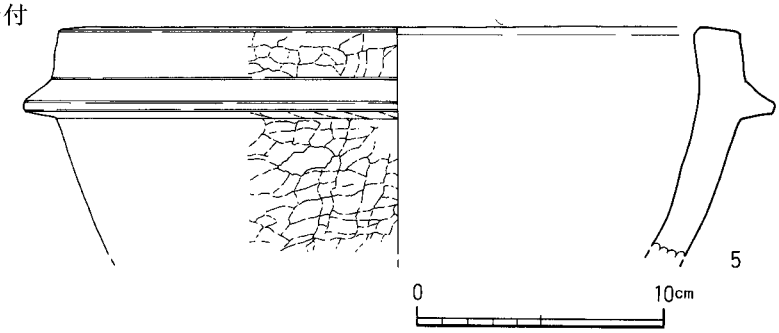


Fig. 35. SE－2005出土石製品実測図（1/3）

5は、口径は26cmを測る滑石製の石鍋片である。口縁部は小さく内傾し、鍔から下には煤が付着する。

2は小型の土錘である。現長は3.03cm、重さは2.5gを測る。

(2) 土壙　(SK)

第2面では、16基の土壙を検出した。平面プランは円形・楕円形・長方形と様々あるが、円～楕円形のものが多い。また、分布的には南側がやや空白地帯となる。明らかに墓壙と考えられるものはなく、性格等は判然としない。

SK－2001（Fig.36・37　PL.6・7）

調査区の西側で検出した土壙で、SE－2004の西に隣接してある。南端が消失しているが、平面形は長軸190cm、短軸117cmの隅丸長方形になろう。主軸方位はN－21°－Wにとる。壁面は緩やかに傾斜し、深さは35cmを測る。底面は中央部がやや凹む浅い舟底状をなす。土壙内には100点を越す土師皿と龍泉窯や同安窯系青磁碗等が投棄された状態で一括して出土した。

出土遺物

393～422は土師器である。393～403は小皿で、口径9～9.2cm、器高0.9～1.2cm、404～422は坏で、口径14.6～16.2cm、器高2.3～3.2cmを測る。404は底部を打ち欠いて大きな孔を穿つ。また405にも穿孔が見られる。410は焼成後3か所を穿孔し、面のように仕上げる。小皿・坏とも全て糸切り底で、395・408・421を除いていずれも内底にナデ調整を施す。423～424は龍泉窯系青磁碗で、Ⅰ類に属する。425～428は同安窯系青磁で、425～427はⅡ類の碗、428はⅡ類の平底皿である。429～431は中国陶器である。429はC群の水注と思われる。重ね焼きのためか、口縁端の釉がぐるりと剝がれている。430はC群の鉢の底部である。内面とほぼ外底まで黒に近いあずき色の不透明釉がかかる。431はA群の玉縁をもつ盤である。内面から外面体部上半にかけて化粧土を施し、内面だけに灰黄色の釉がかかる。見込みに鉄絵が見られる。

SK－2002（Fig.45　PL.7）

調査区西端のSK－2001のすぐ北に位置する小型の土壙で、平面プランは、径55～60cmの円形を呈する。深さは13cmを測り、断面形は舟底状をなす。

出土遺物

432は同安窯系青磁の平底皿である。433は土師器坏で、口径は15cm、器高2.6cm。糸切り底で板状圧痕が残る。

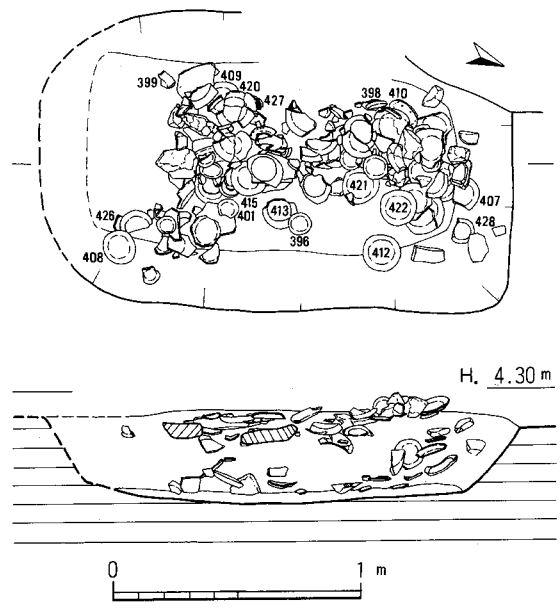


Fig. 36. SK－2001実測図（1/30）

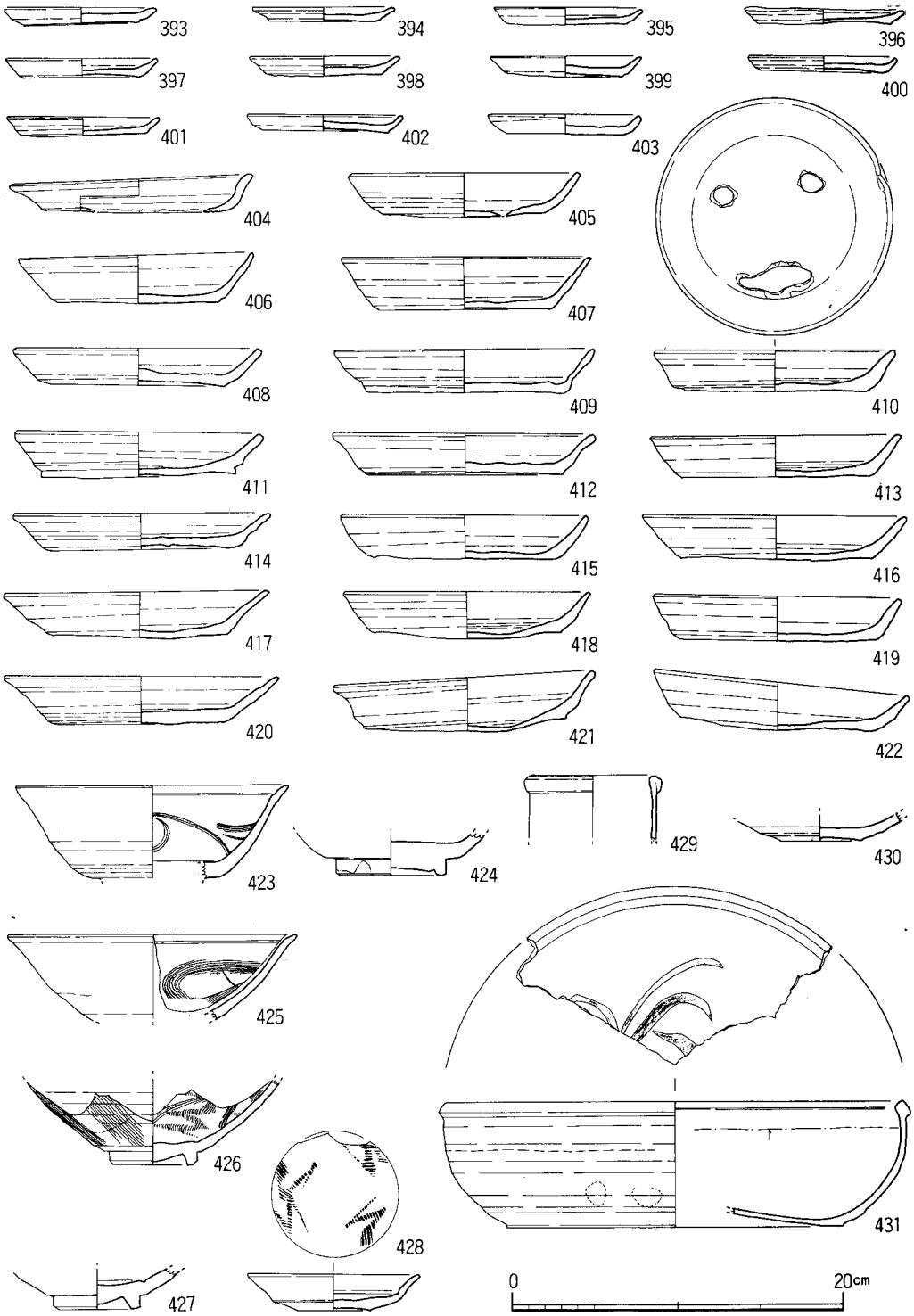


Fig. 37. SK－2001出土土器実測図（1/4）

SK－2003(Fig.39･40･45 PL.6)

調査区の北端に位置する。大型の土壙である。平面形は長軸212cm、短軸144cmの隅丸長方形を呈し、主軸方位N－69°－Eをとる。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。深さは28cmを測り、断面形は逆台形をなす。土壙内からは土師皿の外、越州窯系や龍泉窯系の青磁碗が出土している。

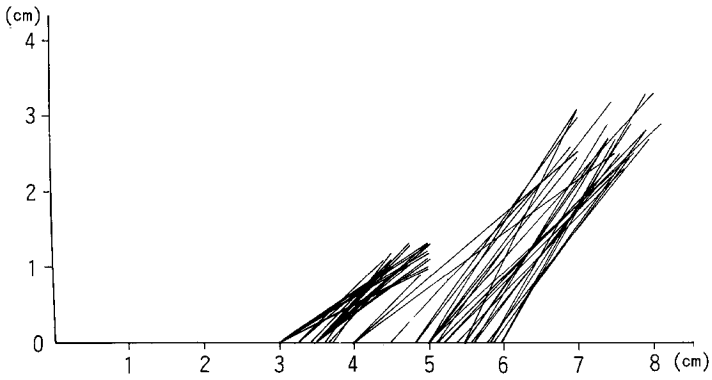


Fig. 38. SK－2001土師皿計測グラフ

出土遺物

434～446は土師器である。434～444は小皿で、口径7.5～9cm、器高0.9～1.3cm、445は中皿で、口径11.5cm、器高1.6cmを測る。446は坏で、口径12.9cm、器高2.7cmを測る。434～436･439には内底にナデ調整が見られる。全て糸切り底をもつ。447は口ハゲの白磁の平底皿である。淡青色の半透明釉がかかる。448は越州窯系青磁の碗である。灰ベージュ色の緻密な胎土に茶オリーブ色の半透明釉がかかる。見込みに目跡が残る。449は龍泉窯系青磁碗である。この外に『元祐通寶』が1点出土している。

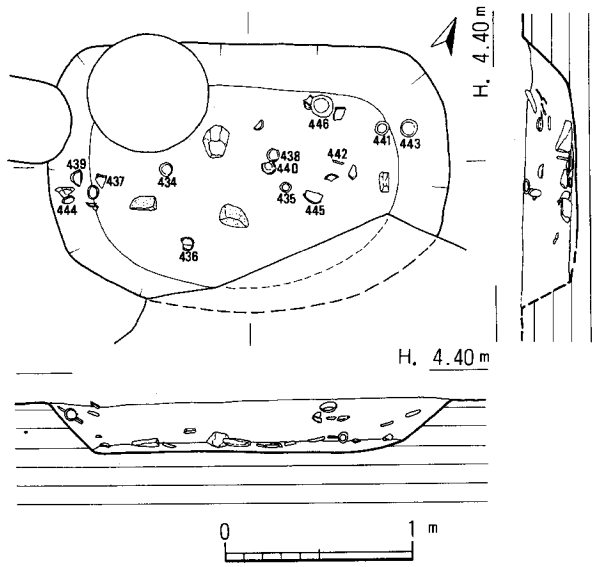


Fig. 39. SK－2003実測図（1/40）

SK－2006（Fig.41 PL.6）

調査区のほぼ中央に位置する大型土壙で、平面形は長軸230cm、短軸160cmの楕円形に復原できよう。底面は平坦で、深さ37cmを測り、断面形は逆台形をなす。

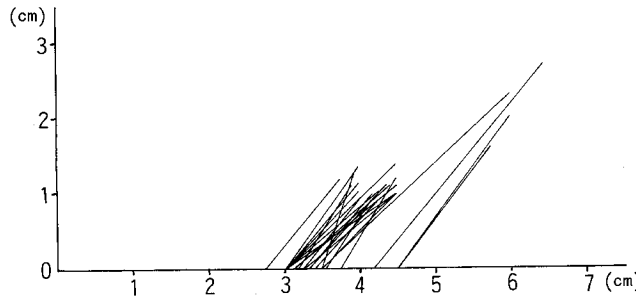


Fig. 40. SK－2003土師皿計測グラフ

SK－2007（Fig.41・45）

調査区の中央部北寄りにある土壙で、SE－2005の東２mの距離に位置する。平面プランは長軸90cm、短軸80cmの隅丸方形をなし、深さは20cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。覆土中からは土師器皿のほかに白磁碗や中国陶器の盤等が少量出土している。

出土遺物

450は土師器の小皿である。口径9.4cm、器高1.2cmを測る。内底にナデ調整が見られ、糸切り底で板状圧痕が残る。451は雲文のある龍泉窯系青磁Ⅰ類の碗で、灰オリーブ色の釉が厚めに施される。

SK－2027（Fig.41）

調査区の北にあり、北側はSK－2030に切られている。平面形は、長軸116cm、短軸75cmの楕円形に復原できよう。深さは21cmを測り、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN－48°－Wにとる。覆土中からは土師器の皿・碗・甕等のほかに白磁碗や中国陶器片も少量出土している。

出土遺物

452は土師器の丸底坏である。口径15.6cm、器高3.6cmを測る。内面はミガキで仕上げ、外底には粘土紐巻き上げ痕が残る。

SK－2030（Fig.42・45）

調査区の北部に位置し、SK－2027よりも新しい。平面形は長軸、短軸

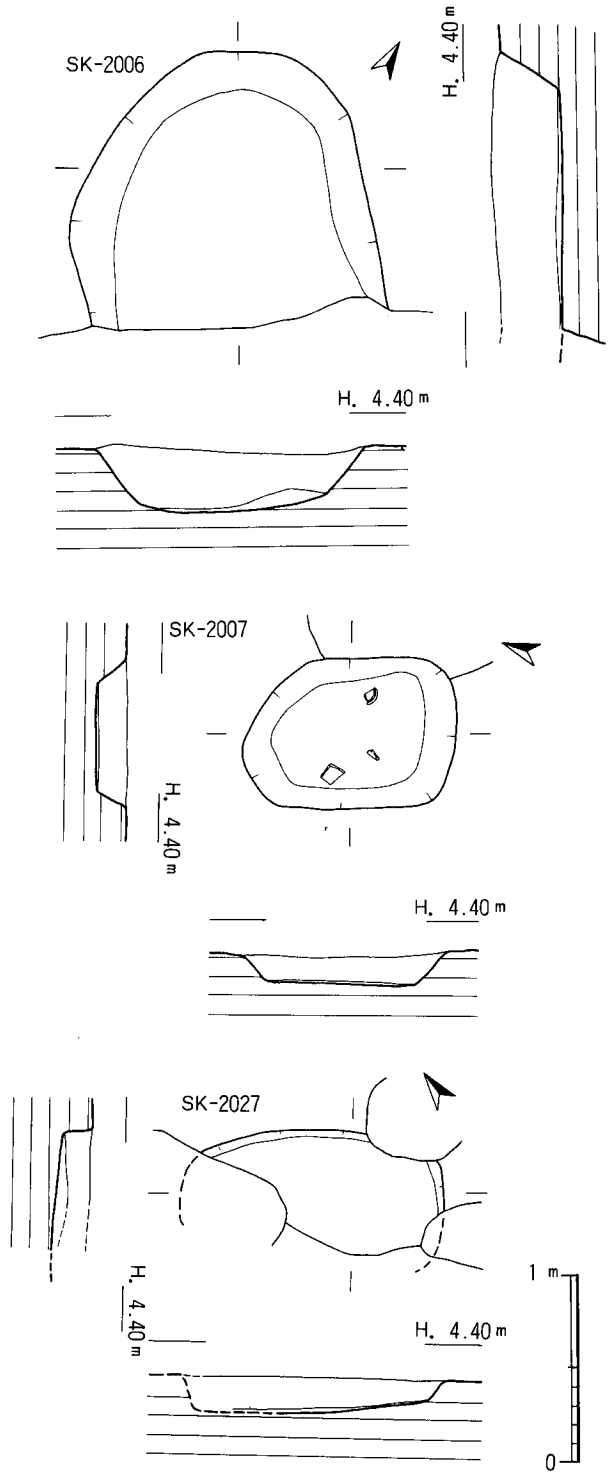


Fig. 41. SK－2006・2007・2027実測図（1/40）

の楕円形をなし、N－32°－Wに主軸方位をとる。やや急峻に立ち上がる壁面は深さ24cmを測り、断面形は逆台形をなす。遺物は、古代～中世の須恵器や土師器皿、瓦器碗のほか白磁の壷、碗、皿が出土している。

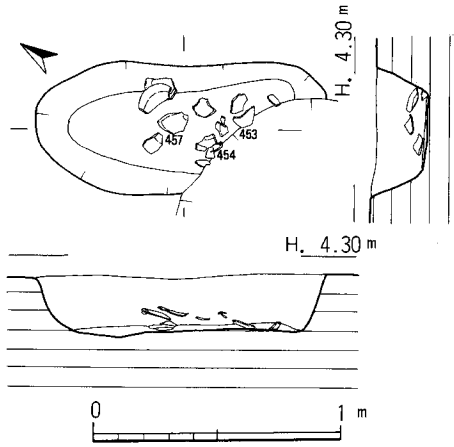


Fig. 42. SK－2030実測図（1/30）

出土遺物

453・454は土師器である。453は小皿で、口径8.3cm、器高1.5cmを測る。内底をナデ調整しており、糸切り底で板状圧痕をもつ。454は丸底坏で、口径15cm、器高3.3cm。内面はミガキで仕上げる。底部付近には指頭痕が並ぶ。455は天目碗で、黒灰色の精良な胎土に黒色の不透明釉が厚く施される。456～458は白磁碗である。456はV類、457はII類、458はIV類に属する。

SK－2039（Fig.43）

調査区の北部で検出した長楕円形の土壙で、南東部は撹乱を受けて消失している。長軸170cm、短軸は80cmに復原できよう。断面形は北側に平坦面をつくる二段掘りの構造をなす。覆土中からは土師器や須恵器片のほか、龍泉窯系や同安窯系の青磁碗と白磁、天目碗片が少量出土している。

SK－2067（Fig.43・45）

調査区の東南隅にある小型の円形土壙で、直径67cm、深さは40cmを測る。壁面は緩く傾斜して立ち上がり、底面は舟底状をなす。遺物は、土師器のほか白磁碗や同安窯系の青磁片が少量出土した。

出土遺物

459は土師器の丸底坏で、底部に粘土の巻き上げ痕と板状圧痕が残る。内面はミガキで仕上げる。460は白磁の小碗である。若干青みのある灰白色の不透明釉が、ほぼ高台までかかる。

SK－2081（Fig.43・45）

調査区の南部にあり、SK－2106のすぐ南に位置する小型の土壙である。平面形は、長軸100cm、短軸80cmの楕円形プランを呈し、やや急峻に立ち上がる壁面は深さ25cmを測る。断面形は中央が凹む浅い舟底状をなす。暗灰褐色の覆土中からは土師器皿や瓦器碗のほか白磁の小片が出土している。

出土遺物

461は、白磁の壷の蓋である。天井部から口縁内側にかけて淡青色の半透明釉がかかる。極めて細かい貫入が全体にはいる。

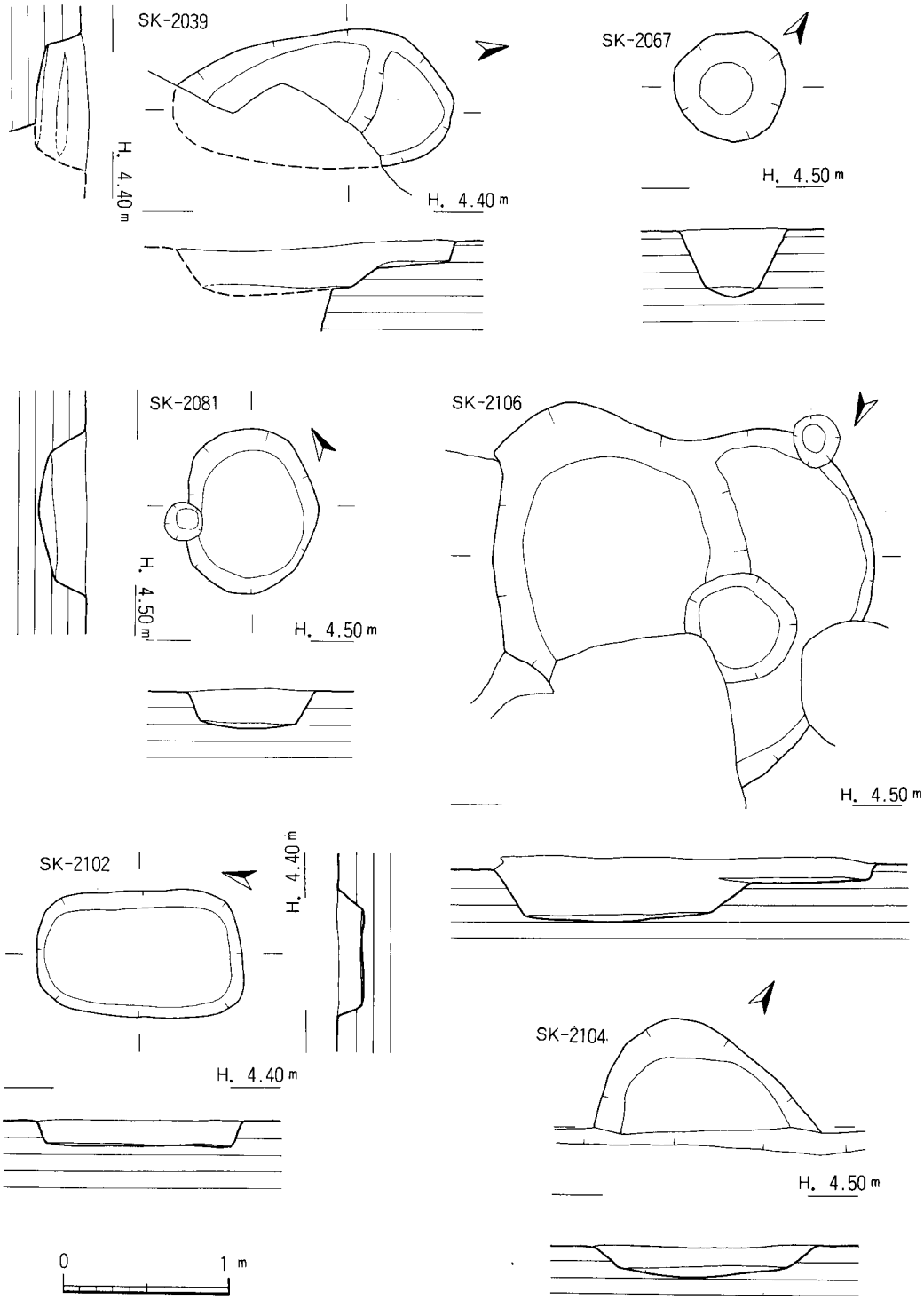


Fig. 43. SK－2039～2104実測図 (1/40)

SK－2103 (Fig.45)

調査区の東南隅にあり、SK－2104の西に隣接している。平面形は、長軸122cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈し、N－12.5°－Wに主軸方位をとる。やや急峻な壁面は深さ15cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土中からは、土師器皿、瓦器碗、須恵器のほか青磁や白磁と中国陶器片が少量出土した。

出土遺物

462は、青白磁の平底皿である。灰ベージュ色の精良な胎土にやや草色掛かった半透明釉が底部付近までかかる。全体に細かい貫入が見られる。

SK－2104 (Fig.43)

調査区の東南端にあり、SK－2103の東隣に位置する。東側は調査区外に拡がるが、平面形は隅丸長方形プランになろう。深さは20cmで、断面形は中央部がやや凹んだ逆台形をなす。遺物は、土師器皿がわずかに出土した。

SK－2105 (Fig.44・45　PL.7)

調査区の東南部に位置し、西側はSK－2106に切られている。平面形は165×105cmの不整方形で、二段掘りである。はじめに15～20cm程浅く掘り、次に擂鉢状をなす一辺65cmの小土壙を北隅に穿っている。この小土壙上面からは土師皿や瓦質の鉢等が焼け石に混じって出土した。また、いわゆる北方系軒平瓦が1点出土しているほか龍泉窯系の青磁碗や白磁皿等も出土している。

出土遺物

463・464は土師器の坏である。463は口径13.2cm、器高2.8cm、464は口径13.3cm、器高2.5cmを測る。どちらも糸切り底で、464の内底にはナデ調整が見られる。465は同安窯系青磁II類の碗である。466・467は白磁碗で、466はIV類、467はVII類に属する。468は押圧文のある北方系の軒平瓦である。灰色の極めて緻密な胎土で堅く焼きしまっている。今回の調査では北方系軒平瓦はこの1点のみである。469は須恵器の大甕で口縁を折り返して玉縁としている。表面にうすく自然釉がかかる。470は国産陶器の甕の底部である。小砂粒を少量含んだうすい灰色の胎土で表面は黒光りし、堅く焼きしまる。

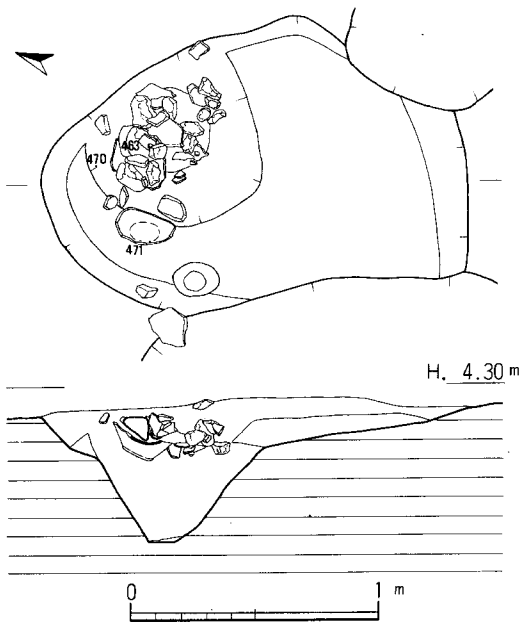


Fig. 44. SK－2105実測図 (1/30)

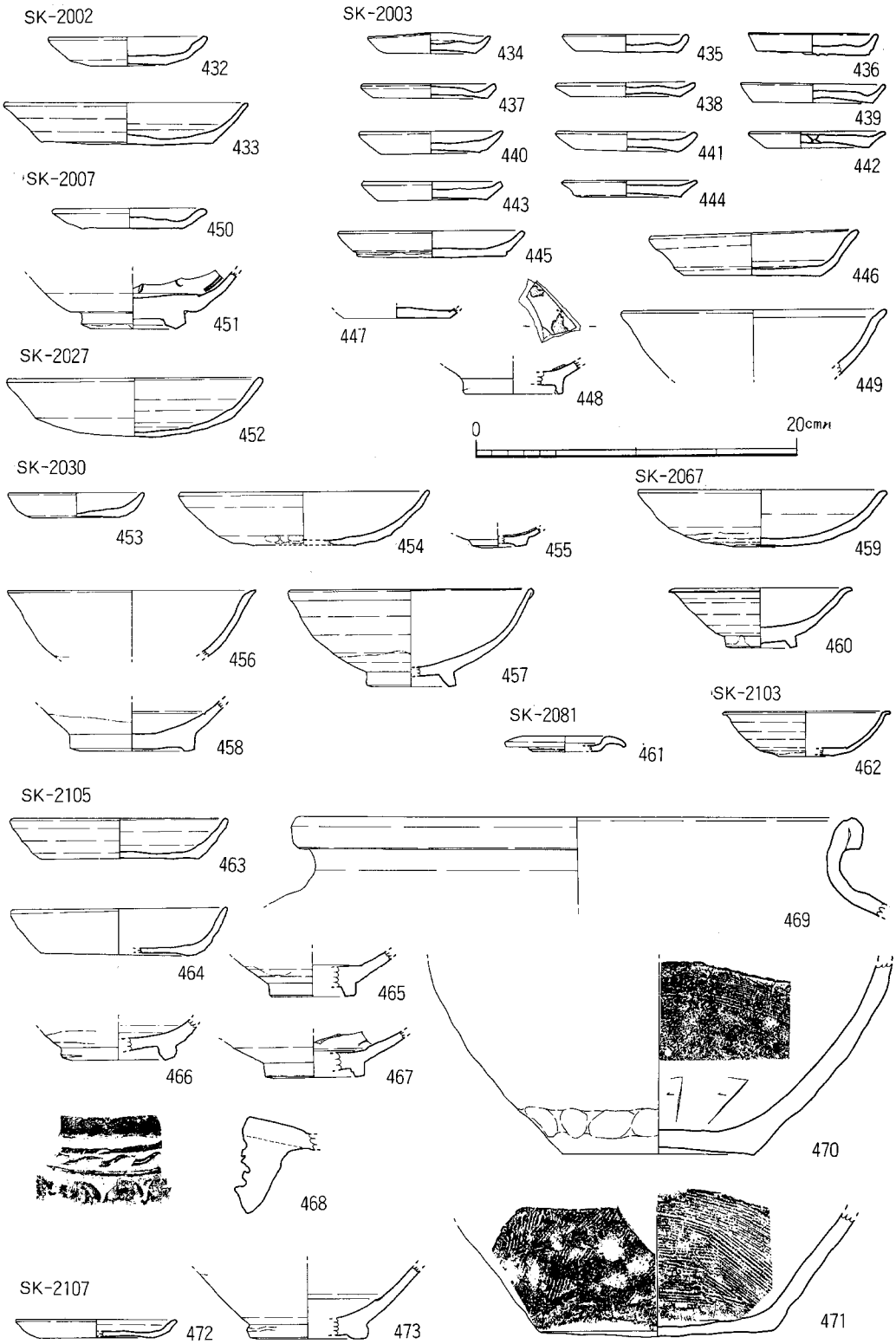


Fig. 45. SK－2002～2107出土土器実測図 (1/4)

471は瓦質土器の鉢である。小砂粒を少量含んだ灰色の胎土である。内面はハケ目調整後内底だけナデ調整、外面はハケ目調整後ハデ調整する。指頭痕が多く残り、外底には板状圧痕が残る。

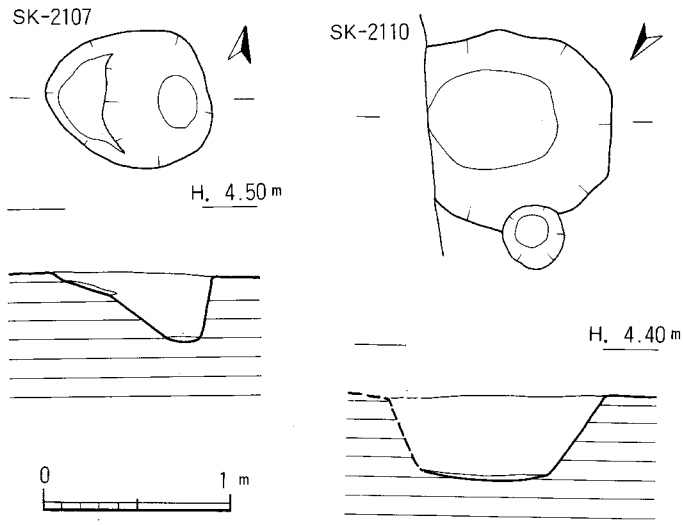


Fig. 46. SK－2107・2110実測図（1/40）

SK－2106（Fig.43）

調査区の東南に位置する二段掘りの大型土壙で、SK－2105より新しく、SK－2107よりも古い。平面形は径225cmの不整方形になろう。西側には一段浅いフラット面をつくり、断面形は逆台形をなす。遺物は、古代～中世の土師器や須恵器、瓦器碗のほかに、白磁碗や青磁片も出土している。

SK－2107（Fig.45・46）

調査区の中央部南寄りに位置し、SK－2106よりも新しい。平面形は95×75cmの円形を呈する。西側は一度フラット面をつくったのちに擂鉢状に窄まり、東側壁は直口気味に立ち上がる。覆土中からは土師器皿のほかに白磁碗が少量出土している。

出土遺物

472は土師器の小皿である。口径9.8cm、器高1.5cmを測る。糸切り底で内底をナデ調整する。473はIV類の白磁碗である。ベージュ色のやや粗い胎土に黄ベージュ色の不透明釉がかかる。細かい貫入がある。

SK－2110（Fig.46）

調査区のほぼ中央にある小型の土壙で、SK－2106のすぐ北に位置する。平面形は長軸120cm、短軸105cmの隅丸方形を呈し、主軸方位をN－56°－Eにとる。緩傾斜して立ち上がる壁面は、深さ47cmを測り、断面形は逆台形をなす。遺物は、古代～中世の土師器や須恵器のほか白磁壷等が出土している。

(3) その外の遺構と遺物 (SX・SP)

第2面でも、第1面と同様に井戸址と土壙の外にその形状の定かならぬ不整形土壙とピットを検出したが、第1面のそれと比較すると量的には少ない。

不整形土壙としたものは2基検出した。また、ピットの中には柱筋が通り建物址等の柱穴と考えられるものもあったが、調査区が狭いためにひとつの遺構としてまとめ得るものはなかった。

SX−2050 (Fig.47)

調査区の北西端に位置する。第3面のSE−3077の真上にあたり、その一部かとも考えたが井筒との間に差異があり、ここでは別遺構とした。調査区の北西角にあり、全容が判断としないために不整形土壙として取り扱った。平面形は、比較的大きい円形プランを呈するものであろう。深さは35cmを測り、断面形は逆台形状をなす。遺物は、土師器皿の外に龍泉窯系や同安窯系の青磁碗等が出土している。

出土遺物

474は土師器の坏である。体部内外をヨコナデ調整する。底部は糸切り底である。475〜477は中国陶器B群の壷である。475は灰オリーブ色、476は茶オリーブ色、477は灰褐色の不透明釉が全体に施される。475の高台内にはわずかに墨書が残る。

SX−2101 (Fig.47)

調査区の東側に位置する。鋼矢板による撹乱で消失しているが、平面形は240×160cmの楕円形を呈すものであろう。断面形は深さ15cmほどの浅い擂鉢状をなし、壙内には焼土粒の小塊が点在していた。覆土中からは、土師皿や須恵器片の外白磁碗が少量出土した。

遺構No.	法量(長軸×短軸×深さ)	主軸方位	平面形	断面形	出土遺物
SK-2001	190×117×35	N−21°−W	隅丸長方形	舟底状	土師器・土師質土器・瓦器・須恵器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器 他
SK-2002	60× 55×13		円形	舟底状	土師器・須恵器・白磁・青磁
SK-2003	212×144×28	N−69°−E	隅丸長方形	逆台形	土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器・瓦・石鍋・銅銭
SK-2006	230×160×37		楕円形	逆台形	
SK-2007	90× 80×20	N−32°−W	隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・白磁・中国陶器
SK-2027	116× 75×21	N−48°−W	楕円形	逆台形	土師器・白磁・中国陶器・古窯系陶器・石玉
SK-2030	116× 50×24	N−32°−W	楕円形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・白磁・中国陶器・黒褐釉・銃弾
SK-2039	170× 80×30	N− 7°−E	長楕円形	二段掘り舟底状	土師器・須恵器・土師質土器・白磁・青磁・黒褐釉・中国陶器
SX-2050			不整形		土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器・瓦・石斧
SK-2067	67× 67×40		円形	舟底状	土師器・須恵器・古窯系陶器・白磁・青磁・中国陶器
SK-2081	100× 80×25	N−58°−E	楕円形	舟底状	土師器・須恵器・瓦器・白磁
SX-2101					土師器・須恵器・白磁
SK-2103	122× 55×15	N−12.5°−W	隅丸長方形	逆台形	土師器・瓦器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器・石鍋
SK-2104	×20		隅丸長方形	逆台形	土師器・瓦
SK-2105	165×105×58		不整方形	二段掘り舟底状	土師器・須恵器・須恵質土器・白磁・青磁・中国陶器
SK-2106	225×225×38		不整方形	二段掘り舟底状	土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・中国陶器・瓦・石鍋
SK-2107	95× 75×35	N−79°−W	円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・白磁
SK-2110	120×105×47	N−56°−E	隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・白磁・青磁

Tab. 2. 第2面土壙一覧表

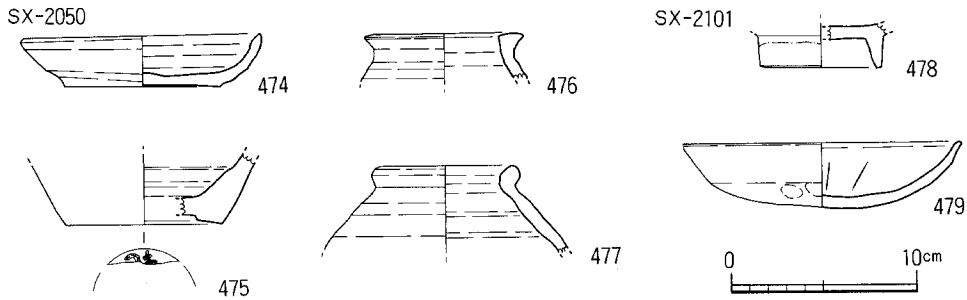


Fig. 47. SX－2050・2101出土土器実測図（1/4）

出土遺物

478はＶ類もしくはVI類の白磁碗である。淡青色の半透明釉がかかる。479は土師器の丸底坏で、底部はヘラ切り痕が残る。体部外面はナデ調整し、わずかに指頭痕が見られる。内面はミガキを加え平滑に仕上げる。

480～513はピット出土の遺物である。480は内黒土器の碗である。481～488は土師器である。481～485は小皿で、口径8.6～9.2cm、器高1.1～1.4cm、486～488は坏で、口径13.2～15.4cm、器高2.3～3.0cmを測る。小皿・坏とも全て糸切り底をもつ。489は瓦器碗である。断面三角形の低い高台がつく。内外面とも雑なヘラミガキを施す。490～507は白磁である。490・491は平底皿。492はＩ類の高台付皿である。493～495は小碗で、493の口縁は小さな玉縁となす。494・495の内面には線描文が施される。496～506は碗である。496はII類、497・498はIV類、499～502はＶ類に属する。503はO類の碗で、若干外反する細く高い高台をもつ。うすいベージュ色の精良な胎土に、黄ベージュ色の半透明釉が高台中位までかかる。細かい貫入が全体に見られる。504はＶ類、505はＶ類もしくはVI類に属するもので、504の高台内には墨書が残る。506はII類で、淡い青灰色の透明釉が厚めにかかる。細かい貫入が見られる。507は広東系白磁の大鉢である。灰色の緻密な胎土に灰白色の土で化粧を施し、淡い灰緑色の半透明釉をかける。全体に細かい貫入がある。508・509は青磁の蓋である。508は灰色の緻密な胎土に茶オリーブ色の半透明釉がかかる。天井部には目跡が残る。509は濃い灰色の緻密な胎土に灰オリーブ色の半透明釉がかかる。口縁部にわずかに目砂が付着する。510・511は龍泉窯系青磁である。510は鉢のような器型になると思われる。灰オリーブ色の半透明釉が厚くかかる。511はＩ類の碗である。512は青磁碗で、見込みに輪状の釉の削り取りが見られる。513は青磁の壷である。灰色の緻密な胎土に半透明の灰オリーブ色の釉がかかる。

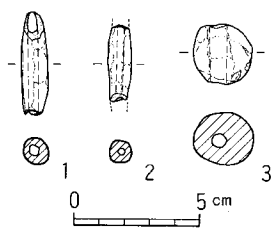


Fig. 48. 第2面出土土製品実測図（1/3）

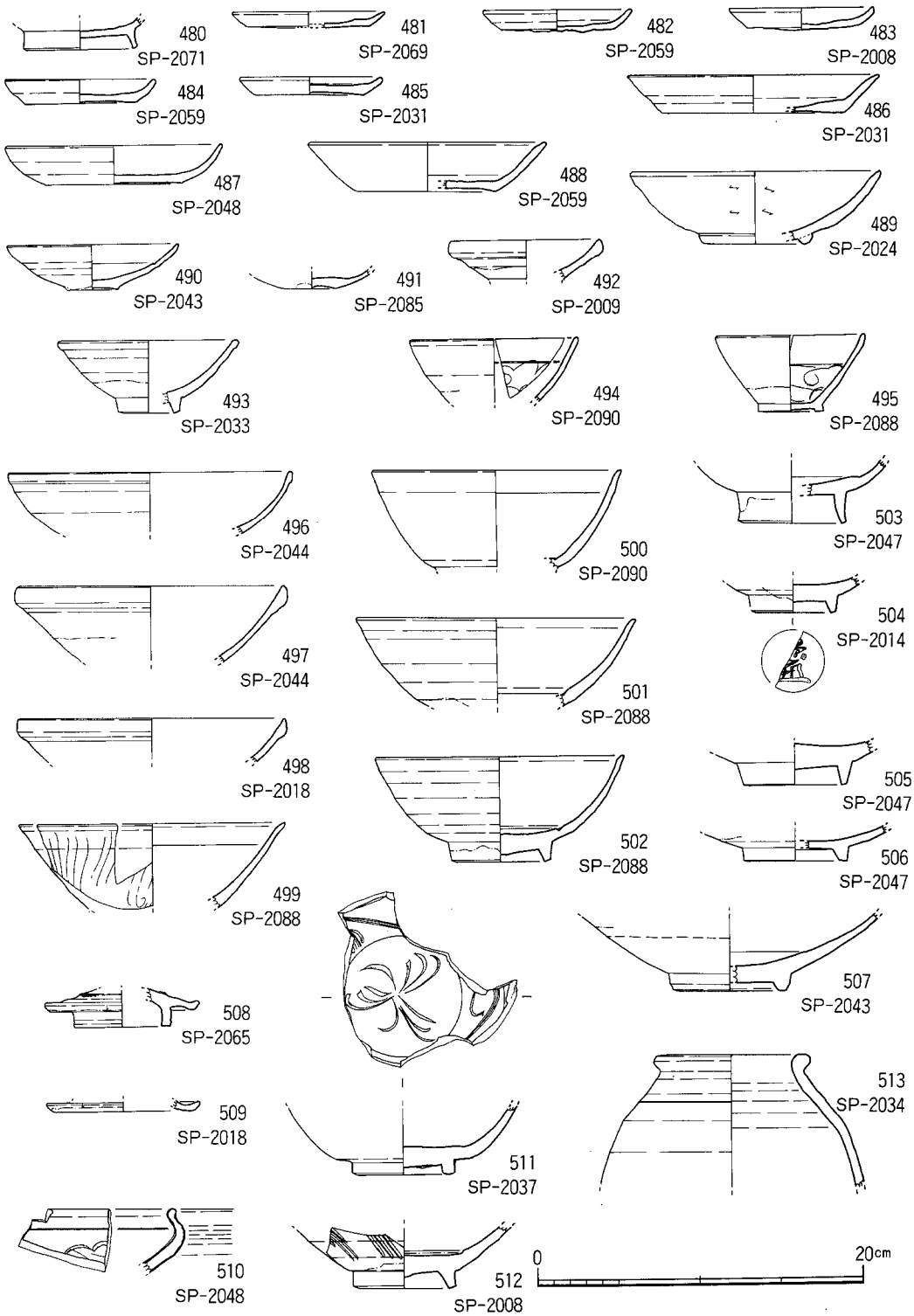
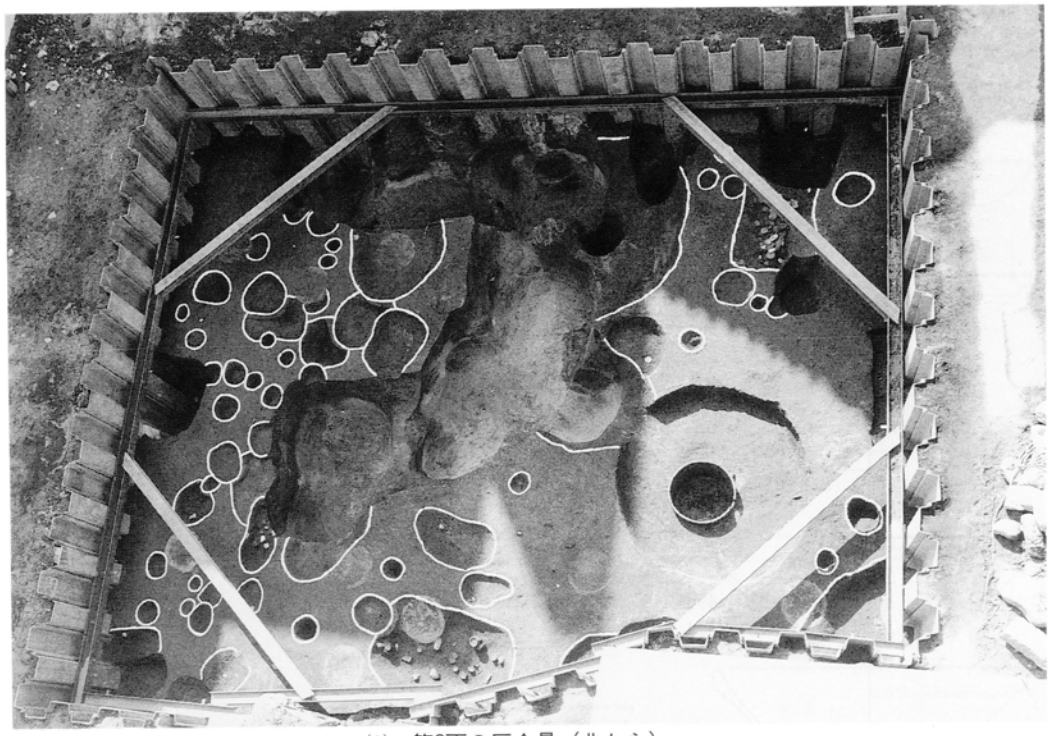
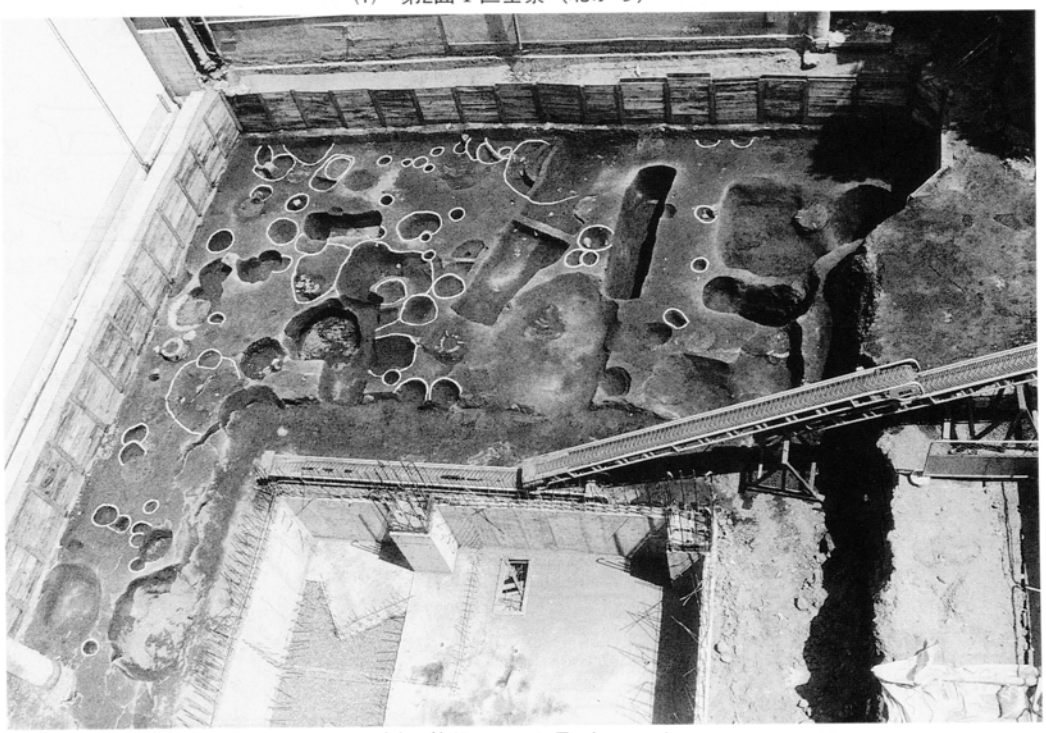


Fig. 49. 第2面SP出土土器実測図 (1/4)

PL. 5.



(1) 第2面 I 区全景（北から）



(2) 第2面 II 区全景（北から）

PL.. 6.

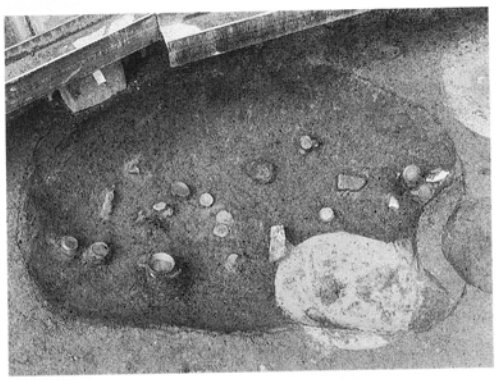
(1) SE－2004・2006、SK－2001（西から）

(2) SE－2004・2006土層断面（東から）

(3) SE－2004・2006（南から）

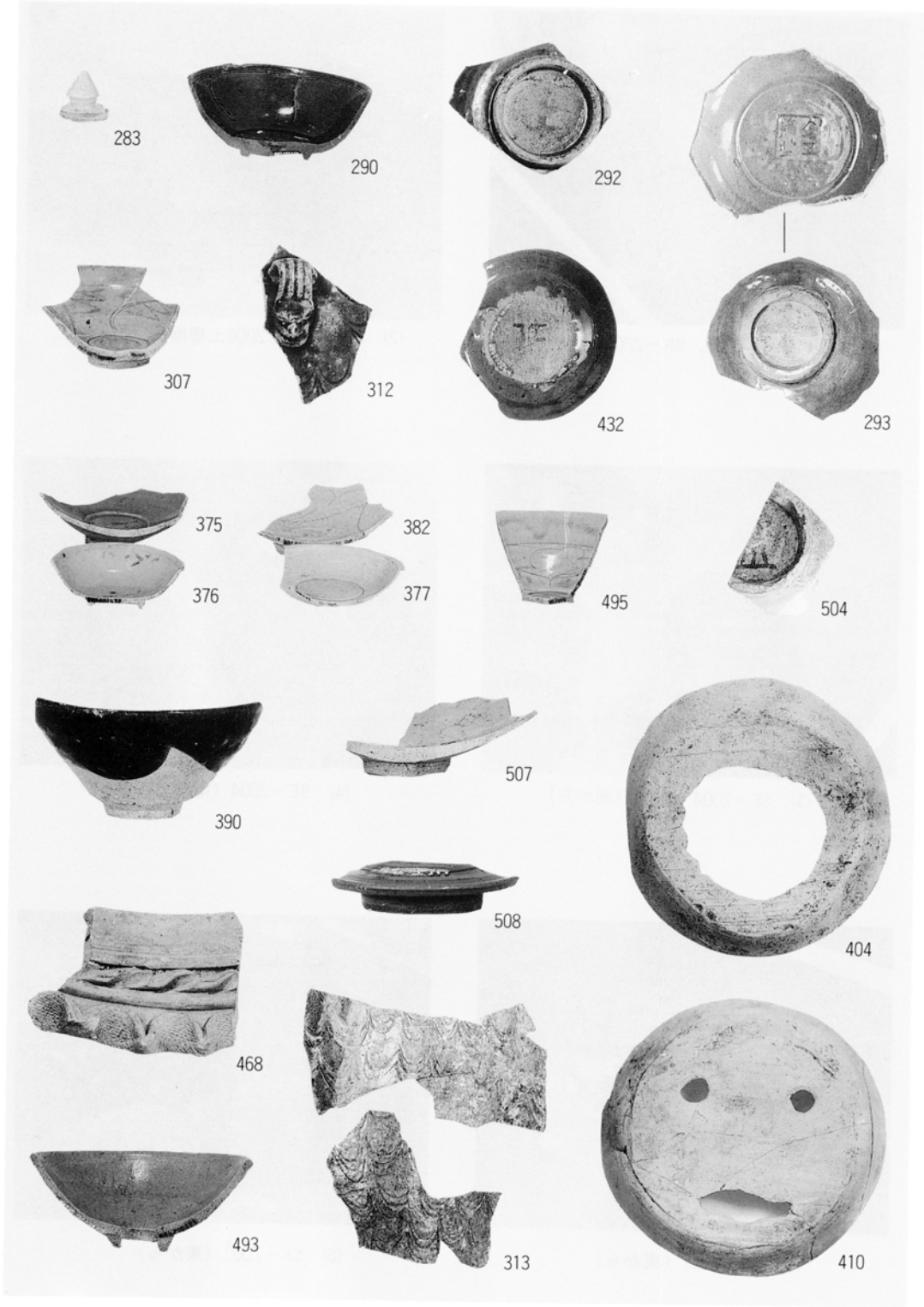
(4) SE－2004（南から）

(5) SK－2001（東から）



(6) SK－2003（東から）

PL. 7.



第 2 面 出 土 遺 物（縮尺不同）

3．第3面の遺構

第3面は、第2面ののる第2層目の遺物包含層を25cmほど掘り下げて検出した遺構面であり、標高は4.0mを測る。

第3面で検出した遺構は、井戸址、土壙、焼土壙等と柱穴がある。

井戸址は、狭い範囲に10基まとまって検出し、第2面の2基とは様相を異にする。焼土壙の検出は、第1・2面では観られなかったものである。また、備蓄銭が検出されたことは特筆すべきである。銅銭は約500枚が1本の紐に通して浅鉢に納められていた。周辺には柱穴群があり、建物の傍に埋められたとも考えられるが、建物はまとまらず積極的な根拠はない。

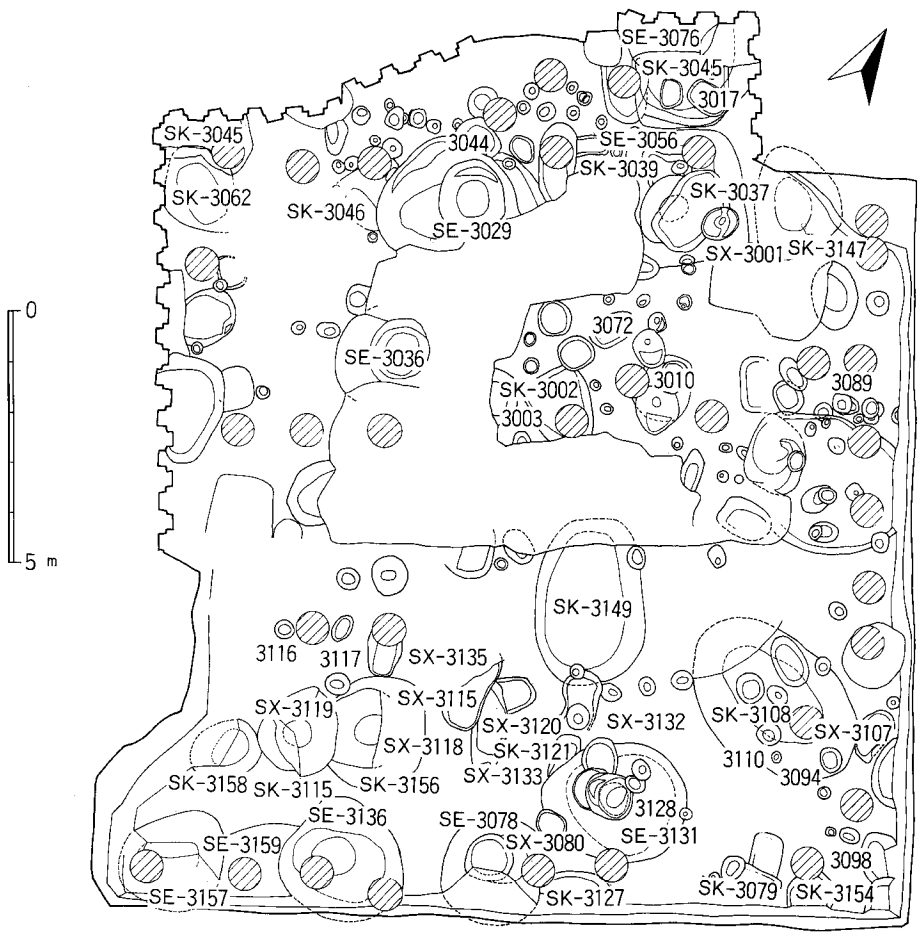


Fig. 50. 第3面の遺構配置図（1/150）

(1) 井戸址 (SE)

第3面では、10基の井戸址を検出した。大きさに多少の差異はあるが、概ね円形プランを呈し、調査区全域に分布する。井戸址は、そのほとんどが素掘りで、井筒内に井戸側施設をもつものはSE－3077のみである。このSE－3077は掘り方内に2ヶ所の井筒をもち、井戸址群中で特筆すべきものである。時期的にはほとんど差異はなく、切り合っていてもきわめて短い時間差のうちに納まるものである。

SE－3029 (Fig.51～55・71 PL.9・11)

調査区の北部に位置する素掘りの井戸址である。掘り方の平面形は長軸285cm、短軸265cmの楕円形になろう。井戸は、掘り方の西壁に寄せて径140cmの井戸側を掘り下げる二段掘りの構造をなす。井戸側は掘り方底より65cmの深さまで掘り下げ、井戸底の標高は2.8mを示す。覆土はやや粘質を帯びた暗黒灰色土である。遺物は、土師皿のほか青磁碗や白磁が出土したが、量的には陶磁器が土師器を圧する。

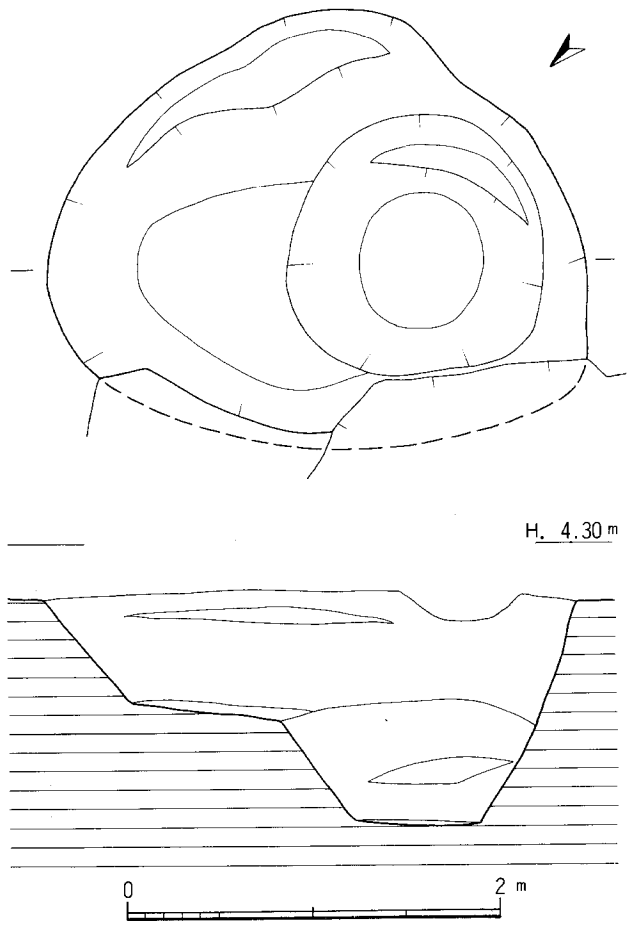


Fig. 51. SE－3029実測図 (1/40)

出土遺物

514～528は土師器である。514～520は小皿で、口径8.9～9.7cm、器高0.8～1.4cmをはかる。いずれも内底をナデ調整する。514～517はヘラ切り底、518～520は糸切り底をもつ。また、518を除いて全て板状圧痕をもつ。521～524は丸底坏で、口径14.8～15.2cm、器高2.8～3.4cmをはかる。いずれも内面はミガキで仕上げ、外底はヘラ切りの後、軽くナデ調整する。525～528は坏で、口径14.3～15.4cm、器高2.3～2.7cmをはかる。いずれも内底にナデ調整が見られ、糸切り底で板状圧痕をもつ。529は瓦器碗である。530～565は白磁である。530はV類、531・532はII類の平底皿

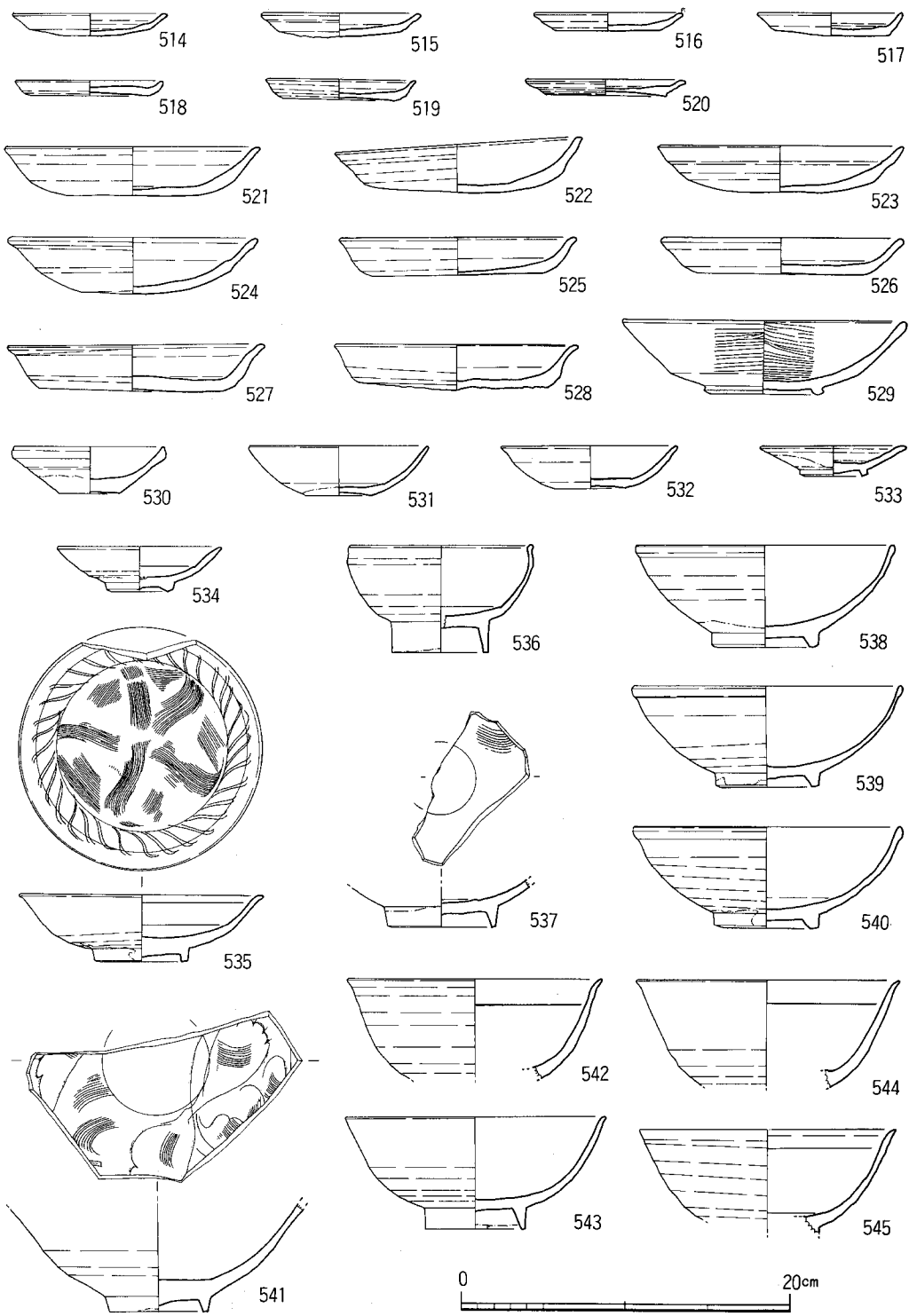


Fig. 52. SE－3029出土土器実測図(1) (1/4)

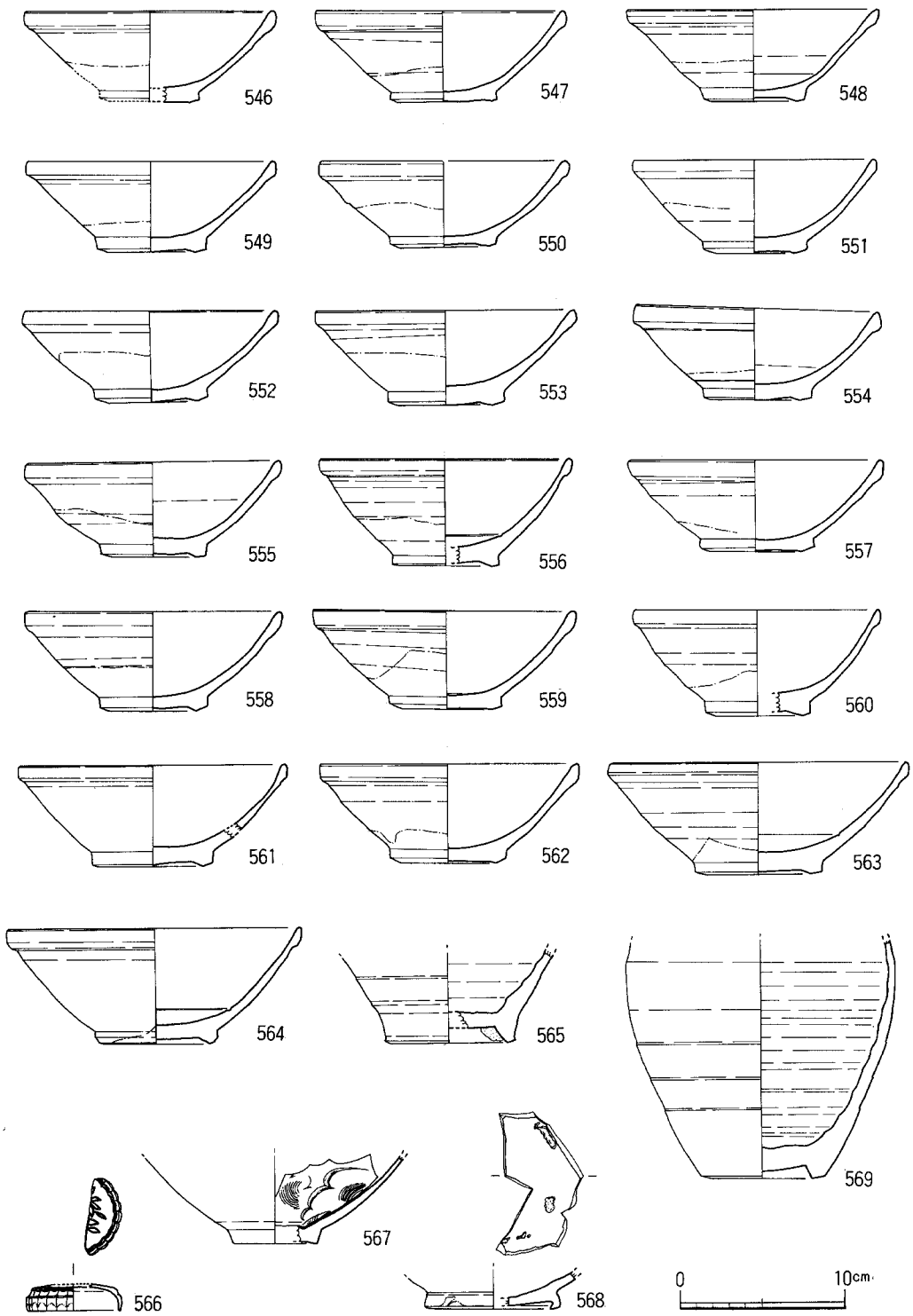


Fig. 53. SE－3029出土土器実測図(2) (1/4)

である。533・534はII類の高台付皿で533は見込みに輪状の釉の削り取りが見られる。535はII類の高台付皿で内面に櫛描文を施す。536～564は碗。536はO類に属し、精良なベージュ色の胎土にうすいあめ色の釉がかかる。細かい貫入がある。537はVI類の高台の特徴をもつが、見込みを1段高くなす点で特殊である。538～540はII類に属する。いずれも口縁を玉縁となす。540の見込みには甘い段を有する。541はVII類の碗で、内面に花文を施す。542～545はV類に属するものである。ただし543は高台畳付の内側まで施釉しており特殊である。546～564は全てIV類の碗である。565は壷。灰白色の緻密な胎土に灰青緑色の半透明釉がかかる。566・567は青白磁である。566は合子の蓋、567は碗である。568は越州窯系青磁碗である。灰ベージュ色の緻密な胎土に金茶オリーブ色の半透明釉が高台付近までかかる。見込みに目跡が残る。569は中国陶器B群

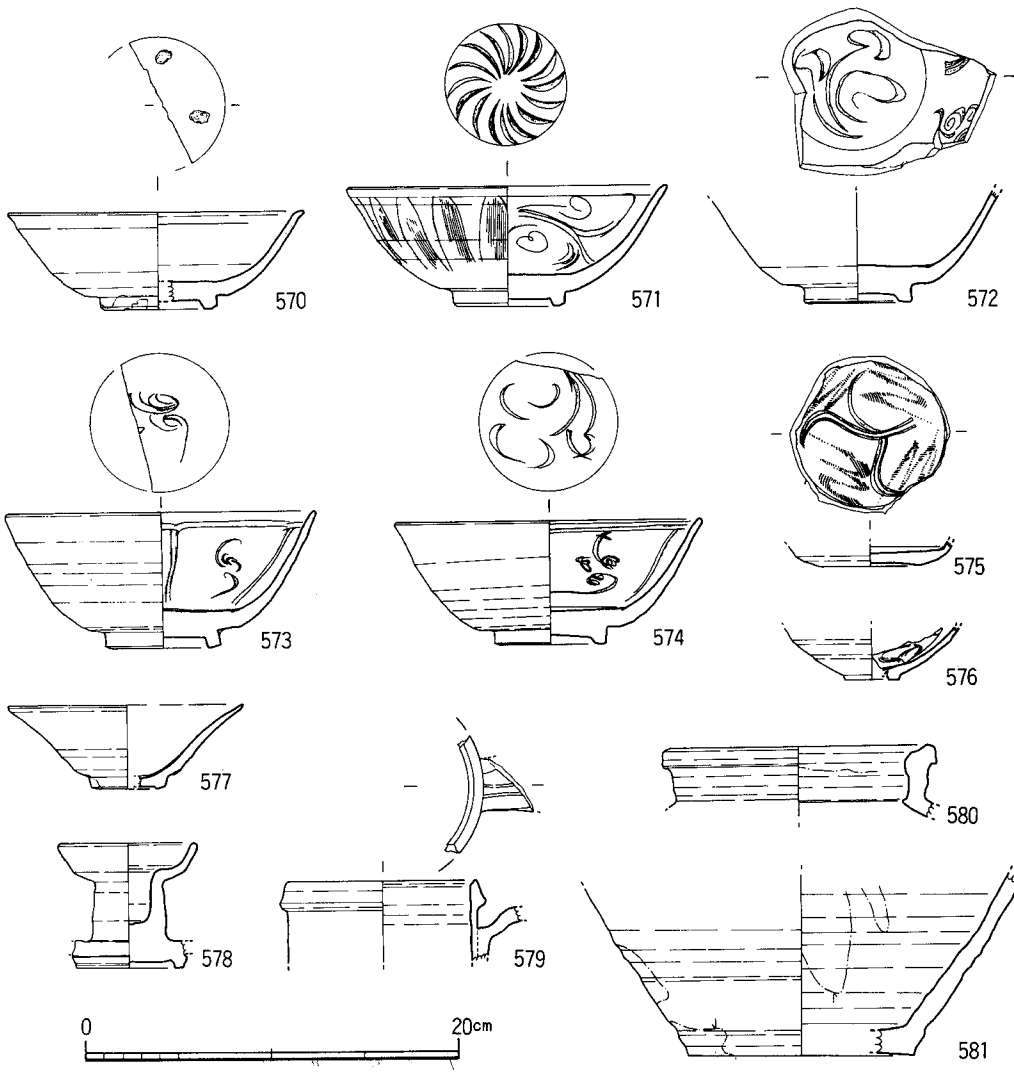


Fig. 54. SE－3029出土土器実測図(3) (1/4)

の壷。570～574は龍泉窯系青磁Ⅰ類の碗である。570の見込みには胎土目が見られる。575はⅠ類の同安窯系青磁平底皿である。576は広東系青磁の小碗で、低い輪高台をもち体部は中位で一旦屈曲する。見込みに小さい茶溜りを作る。灰色の緻密な胎にうすいオリーブ色の透明釉がかかる。内面には櫛描文を施す。577は天目碗で、濃い灰ベージュ色のやや粗い胎土に黒色の釉がかかる。釉の表面は茶褐色を呈する。578～581は中国陶器である。578はB群の灯明皿で、受け皿部は欠失している。白黒の細砂粒が混じった灰色の緻密な胎に、濃いあずき色の釉が、外底を含めた全面に施される。579はC群の水注である。580・581は準A群の壷で、どちらも白黒の小～粗砂粒を多く含んだやや粗い胎土にうすいあずき色の不透明釉がかかる。

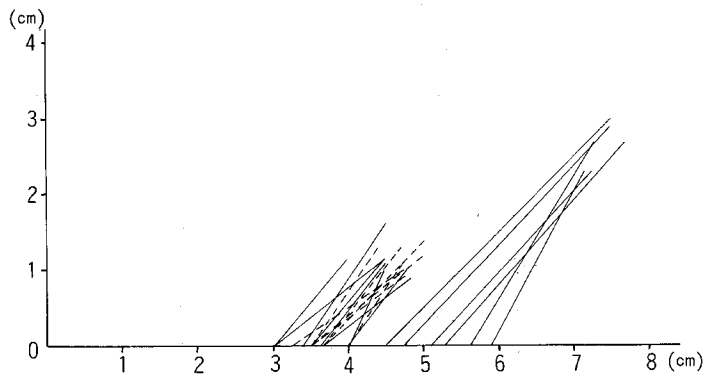


Fig. 55. SE－3029土師皿計測グラフ

9は、口径18.5cmの石鍋である。小さく内傾する口縁部下には鍔が巡り、鍔下には煤が付着する。

SE－3036（Fig.56・57　PL.9）

調査区の南端に位置する素掘りの井戸址で、平面形は径約260cmの円形になろう。掘り方は擂鉢状に緩く掘り込んだのち、井戸側部分をさらに100cmほど筒状に掘り下げている。井戸底面の標高は1.7mである。覆土は濃灰褐色土である。遺物は、土師器や須恵器が出土したが、量的には少ない。

出土遺物

582～584は土師器である。582は小型器台である。受部内面は放射状に暗文を施し、口縁部から受部外面はヨコナデ調整、脚部外面は横方向のヘラミガキで仕上げる。583・584は碗である。583は

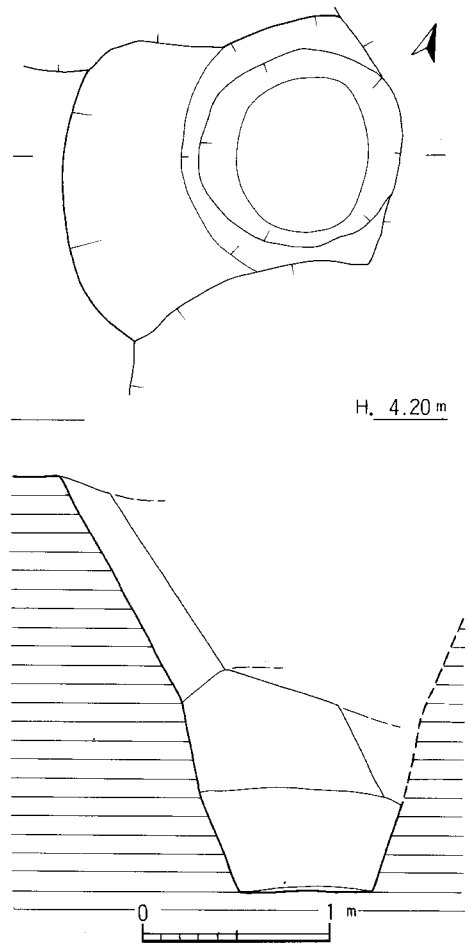


Fig. 56. SE－3036実測図（1/40）

外方にやや開いた高台をもつが、584は高台を欠失する。いずれも内底をナデ調整し、他はヨコナデ調整する。585は須恵器の高台付坏である。

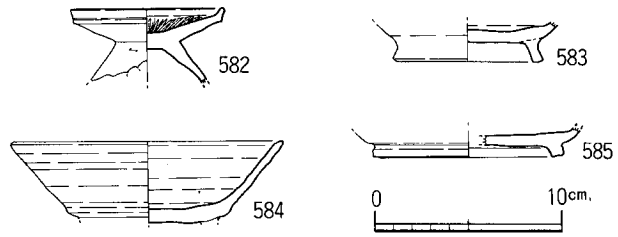


Fig. 57. SE－3036出土土器実測図（1/4）

SE－3056(Fig.58～60・71　PL.9・11)

調査区の北東隅にある素掘りの井戸址で、SX－3001、SK－3037よりも古い。平面プランは、径250～270cmの円形をなす。掘り方は、大きく擂鉢状に掘り込んだのち、南壁側に寄って径140cmの井戸側部分をさらに50cmほど掘り下げているために二段掘り状の構造をなす。井戸底面の標高は2.5mを測る。遺物は、土師皿、瓦器碗のほか越州窯や龍泉窯系青磁と広東系の白磁壷が出土している。

出土遺物

586～605は土師器である。586～599は小皿で、口径8.5～9.6cm、器高0.8～1.5cmをはかる。いずれも内底にナデ調整がみられる。596～599は糸切り底をもつが、他はヘラ切り底をもつ。また、593・597を除いて全て板状圧痕が見られる。600は中皿で、口径11.7cm、器高1.7cmをはかる。内底はナデ調整し、ヘラ切り底で、板状圧痕をもつ。底部に焼成前の穿孔が２か所認められる。601～605は丸底坏で、口径15～15.2cm、器高３～3.6cmをはかる。いずれも内面はミガキで仕上げ、外底にはヘラ切り底が残る。606は瓦器碗である。607～631は白磁である。607～612はIII類の平底皿、613・614はIII類の高台付皿である。616は小碗、617～627は碗。617～619はO類に属する。617は浅碗で、灰白色の緻密な胎土に淡いオリーブ色の半透明釉がかかる。内側に櫛描文を施す。618・619は内面に白堆線をもつ。620・621はII類、622～625はIV類、626はVI類に属する。627はIX類に似るが見込みの釉は削り取られていない。628～631は広東系白磁の壷である。628は耳で、背に３本の沈線を刻む。灰白色の緻密な胎土に緑色を帯びた灰白色の半透明釉がかかる。内面は露胎である。629～631はいずれも灰白色の極めて緻密な胎土にごく淡い青緑～黄緑色の半透明釉がかかる。全体に細かい貫入が見られる。631は内面も施

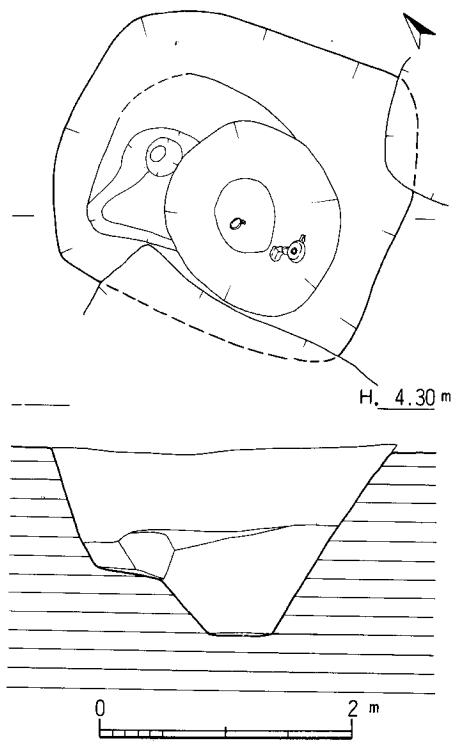


Fig. 58. SE－3056実測図（1/60）

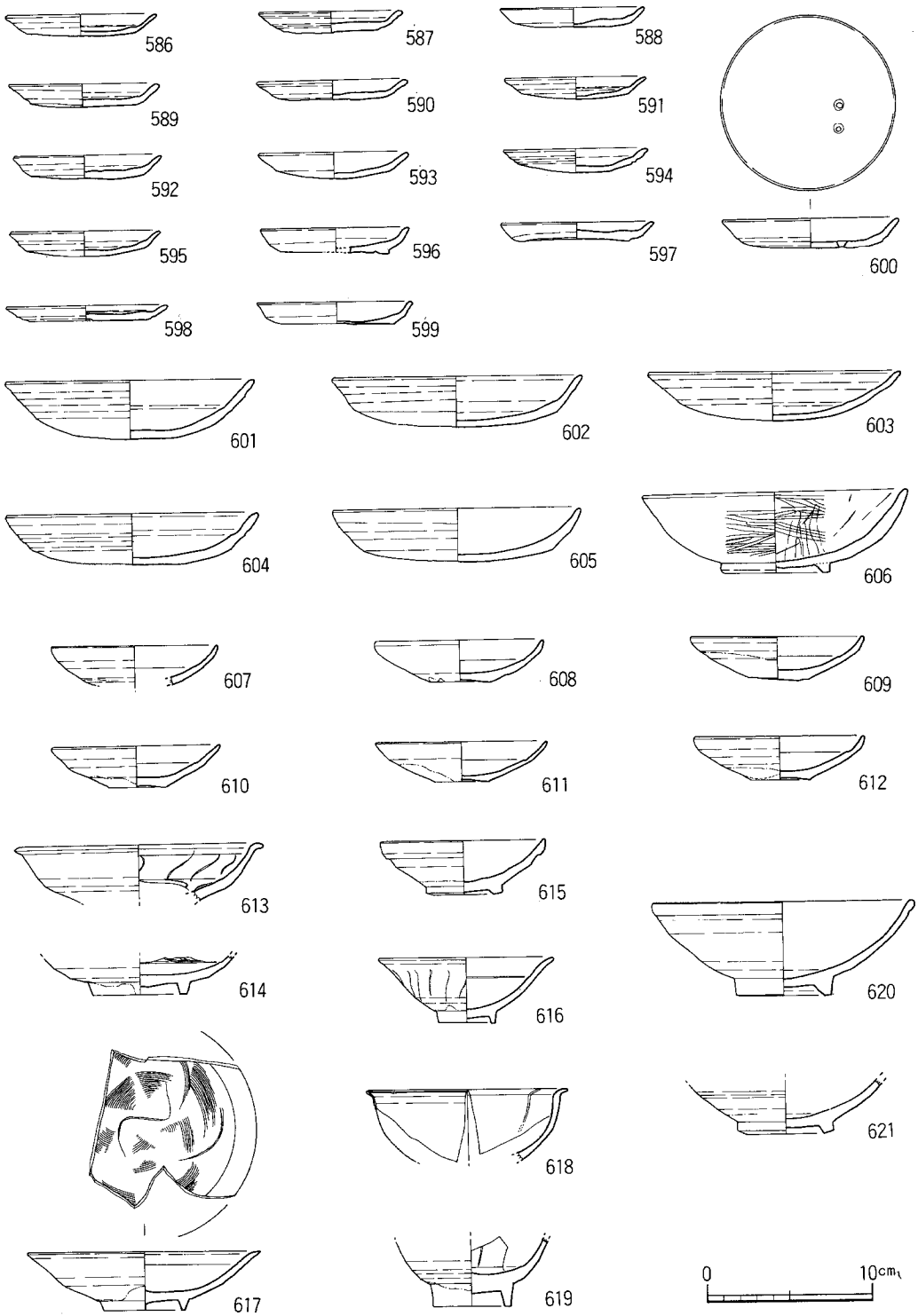


Fig. 59. SE－3056出土土器実測図(1) (1/4)

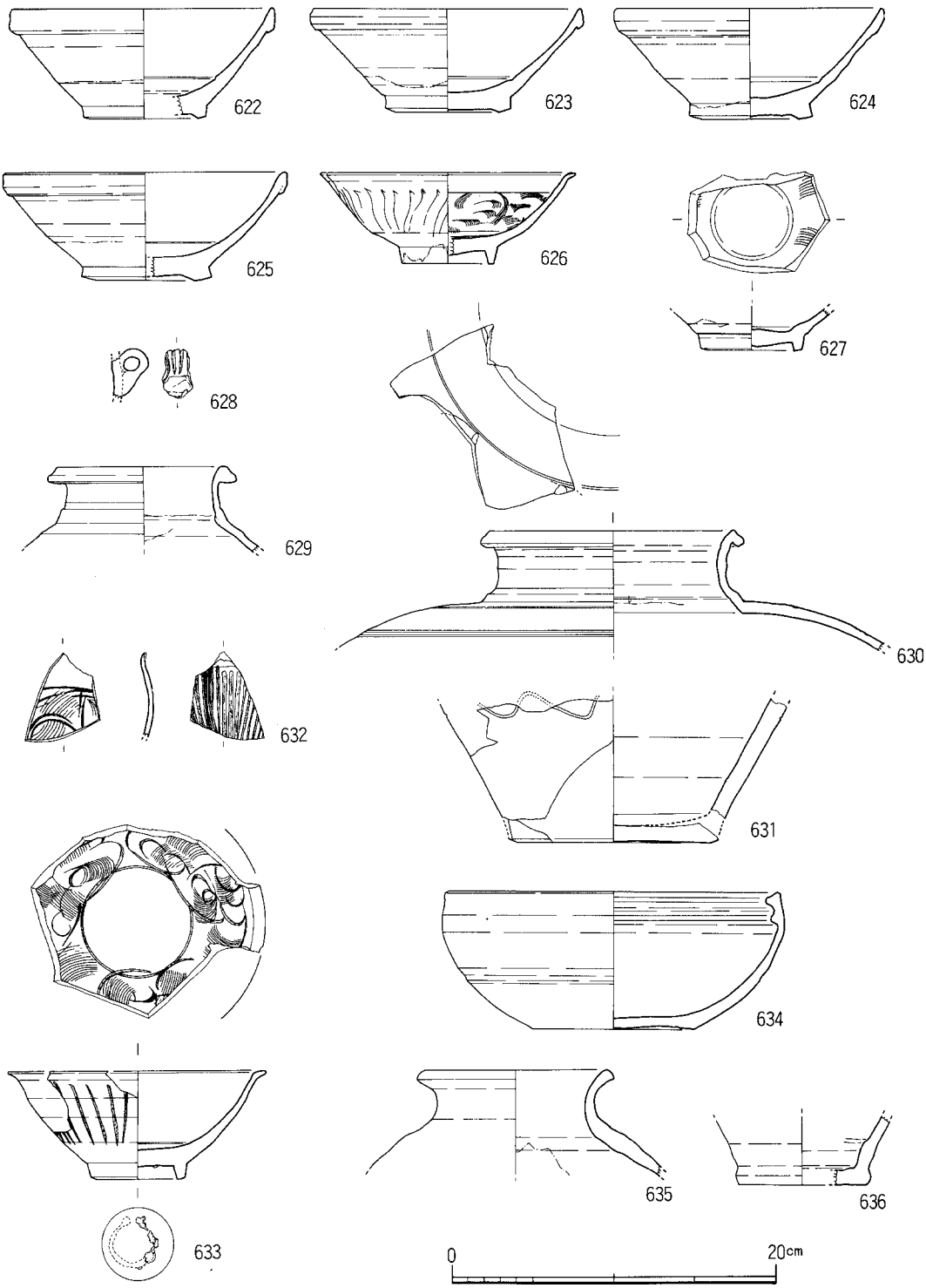


Fig. 60. SE－3056出土土器実測図(2) (1/4)

釉されており、外底の釉は削り取られる。632は龍泉窯系青磁碗のO類と思われる口縁部小片である。灰色の緻密な胎土に灰オリーブ色の透明釉がかかる。体外壁には太い櫛描文が見られる。633は新しいタイプの越州窯系青磁碗である。体外壁に櫛描文を放射状に刻み内面にはヘラ描文・櫛描文を施す。灰色の緻密な胎土に茶色を帯びた灰オリーブ色の半透明釉がかかる。釉は全面に施され高台内には輪状に目跡が残る。634～636はいずれもC群の中国陶器である。634は無釉の捏鉢。内表面は使用により石が飛んで滑らかである。635は壷。白い小砂粒を多く含んだやや粗い黒灰色の胎土に、緑色を帯びた黒褐色の不透明釉がかかる。636は無釉の水柱。坩堝として使用されたもので、二次焼成を受けており内面には銀化したガラスが付着する。

6・10は滑石製品である。6は破砕した石鍋の把手を再利用した模造鏡で、長径6.8cm、短径4.7cm、厚さ2.2cmを測る。10は断面形が台形を呈する紡錘車で、中央部に直径0.8cmの円孔が通る。重さは70.3g。

SE－3076 (Fig.61～63　PL.10・11)

調査区の北端に位置する素掘りの井戸址で、SK－3045よりも古い。北側半分は調査区外にのびるが、平面形は径330cmほどの大型の円形になろう。掘り方は、大きく逆台形状に掘り、その中央部に井筒を掘り込んでいるが完掘できなかった。井筒の検出面は、標高2.7mである。遺物は、土師器や瓦器のほか中国陶磁器が出土している。

出土遺物

637～644は土師器である。637は坏蓋である。赤茶色の精良な胎土で焼きしまっている。天井部にはつまみがついていたものと思われる。全体を横方向のヘラミガキで仕上げる。638は甕である。大小の砂粒を多く含んだ灰褐色の粗い胎土である。内面は雑なケズリ、口縁部内側から胴部外面は粗いハケ目調整し、口縁部はその上からヨコナデ調整する。639～641は小皿で、口径8.8～9.7cm、器高1.2～1.4cmを測る。639・640はヘラ切り底、641は糸切り底で、いずれも板状圧痕をもつ。642～644は坏で、口径13.3～14.4cm、器高2.1～3.9cmを測る。642・643は外底をナデ調整し、644は外底に粘土紐の巻き上げ痕が残る。645・646は瓦器碗である。645は高台内と高台付近はヨコナデ調整し、体部内外は雑なヘラミガキである。646は楠葉型のもので、口縁下に沈線が一条巡る。断面三角形の低

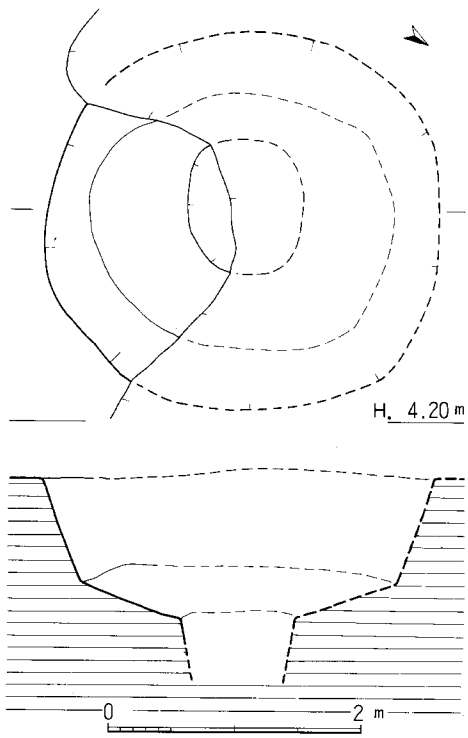


Fig. 61. SE－3076実測図 (1/60)

い高台がつく。内面は幅2㎜程度の横方向の密なヘラミガキ、外面はナデ調整の上から斜め方向に間をあけたヘラミガキをおこなう。647～654は白磁である。647は水注もしくは壷である。灰色のかなり緻密な胎土に半透明の灰オリーブ色の釉がかかる。広東系のものであろう。648はII類の高台付皿である。649はII類の平底皿で、口縁部を輪花となし、白堆線で体部を6区分する。外底のみ釉を削り取り露胎となす。650はVI類の平底皿で見込みに劃花文を施す。651はII類、652はV類。653はIV類、654はVI類の碗である。655は青白磁と思われる碗である。白色の緻密な胎土に淡青色の半透明釉がかかり小さい貫入が全体に見られる。体外壁に線描文が不規

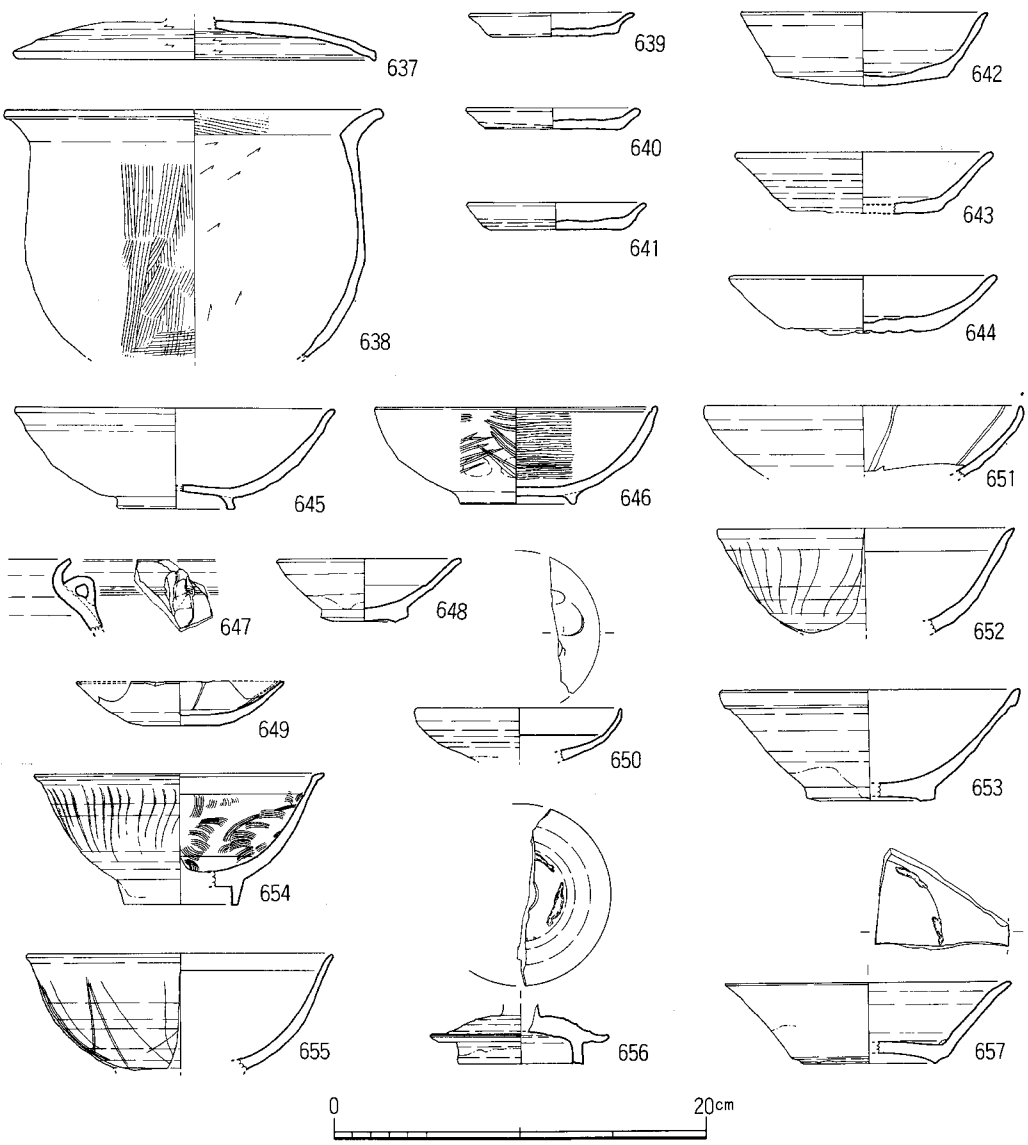


Fig. 62. SE－3076出土土器実測図（1/4）

則にはいる。656は青磁の蓋である。灰ベージュ色の極めて緻密な胎土で、うすい灰オリーブ色の半透明釉が天井部に施される。天井部には目跡が残る。657は中国陶器B群の皿である。黒色粒が混じる濃い灰色の緻密な胎土である。褐釉を口縁部に流しがけし、その上から灰オリーブ釉をかける。体外半釉である。見込みに目跡が残る。

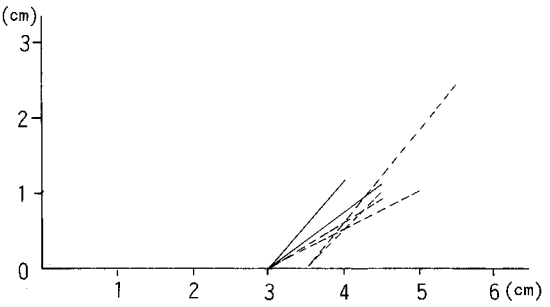


Fig. 63. SE－3076土師皿計測グラフ

SE－3077 (Fig.64～66・71　PL.9・11)

調査区の北西端にある大型の井戸址で、上端をSK－3054と3062に切られている。北側と西側は調査区外にあるが、平面形は径4.4～4.7mの円形になろう。掘り方の壁面は急峻で、検出面より1.5mの標高2.0mまで円筒状に掘り、この掘り方底面に径90cmの井筒を南北に2個掘り込んでいる。北側の井筒は、井戸側に木枠を用いている。底面より15cmほどの高さで薄板痕が検出されたが、取り上げるには至らなかった。深さは95cmで、標高は0.9mである。南側の井筒は、素掘りである。底面より20cm上面には、浄水のためかと思われる拳～小児頭大の礫石が敷き並べられていた。この二つの井筒は同時にあったものか、あるいは掘り直しによるものかは現状では判然としない。遺物は、龍泉窯や同

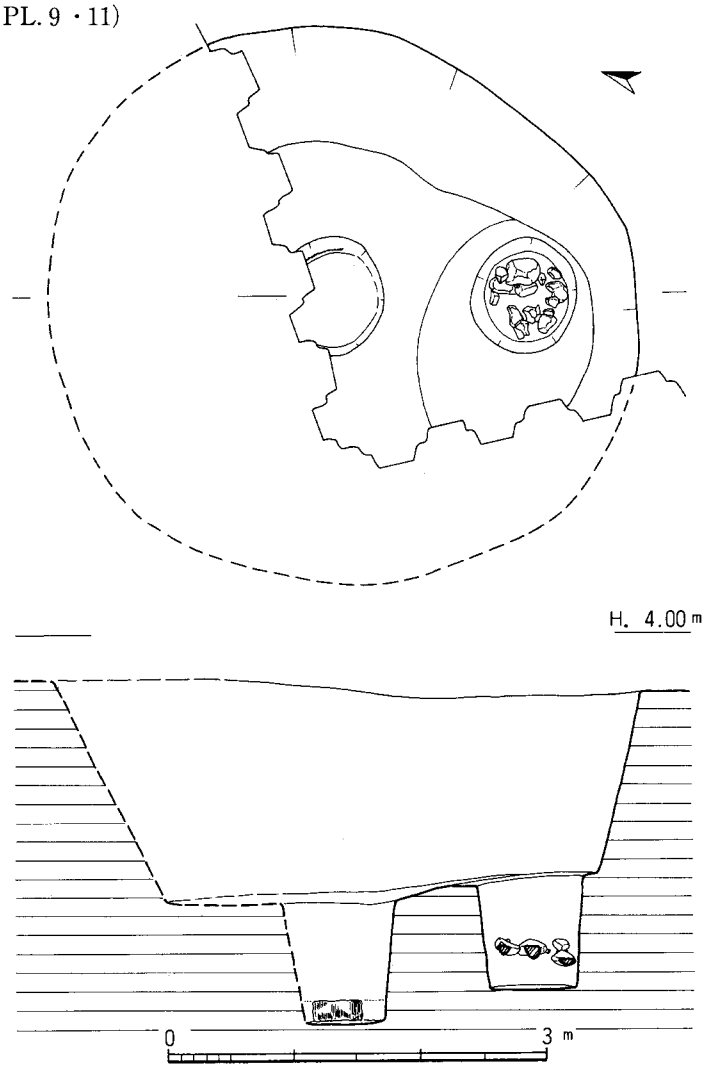


Fig. 64. SE－3077実測図 (1/60)

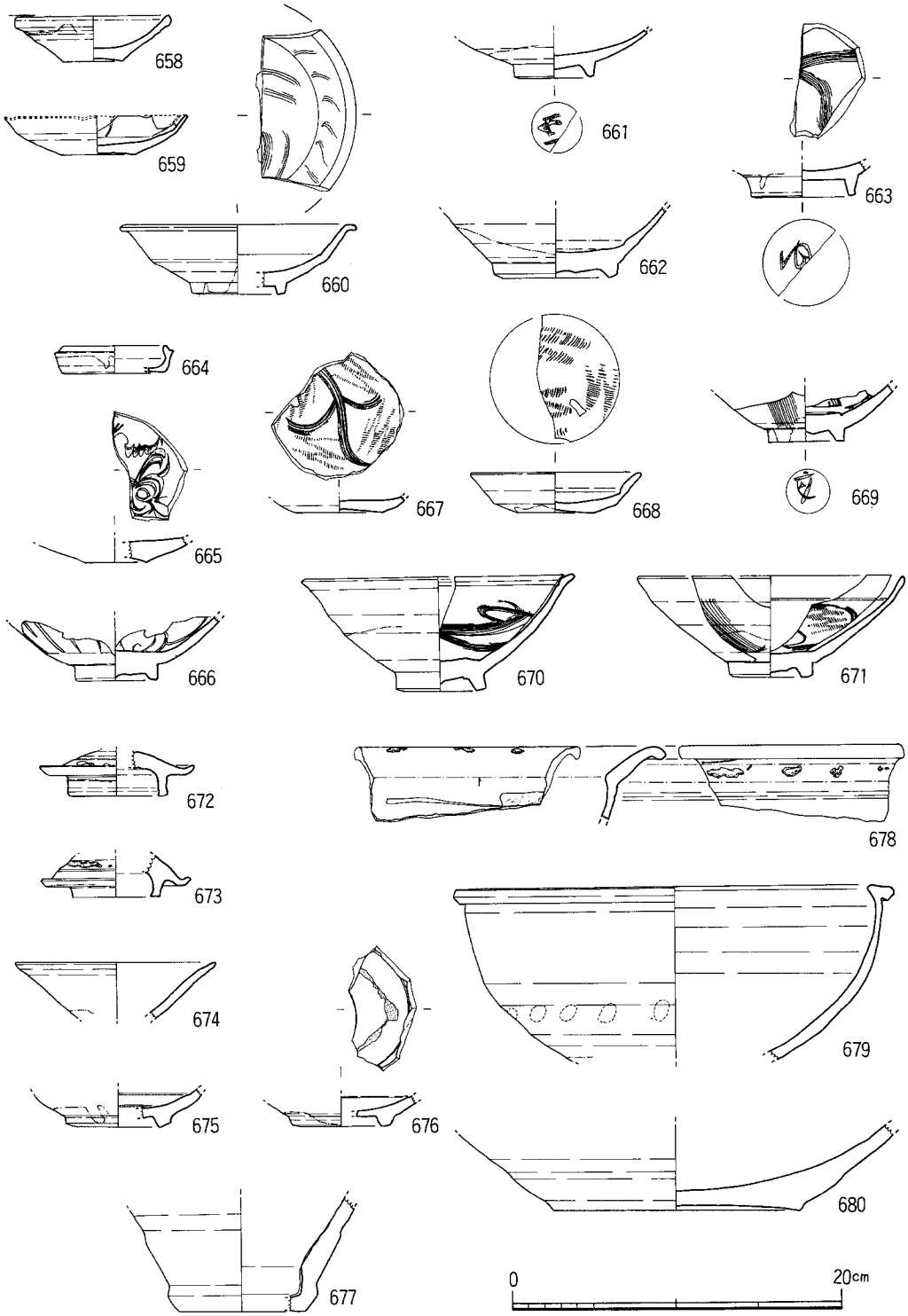


Fig. 65. SE－3077出土土器実測図（1/4）

安窯系青磁のほか天目碗が出土している。

出土遺物

658～663は白磁である。658はV類、659は白堆線をもつII類の平底皿である。660はIII類の高台付皿である。661はII類の碗で、高台内に墨書が残る。662はIX類の碗である。灰白色の胎土に淡青色の半透明釉がかかる。見込みで輪状に釉を削り取る。663はVI類の碗で、高台内に墨書が残る。664は青白磁の合子身である。665・666は龍泉窯系青磁である。665はI類の平底皿。666は碗で、内外面とも片切彫で文様を描く。667～671は同安窯系青磁である。667はI類、668はII類の平底皿で、いずれも見込みに櫛描文をもつ。669～671はII類の碗である。672・673は青磁の蓋である。どちらも濃いベージュ色の極めて緻密な胎土に灰オリーブ色の半透明釉がかかる。天井部に目跡が残る。674は天目碗である。口縁部周辺のみあめ色の釉がかかり、他は褐釉が施される。広東系のものと思われる。675～680は中国陶器である。675・676はB群の碗である。いずれも白黒の細砂粒が混じったやや粗い胎土に灰オリーブ色の不透明釉がかかる。胎土は部分的に、うす茶色・灰色・黒灰色と発色が異なる。677はC群の無釉の水注である。白い砂粒が多く混じった粗い黒灰色の胎土で、内面に青色のガラスが付着する。坩堝として使用されたものである。678は鍔口縁をもつA群の盤である。口縁部内外に白い目砂が付着する。679はB群の鉢。うすい赤茶色の胎土に濃いあずき色の釉がかかる。680はC群の捏鉢である。白い小～粗砂粒を多量に含んだ粗い赤茶色の胎土で無釉。内表面は、砂粒が飛んで滑らかである。

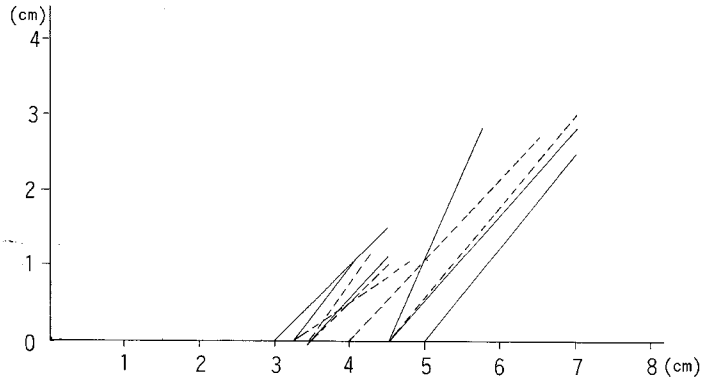


Fig. 66. SE－3077土師皿計測グラフ

7は、滑石製の石鍋で、口縁端に小さな把手が付き、外面には煤が付着している。

SE－3078（Fig.67・68・71・72　PL.10・11）

調査区の南端にある素掘りの井戸址で、SE－3136のすぐ東に位置する。南側は調査区外にのびるが、平面形は径2.1mほどの円形になろう。掘り方は、逆台形状にやや急峻に掘り込んだのち、西側に寄せて浅く井筒部を掘り下げており、二段掘り状の構造をなす。井戸底の標高は2.45mで、木桶等の井戸側施設は検出できなかった。覆土は濃灰褐色土で、下層はやや粘質を帯びている。遺物は、土師皿のほか龍泉窯系等の青磁があり、青磁の中には墨書やスタンプ印のものも出土している。

出土遺物

681～695は土師器である。681～689は小皿で、口径8.5～9cm、器高0.7～1.1cmを測る。690～695は坏で、口径13.1～14.4cm、器高2.3～3.1cmを測る。小皿・坏とも内底にナデ調整を施し、外底に糸切り痕・板状圧痕が残る。696は青白磁の合子身である。697～699は白磁。697は碁笥底をもつ皿で、灰白色の胎土に青みある灰白色の不透明釉がかかる。698はIX類の碗と思われるが、見込みにかなり丸みをもつ点で特殊である。699はV類もしくはVI類に属し、高台内には墨書が残る。700～703は龍泉窯系青磁碗である。700・701はI類に属する。700は無文であるが、701は見込みに『金玉満堂』のスタンプをもつ。702・703はどちらも鎬蓮弁をもちII類に属する。703の高台内には墨書が残る。704はその他群の青磁碗である。体外は放射状に片切彫をいれる。釉は濃い灰オリーブ色で、よく溶けておらず濁っている。見込みで輪状に釉を削り取る。705は中国緑釉陶器の壷の耳である。小砂粒を含んだやや粗い灰ベージュ色の胎にペンキのような緑色の釉がかかる。内面は露胎である。

8は、滑石製の石鍋である。口径は23.8cmを測り、直口する口縁下には小さな鍔が巡る。

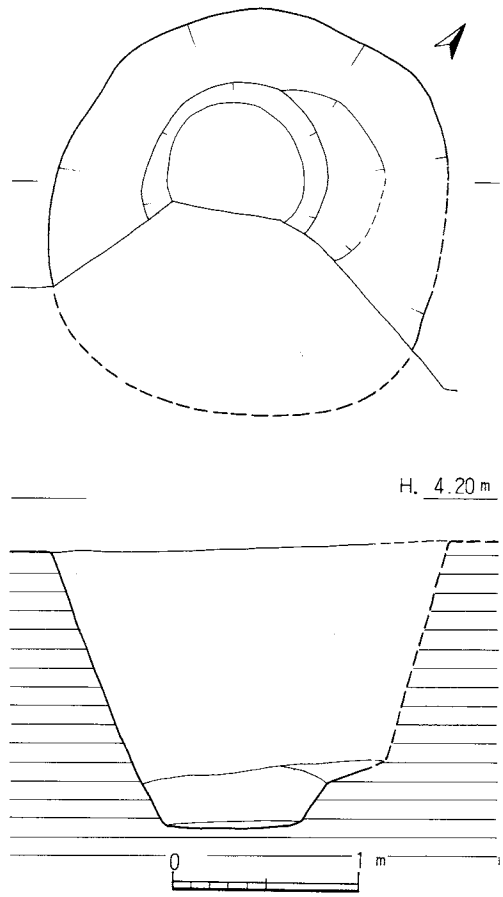


Fig. 67. SE－3078実測図（1/40）

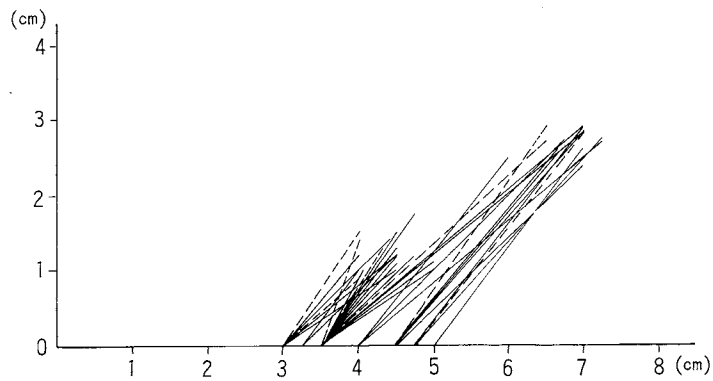


Fig. 68. SE－3078土師皿計測グラフ

SE−3131（Fig.69・72・94　PL.9）

調査区の南東隅にある素掘りの井戸址で、SE−3078のすぐ北に位置する。平面形は、長軸3.0m、短軸2.35mの楕円形プランを呈する。掘り方は擂鉢状に掘り下げ、その中央には径90cmの井筒を掘り込んでいるが、標高1.8mまで掘り下げたところで壁面が崩落し、完掘するには至らなかった。遺物は、白磁皿や陶器碗等が出土したが、量的には少ない。

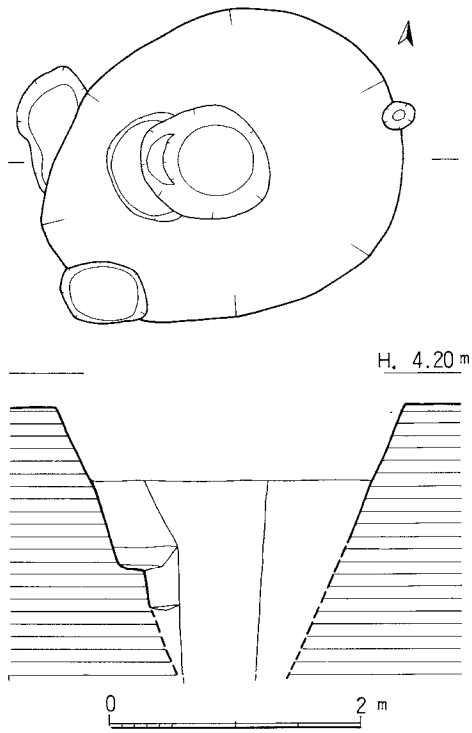


Fig. 69. SE−3131実測図（1/60）

出土遺物

706は白磁の高台付皿である。灰白色の緻密な胎土に青白磁風な淡青色の半透明釉がかかる。見込み中央には径2cmほどのボタン状の凸部を有する。内面に蕉葉文を施す。広東系のものであろう。707は李朝粉青沙器の碗と思われる。灰色の緻密な胎土に灰緑色の半透明釉が全面に施される。見込みと畳付に輪状に目砂が付着する。

4は土錘である。現長3.64cm、重さ3.8gを測る。

SE−3136（Fig.70・72　PL.11）

調査区の南端にある素掘りの井戸址で、SE−3078のすぐ西に位置する。南側は調査区外に拡がるが、平面形は、径240cmほどの円形になろう。掘り方の壁面は急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。掘り方検出面より130cmの標高2.6mの西寄りに位置したところで、径80cmの井筒痕を検出したが、50cmほど掘り下げたところで壁面が崩落し、完掘するには至らなかった。遺物は、越州窯系青磁碗や白磁皿等が少量出土した。

出土遺物

708～712は白磁である。708はO類の平底皿で、外底のごく内側を削り込んで極めて低い高台を作りだす。灰白色の胎土に青みある白色の不透明釉がかかり、細かい貫入がはいる。709はIX類、710・711・712はVI類の碗である。いずれも見込みの釉は輪状に削り取られる。713は越州窯系青磁碗である。濃い灰色の緻密な胎に灰オリーブ色の半透明釉がかかる。畳付の釉は削り取られる。見込みと畳付には目跡が残る。

SE−3157

調査区の南端にある素掘りの井戸址である。西側と南側が調査区壁下にあたるために完掘し

なかったが、平面形は径210～230の円形になろう。掘り方は擂鉢状に窄まり、標高2.9mまで掘り下げたところで発掘できなくなった。井筒は未検出である。

SE－3159

調査区の南端に位置する素掘りの井戸址である。東側はSE－3136に、西側はSE－3157に切られている。また、南側は調査区壁下にある為に全容は明確でないが、径4.0～4.3mほどの大型の円形になろう。掘り方は擂鉢状に窄まるが、標高2.05mまで掘り下げたところで発掘できなくなった。ここまでの段階では井筒等は確認できていない。

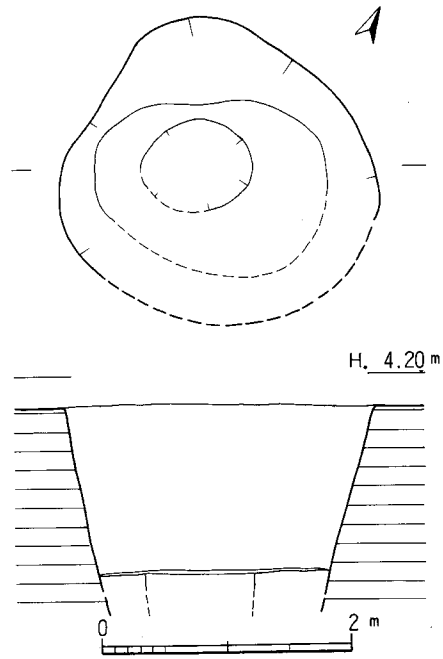


Fig. 70. SE－3136実測図（1/60）

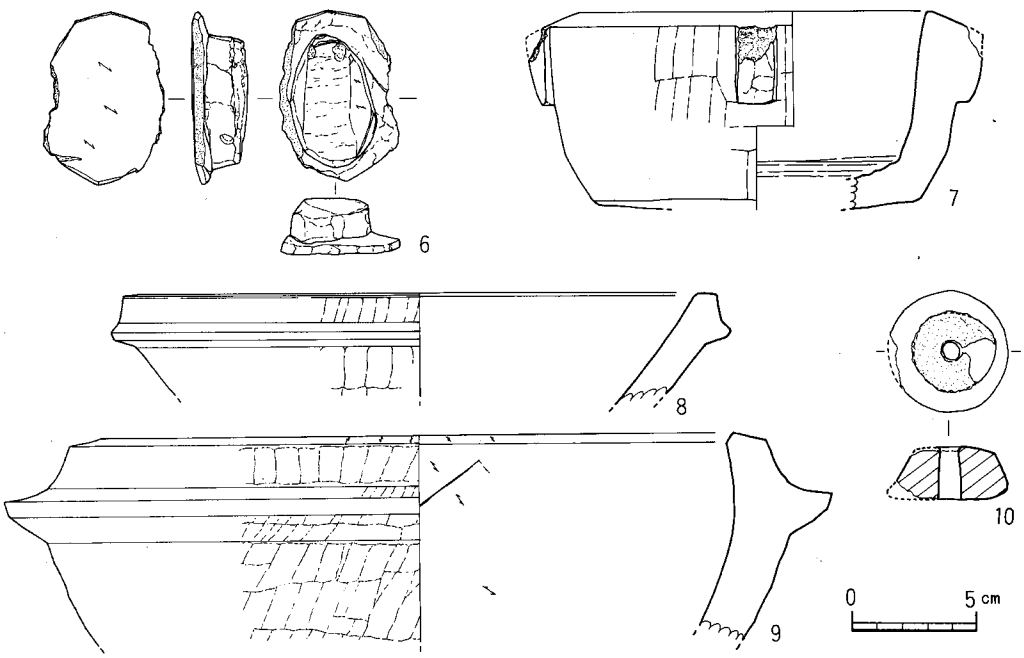


Fig. 71. SE－3029～3078出土石製品実測図（1/3）

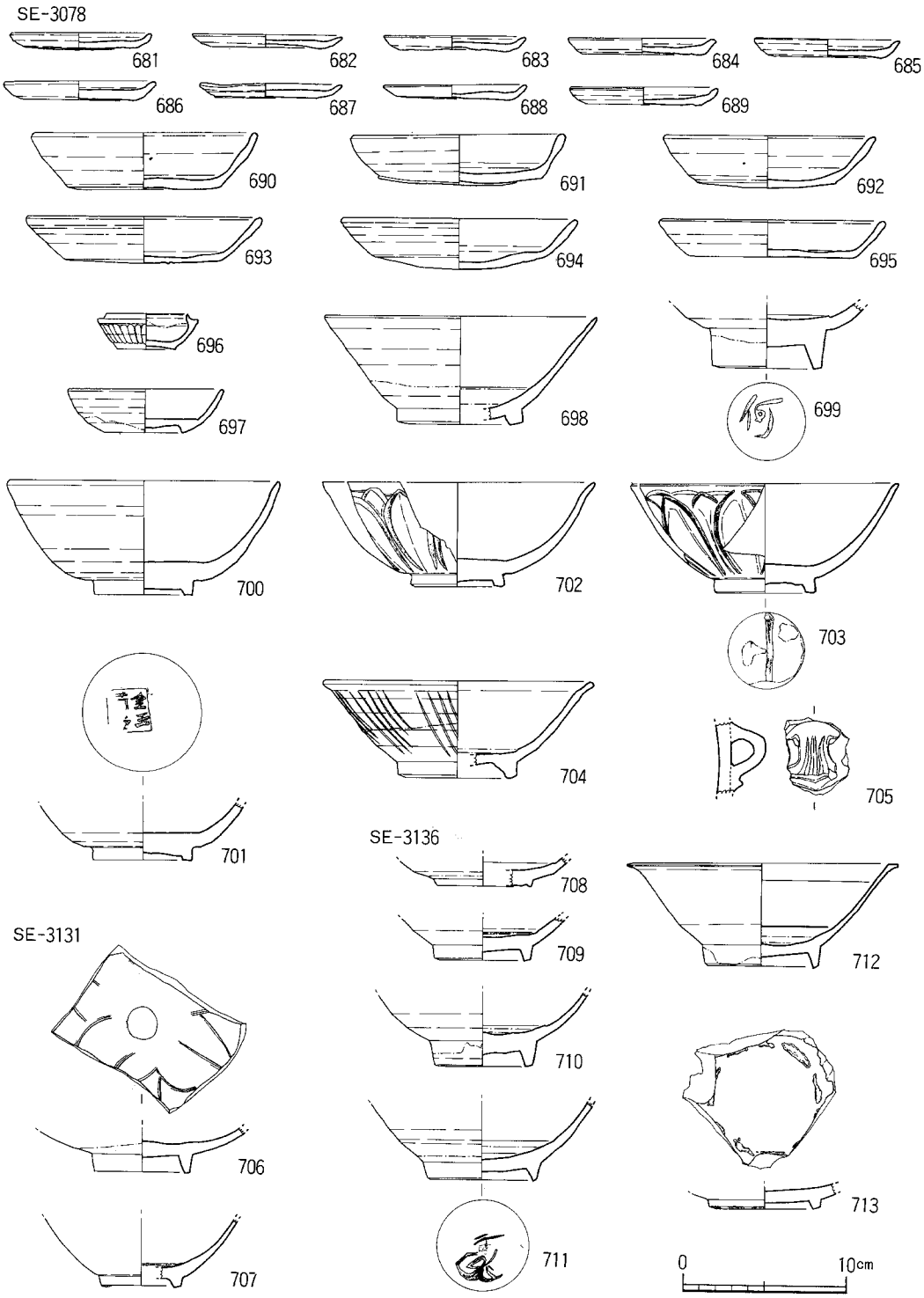


Fig. 72. SE－3078・3131・3136出土土器実測図 (1/4)

(2) 土　壙　(SK)

第3面では18基の土壙を検出した。時間的にはほぼ同時期として捉えられるが、その形状は円形から方形まで大小さまざまあり、明確にその使用目的を特定するには至らなかった。

SK－3002 (Fig.75・92)

調査区のほぼ中央部に位置する。東側は消失するが、平面形は長軸170cm、短軸125cmの不整方形に復原できよう。底面は平坦で、断面形は浅い逆台形をなす。

出土遺物

土師器の小皿である。口径10.3cm、器高1.7cmをはかる。内底にナデ調整が見られ、底部にヘラ切り痕が明瞭に残る。

11は、小さな滑石製の石製品である。直径が2.5cmの円形を呈し、中央部には径1.2cmの円孔を皿状に途中まで穿つ。

SK－3037 (Fig.73・75・94)

調査区の北東隅にあり、SE－3056の埋没後に掘り込まれた土壙である。平面形は、長軸、短軸の隅丸方形をなし、N－7.5°－Eに主軸方位をとる。深さは26cmを測り、断面形は中央部が浅く凹む逆台形を呈する。

出土遺物

715～717は土師器である。715・716は小皿で、715は口径9cm、器高1.2cm、716は口径9.8cm、器高1.9cmを測る。どちらも内底にはナデ調整が見られる。717は丸底坏で、口径16.2cm、器高3.5cmを測る。内面はミガキで仕上げる。3個体ともヘラ切り底で板状圧痕をもつ。718は須恵器の高台付坏と思われ、高台内には墨書が残る。719～723は白磁である。719は小壺の蓋で、最大径3cmを測る。天井部に黄ベージュ色の不透明釉がかかる。下面に糸切り痕が残る。720は小碗である。口縁を小さな玉縁となし、見込みに小さな茶溜りをつくる。721はIII類の平底皿。722はIV類、723はII類の碗である。

7は土錘。長さ3.53cm、重さ7.9g。

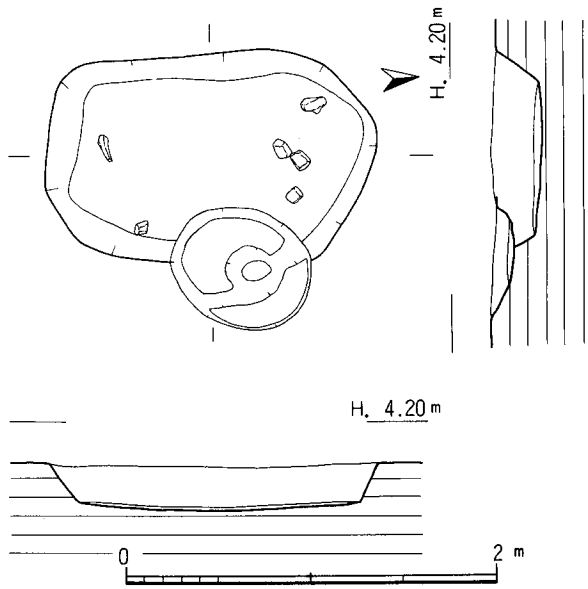


Fig. 73. SK－3037実測図 (1/40)

SK－3039（Fig.74・75）

調査区の北部にあり、SE－3029のすぐ東に位置する。平面プランは、長軸170cm、短軸73cmの楕円形に復原できよう。深さは36cmを測り、断面形は中央部がやや凹む逆台形をなす。N－32°－Wに主軸方位をとる。遺物は、土師皿のほか白磁や同安窯系青磁が出土した。

出土遺物

724は中国陶器の碗である。白黒の細砂粒を小量含むが緻密な胎土で、うすい灰緑色の半透明釉がかかる。畳付の釉は削り取られており、見込みに輪状に目跡が残る。725・726は白磁。725はII類の高台付皿、726はVI類の碗で内面に櫛描文がある。

SK－3045（Fig.74・75）

調査区の北東端にある土壙で、SE－3076の埋没後に掘り込まれている。平面形は長軸192cm、短軸145cmの隅丸長方形をなし、N－61°－Eに主軸方位をとる。深さは25cmを測り、壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。断面形は浅い凹レンズ状をなし、南側がやや高くなる。

出土遺物

どちらも土師器の丸底坏である。727は口径15cm、器高3.5cm、728は口径15.2cm、器高3.7cmを測る。727・728とも内面はミガキで仕上げ、728にはコテ跡が残る。727にはヘラ切り痕が認められる。

SK－3046（Fig.75）

調査区の北側にある土壙で、その大半をSE－1073・3029や基礎杭によって破壊されているために全容は判然としない。

出土遺物

729は土師器の丸底坏である。口径14cm、器高3.5cmを測る。内面はミガキで仕上げる。底部の切り離し痕はナデ消されているが、わずかに板状圧

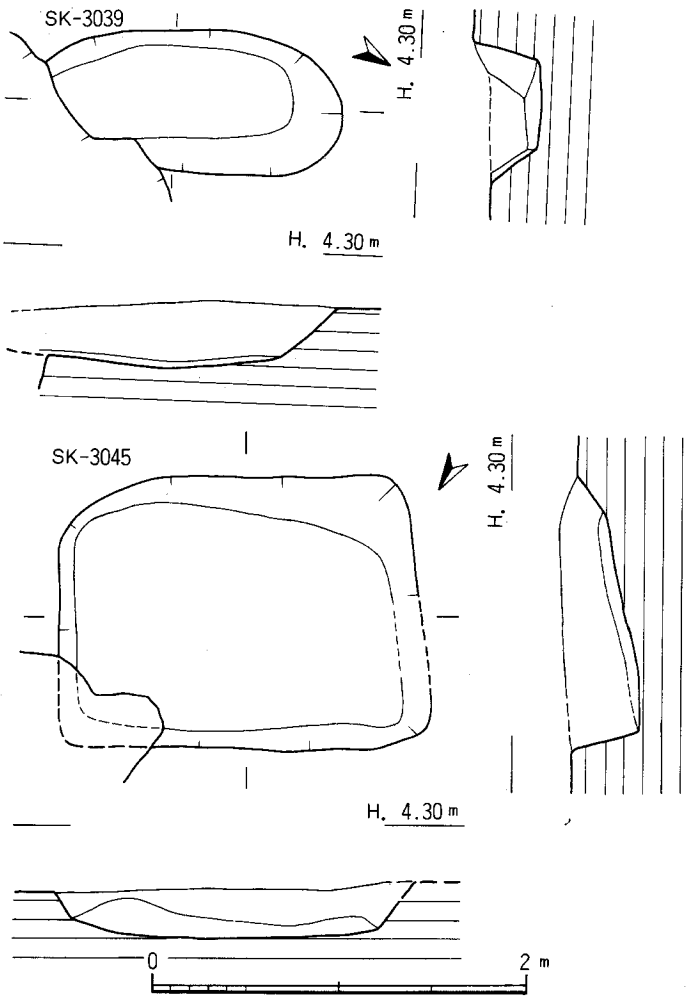


Fig. 74. SK－3039・3045実測図（1/40）

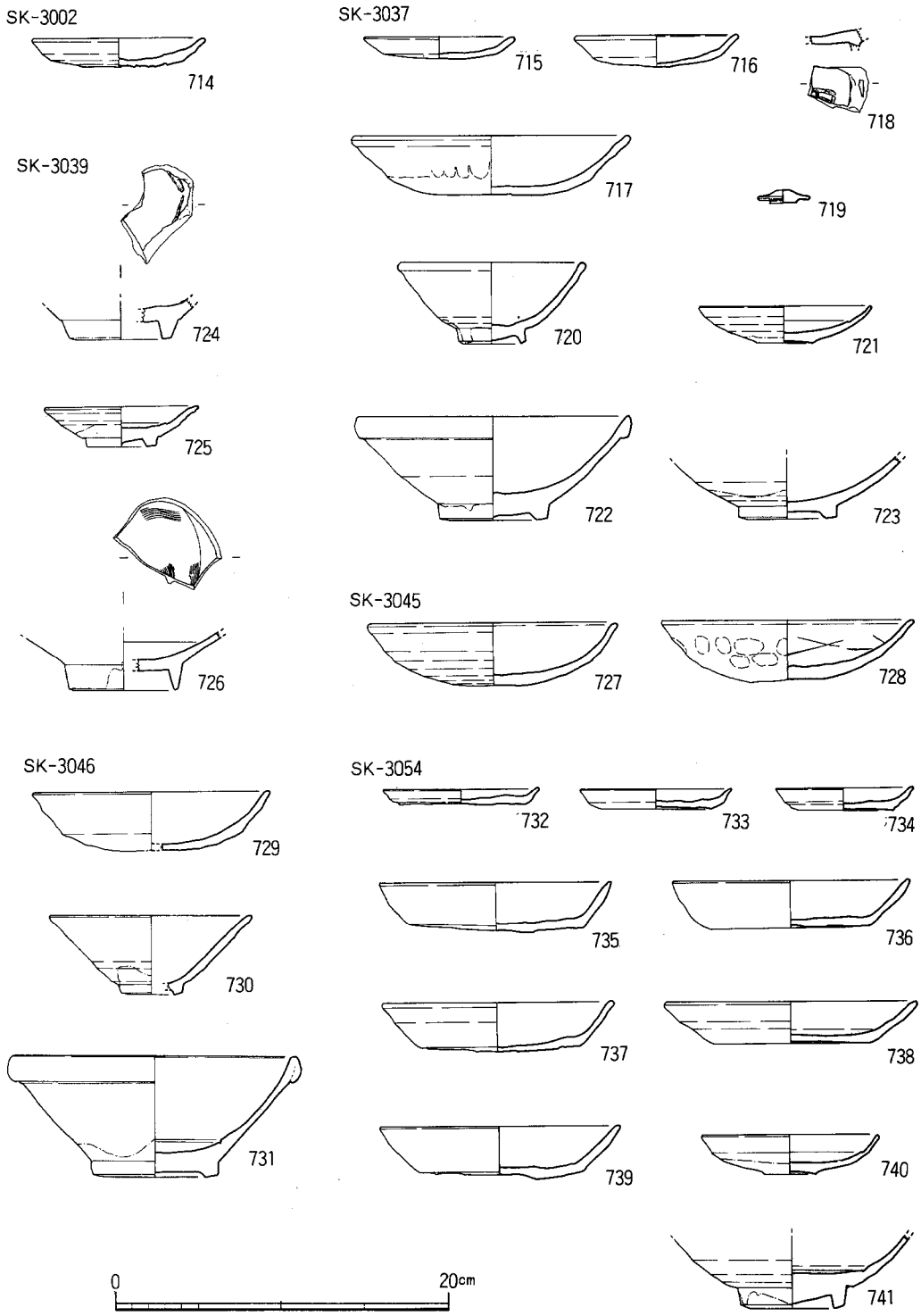


Fig. 75. SK－3002～3054出土土器実測図 (1/4)

痕が残る。730は天目碗である。黒灰色の緻密な胎土に、黒色の釉がかかる。部分的に柿色を呈する。731はIV類の白磁碗である。ベージュ色の緻密な胎土に黄ベージュ色の不透明釉がかかる。ピンホールが多い。

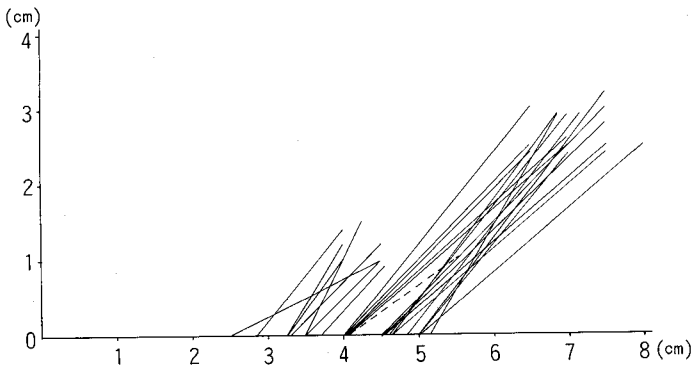


Fig. 76. SK－3054土師皿計測グラフ

SK－3054 (Fig.75・76)

調査区の北西端に位置する土壙で、SK－3062よりも古く、平面形は隅丸方形になろうか。深さは70cmを測り、断面形は逆台形をなす。遺物は、土師皿等のほか龍泉窯や同安窯系の青磁、天目碗が出土している。

出土遺物

732～739は土師器である。732～734は小皿で、口径8～9.1cm、器高0.9～1.4cmを測る。735～739は坏で、口径13.7～15cm、器高2.4～2.9cmを測る。小皿・坏とも糸切り底で、734を除いた全てに、内底にナデ調整、底部に板状圧痕が認められる。740はIII類の白磁平底皿。741は白磁碗で、白色の緻密な胎土に青みを帯びた透明釉がかかる。

SK－3062 (Fig.77・79)

調査区の北西端に位置し、SK－3054よりも新しい。平面形は、長軸185cm、短軸140cmの楕円形プランをなそう。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈し、深さは68cmを測る。

出土遺物

742・743は糸切り底をもつ土師器坏である。742は口径13.3cm、器高2.4cm、743は口径13cm、器高2.8cmを測る。744・745はII類の同安窯系青磁碗である。746は東播糸須恵質土器の鉢である。細～小砂粒を多く含んだやや粗い黒灰色の胎土で焼きしまっている。全体をヨコナデ調整しているが、内表面は使用により摩滅している。

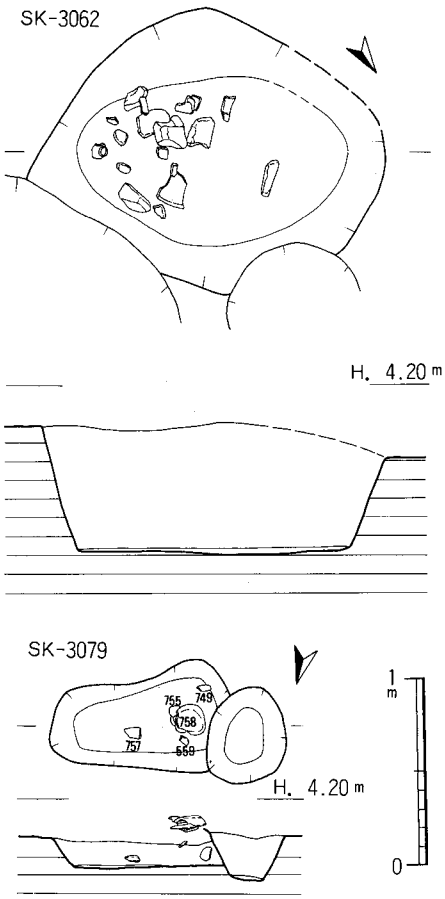


Fig. 77. SK－3062・3079実測図 (1/40)

SK－3079（Fig.79）

調査区の南東隅あり、SK－3148、SE－3154より新しい。平面形は、長軸125cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈し、西側小口部がやや幅広になる。深さは10cmと浅く、断面形は逆台形をなす。N－80°－Eに主軸方位をとる。西側小口の上面から土師皿８枚が重なって出土した。

出土遺物

いずれも土師器である。747～754は小皿で、口径9.1～9.6cm、器高1.1～1.7cmを測る。どれも内底にナデ調整が見られ、外底にはヘラ切り痕・板状圧痕が残る。755～758は丸底坏である。755・756は小型で、口径13.1～13.4cm、器高2.3cmを測る。757・758は口径15.2～15.4cm、器高3.8cmを測る。いずれも内面はミガキで仕上げ、755・758にはヘラ切り痕が残る。759は糸切り底をもつ坏で、口径14.2cm、器高2.6cmを測る。

SK－3108（Fig.78～80・94　PL.11）

調査区の南東隅に位置する大型の土壙である。平面形は、長軸385cm、短軸260cmの楕円形をなし、主軸方位をN－76°－Wにとる。深さは75cmを測り、舟底状の断面形を呈する。覆土中からは土師皿や瓦器碗のほか越州窯系青磁碗等が出土した。

出土遺物

760～767は土師器である。760～763は小皿で、口径8.8～9.9cm、器高1.2～1.6cmを測る。いずれも内底にナデ調整が見られる。761・762はヘラ切り底、763は糸切り底をもつ。764～766は丸底坏で、口径14.8～15.5cm、器高2.9～4.1cmを測る。いずれも内面はミガキで仕上げる。766

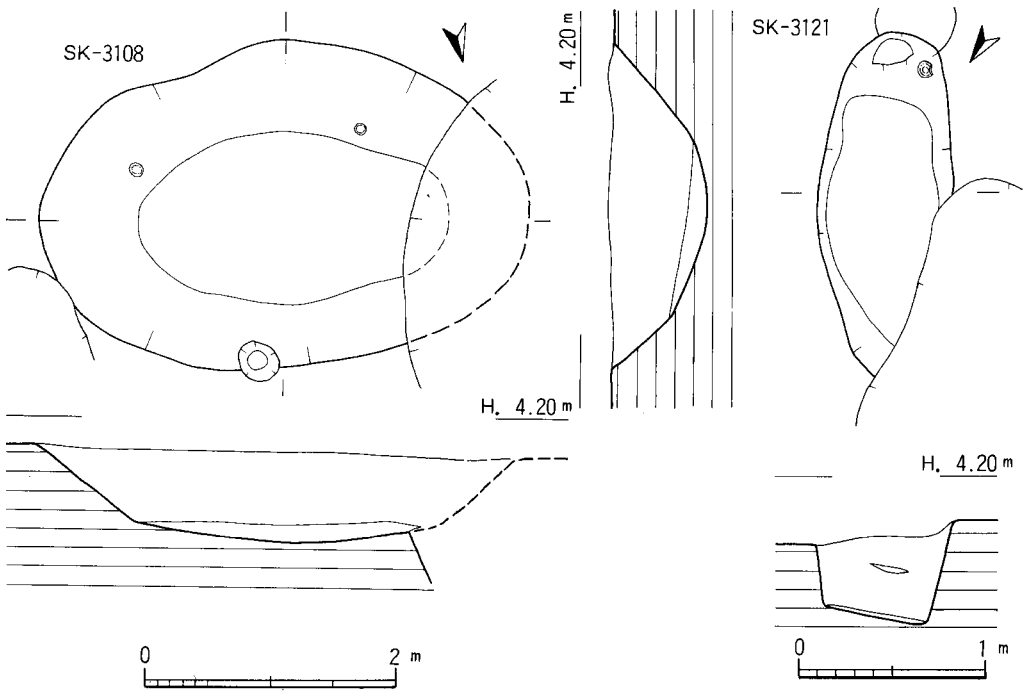


Fig. 78. SK－3108・3121実測図（1/60・1/40）

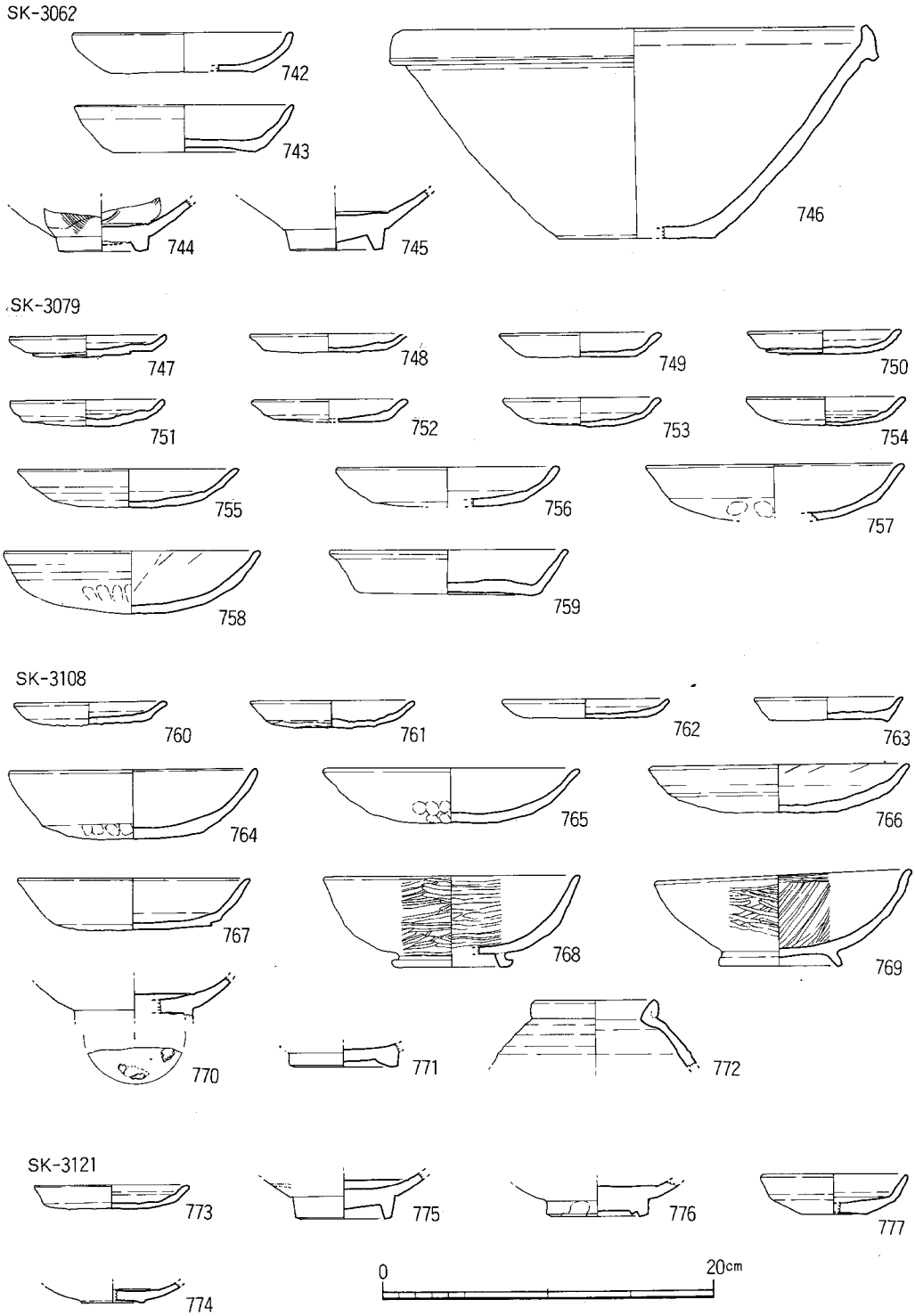


Fig. 79. SK－3062～3121出土土器実測図（1/4）

にはヘラ切り痕・板状圧痕が残る。767は糸切り底をもつ坏で、口径13.8cm、器高3.1cmを測る。768・769は瓦器碗である。770は越州窯系青磁碗である。灰ベージュ色の緻密な胎土に半透明の灰オリーブ色の釉がかかる。高台内に目跡が残る。771はII類の白磁碗。772は中国陶器B群の長瓶である。灰ベージュ色の緻密な胎土に黒褐色の不透明釉がかかる。

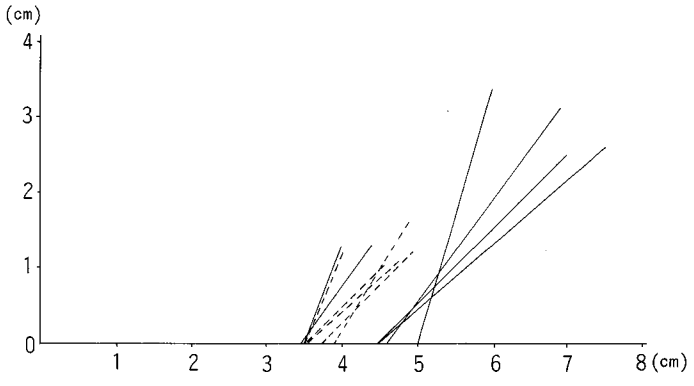


Fig. 80. SK−3108土師皿計測グラフ

6・8は土錘である。6は、長さ5.56cm、重さ4.8g。8は大型品で長さ6.93cm、重さ41.9g。

SK−3121 (Fig.78・79・94)

調査区の南側に位置し、SX−3120より新しく、SX−3115よりも古い。平面形は、長軸190cm、短軸75cmの長楕円形に復原できよう。主軸方位はN−8°−Wにとる。深さは50cmを測り、断面形は逆台形をなすが、西側に傾斜する。遺物は土師皿のほか、青・白磁が出土した。

出土遺物

773は土師器の小皿である。口径9.2cm、器高1.4cmを測る。内底にナデ調整が見られ、ヘラ切り底で板状圧痕が残る。774・775は白磁である。774は平底皿で、仮高台が作り出されている。ベージュ色の胎に同色の半透明釉がかかる。細かい貫入がある。775は碗であるが、釉下に化粧土を施している。776・777は龍泉窯系青磁である。777はI類の碗、778はI類の平底皿である。

5は長さ3.45cmの小型の土錘である。重さは3.3gを測る。

SK−3127 (Fig.81・84)

調査区の南端に位置し、平面形は円〜楕円形を呈するものであろう。深さは75cmを測り、断面形は浅い凹レンズ状になろう。遺物は土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁等が出土した。

出土遺物

778・779は土師器である。778は小皿で口径9.9cm、器高1.4cmを測る。内底はナデ調整で、ヘラ切り底は板状圧痕がつく。779は丸底坏

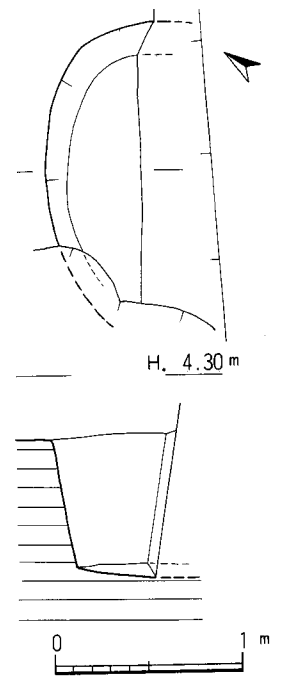


Fig. 81. SK−3127実測図 (1/40)

で口径15cm、器高3.2cmを測る。内面はミガキで仕上げる。780～783は白磁で、780は白色精良な胎土に青みのある白色の半透明釉がかかる。781はⅠ類の高台付皿、782・783はⅤ類の碗である。白色の胎土に半透明の灰白色釉がかかる。784は中国陶器準A群の大型容器である。白黒の細砂粒が混じる灰ベージュ色の粗い胎土に不透明な茶オリーブ釉がかかる。底部に胎土目が残る。

SK－3147（Fig.82～84）

調査区の北東隅のSX－3001のすぐ東に位置する。西壁は鋼矢板による破壊で検出できなかったが、平面形は楕円形になろう。深さは93cmを測り、断面形は逆台形になる。

出土遺物

785～802は土師器。785～791は小皿で、口径8.6～9.8cm、器高0.9～1.4cmを測る。785がヘラ切り底の他は糸切り底である。内底はナデ調整で、板状圧痕をもつ。792～795は丸底坏。口径14.7～16.1cm、器高3～3.4cmを測り、内面は研磨を施す。全てヘラ切り痕と板状圧痕が残る。796～802は坏。口径15.3～15.8cm、器高2.8～3.4cmを測る。800は内面に研磨を施すが、他はナデ調整である。全て糸切り底で板状圧痕をもつ。803～806は白磁で、803はⅤ類、804はⅣ類の碗。805はⅡ類、806はⅢ類の平底皿である。807は越州窯系青磁碗で、灰色の緻密な胎土に灰オリーブ色の半透明釉がかかる。見込みに目跡が残り、高台畳付に目砂が付着する。

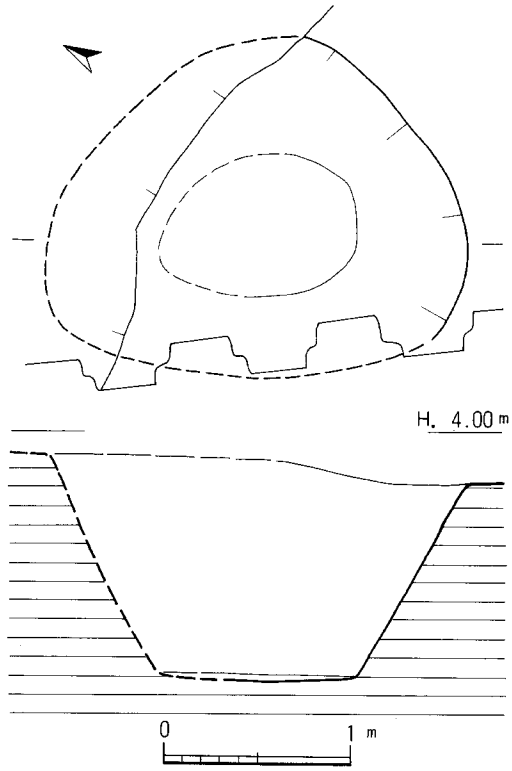


Fig. 82. SK－3147実測図（1/40）

SK－3148（Fig.85・86）

調査区の南東端にあり、SE－3154より新しく、SK－3079より古い。平面形は、長軸150cm、短軸82cmの楕円形で、N－10°－Wに主軸をとる。深さは28cmを測り、断面形は凹レンズ状をなす。

出土遺物

808～811は土師器。808は小皿で、口径9.5cm、器高1.3cm。内底はナデ調整で、ヘラ切り底には板状圧痕がつく。809～811は丸底坏で、口径は

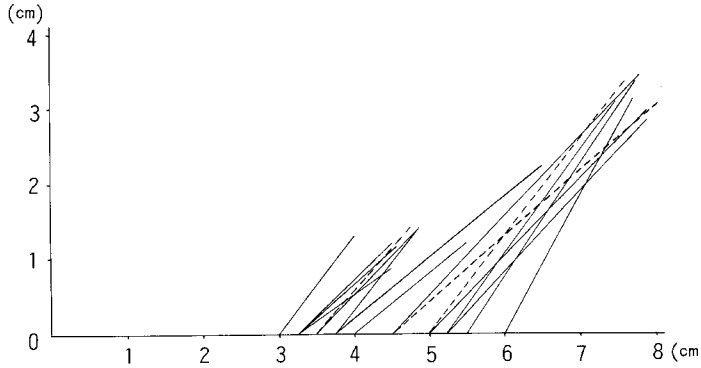


Fig. 83. SK－3147土師皿計測グラフ

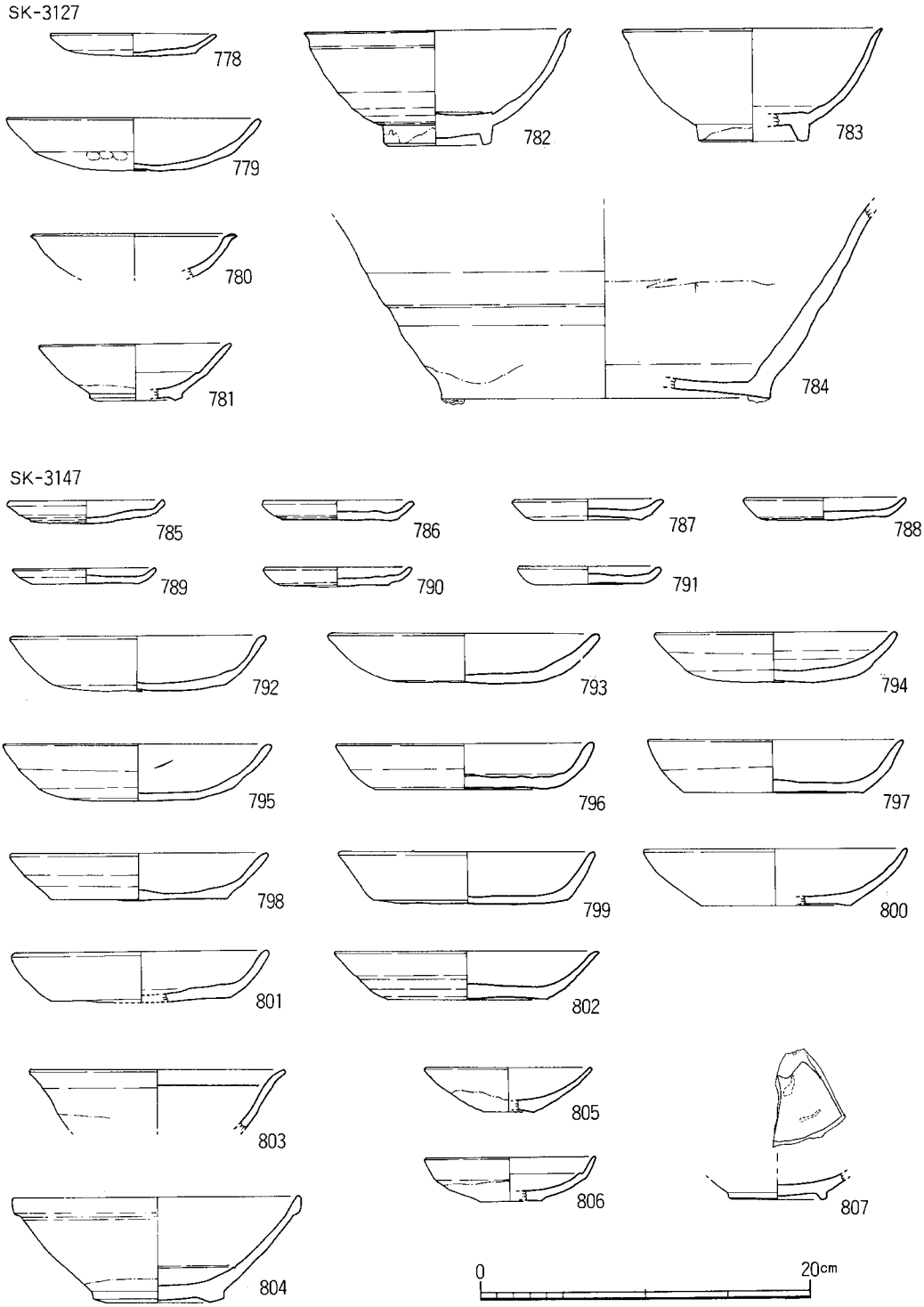


Fig. 84. SK－3127・3147出土土器実測図（1/4）

15～15.3cm、器高は2.8～3.6cmを測る。内底はミガキで仕上げ、809・810にはコテ跡が残る。812は青白磁の小碗である。口縁を小さな玉縁となす。813は天目碗で、灰茶褐色のやや粗い胎土に黒色の釉がかかる。814・815はO類の白磁碗である。815は体外に片切彫の文様も施す。

SK－3149（Fig.86）

調査区の中央にある大型の土壙で、平面形は長軸325cm、短軸215cmの楕円形になろう。主軸方位はN－32°－Wにとる。緩く立ち上がる壁面は深さ43cmを測り、断面形は逆台形をなす。

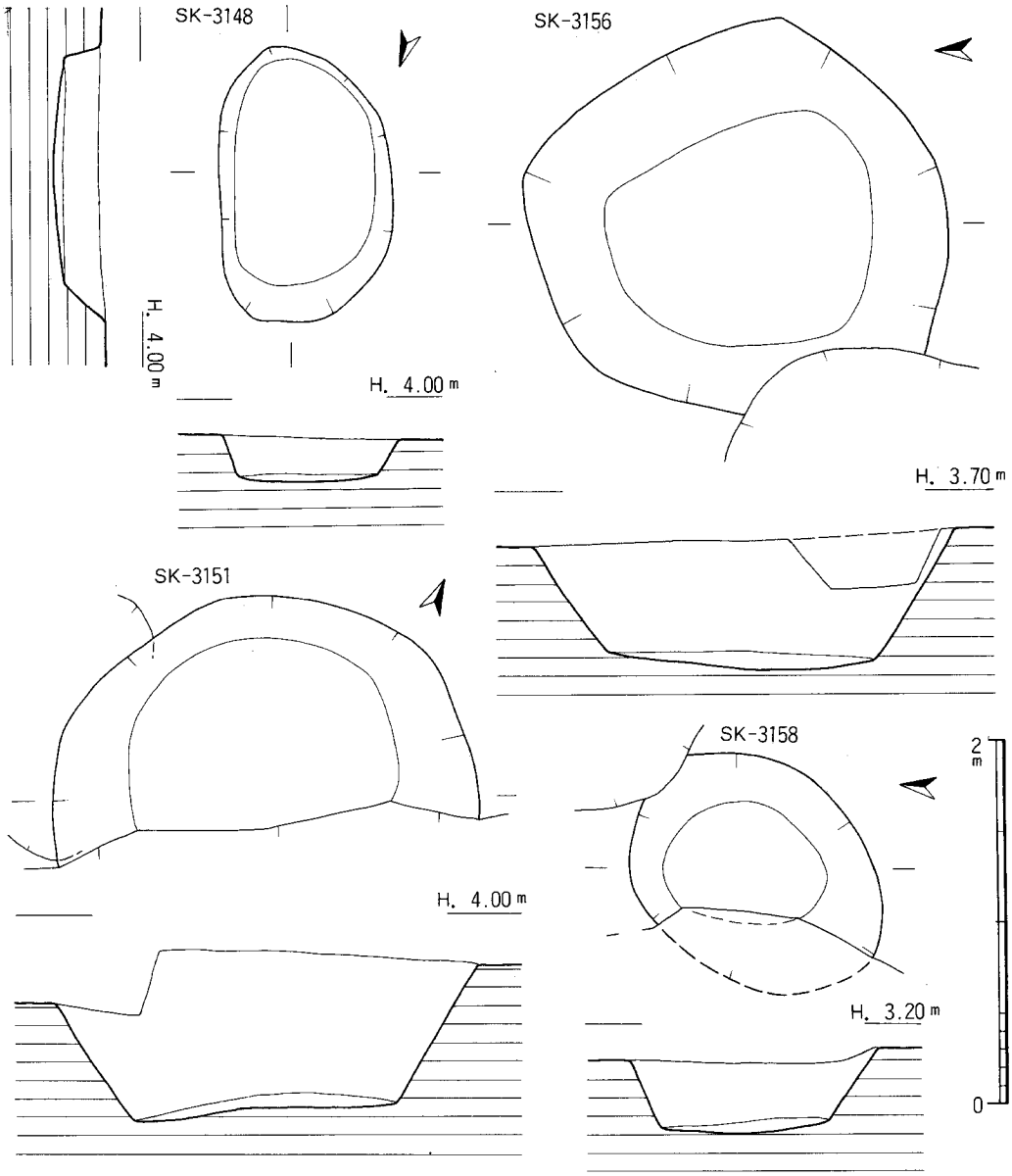


Fig. 85. SK－3148～3158実測図（1/40）

出土遺物

816・817は土師器である。816は丸底坏で、口径10.6cm、器高3cmを測る。茶色の精良な胎土で焼きしまる。内面は丁寧なナデ、口縁部はヨコナデ、外面は手持ちのヘラケズリののち雑にナデ調整をする。817は碗で、全体をヨコナデ調整する。818は内黒土器の碗である。

SK－3154 (Fig.85)

調査区の南東端に位置し、SK－3148よりも古い。平面形は、径225cmの円形に復原できよう。深さは70cmを測り、断面形は凸レンズ状に中央部がやや高くなる。

SK－3155 (Fig.86)

調査区の南西端に位置し、SK－3156よりも新しい。平面プランは、長軸180cm、短軸137cmの隅丸長方形を呈し、N－5°－Wに主軸方位をとる。深さは60cmを測り、断面形は浅い舟底状をなす。東側壁上面から2個の土師皿が重なって出土した。

出土遺物

819～824は土師器。819・820は小皿で、819は口径9.8cm、器高1.5cm、820は口径9.7cm、器高1.3cm。821は中皿で、口径11.5cm、器高2.4cm。822～824の坏は、口径14.9～16.2cm、器高2.8～3.5cmである。小皿・中皿・坏とも内底はナデ調整し、ヘラ切り底で、820を除いて板状圧痕がつく。825はIV類、826はII類に属する白磁碗である。827は須恵器の高台付坏である。

SK－3156 (Fig.85・86　PL.11)

調査区の南西部に位置し、SK－3155よりも古い。平面形は、径200～220cmの方形に近い円形を呈し、深さは75cmを測る。壁面は緩く立ち上がり、断面形は逆台形をなす。

出土遺物

828は土師器の丸底坏である。口径15cm、器高4.4cmを測る。調整は外面上半がヨコナデ、外面下半はナデ、内面はヨコナデ後に雑なヘラ研磨。829～832は白磁。829はIV類の碗。830は広東系白磁大鉢の高台付近の小片である。灰ベージュ色の胎土に淡青色の半透明釉がかかる。畳付についた釉は削り取り、細かい貫入が見られる。831・832はVI類の碗。831は高台内に輪状の目跡があり、黒灰色の粘土目が残る。832は高台内に墨書がある。どちらも内面に櫛描文が見られる。833は須恵器の高台付坏で、全体をヨコナデ調整する。

SK－3158 (Fig.85・86)

調査区の南西端にあり、東側はSK－3155に切られる。西側は調査区外にのびるが、平面形は長軸145cm、短軸125cmの円形に復原できよう。断面形は逆台形をなし、深さは40cmを測る。

出土遺物

834は瓦器皿で、口径10.1cm、器高2.3cm。胎土は精良で表面は黒色を呈す。調整は内外ともヘラ研磨。835は土師器の高台付坏。胎土は精良で、焼成は良好。外面はヨコナデ、内面はヘラ研磨。

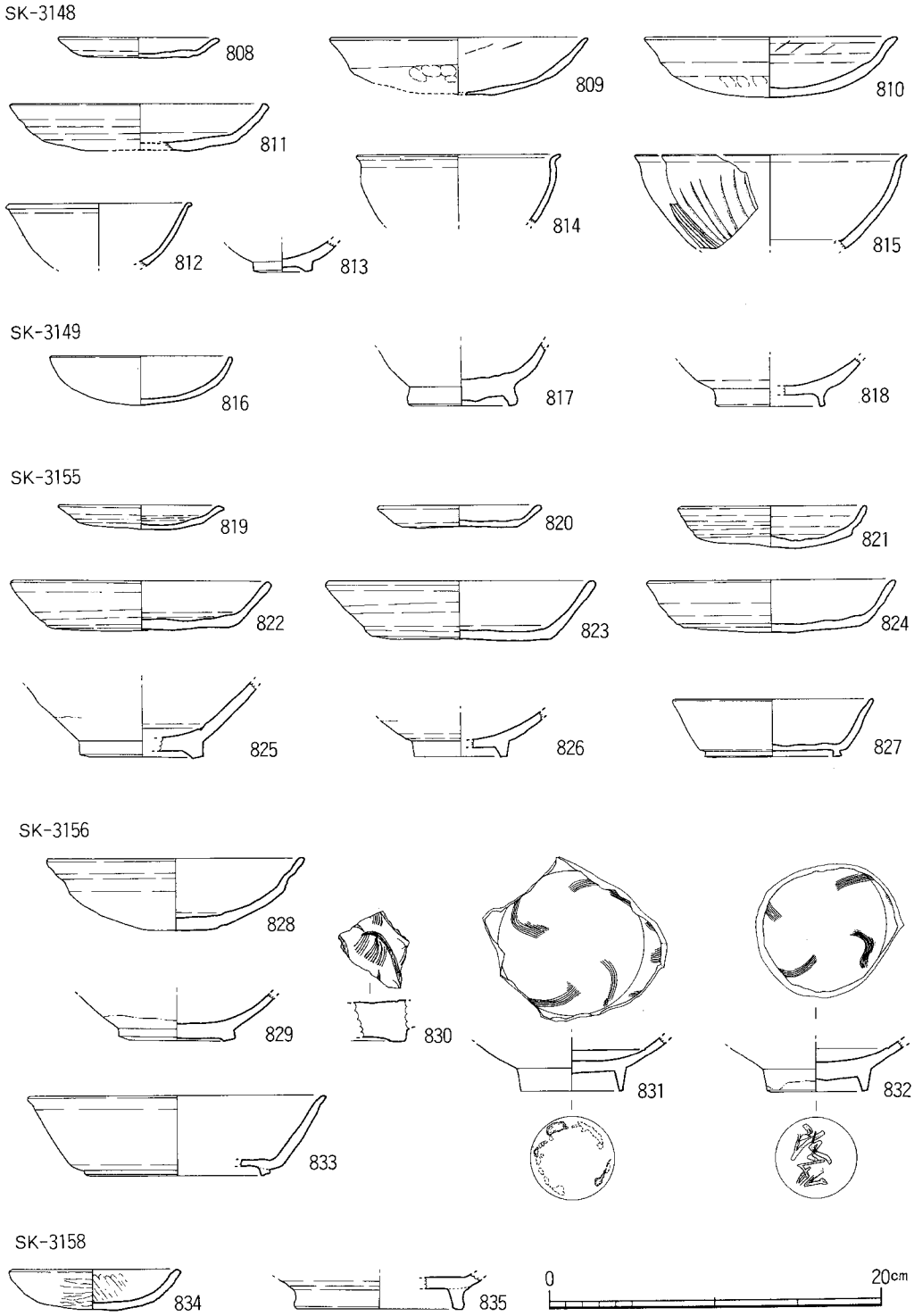


Fig. 86. SK－3148～3158出土土器実測図（1/4）

(3) その外の遺構と遺物 (SX・SP)

第3面では、井戸址と土壙の外に11基の不整形の土壙（SX）とピット（SP)を検出した。

本面で検出した不整形土壙は、SX－3001・3055・3080の3例を除いてはいずれも土壙中から炭化材片や灰層が検出され、壁面も赤く焼けていた。これらは広義的にはいわゆる焼土壙として捉え得べきもので、ある種の目的、機能を想定でき、このことが第1・2面で検出した同種の土壙群と大きく異なる。分布的には、調査区の南半部にまとまる傾向がある。

また、ピットの中には柱筋の通るものがあり建物址の存在が想定されるが、調査区が狭小なためにひとつのまとまりある構造物として捉えることはできなかった。

SX－3001 (Fig.87・90 PL.10)

調査区の北部に位置し、SK－3037よりも新しい。径75×65cmの楕円形プランの浅い小土壙内には約35°の傾斜で、中国陶器の鉢が埋置されていた。この鉢内には、いわゆる「備蓄銭」と云われる輸入銅銭が埋納されていた。銅銭は、1本の紐に通された差し銭状で1連が80～100枚の、6ないし7連に折り重なっている。この鉢の口縁部から銅銭の上面には数ミリの濃灰褐色粘質土が一面にあり、鉢上面に木蓋が被せられていたものと思われる。銅銭は鉢ごと取り上げたために正確な枚数は把握できていないが、500枚は優に越えるものと思われる。博多遺跡群内における備蓄銭の出土はこれが初例である。

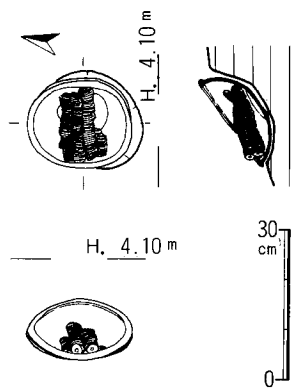


Fig. 87. SX－3001実測図 (1/15)

出土遺物

836は中国陶器B群の鉢である。口径21.5cm、底径7.4cm、器高7.3～8cmを測る。うすい赤茶色の緻密な胎土に金茶オリーブ色の不透明釉がかかる。口縁部に9ケ所の目跡が残る。外面胴部中位には重ね焼きの際に形成されたと思われる稜があり目砂が少し付着する。その稜を境に釉の発色が若干異なる。

銅銭は、検出状況での保存を図ったために銘文は判読できないが、保存処理中に剝落した2枚は『元豊通宝』と『聖宋元宝』であった。初鋳は『元豊通宝』が1078年、『聖宋元宝』が1101年で、いずれも北宋のものである。

SX－3080 (Fig.88・90)

調査区の南部にあり、SE－3131よりも新しい。平面形は長軸66cm、短軸50cmのほぼ円形を呈し、深さは11cmを測る。壁面は急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土中からは土師器皿や白磁碗等の遺物に混じって人頭大の焼石や焼土粒・炭片が出土したが、遺物に二次焼成

痕はなく焼土壙とは云いがたい。

出土遺物

837～840は土師器である。837～839は小皿で、口径9.1～9.3cm、器高1.2～1.3cmを測る。いずれも内底をナデ調整し、ヘラ切り底で板状圧痕をもつ。840は丸底坏で、内面はヨコナデ調整後ミガキを施しコテ跡が見られる。ヘラ切り痕が残る。841～843は白磁である。841は小碗で外面に縦線文を施す。842はO類の碗と思われる。外面に片切彫で菊弁状の文様を施す。843はIX類の碗で高台内に墨書が残る。

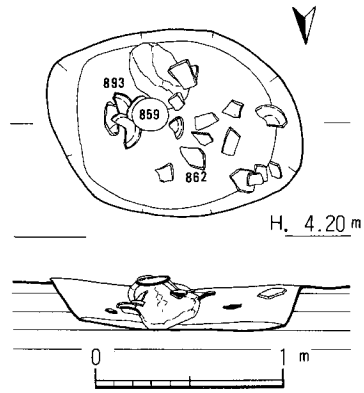


Fig. 88. SX－3080実測図（1/40）

SX－3115（Fig.91）

調査区の中央部南寄りに位置し、SK－3121よりも新しい。北西側は消失しているが、平面形は長軸170cm、短軸90cmの楕円形プランになろう。底面の中央部には45×35cmの浅い円形ピットがあり、中には炭片と灰の混合土が堆積していた。このピットの東肩には焼けた人頭大の石が埋置されていた。また、東南隅からは炭化した木材片が検出された。遺物は、土師器と須恵器のほか白磁の壺と碗の小片が出土している。

SX－3118（Fig.89・90）

調査区の南端部に位置する。西側はSX－3119によって切られ、東側は撹乱を受けているが、平面形は長軸200cm、短軸160cmの楕円形に復原できよう。壁面から底面には3～5cmの炭片と灰の混入層が堆積しており、焼土壙と考えられる。覆土中からは土師器皿や瓦器碗のほか白磁碗と皿が出土している。

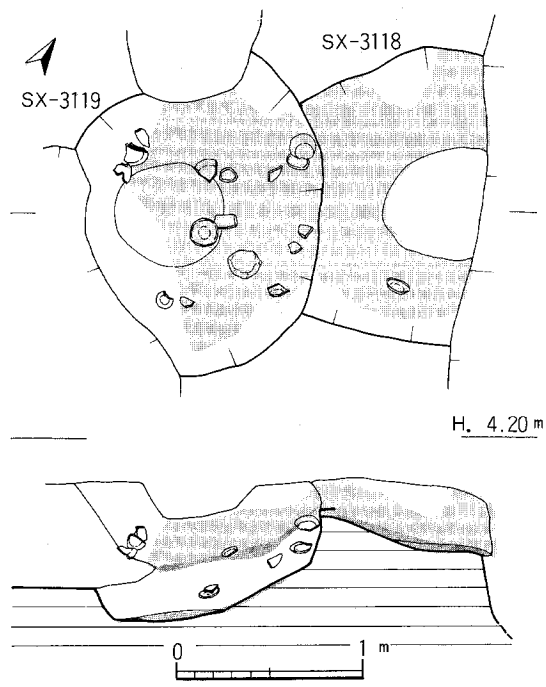


Fig. 89. SX－3118・3119実測図（1/40）

出土遺物

844は糸切り底の土師器小皿で、口径9.9cm、器高1.5cmを測る。全体をヨコナデ調整する。845は瓦器碗である。高台付近はヨコナデ調整し、他は横方向のヘラミガキを行う。846～848は白磁。846は白堆線をもつIV類の平底皿である。847は壷で、胴部に縦方向の沈線を施す。高台には施釉の際の指あとが残る。848はV類もしくはVI類の碗である。

SX－3119（Fig.89・90・92　PL.10）

調査区の南端にあり、SX－3118よりも新

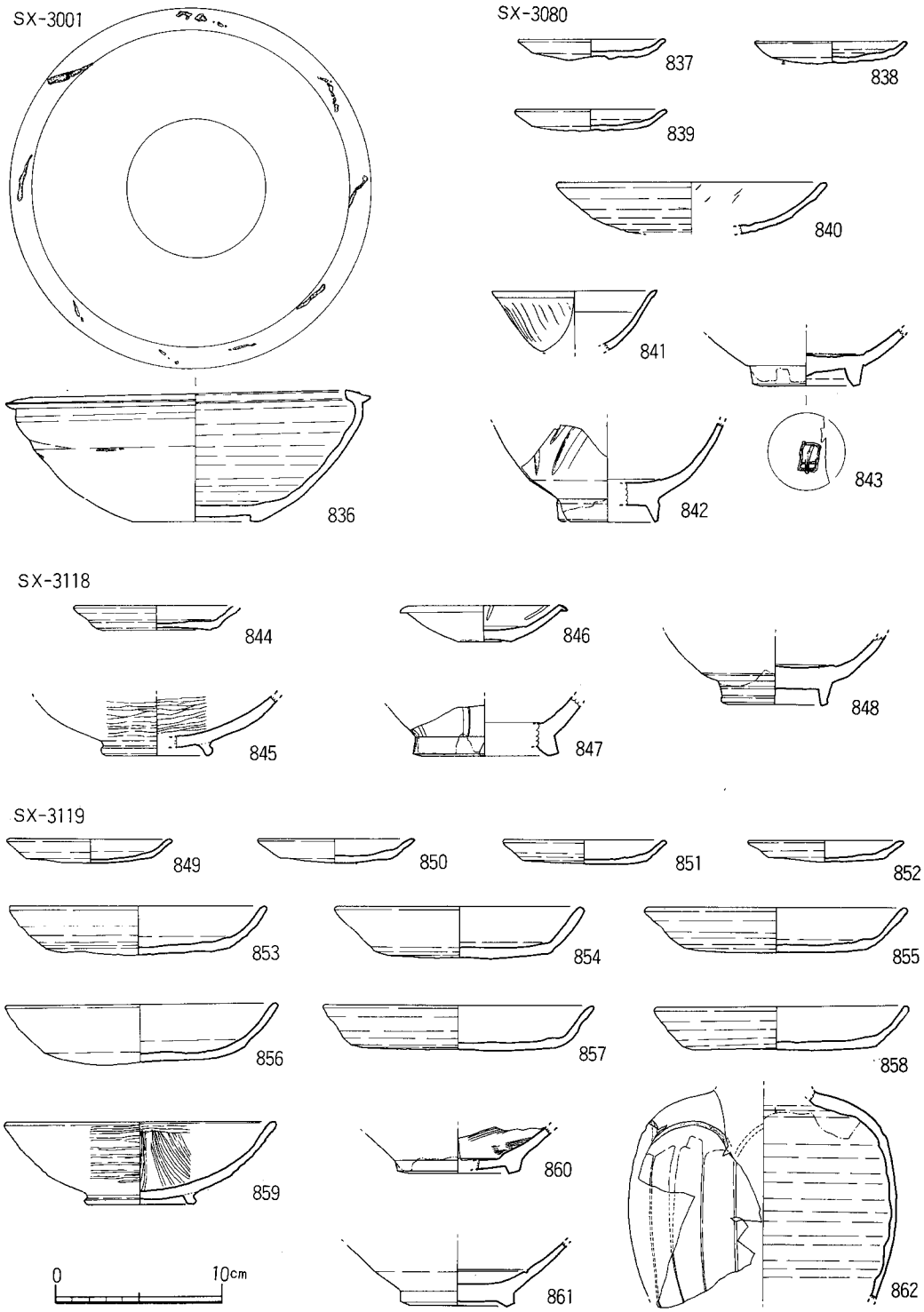


Fig. 90. SX－3001～3119出土土器実測図（1/4）

しい。平面形は長軸170cm、短軸140cmの楕円形に復原でき、深さは70cmを測る。凹レンズ状の底面と土壙中位には2～5cmの炭片と灰の混合層が堆積している。焼土壙と考えられ、2度に亙って利用されている。

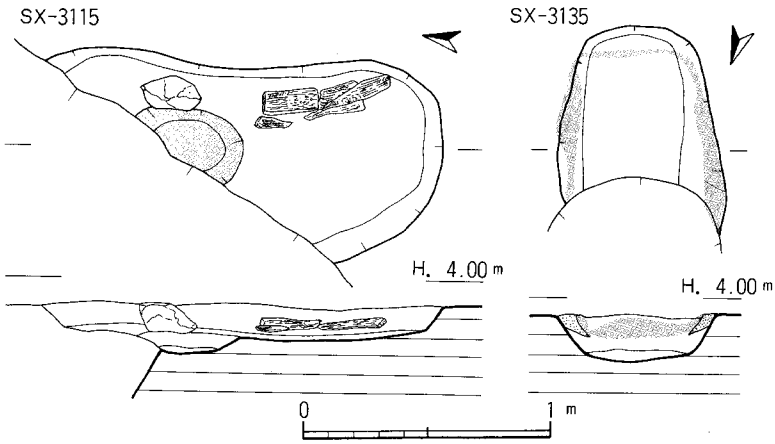


Fig. 91. SX－3115・3135実測図（1/30）

出土遺物

849～858は土師器である。849～852は口径9.3～9.8cm、器高1.2～1.4cmを測る。853～858は坏で、口径14.8～16.2cm、器高2.7～3.5cmを測る。856の底部はヘラ切り離し後、指おさえとナデ調整を行い丸底風になし、内面はミガキで仕上げる。他はいずれも内底にナデ調整が見られ、ヘラ切り底で板状圧痕をもつ。859は瓦器碗である。860・861は白磁碗である。860はベージュ色の胎土に黄ベージュ色の不透明釉がかかる。ごく細かい貫入が見られ、内面に櫛描文を施す。Ⅶ類のものと思われる。861はⅣ類である。862は高麗青磁の壷である。灰色の緻密な胎土に灰オリーブ色の濁った感じの不透明釉がかかる。露胎部は茶色を呈する。胴部表面を縦に削り落として、約2cm幅の縦長の凹部を作り、肩には波状に太い沈線を施し蓮弁としている。

12は壷状の滑石製品である。口径は3.8cmを測り、口縁部は短く直口する。

SX－3135（Fig.91）

調査区のほぼ中央にある焼土壙で、SX－3118のすぐ北に位置する。北側は基礎杭によって撹乱されるが、平面形は長軸110cm、短軸60cmの隅丸長方形に復原できよう。深さ18cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。壁面は全体に赤く焼け、壙底よりやや上には厚さ2～3cmの炭片と灰の混合層がレンズ状に堆積していた。遺物は土師器や白磁碗片が少量出土した。

863～880はピットから出土したものである。

863～866・868は土師器である。863は高坏の脚部で3個の穿孔がある。864は甕である。口縁付近はヨコナデ調整、内面は雑なケズリ、外面はハケ目調整後にナデ調整を行う。865は坏蓋。灰ベージュ色の精良な胎土で焼きしまる。天井部は回転切

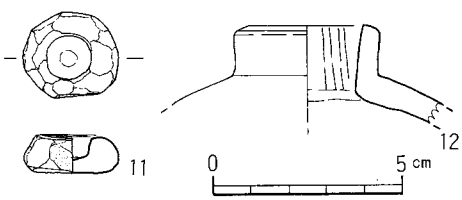


Fig. 92. SK－3002・SX－3119出土石製品実測図（1/2）

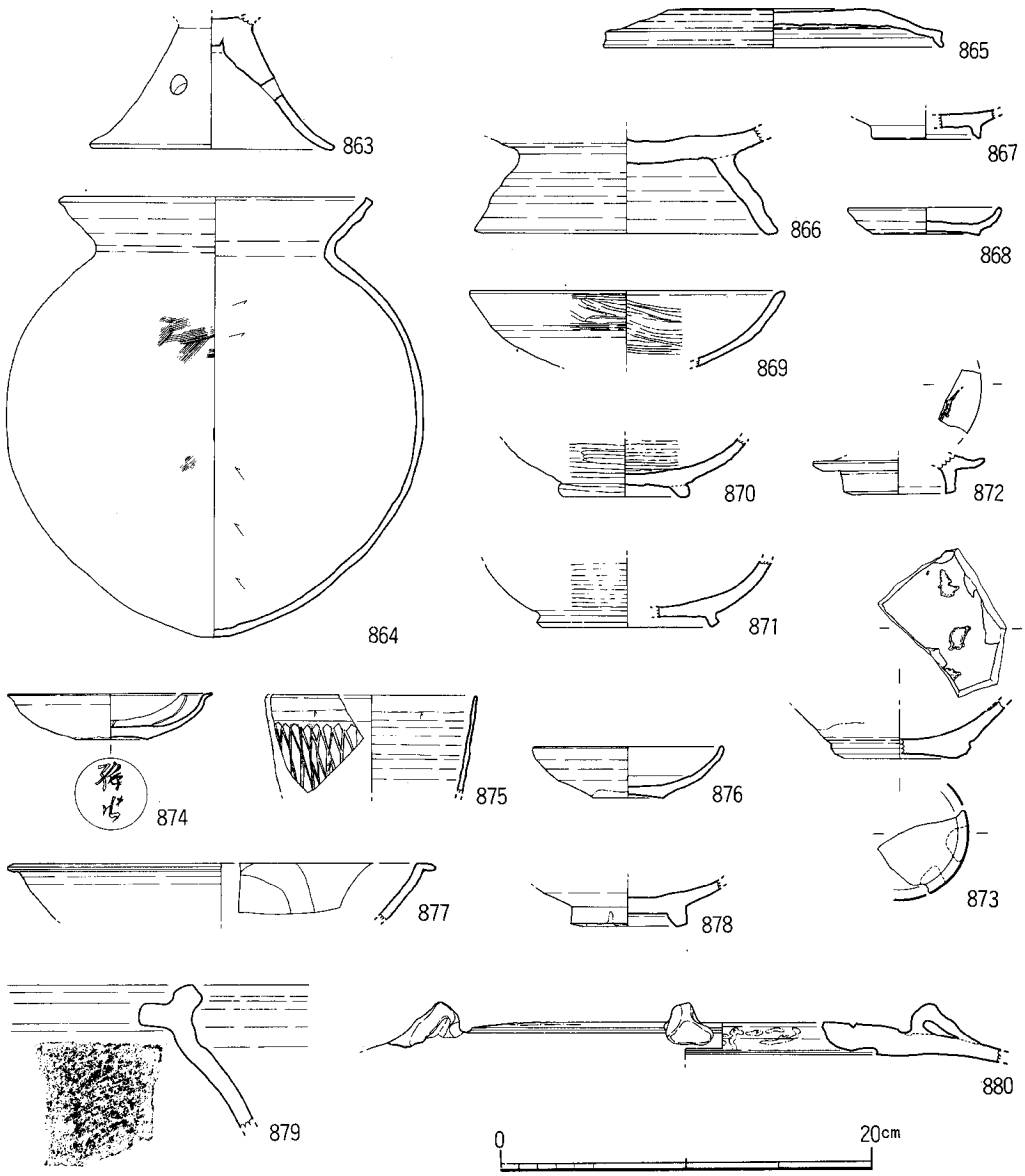


Fig. 93. 第3面SP出土土器実測図（1/4）

り離しのままである。内面中央をナデ調整し、他の部分はヨコナデ調整する。866は高台付坏であろうか。内面をナデ調整、外面はヨコナデ調整する。868は小皿。口径9.3cm、器高1.2cmを測る。内底をナデ調整し、ヘラ切り底で板状圧痕をもつ。867は国産緑釉陶器の碗である。内側に段を有する高台をもつ。ベージュ色の砂っぽい胎土に緑黄色の不透明釉がかかる。畳付の釉は削り取られる。869は瓦器碗で、内外面ともヨコナデ調整の上から雑にヘラミガキを行う。870

は内黒土器の碗である。高台付近はヨコナデ調整、他は横方向のヘラミガキを行う。871は研磨土器の碗である。うすい赤茶色の精良な胎土で焼きしまる。高台から高台内にかけてヨコナデ調整、他はヘラミガキで仕上げる。872は青磁の蓋で、灰色の緻密な胎土に灰オリーブ色の半透明釉がかかる。天井部に目跡が残る。873は越州窯系青磁の碗で、見込みと高台に目跡が見られる。874・875は青白磁である。874は平底皿で、底部に墨書がある。875は外面に片切彫で斜格子の文様を描く。口縁付近の釉は削り取られる。深めの碗であろうか。876～878は白磁である。876はII類の平底皿。877はVI類の碗で、器内に釉下褐彩が見られる。878はII類の碗である。879・880は中国陶器である。879はC群のY字口縁甕である。小砂粒を多く含んだ粗い茶褐色の胎土にオリーブ色を帯びた黒褐色の釉がかかる。内面に青海波の叩き目が残る。880はその他群の無頸四耳壺で、小～粗砂粒を多量に含んだピンク色を帯びた茶色の胎土に、茶緑色の釉がかかる。

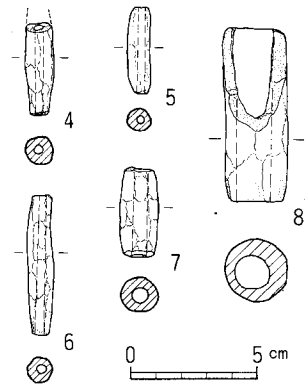
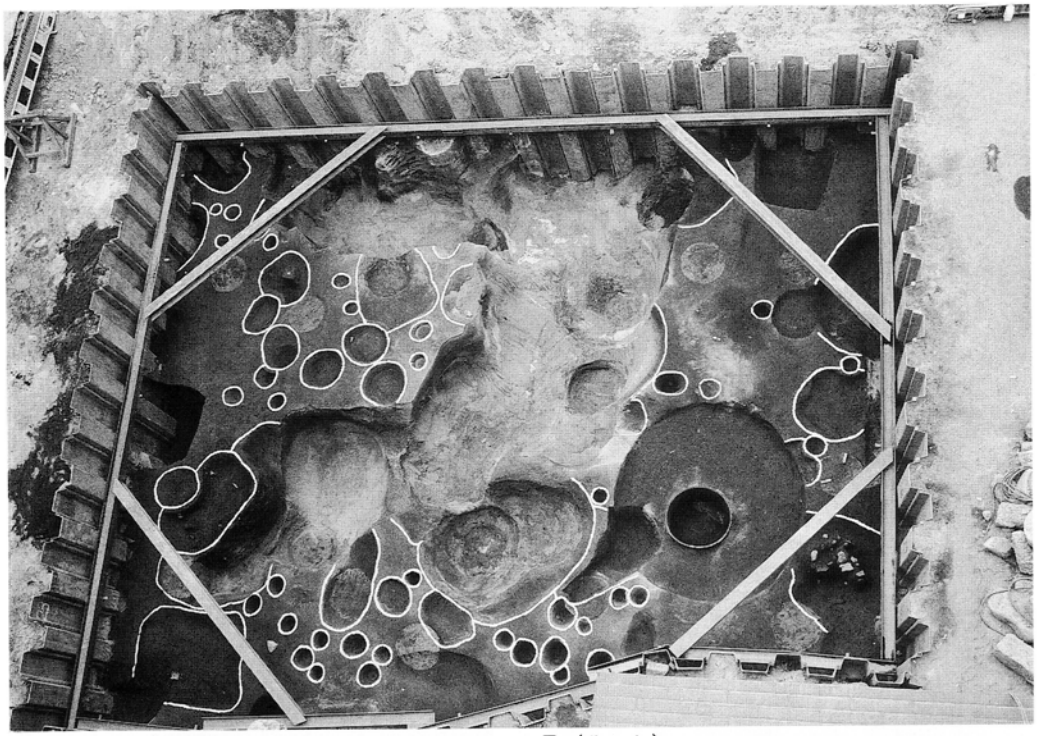


Fig. 94. 第3面出土土製品実測図 (1/3)

遺構No.	法量(長軸×短軸×深さ)	主軸方位	平面形	断面形	出土遺物
SX-3001	75× 65×15	N－88°－E	楕円形	舟底状	中国陶器・銅銭多数
SK-3002	170×125×16		不整方形	逆台形	土師器・須恵器・土師質土器・近世陶磁器
SK-3037	177× 95×26	N-7.5°-E	隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・白磁・中国陶器・近世陶磁器
SK-3039	170× 73×36	N－32°－W	楕円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器・瓦
SK-3045	192×145×25	N－61°－E	隅丸方形	凹レンズ状	土師器・須恵器・瓦器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器・土師質土器
SK-3046			隅丸方形		土師器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器・瓦
SK-3054	70		隅丸方形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・白磁・青白磁・青磁・中国陶器・黒褐釉・瓦 他
SX-3055			隅丸方形	舟底状	土師器・土師質土器・須恵器・白磁・中国陶器
SK-3062	185×140×68	N－55.5°－W	楕円形	逆台形	土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・瓦器・白磁・青磁・中国陶器 他
SX-3063	60× 45×12	N－68°－W	楕円形		土師器・中国陶器
SK-3079	125× 53×10	N－80°－E	隅丸長方形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・白磁・中国陶器
SX-3080	66× 50×11	N－89°－E	円形	逆台形	土師器・須恵器・中国陶器・白磁・青磁・近世陶磁器
SX-3107	106× 58×17	N－ 3°－W	楕円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・白磁
SK-3108	385×260×75	N－76°－W	楕円形	舟底状	土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・中国陶器・近世陶磁器
SX-3115	170× 90×20	N－ 8°－E	楕円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・白磁
SX-3118	200×160×40	N－59°－E	楕円形	凹レンズ状	土師器・瓦器・須恵器・白磁・中国陶器・瓦
SX-3119	170×140×70	N－32°－W	楕円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・瓦器・白磁・中国陶器
SX-3120	75×22	N－47°－E	楕円形	逆台形	土師器・須恵器
SK-3121	190× 75×50	N－ 8°－W	長楕円形	逆台形	土師器・須恵器・須恵質土器・土師質土器・白磁・青磁・中国陶器
SK-3127	75		円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・中国陶器
SX-3132	90×15	N－15°－W	楕円形	凹レンズ状	土師器・須恵器
SX-3133	60×15	N－15°－W	楕円形	凹レンズ状	土師器
SX-3135	110× 60×18	N－20°－W	隅丸長方形	舟底状	土師器・須恵器・白磁・中国陶器
SK-3147			楕円形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・白磁・中国陶器
SK-3148	150× 82×28	N－10°－W	楕円形	凹レンズ状	土師器・須恵器・白磁・中国陶器・黒褐釉
SK-3149	325×215×43	N－32°－W	楕円形	逆台形	土師器・須恵器
SK-3154	225×225×70		円形	凸レンズ状	
SK-3155	180×137×60	N－ 5°－W	隅丸長方形	舟底状	土師器・須恵器・白磁・青磁・中国陶器
SK-3156	225×200×75		不整円形	逆台形	土師器・須恵器・瓦器・白磁・中国陶器・砥石
SK-3158	145×125×40		円形	逆円形	土師器・須恵器・白磁・中国陶器

Tab. 3. 第3面土壙一覧表

PL. 8.



(1) 第3面Ⅰ区全景（北から）

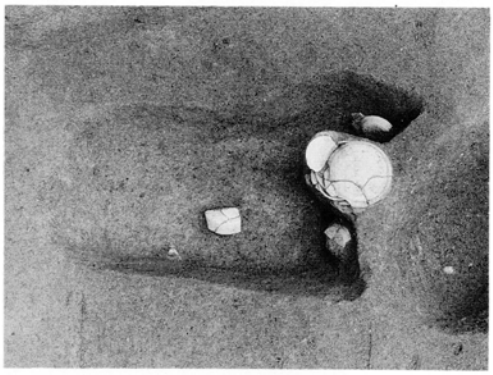
(2) 第3面Ⅱ区全景（北から）

PL. 9.

(1) SE－3029（北から）

(2) SE－3131（東から）

(3) SE－3036（東から）



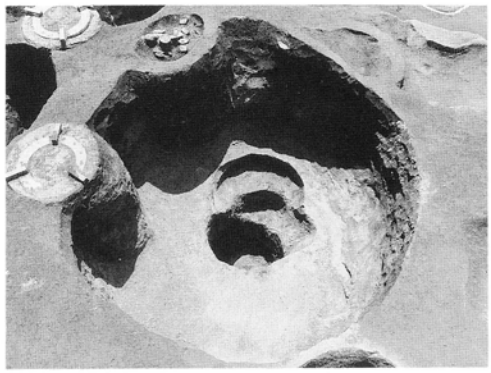
(4) SE－3056（南から）

(5) SE－3077（南から）

(6) SE－3077（西から）

PL. 10.

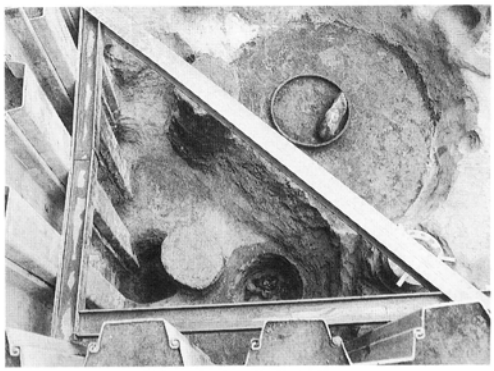
(1) SE－3076（東から）



(2) SE－3078（南から）

(3) SX－3119（西から）

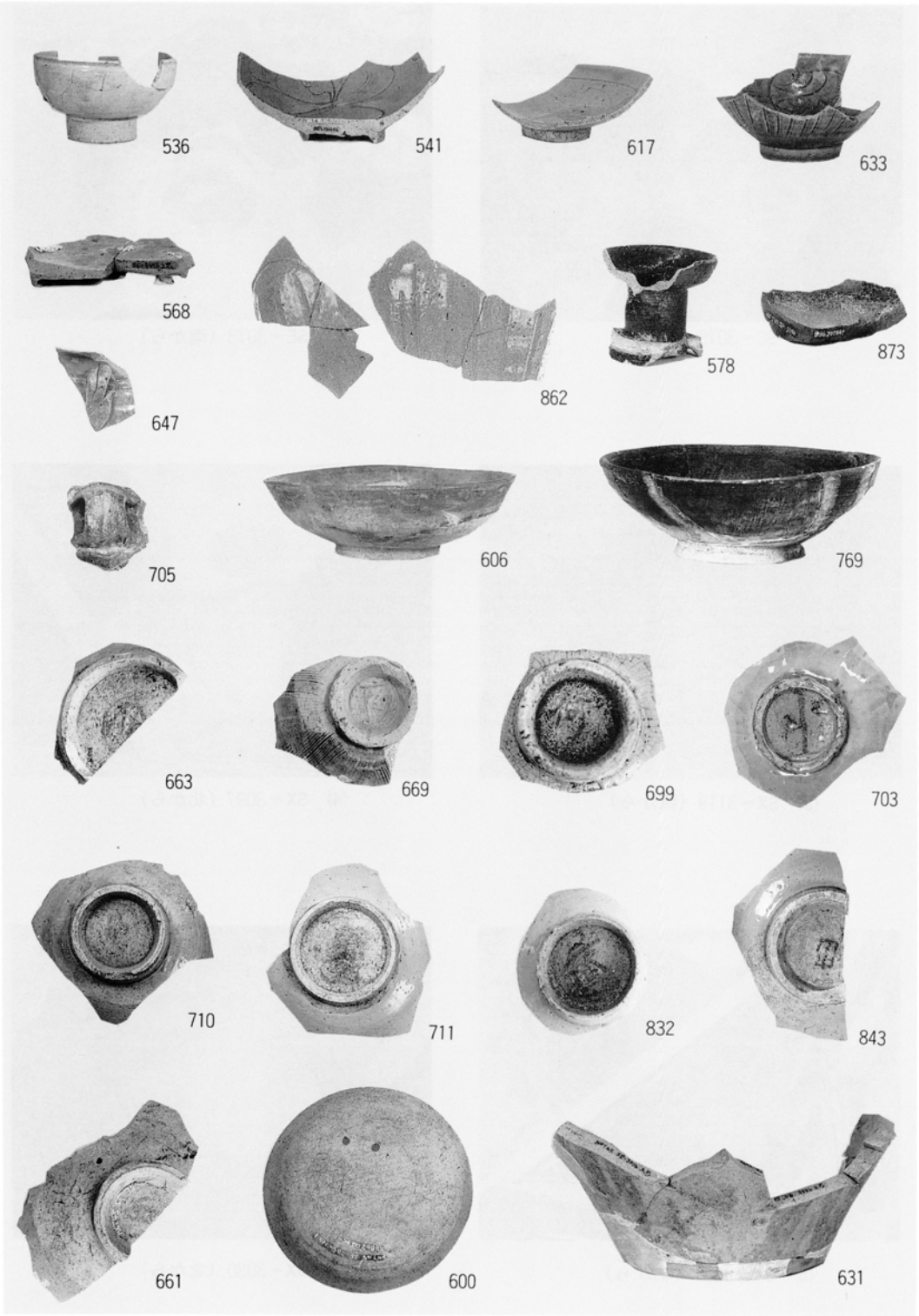
(4) SX－3097（北から）



(5) SX－3001（北から）

(6) SX－3080（北から）

PL. 11.



第 3 面 出 土 遺 物（縮尺不同）

4　第4面の調査

第4面は、第3面ののる第3層と4層を約50～60cmほど掘り下げて検出した最下層の遺構面で、黄白色砂層上にのり、標高は3.3～3.4mを測る。第3面と4面の間には2枚の遺物包含層がある。第3層は、古墳～奈良時代までの遺物を、第4層は、古墳時代の遺物のみを含む層である。

第4面で検出した遺構は、竪穴住居址5棟、土壙14基等がある。

このうちSK－4031からは、いわゆる布留式の甕や高坏が一括して多量に出土した。また、SK－4051からは銅鏃が1点出土したほか、撹乱壙等から弥生時代の甕や高坏片が出土しており、この期の遺構が近接して拡がっていることが考えられる。

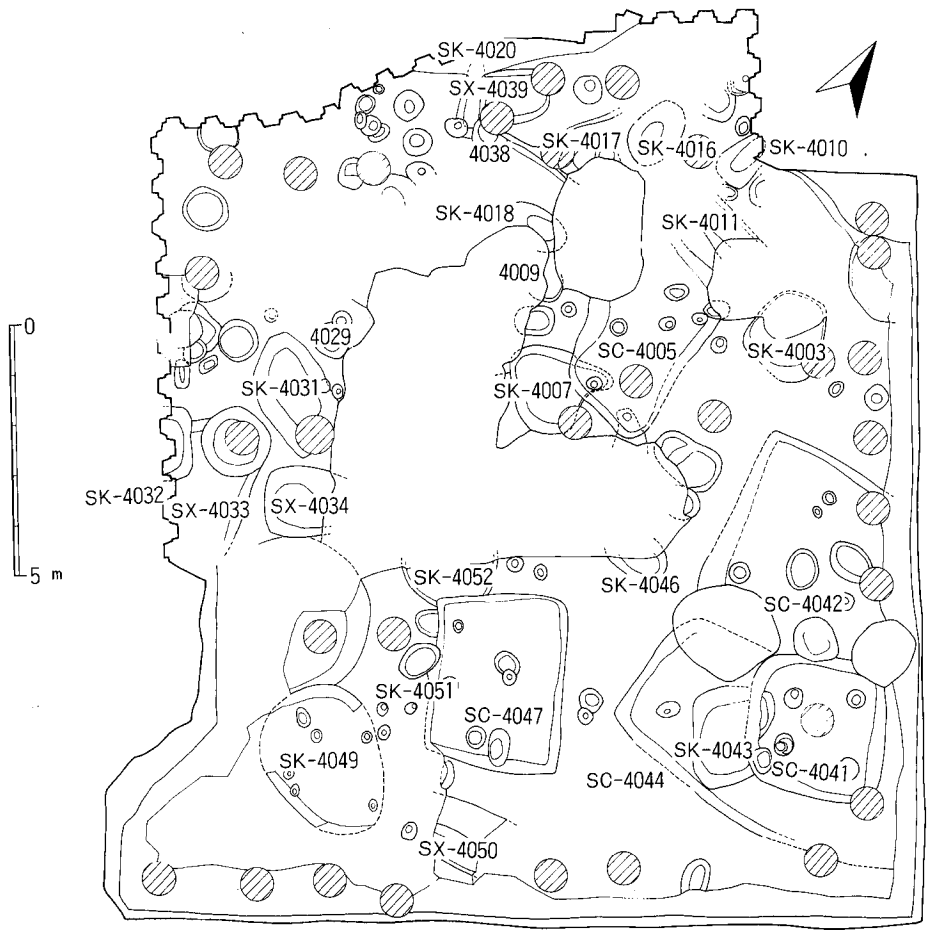


Fig. 95. 第4面遺構配置図（1/150）

(1) 竪穴住居址 (SC)

第4面では、調査区の東側に寄って5棟の竪穴住居址を検出した。竪穴住居址のうちSC－4041は、覆土が濃灰褐色土の第3層中より掘り込んだ8世紀代の住居址である。この期の遺構は他に検出されていないが、これは第4面の遺構面検出を急いだため精査を欠いたことに起因するもので、周辺部に拡がる可能性は十分に考えられる。

SC－4005 (Fig.96)

調査区の北側で検出した住居址で、SC－4042の北西2mの距離に位置する。北西壁と北東隅壁が撹乱により消失しているが、平面形は長軸3.7m、短軸2.4mの隅丸長方形になる。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は中央部が浅く窪む凹レンズ状をなす。深さは40cmを測る。柱穴は、床面上より5本を検出したが、小口壁側の中央に位置する2本が主柱穴となろう。覆土は茶褐色砂で、土師器甕片等が少量出土した。

SC－4041 (Fig.97・99・100 PL.13)

調査区の東隅で検出した住居址で、SC－4042・4044上に位置する。平面形は、2.8×2.9mの小型の隅丸方形プランを呈する。壁面は鋭角的に立ち上がり、深さは65cmを測る。ほぼ平坦な床面の中央部には、炉跡と思われる灰層が径110cmの円形状に拡がっている。炉跡の断面は、5cmほどの浅い凹レンズ状で、壁際は薄く赤変していた。この炉跡を中心に径35～45cm、深さ30～50cmのしっかりした4本の主柱穴が巡る。覆土は濃灰褐色土で、遺物は古墳時代から古代までの土師器や須恵器の外、上層の撹乱混入による瓦器碗や陶磁器を含む。本住居址は第4面で調査したが、第4層の茶褐色砂を掘下げる際にはプランの一部が確認されていたものであり、ほかの住居址群とは時期を異にする。

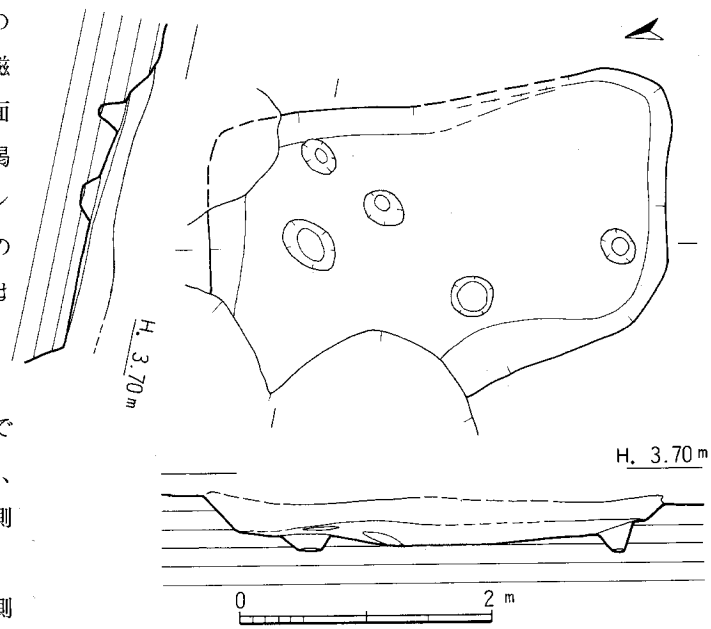


Fig. 96. SC－4005実測図 (1/60)

出土遺物

881は土師器甕の口縁部である。「く」字状の口縁部は、内弯ぎみに開き、端部は内側に小さく摘み出す。調整は、口縁部がヨコナデ、頸部内側

がナデ、胴部内側はヘラケズリである。882は高台付の須恵器坏である。口径14.7cm、高台径7.4cm、器高5.9cmを測る。高台は低く、口縁部は緩く屈曲して小さく外方に開く。調整は、内外面ともにヨコナデ。883は須恵器坏蓋で、口径8cmを測る。見受けの返りは短く直口し、天井部には小さな摘みがつこう。調整は天井部外面が回転ヘラ切り、内面がナデの外はヨコナデで、天井部にはヘラ記号が残る。884は底径5.2cmの越州窯系青磁碗である。内外面には半透明の釉薬がかかり、高台端は雑に削り取る。

SC－4042 (Fig.98・99　PL.13・14)

調査区の東端に位置する住居址で、SC－4041・4044と重複し、SC－4041よりも古い。SC－4044との切り合いは明確ではないが、本柱跡址が新しかろう。東側が調査区外にのび、南側がSC－4044と重複するが、平面形は、一辺が4～4.2mほどの方形プランになろう。壁面が緩く傾斜して立ち上がり、床面は中央部が浅く凹レンズ状に窪む。柱穴は4本あるが、主柱穴は特定でき

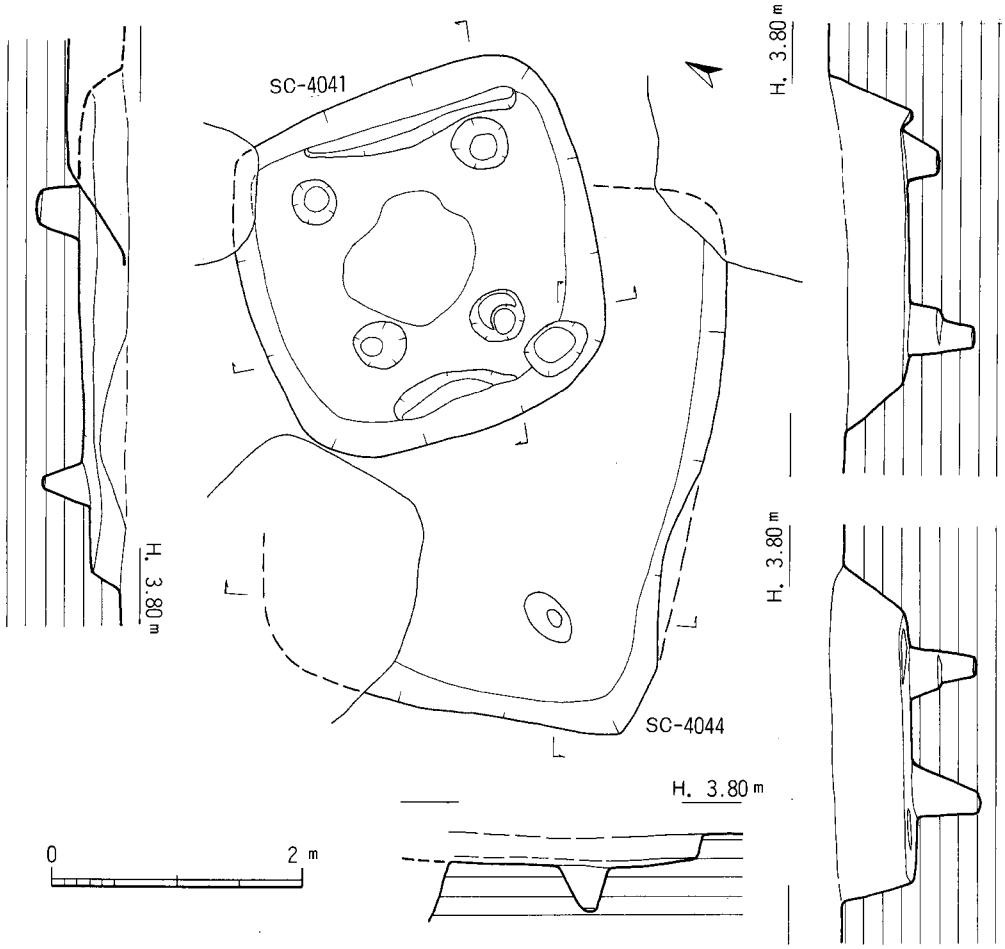


Fig. 97. SC－4041・4044実測図 (1/60)

なかった。遺物は、土師器の壺・甕・高坏等があり、南壁際からは一括して出土した。覆土は、茶褐色砂である。

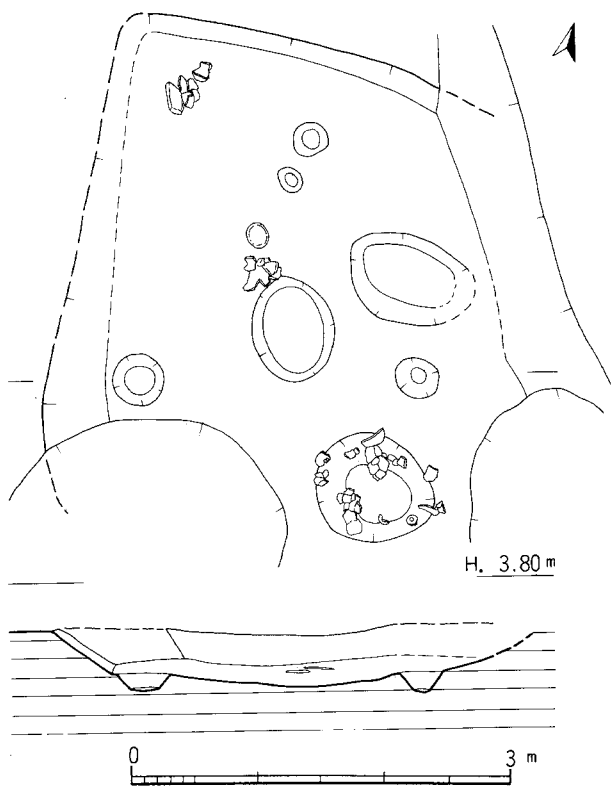


Fig. 98. SC－4042実測図（1/60）

出土遺物

いずれも土師器である。885は、底径10cmの台付鉢の脚であろう。886は、底径12cmを測る高坏の脚である。脚部は短くストレートに開き、中位に3ケ所円孔を穿つ。坏部底内面はハケ目の上に放射状の暗文を施す。脚外面はハケ目後にヘラ研磨、内面はハケ目。887は、口径10.8cm、器高3.4cmの鉢である。体部は偏平な半球形をなし、口縁部は外方に小さく摘み出す。外面はヘラ研磨、内面は放射状の暗文を施す。888・889は小型丸底壷である。888は口径10.2cm、器高6.3cm、889は口径11cm、器高9.4cmを測る。口縁部は短い「く」字状を呈し、胴部は偏球状をなす。890・891は壷型土器である。890は玉葱状の胴部に短くラッパ状に開く口縁部がつくものであろう。891は口径10.4cm、器高16.1cmを測る。頸部は直口し、口縁部はわずかに外反する。胴部は偏球形を呈し、外面はヘラ研磨を施す。892～896は甕型土器である。口縁部は「く」字状をなし、端部は上～内方に小さく摘み出している。胴部は球～卵形をなす。893は口径12.1cm、器高11.9cm、895は口径14.5cm、器高21.6cmで、肩部に1条の波状凹線が巡る。896は口径15.2cm、底径17.7cm。胴部はやや下膨れの球形をなし、平底状の小さな底部がつく。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリであるが、895の胴部外面下半はヘラケズリである。

SC－4044（Fig.97・100）

調査区の東南隅にある居住址で、SC－4041・4044と重複し、もっとも古いものであろう。東側壁は確認できなかったが、平面形は一辺が4mほどの方形をなすものであろう。壁面は緩く傾斜し、深さは35cmを測る。床面はほぼ平坦で、断面形は逆台形をなす。南側壁に沿って2本の柱穴を検出したが、北壁側は撹乱等で消失している。覆土は暗茶褐色砂で、SC－4042とほとんど大差ない。遺物は、土師器と須恵器片が少量出土した。

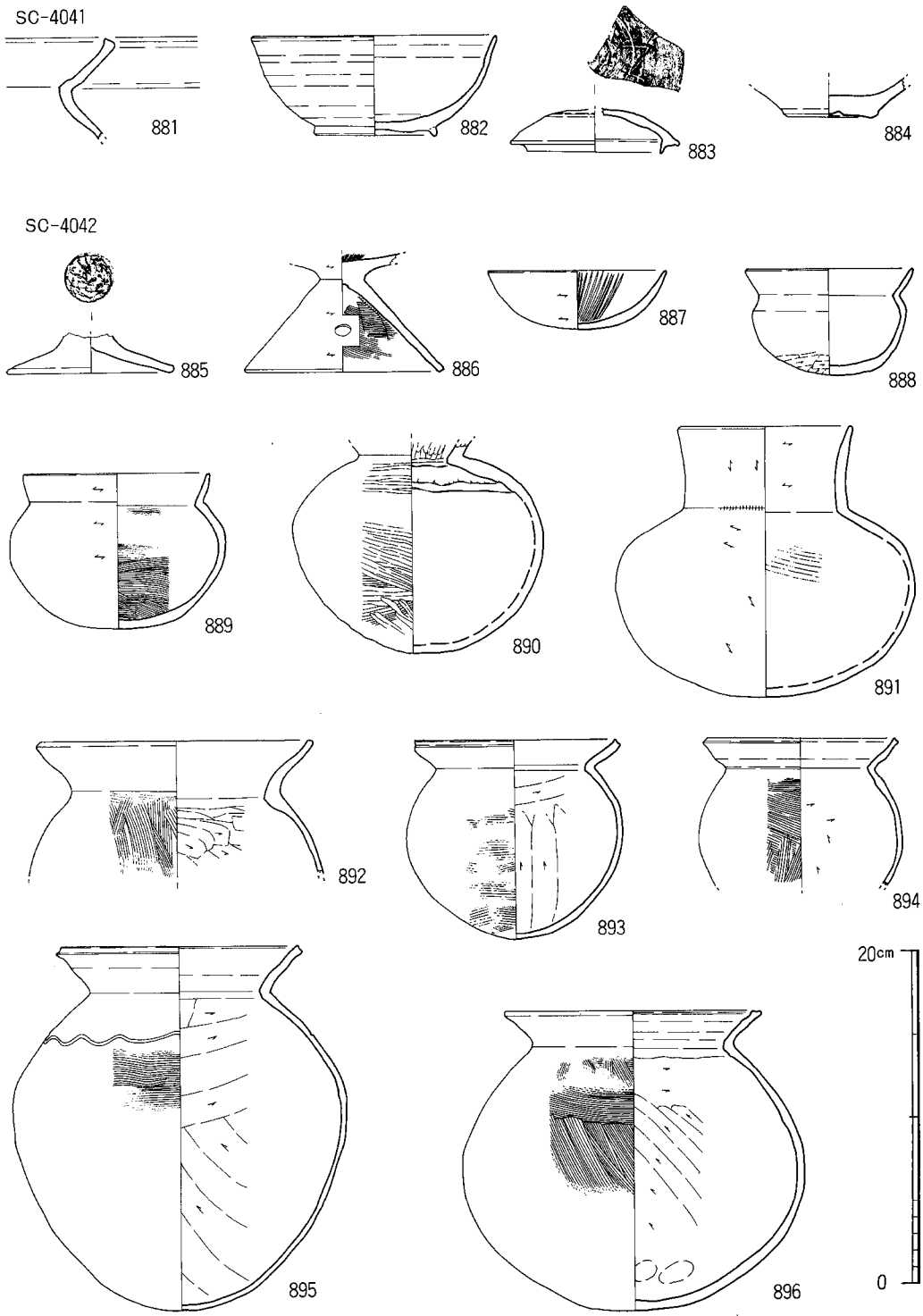


Fig. 99. SC－4041・4042出土土器実測図 (1/4)

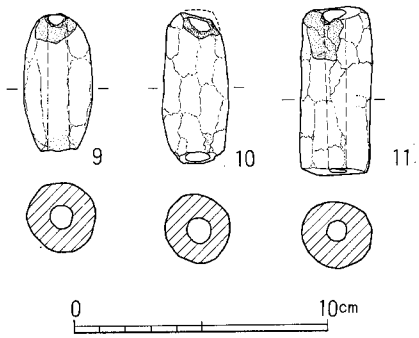


Fig. 100. 第4面出土土製品実測図 (1/3)

SC－4047 (Fig.101・102　PL.13・14)

調査区の南側にあり、SC－4044の西に位置する。平面形は長軸350cm、短軸270cmの長方形プランを呈する。深さは10～30cmで、壁面は緩く傾斜して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、逆台形の断面形をなす。主柱穴は特定できなかった。覆土は茶褐色砂で、土師器の壷・甕・高坏等が出土した。

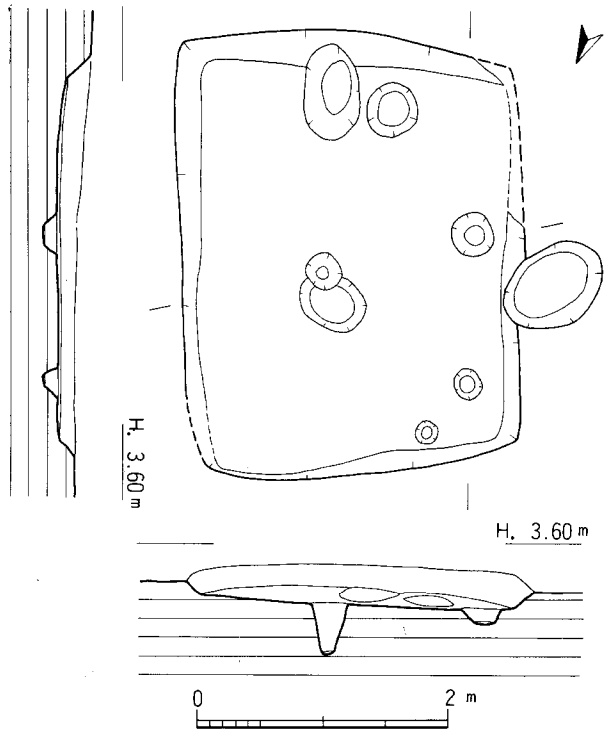


Fig. 101. SC－4047実測図 (1/60)

出土遺物

897は、口径10.6cm、器高2.9cmの土師器鉢。口縁部は内傾ぎみに小さく摘み上げ、体部は偏平な半球形をなす。外底面がヘラケズリの外はナデ。898～900は口径13～15.4cm、器高17.7～21.1cmの「く」字状口縁甕で、端部は小さく摘み上げる。胴部はやや肩の張る899・900と球形の898に分かれるが、底部は尖底になる。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ～ナデ。

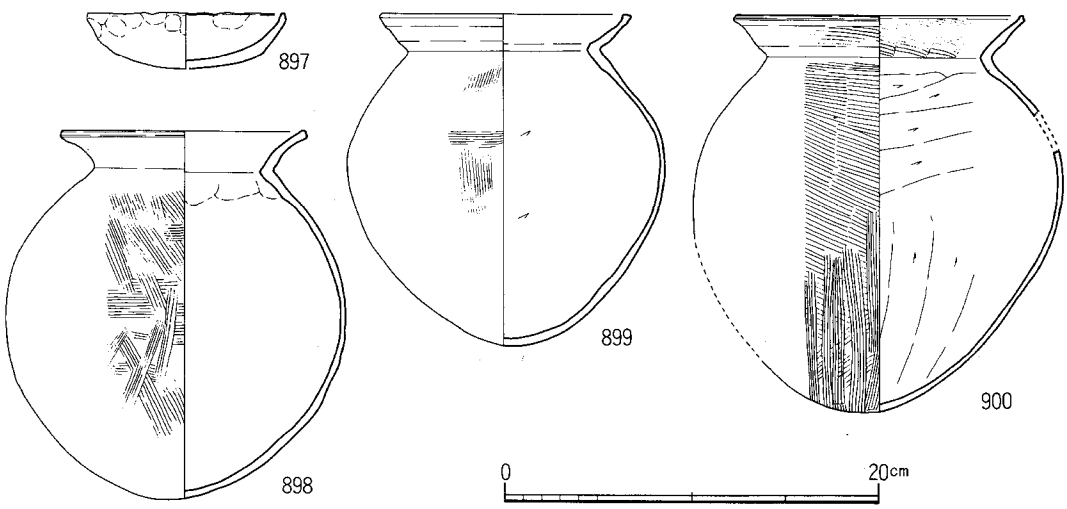


Fig. 102. SC－4047出土土器実測図 (1/4)

(2) 土壙 (SK)

第4面では、全域で14基の土壙を検出した。平面プランは円形～楕円形のもので、明らかに墓壙と考えられるものはなく、性格等は判然としない。土壙内からは撹乱によって混入したと考えられるものを除いては土師器や須恵器のほか弥生式土器片が出土するが、弥生式土器のみを出土する遺構はない。

SK－4003 (Fig.103)

調査区の北側で検出した土壙で、SC－4005のすぐ東に隣接して位置する。土壙の中央が鋼矢板によって撹乱されているが、平面形は長軸160cm、短軸145cmの隅丸方形になろう。主軸方位はN－75.5°－Eにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、深さは10～25cmを測る。底面はほぼ平坦で、逆台形の断面形を呈する。土壙内からは少量の土師器片が出土した。

SK－4007 (Fig.103・105)

調査区のほぼ中央部にあり、東側はSC－4005に切られている。平面形は長軸180cm、短軸145cmの隅丸方形を呈するが、東側は70cmほど突起状に突出しがある。壁面は緩傾斜し、深さは25～40cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、東側の突出部は凹レンズ状に凹む。遺物は、土師器や須恵器小片が少量出土している。

出土遺物

901は、口径9.9cmを測る小型器台の坏部である。口縁部は鋭く屈曲して短く直口する。調整は外面がヨコナデ、内面はナデて仕上げる。

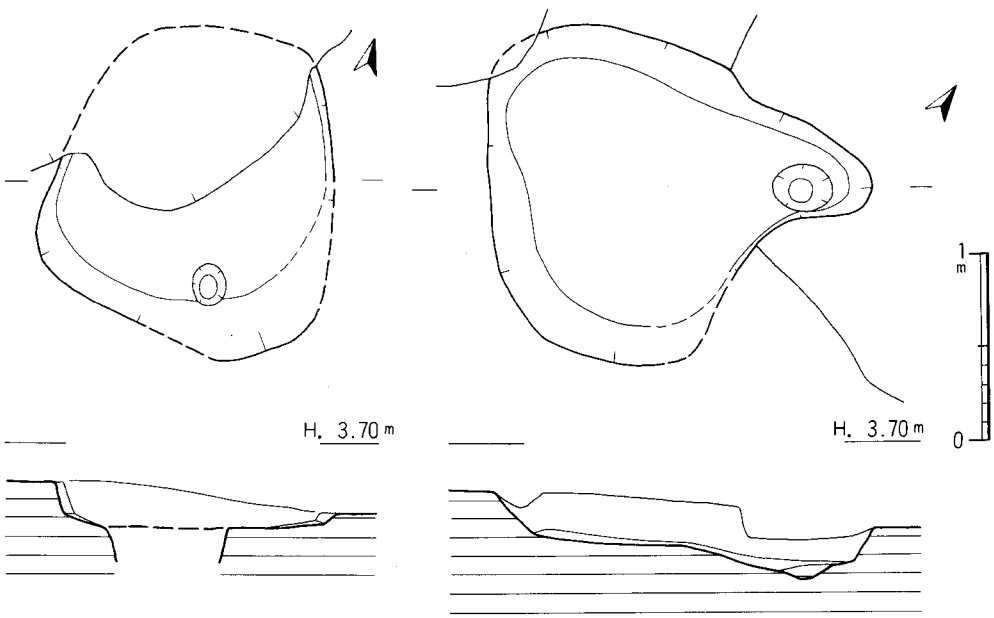


Fig. 103. SK－4003・4007実測図 (1/40)

SK－4010

調査区の北端にあり、SK－4011のすぐ北に位置する土壙である。両小口部は撹乱により消失しているが、平面プランは主軸方位をN－7°－Eにとる長軸130cm、短軸80cmの楕円形になろう。深さは15cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土中からは土師器と須恵器片が少量出土した。

SK－4011（Fig.104）

調査区の北側にあり、SC－4005の北に隣接して位置する。両小口部が撹乱を受けているため全容は定かでないが、平面形は小口幅80cmを測る長方形プランになろう。主軸方位はN－77°－Wにとる。壁面は緩傾斜し、断面形は逆台形をなす。土壙墓の可能性もなくはない。遺物は土師器の甕と鉢小片が少量出土した。

SK－4016（Fig.104）

調査区の北端にある小型の土壙で、SK－4010のすぐ西に位置する。平面形は、主軸方位をN－5°－Wにとる長軸140cm、短軸90cmの楕円形になろう。深さは48cmを測り、断面形は舟底状をなす。覆土中から土師器と須恵器片が少量出土した。

SK－4017（Fig.104）

調査区の北端にあり、SK－4016のすぐ南西に隣接している。平面形は一辺が105cmの隅丸方形になろう。壁面は緩傾斜し、深さ30cmの底面は浅い凹レンズ状をなす。遺物は土師器甕片等が少量出土した。

SK－4018（Fig.104・105）

調査区の北側にある土壙で、SC－4005のすぐ西に位置する。撹乱による消失が著しいが、平面形は長軸145cm、短軸90cmの楕円形プランになろう。壁面は緩く立ち上がり、断面形は逆台形をなす。遺物は土師器と須恵器の外、瓦器碗や白磁碗が混入している。

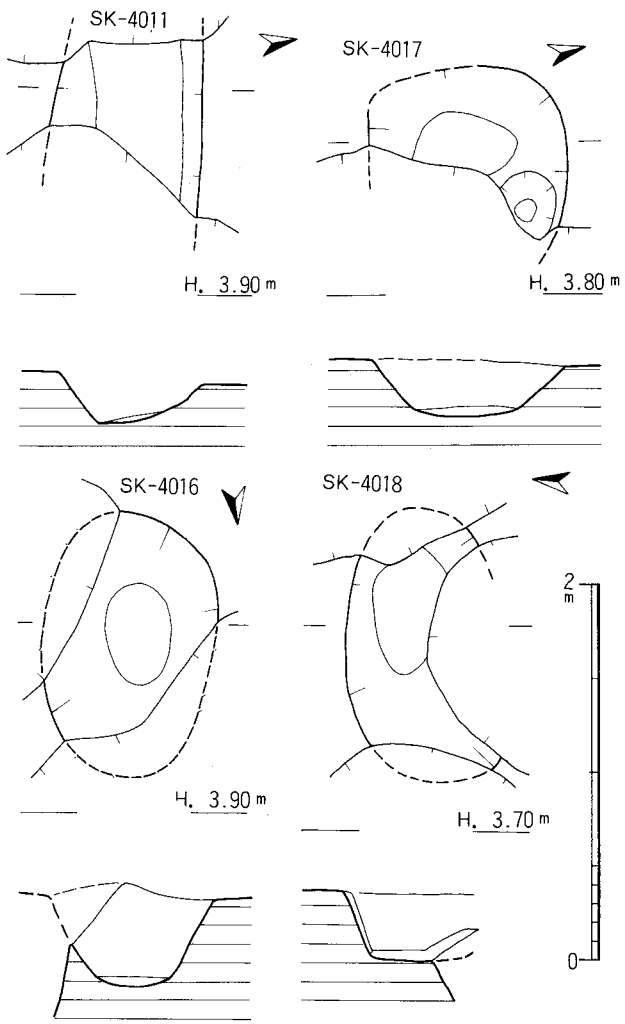


Fig. 104. SK－4001～4018実測図（1/40）

出土遺物

902は高台付の須恵器坏身である。高台径は10.2cmを測る。畳付は端部を小さく摘み出す。調整は外底面がナデのほかヨコナデ。

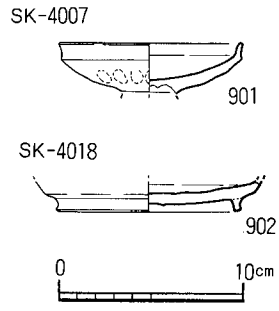


Fig. 105. SK－4007・4018 出土土器実測図（1/4）

SK－4020

調査区の北端に位置する土壙墓状のもので、SX－4039よりも古い。平面形は、主軸方位をN－24°－Wにとる長軸150cm、短軸50cmの長方形プランになろう。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。深さは15cmを測り、断面形は逆台形をなす。土壙内からは土師器や須恵器片が少量出土した。

SK－4031（Fig.106～108　PL.14）

調査区の西端にある土壙で、SX－4034のすぐ北に位置する。東側小口は基礎杭により破壊されているが、平面形は長軸250cm、短軸145cmの長方形プランになろう。緩傾斜して立ち上がる壁面は深さ65cmを測り、舟底状に断面形を呈する。覆土は底面から30cmほどが淡茶褐色砂で、その上層は黒茶褐色砂である。土壙上面からは古墳時代初めの一括土器が出土している。現況は土壙より浮いた状況にあるが、プランの確認面は第4層上面にあり、土器群は土壙上面に位置することになる。

出土遺物

903・904は鉢である。903は口径12.6cm、器高5.1cm。口縁部はストレートに開く。口縁部内面はハケ目、外面はナデ、底面はケズリ状に粗くナデて丸底状に仕上げている。904は口径14.4cm、器高3.8cmを測る。体部は偏平な半球形で、口縁部は小さく直口する。体部外面はヘラ研磨、内面は放射状に暗文を施す。905～908は小型丸底壷である。906は口径12.2cmで、口縁部はストレートに長くのびる。905・907・908は短い「く」字状の口縁部に偏球形の胴部がつくタイプである。905は口径701cm、器高6cm。907は口径13.2cm、器高7.4cmで、体部下半は粗いナデ調整。908は口径12.8cm、器高10.5cmを測り、外面はヘラ研磨で仕上げる。909～911は壷である。909は直口する頸部に短く外反する口縁部のつくものである。胴部外面にはタタキ痕が残る。910は口径16.2cmを測り、「く」字状

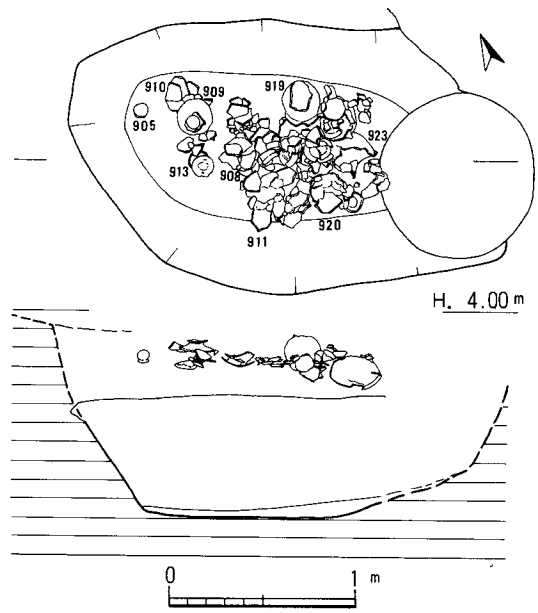


Fig. 106. SK－4031実測図（1/40）

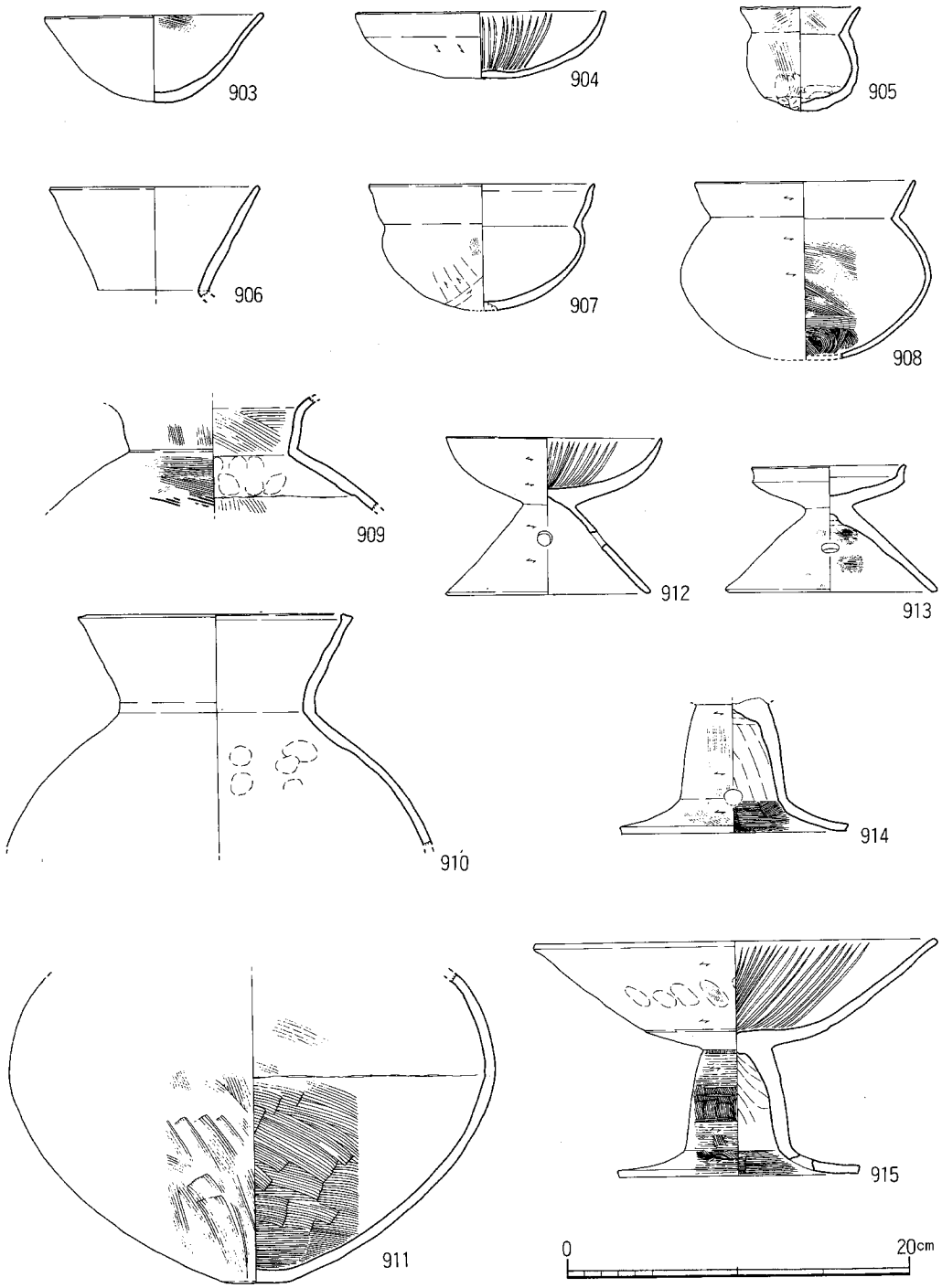


Fig. 107. SK－4031出土土器実測図(1) (1/4)

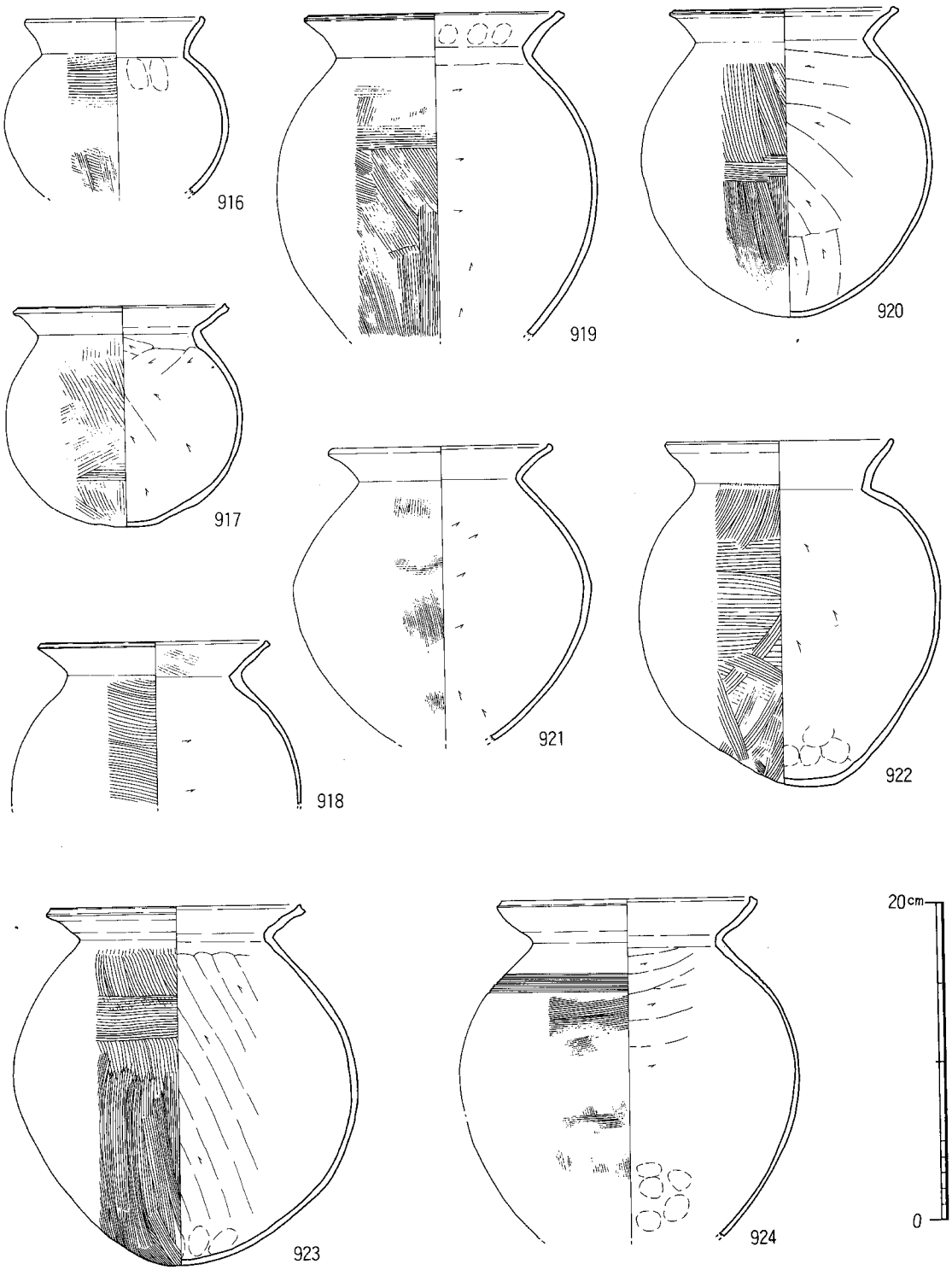


Fig. 108. SK－4031出土土器実測図(2) (1/4)

の口縁部は内唇を小さく水平に摘み出す。胴部外面はハケ目後にナデ。913は器台である。口径9cm、脚径12.5cm、器高7.3cm。坏部の口縁部は短く直口し、端部は小さく外反する。脚部は大きくストレートに開き、中位に一対の穿孔がある。912・914・915は高坏である。912は口径12.4cm、脚径11.8cm、器高9.2cm。偏平な半球形の坏部は、内面に放射状の暗文を描く。脚部はラッパ状に開き、円孔を穿つ。外面はヘラ研磨で丁寧に仕上げる。916～924は甕である。短く「く」字状に開く口縁部は、端部を上方に小さく摘み出す。胴部は球形のもの(916～918・920)と肩の張った卵形のもの(919・921～924)がある。調整は、外面がハケ目、内面はヘラズリである。924は肩部に櫛歯状の凹線が巡る。

SK－4043

調査区の南東端にあり、SC－4044よりも新しく、SC－4041よりも古い。平面形は長軸200cm、短軸160cmの隅丸方形に復原できよう。底面はほぼ平坦で、深さは32cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土中からは土師器と須恵器片の外、弥生式土器片が出土している。

SK－4046

調査区のほぼ中央部にある土壙で、SC－4042のすぐ西に位置する。北半は消失しているが、平面プランは長軸130cm、短軸95cmほどの楕円形プランになろう。深さ35cmを測る壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。

SK－4049 (Fig.109　PL.13)

調査区の南端にある大型の土壙で、SC－4047のすぐ南に位置する。平面形は長軸305cm、短軸

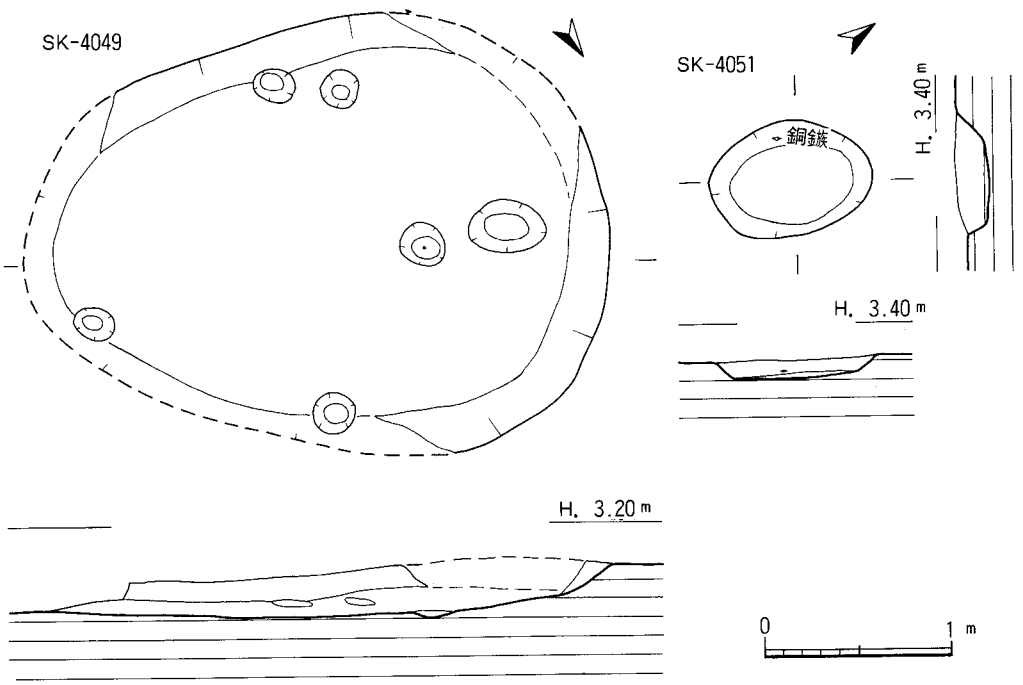


Fig. 109. SK－4049・4051実測図 (1/40)

235cmの卵形に復原できよう。緩傾斜して立ち上がる壁面は深さ25cmを測る。浅い凹レンズ状をなす底面上には6本のピットがある。

SK－4051（Fig.109・110　PL.13・14）

調査区の南側にある小土師器壙で、SC－4047よりも新しい。平面形は長軸86cm、短軸65cmの楕円形を呈し、主軸方位をN－34°－Eにとる。深さ13cmの壁面は緩傾斜して立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土内からは土師器甕片の外、銅鏃が1点出土した。

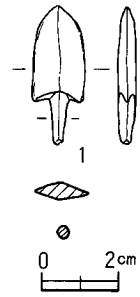


Fig. 110. SK－4051 出土銅鏃実測図 (1/2)

出土遺物

1は、長さ3.7cm、身幅1.4cmを測る有茎鏑造腸抉柳葉式の銅鏃である。断面形は身が菱形、茎は楕円形をなす。

SK－4052

調査区のほぼ中央部に位置し、南端はSC－4047に切られている。平面形は径190cmほどの円形に復原できよう。深さは28cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土中からは土師器甕片が少量出土した。

(3)　その外の遺構と遺物　(SX・SP)

第4面では、竪穴住居址と土壙の外に不定形の土壙状の遺構（SX）とピット（SP）を検出した。このうちピットは、建物址等の柱穴と考えられるものもあるが、明確にひとつの遺構としてはまとめ得なかった。

出土遺物（Fig.111）

925は、SP－4038出土の甕である。口径22cmを測り、「く」字状の口縁部は内昏を上方に小さく摘み上げる。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。926は、SP－4009出土の脚である。脚径は11cmで、中位に2ケ一対の円孔がある。坏部内面と外面はヘラ研磨。927はSP－4029出土の蛸壺で、口径5cmを測る。体部は細く直口し、口縁部は小さく内傾する。調整は指頭押圧によるナデ調整である。

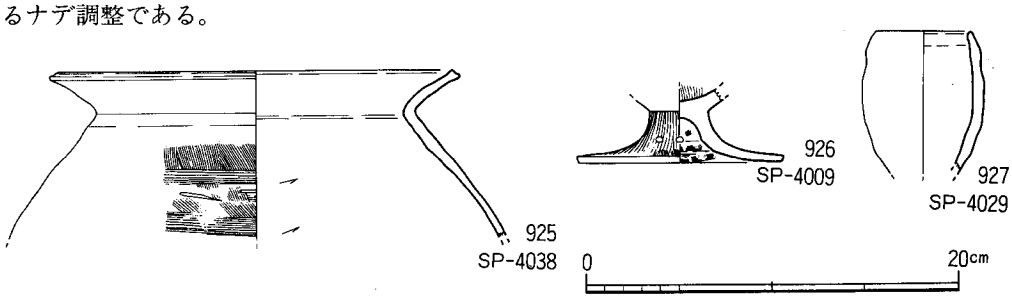
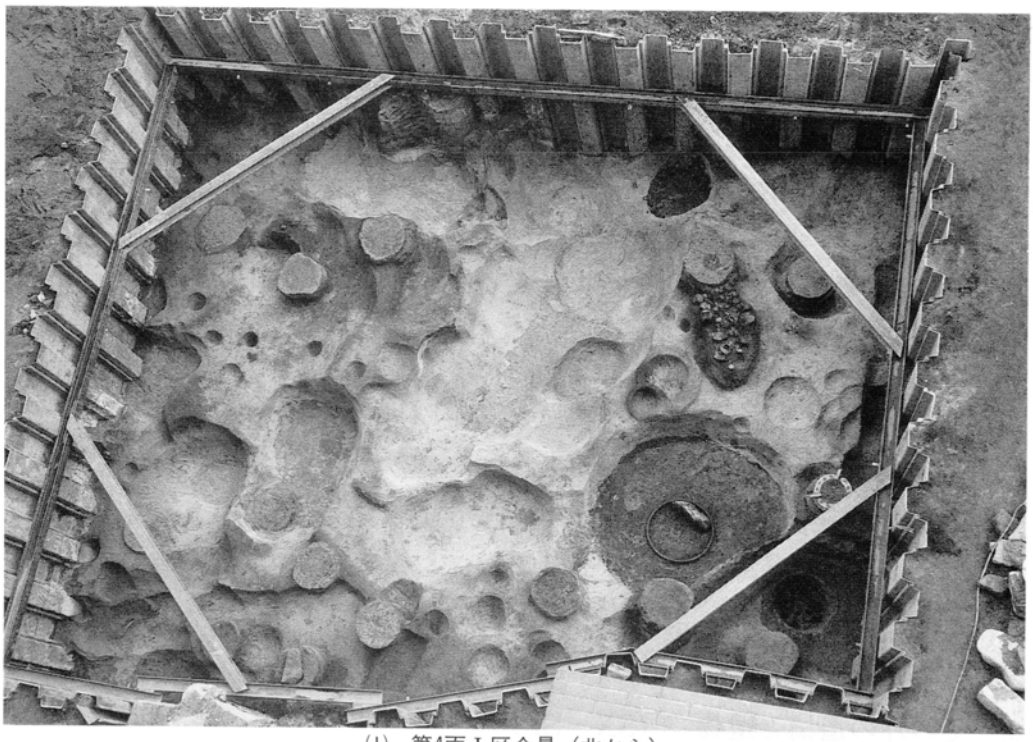
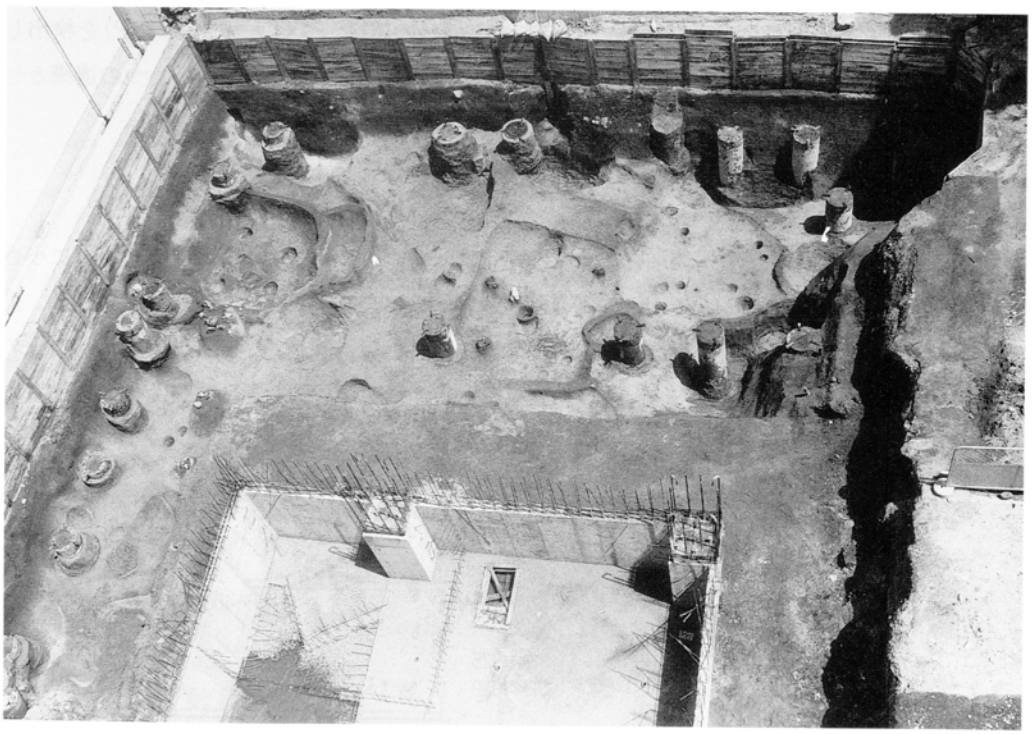


Fig. 111. 第4面SP出土土器実測図 (1/4)

PL. 12.



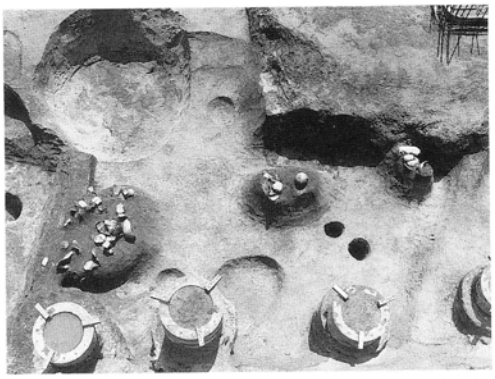
(1) 第4面Ⅰ区全景（北から）



(2) 第4面Ⅱ区全景（北から）

PL. 13.

(1) SC－4041（東から）

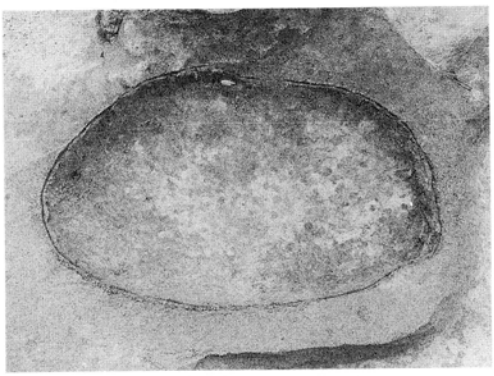


(2) SC－4042（東から）

(3) SC－4047、SK－4049（北から）

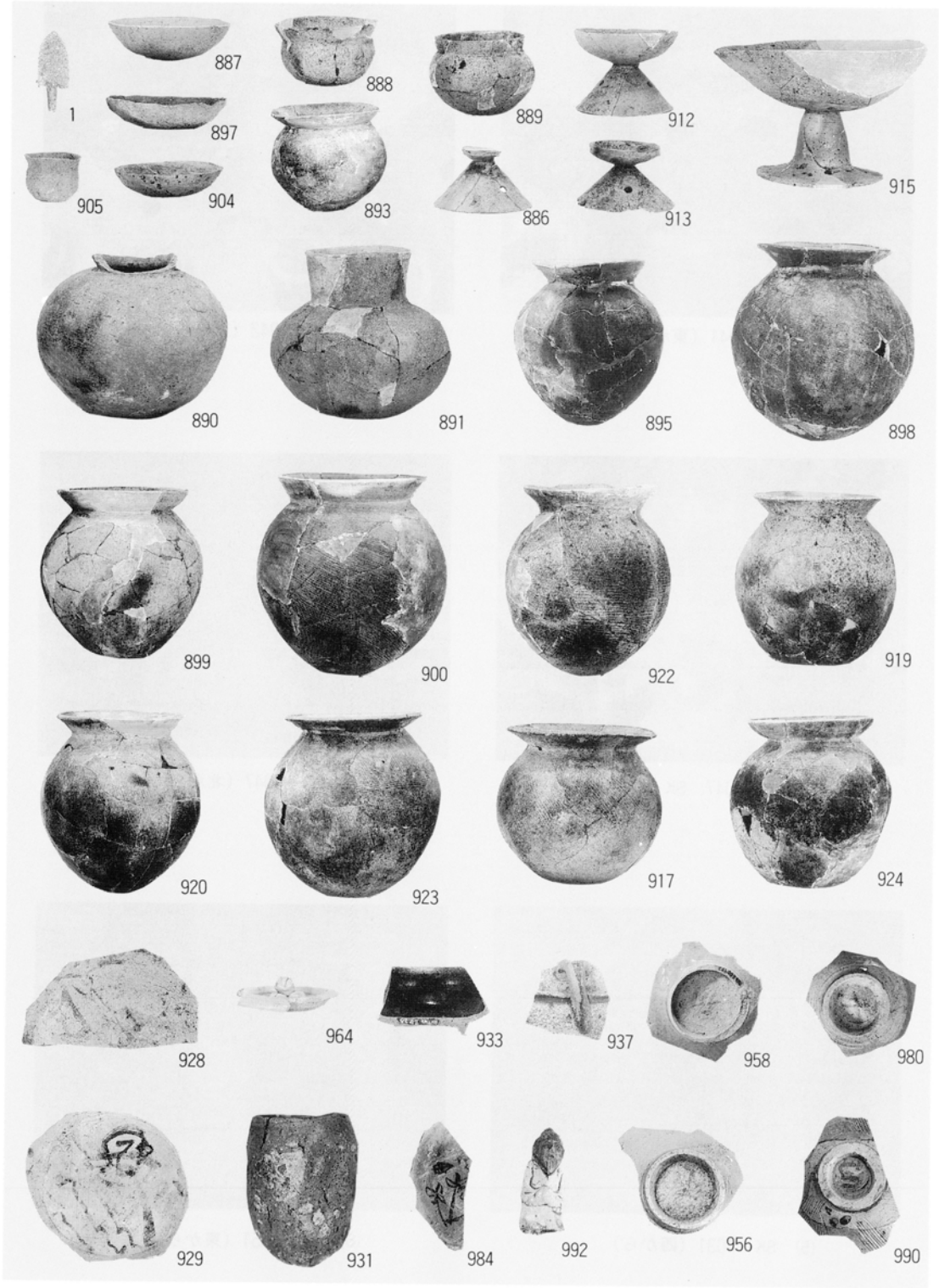
(4) SC－4047（北から）

(5) SK－4031（西から）



(6) SK－4051（東から）

PL. 14.



第4面　包含層・撹乱壙出土遺物（縮尺不同）

6．包含層出土の遺物

第45次調査では、4面の遺構面を検出し、その間には厚さ1mの遺物包含層が4層に亙って堆積していた。第1・2層は古代から中世、第3層は古墳時代から古代、第4層は古墳時代の遺物包含層である。これらの包含層からは各面で検出した遺構とほぼ同時期の遺物が多量に出土した。また、調査区内には、近世遺構の撹乱壙があり、この中からも包含層と同様の遺物が出土している。

包含層出土の遺物（Fig.112～114・116・117　PL.14）

928～932は土師器である。928～930は糸切り底をもつ坏で、いずれも外面に墨書がある。931は蛸壺である。932は坏蓋で、天井部中央にわずかに立ち上がりが残っていることからつまみがついていたものと思われる。精良なうすい茶色の胎土で焼きしまる。つまみ周辺はヨコナデ調整、他は横方向のヘラミガキで仕上げる。933～936は国産緑釉陶器碗である。933・934の胎土には須恵質で堅く焼きしまっているのに対し、935・936はうす茶色の砂っぽい胎土で軟質に焼成されている。933は濃緑色の光沢ある不透明釉が高台裾までかかり、畳付から高台内は露胎である。934～936は全釉である。937は灰釉陶器と思われる壷で、外面に青みある灰色の釉がかかる。938は紅皿。939はうすいベージュ色の緻密な胎に黄灰色の透明釉がかかる。畳付の釉は削り取られ、見込みに4ケ所の目跡がある。美濃焼であろうか。940は常滑焼のN字口縁をもつ甕である。941～943は土師質土器である。941・942は灯明皿である。942は手捏ねで成形されており指頭痕が多く残る。内面は煤のため黒色を呈する。943は鍋である。944は瓦質の火舎である。945～947は青白磁である。945は壷。946は獣脚をもつ香炉である。小片のため何脚あったかは不明。淡い青緑色の透明釉が内底を除き全体に施される。947はロハゲの印花文皿である。948は天目碗である。灰褐色の緻密な胎土に黒色釉がかかる。釉の表面はオパールのような光沢がある。949は李朝の粉青沙器の皿である。白い小砂粒が多く混じった黒灰色の胎土で、灰色の半透明釉が全体にかかる。内底と畳付に砂目が残る。950～964は白磁である。950～952は高台付皿。950は施釉前に化粧を施している。953・954は小碗である。955～961は碗である。955は低い高台をもち見込みに小さな茶溜りをつくる。体部内面に櫛描雷光文を放射状に施す。灰白色の緻密な胎土に青みある半透明釉がかかる。956はIX類で、見込みの釉を輪状に削り取る。957～960はVI類に属する。961は内面に櫛描と片切彫で文様を描く。灰白色の緻密な胎土でうすい灰色の半透明釉が高台付近までかかる。962は広東系白磁の大鉢である。灰白色の緻密な胎土に淡い青緑色の半透明釉が、ほぼ高台までかかる。細かい貫入が見られる。963は壷の底部であるが、底部中央に打ち欠きによる穿孔がある。964は蓋である。粘土の玉を4つ重ねて摘みとしている。白色の緻密な胎土で、淡い青緑色の半透明釉が天井部と口縁内側まで施される。小さい貫入が

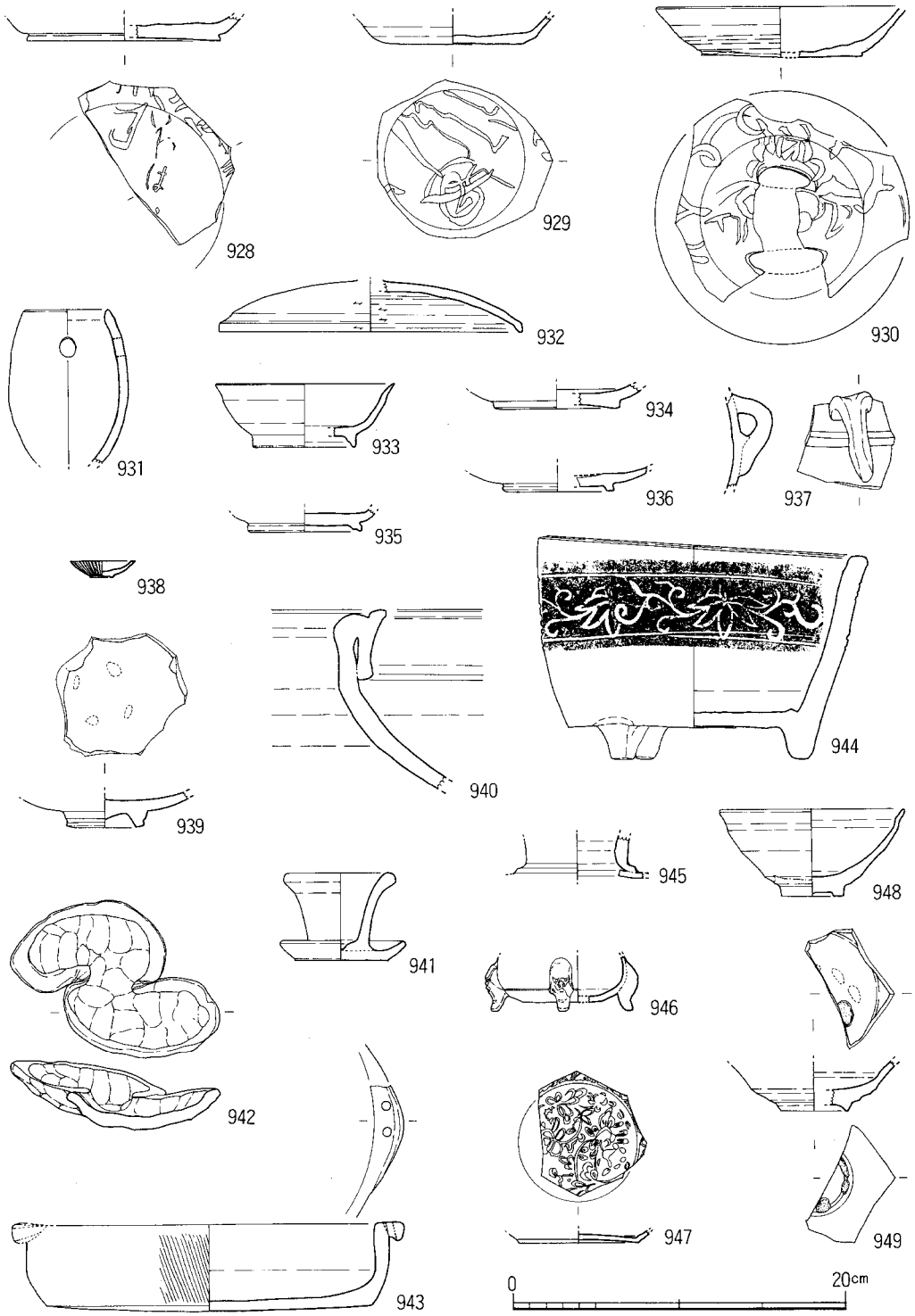


Fig. 112. 包含層出土土器実測図(1) (1/4)

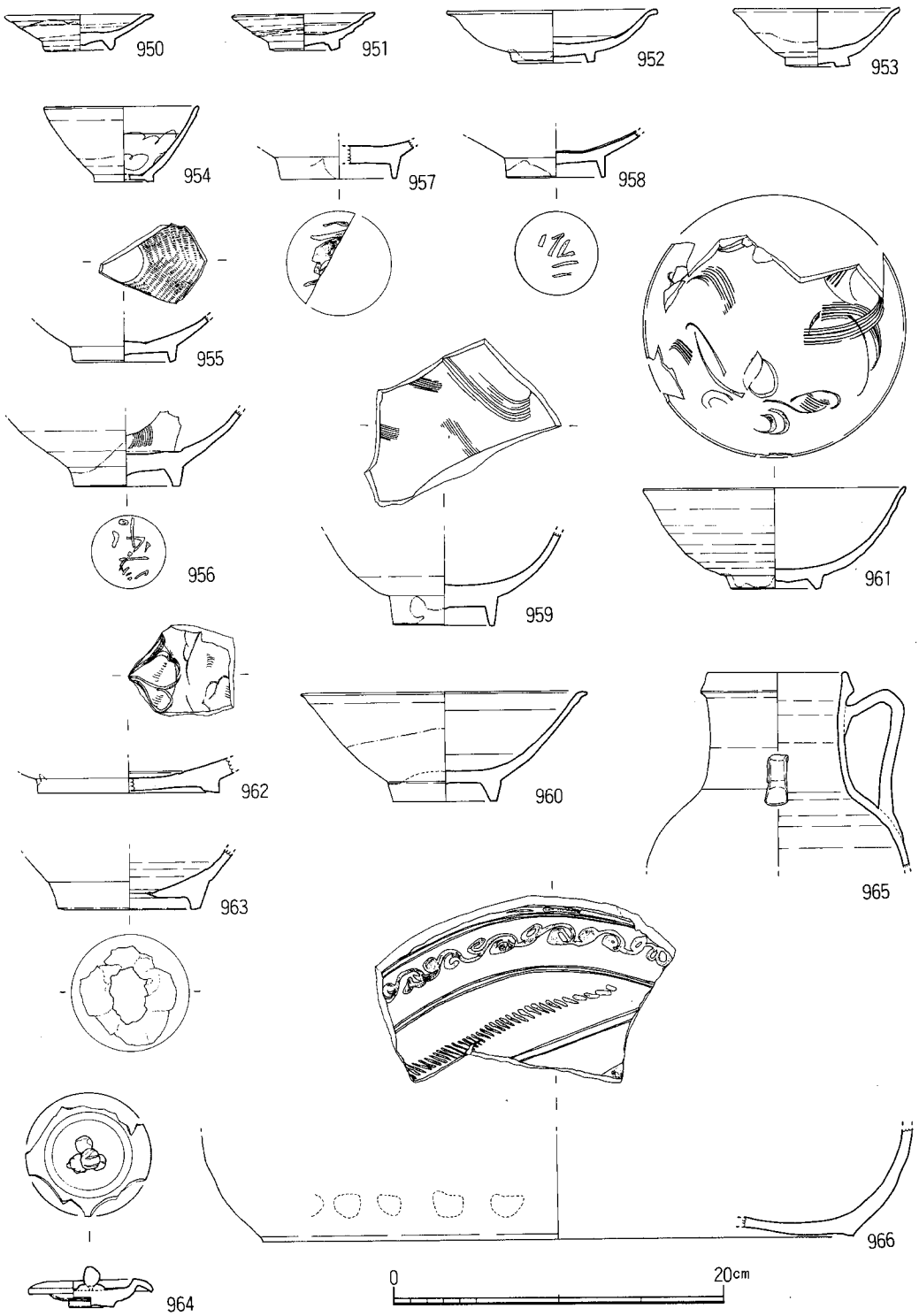


Fig. 113. 包含層出土土器実測図(2) (1/4)

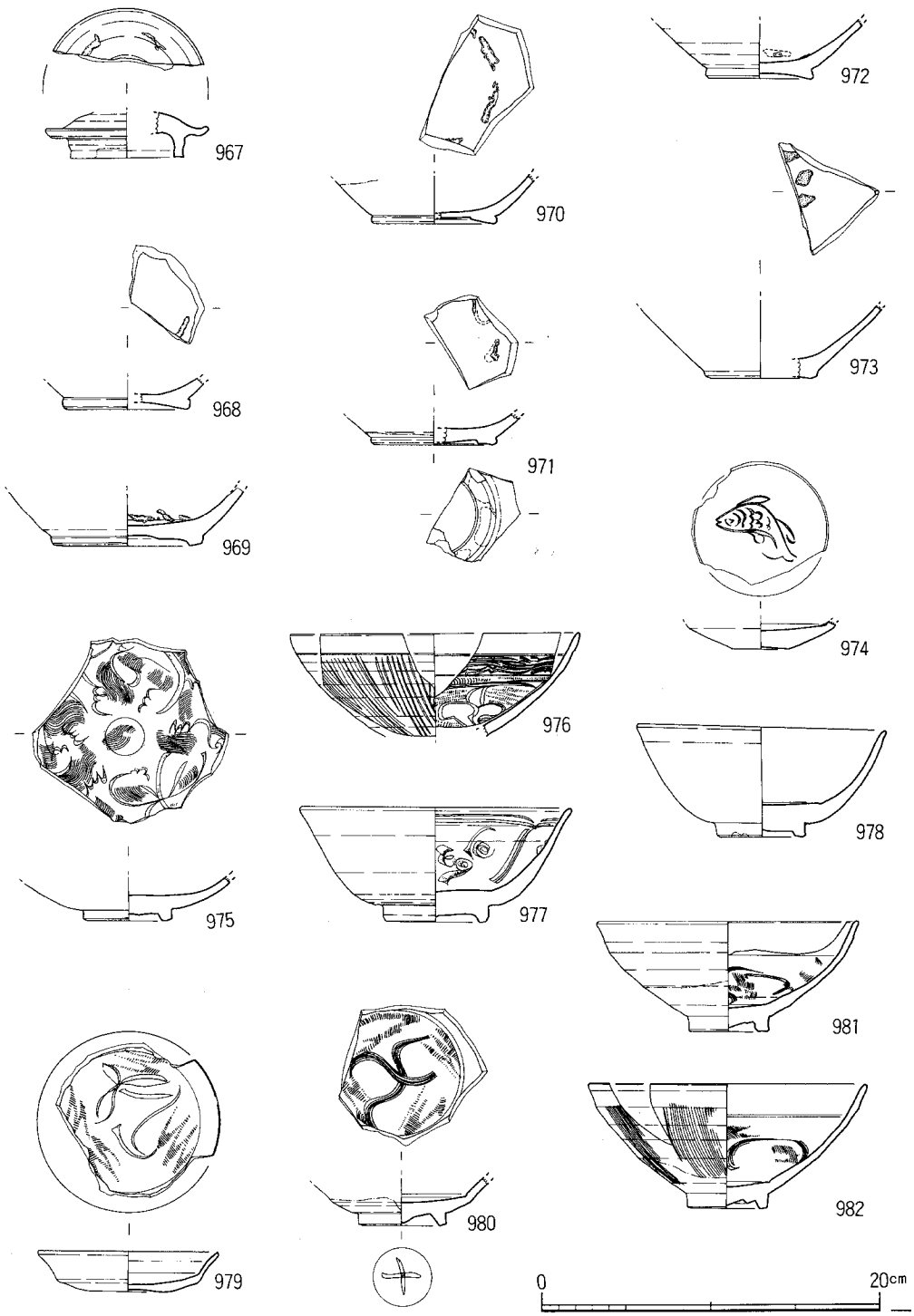


Fig. 114. 包含層出土土器実測図(3) (1/4)

全体にはいる。965・966は中国陶器である。965はC群の水注。966はA群の盤で、釉下鉄彩が見られる。底部付近に火あとが並ぶ。967は青磁の蓋である。緻密な灰ベージュ色の胎にオリーブ色がかかった黄褐色の不透明釉がかかる。天井部に目跡が残る。968～973は越州窯系青磁碗である。968・973は全釉、970～972は半釉、969は畳付のみ釉を削り取る。974～978は龍泉窯系青磁である。974は見込みに片切彫で魚文を描く。975は高台付皿である。976～978は碗である。976は内面に櫛描文とヘラ描文を組み合わせた細かい文様を描き、体外壁に片切彫で放射状に線を刻む。O類に属する。977・978はI類に属する。979～982は同安窯系青磁である。979はI類の平底皿。980は高台内に『十』の墨書をもつ。高台付皿であろうか。981・982はII類の碗である。

14・15は墨壺状の滑石製品である。素材を刳り貫いた皿状の浅い凹みを左右に作り、薄い隔壁で仕切っている。14は長さ5.4cm、幅3.25cm、高さ2.2cmを測り、外面には隔壁に沿って凹線状の刻みを施す。15は、長さ3.7＋αcm、幅3.15cmの凹み石である。表裏面ともに中央部が敲打によって凹レンズ状に浅く窪む。17は砂岩質の砥石である。

12は端部に円孔を穿つ舌状の土製品である。

13は、径2.5～2.7cmの土玉である。重さは12.2gを測る。

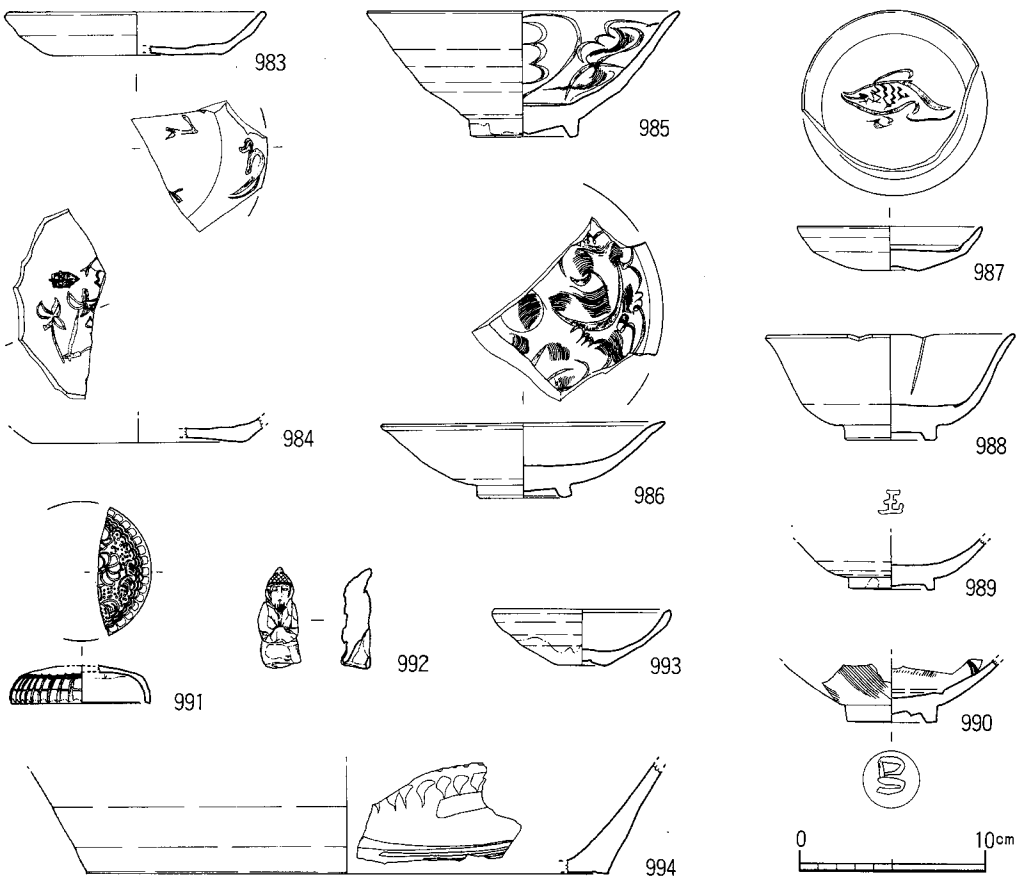


Fig. 115. 撹乱壙出土土器実測図（1/4）

14・15は、土錘である。15は長さ5.02cm、重さ4.3gを測る。

撹乱壙出土の遺物（Fig.115・116　PL.14）

983・984は糸切り底をもつ土師器の坏である。983は外面にかなの墨書がある。984は内底に花と虫を描いたと思われる墨書が残る。985はVII類の白磁碗で、黄ベージュ色の緻密な胎土に乳黄色の釉がかかる。986～989は龍泉窯系青磁である。986は高台付皿。987は片切彫の魚文をもつ平底皿である。988・989はI類の碗で、988は白堆線をもち口縁を輪花となす。989の見込みには『玉』のスタンプが見られる。990はII類の同安窯系青磁碗である。高台内に墨書が残る。991は青白磁の合子蓋である。天井部には型造りで花文を、側面には菊弁を施す。うすい青色の半透明釉がやや厚めに施釉される。992は磁胎の人形である。器高は5.3cmを測る。頭や顔の部分には茶褐色の釉が厚くかかり、それ以外の部分には白色の不透明釉が施されている。下半部には斜めに穿孔が見られる。中国産のものであろう。993・994は中国陶器である。993はB群の皿で、うす茶色の緻密な胎土に茶褐色の不透明釉がかかる。994はA群の盤で、内面に釉下鉄彩が見られる。

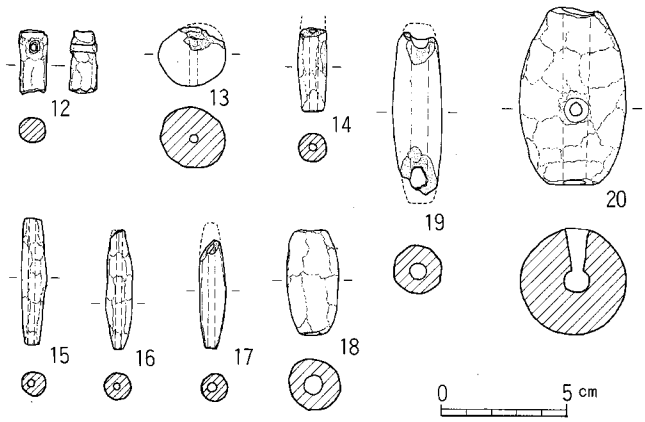


Fig. 116. 遺構外出土土製品（1/3）

16～18は小型、19は中型、20は大型の土錘である。20は長さ7.11cm、幅4.21cm、重さ119gを測る。腹部中央には縦方向の円管に直交する円管をT字状に穿つ。

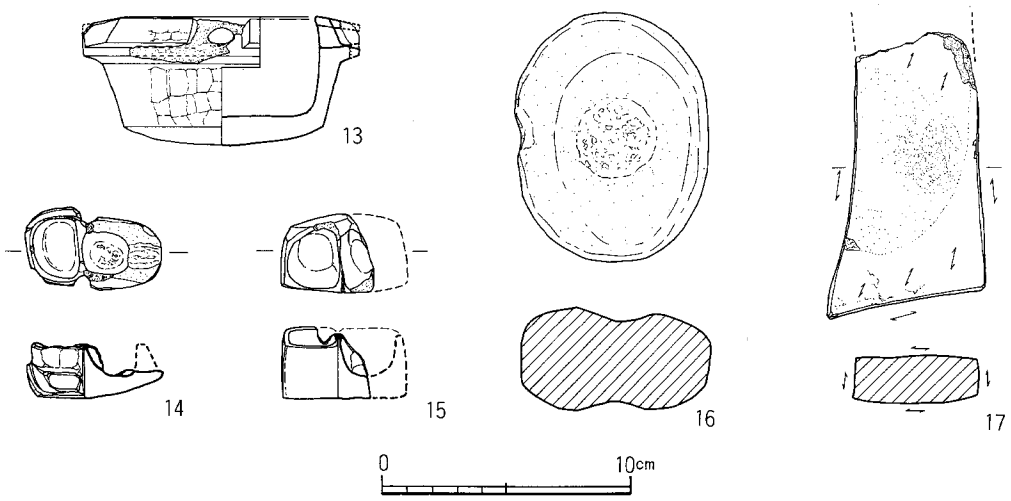


Fig. 117. 包含層出土石製品実測図(3)（1/3）

III. おわりに

中世の貿易都市として栄えた博多遺跡群は、玄界灘にむかって湾口を開く博多湾に面し、ここを玄関口として各時代にわたって様々な文化を受け入れてきた。そのために各調査地点から検出される遺構や遺物は多岐にわたり、なかでも中国陶磁器の豊富さは他を圧するものがある。第45次調査地点も例に漏れるものではない。

博多遺跡群第45次調査地点の概要については、その主な遺構を中心に「II. 調査の記録」で簡単に述べた。しかし、出土した多量の遺物についてはすべてを網羅したとは云いがたく、その提起せる問題点等は十分な整理検討を加えることができなかった。ここではその成果について若干述べ、今後の調査に備えたいと思う。

第45次調査地点では、4面の遺構面を調査した。これはあくまでも便宜的なものであり、その面の遺構の絶対的な年代観を示したものではないが、古墳時代の布留式期から14世紀前半代の遺構を検出し、14世紀後半以降の遺構はほとんど検出できなかった。これは撹乱壙の除去を第一義的に考え一律に表土層を除去したことに大きく起因するが、他の要因も考えられる。本調査区の立地する博多濱一体は15世紀以降の遺構が希薄になるのが一般的である。しかし、調査地点によっては1586年の島津氏による焼き打ちの焼土層上に近世の遺構が検出されたり、あるいはこの焼土処理層や整地層下からすぐに13世紀代の遺構が検出されている。これからすると15～16世紀の遺構破壊は、豊臣秀吉の太閤町割りによる大規模な削平と地均しによるものと推測される。博多濱南西の高所に位置する第45次調査地点の14世紀後半代の遺構面や包含層の喪失も多少はこれによるものとも考えられよう。

第45次調査地点で検出した4面の遺構面にはおおむね次のような年代観が与えられよう。つまり、第1面は鎬連弁文の青磁やロハゲの白磁碗・皿等のほか、やや器高が高く、体部が直線的に開く土師器皿や杯が出土する13世紀後半から14世紀前半代である。第2面は、青磁が普及し、青磁碗の見込みには劃花文や雲文を配する。土師器皿や杯は回転糸切りによる底部の切り離し技法が確立する12世紀後半から13世紀である。第3面は、土師器皿や杯の底部切り離しがヘラ切りから回転糸切り技法への転換期で、白磁の多い11世紀後半から12世紀前半までの時期である。第4面は、いわゆる布留式土器を出土する4世紀代であるが、3層下面から掘り込まれたSC－4041は8世紀代のものであり、包含層の2・3層からは同期の須恵器片等も比較的多く観られ、この期の遺構の存在も予想される。

以上のことから、歴史観的に換言すれば、第Ⅰ期－古墳時代前期、第Ⅱ期－奈良～平安時代前半、第Ⅲ期－平安時代後半～末、第Ⅳ期－鎌倉時代、第Ⅴ期－鎌倉時代後期～室町時代前期までの5期に区分され、営々とした生活史を窺わせる。

本調査地点において特筆されることは「備蓄銭」と「面皿」を検出したことであろう。

いわゆる備蓄銭とは、「蓄蔵を目的とした銭貨」のことであり、14～15世紀にかけて盛行し、数千～数万枚の銭貨を埋蔵することが一般的である。このことからすれば、本調査地点出土のものは数的には遙かに劣るが、木蓋をした中国陶器B群の鉢に一連差しにしてピットに埋納していることからこの範疇で考えた。博多近郊の粕屋郡久山町からは、15世紀後半以降の備蓄銭94,084枚が出土している。博多遺跡群内で備蓄的色彩を示すまとまった銭貨の検出は高速鉄道建設に伴う第1次調査以来なく、これが初例となる。このことは埋蔵時において貨幣経済が確立していたことを示唆するものであり、貿易都市博多の一側面を窺い知る一助になろう。鎌倉時代以降の経済構造は、商品流通の質・量の二面にわたる発展を基礎としており、中国陶磁器等を媒介として成り立つ貿易都市博多の経済構造もこの中において捉える必要があろう。

また、土師皿に目鼻を穿った「面」は4点ある。SK－2001出土のもの(410)は目と口を穿ち、眼上には「ハ」字状の眉をヘラ描きし、頭部には髪と思われる墨痕がある。SE－2004出土のもの(281)は目と口のほか体部に耳を穿っている。包含層出土のもの(930)は目と口を穿ち、その間に鼻と髭、体部には髪を墨で描いている。これらのものが何らかの儀式に使用されたのか、あるいは遊び的に作られたのかは即断できないが、該期の習俗や信仰の一端を窺う資料として非常に興味深いものである。

以上、発掘調査の成果を簡単に述べたが、この報告書にはできるだけ多くの遺物実測図を掲載するように努めたが、発掘調査に携わりながらの時間的制約や環境的制約を受けたなかで作成されたものであり、もっとも学識不足によることが最大の要因であり、そのために遺跡や遺物の提起せる問題点を十分に深化しえずにすぎてしまった。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第248集

博多20遺跡

1991年3月15日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1－8—1

印刷　赤坂印刷株式会社